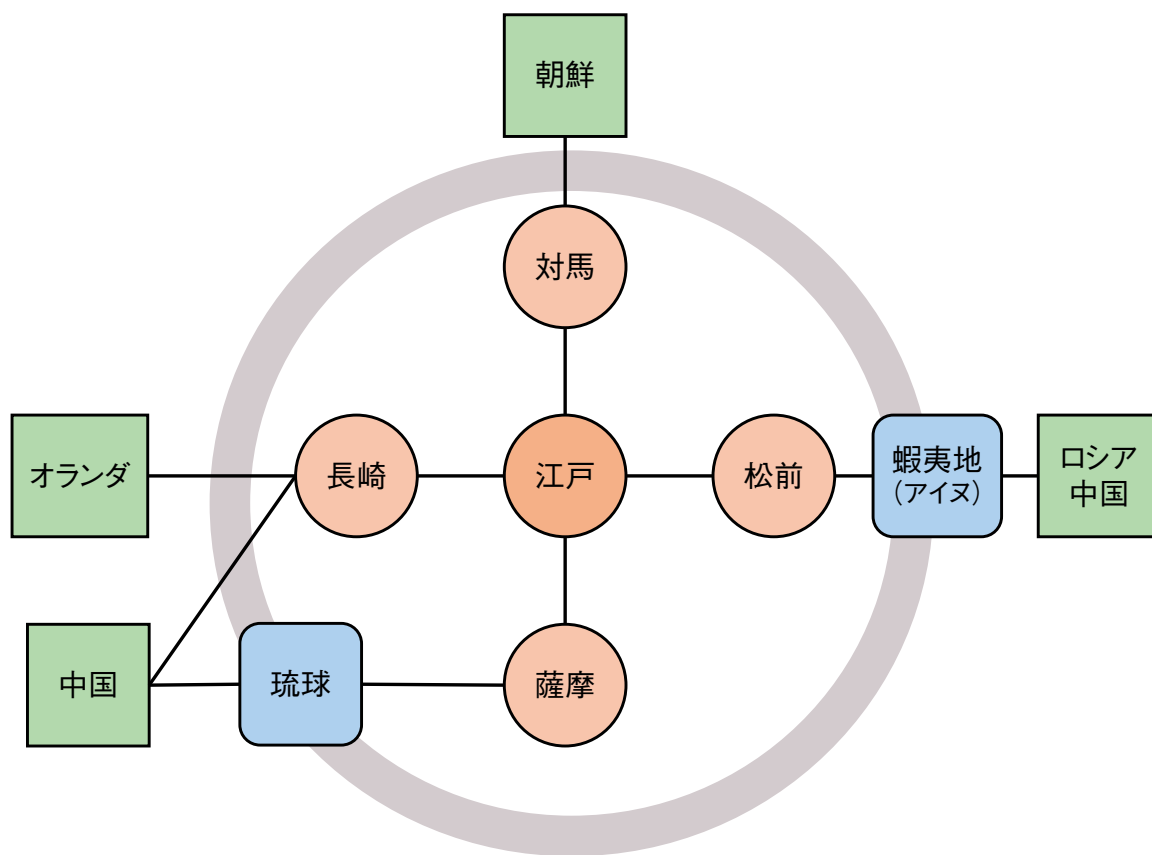


近世国家境界域「四つの口」における 物資流通の比較考古学的研究

2016～2020年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書
(課題番号:16H03510)



2021年3月

研究代表者: 渡辺 芳郎
鹿児島大学法文学部 教授

近世国家境界域「四つの口」における 物資流通の比較考古学的研究

2016～2020年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書
（課題番号：16H03510）

2021年3月

研究代表者：渡辺 芳郎
鹿児島大学法文学部 教授

例 言

1. 本書は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B））の交付を受けた研究の成果を示す報告書である。研究課題、期間、組織、交付額は以下の通りである。

研究課題：近世国家境界域「四つの口」における物資流通の比較考古学的研究（課題番号：16H03510）

研究組織

研究代表者：渡辺 芳郎（鹿児島大学・法文学部・教授）
研究分担者：関根 達人（弘前大学・人文社会科学部・教授）
菊池 勇夫（宮城学院女子大学・付置研究所・研究員）
堀内 秀樹（東京大学・キャンパス計画室・准教授）
片山 まび（東京藝術大学・美術学部・教授）
野上 建紀（長崎大学・多文化社会学部・教授）
木村 直樹（長崎大学・多文化社会学部・教授）
池田 榮史（琉球大学・国際地域創造学部・教授）
深澤 秋人（沖縄国際大学・総合文化学部・教授）
研究協力者：山口 美由紀（長崎市文化観光部出島復元整備室）

交付額

（単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2016年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2017年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2018年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2019年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2020年度	2,400,000	720,000	3,120,000
合計	13,100,000	3,930,000	17,030,000

2. 本研究に関してはこれまで以下の成果を発表している。

【論文等】

2016年度

関根達人2016『モノから見たアイヌ文化史』吉川弘文館 総194頁
関根達人2016「安政の開港と出土陶磁器－なぜコンプラ瓶は北海道から出土するのか－」『中近世陶磁器の考古学』4巻 pp.163-184 雄山閣
深澤秋人2016「鹿児島琉球館における「役所」の機能－尚家文書三四一号を中心に－」『国史学』216 pp.75-117

2017年度

渡辺芳郎2018『近世トカラの物資流通－陶磁器考古学からのアプローチ－』北斗書房 総80頁
木村直樹・牧原成征編2018『十七世紀日本の秩序形成』吉川弘文館 総285頁
池田榮史2018「沖縄における窯業史研究の到達点と課題－窯業開始期を中心に－」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』19 pp.45-54
片山まび2017「高麗・朝鮮陶磁器の概要－14世紀中葉から17世紀初を中心－」『第15回 山陰中世土器検討会資料集 山陰における高麗・朝鮮陶磁』pp.1-10
木村直樹2018「長崎開港成立以前の商人」『桜文論叢』96 pp.101-116
野上建紀2017「陶磁器からみる長崎と海外とのモノ交流－肥前磁器と「唐人」、「唐船」の関わりについて－」『多文化社会研究』4 pp.141-156
渡辺芳郎2018「薩摩焼陶工は琉球にどのような製陶技術を伝えたか？」『那覇市立壺屋焼物博物館紀要』19 pp.33-44

2018年度

菊池勇夫2019「松前藩の上乗・目付について－17・18世紀におけるアイヌ交易」『宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所研究紀要』52 pp.1-25
関根達人2018「アイヌ文化を特徴づけるモノ」『民衆史の遺産』13 pp.746-779
関根達人・木戸奈央子2018「越後産焼酎徳利（「松前徳利」）の生産と流通」『中近世陶磁器の考古学』8巻 pp.245-267 雄山閣

関根達人・佐藤雄生2018「北前船で運ばれた色絵の器－北海道・東北地方出土の色絵磁器－」『東北・北海道に渡った九谷焼』pp.14-19 石川県九谷焼美術館
野上建紀、エラディオ・テロス・エスピノサ2019「アルゼンチン・チリに渡った東洋磁器」『多文化社会研究』5 pp.75-93
深澤秋人2019「廃藩置県に関する通知－鹿児島琉球館への伝達をめぐって－」『黎明館調査研究報告』31 pp.35-37
羅東旭・片山まび2018「草梁倭館船滄跡周辺出土遺物に関する調査概要」『博物館研究論集』24 pp.137-186
渡辺芳郎2018「近世薩摩焼・象嵌陶器の基礎的研究」『中近世陶磁器の考古学』9巻 pp.275-304 雄山閣

2019年度

片山まび2019「茶碗からみる朝日交流－粉青沙器様式から倭館窯まで－」『朝鮮陶磁、肥前の色をまとう』pp.182-191 韓国・国立晋州博物館
菊池勇夫2019「蝦夷地行き輸送船とその乗組員－高田屋金兵衛の手船・雇船を例に－」『北の歴史から』1 pp.63-84
菊池勇夫2020「松前・蝦夷地の廻船と懸り澗－澗(マ)・泊(トマリ)地名－」『北の歴史から』2 pp.27-67
木村直樹2019「幕府の「鎖国」政策とその実態」『歴史地理教育』91 pp.4-11
関根達人2019「北海道松前町福山城下町遺跡小松前町地点発掘調査報告」『人文社会科学論叢』7 pp.61-94
関根達人2019「松前城下出土のガラス玉」『考古学ジャーナル』737 pp.16-20
渡辺芳郎2020「奄美大和村津名久焼の基礎的研究」『奄美群島の歴史・文化・社会的多様性』pp.70-89 南方新社
WATANABE Yoshiro 2020 Ceramic Distribution in the Tokara Islands in the Early Modern Period “*The Tokara Islands : Culture, Society, Industry and Nature*” pp.9-19 北斗書房

【学会発表】

2017年度

深澤秋人「渡唐銀の那覇搬送をめぐる船とヒト－御銀船と御銀宰領について－」琉球・沖縄歴史研究会3月例会 2018年

2018年度

関根達人「アイヌ民族と酒－漆器>陶磁器の価値観－」近世考古学の提唱」50周年記念「近世の酒と宴」研究大会 2019年
渡辺芳郎「近世陶磁器からみた九州と南西諸島」シンポジウム：九州-沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動 2018年
渡辺芳郎「薩摩焼研究の現状と課題」東洋陶磁学会第46回大会 2019年

2019年度

片山まび「草梁倭館内の日本人の暮らし」土のなかから発見した釜山の歴史(釜山博物館) 2019年
木村直樹「九州諸藩から見る「長崎・出島」令和元年度 長崎県考古学会秋季大会 2019年
関根達人「松前口の考古学的研究」日本考古学協会第85回総会研究発表会 2019年
関根達人「北海道島における陶磁器流通－12世紀～19世紀－」東洋陶磁学会第47回大会 2019年
野上建紀「「出島」から伝わった肥前陶磁」令和元年度 長崎県考古学会秋季大会 2019年
渡辺芳郎「近世日本の「四つの口」－琉球口と薩摩を中心に－」令和元年度 長崎県考古学会秋季大会 2019年

3. 本報告書の第2部以外は渡辺芳郎が執筆した。第2部の執筆者は各章冒頭に明記している。
4. 本報告書の編集は渡辺が行った。
5. 資料整理・報告書作成にあたっては、鹿児島大学法文学部人文学科考古学研究室ならびに鹿児島大学埋蔵文化財調査センターのご協力を得た。
6. 巻末の英文要旨の作成にはSteve Cother先生(鹿児島大学法文学部)のご協力を得た。
7. 本研究に関わる考古学資料ならびに報告書関係書類は鹿児島大学法文学部人文学科渡辺芳郎研究室で保管している。

目 次

例言		
第 1 章	研究の目的	渡辺芳郎 …………… 1
第 2 章	研究の概要	渡辺芳郎 …………… 3
第 1 部 報告編		
第 3 章	十島村口之島「阿弥陀様」前庭部の発掘調査	渡辺芳郎 …………… 7
第 4 章	奄美大熊大里遺跡出土陶磁器の調査	渡辺芳郎 …………… 18
第 5 章	奄美大和村盛岡家伝来資料の調査	渡辺芳郎 …………… 27
第 2 部 論考編		
【松前口】		
第 6 章	「松前口」での手工業生産と「蝦夷土産」	関根達人 …………… 53
第 7 章	松前三港の「蔵敷」にみる移出入品	菊池勇夫 …………… 64
【江戸】		
第 8 章	江戸時代の貿易陶磁器需要 -江戸の状況を中心として-	堀内秀樹 …………… 74
【長崎口】		
第 9 章	長崎から輸出された肥前陶磁	野上建紀 …………… 87
第 10 章	「長崎口」の輸出入 -抜荷・四つの口の関わりから	木村直樹 …………… 97
第 11 章	長崎出島の物資流通 -考古学資料を中心に-	山口美由紀 …………… 107
【対馬口】		
第 12 章	「対馬口」と日本人 -草梁倭館船滄周辺遺跡出土遺物にみる対馬人の暮らし	片山まび …………… 117
【琉球口】		
第 13 章	近世南西諸島における陶磁器流通の諸相 -考古学資料と伝来資料から-	渡辺芳郎 …………… 125
第 14 章	近世琉球窯業の展開と対外関係	池田榮史 …………… 142
第 15 章	「琉球口」における流通統制の変容 -「勝手商売」への移行と滞留商人-	深澤秋人 …………… 152
第 16 章	総括	渡辺芳郎 …………… 162
英文サマリー……………		164
謝辞……………		166

挿図目次

第1章	
図1-1	「四つの口」模式図 …………… 1
第3章	
図3-1	調査地点位置図 …………… 7
図3-2	トレンチ配置図(S=1/100) …………… 9
図3-3	トレンチ平面図・土層断面図(S=1/40) …… 9
図3-4~5	口之島「阿弥陀様」前庭部発掘調査状況 (1)(2) …………… 13
図3-6~8	口之島「阿弥陀様」前庭部出土遺物 (1)~(3) …………… 15
第4章	
図4-1	ウントネにおけるフーウンメ祭り …… 18
図4-2	大熊大里遺跡概要 …………… 19
図4-3~5	大里大熊遺跡出土陶磁器(1)~(3) …… 24
第5章	
図5-1~37	盛岡家伝来陶磁器(1)~(37) …… 32
第6章	
図6-1	松前城下の職人の居住地 …………… 59
図6-2	松前城下蔵町地点で検出された鍛冶遺構 (炉1・2) …………… 60
図6-3	和人向けに「蝦夷土産」として製作された 蝦夷拵の腰刀 …………… 61
第8章	
図8-1	清代の銘款 (長崎市教育委員会2020より抜粋・作成) … 84
図8-2	16・17世紀の青花分類(森1995より抜粋) … 84
図8-3	千代田区有楽町一丁目遺跡 070号遺構出土遺物 …………… 85
図8-4	文京区千駄木三丁目南遺跡 第2地点 1号遺構出土遺物 …………… 86
第9章	
図9-1	肥前陶磁の貿易ルート図 …………… 95
図9-2	東南アジアにおける肥前陶磁出土分布図 (野上2015より) …………… 95
図9-3	文献史料にみる肥前陶磁輸出量の推移 (数値は有田町史編纂委員会1988より) … 96
第10章	
図10-1	17世紀の日本の貿易構造 …………… 98
第11章	
図11-1	出島和蘭商館跡の位置 …………… 108
図11-2	出島航空写真 平成25年度(2013)撮影 … 108
図11-3	色絵花卉文輪花鉢 …………… 110
図11-4	染付VOC字文大皿 …………… 110
図11-5	金襴手様式の色絵磁器 …………… 110
図11-6	染付NVOC字文皿他 …………… 110
図11-7	染付アルバレロ型壺 …………… 110
図11-8	染付花唐草文皿 …………… 111
図11-9	染付楼閣山水文皿 …………… 111
図11-10	染付寿字文鉢・皿 …………… 111
図11-11	焼締四耳壺 …………… 111
図11-12	染付縞文広口壺 …………… 112
図11-13	藍絵広口壺 …………… 112
図11-14	染付皿 モスク&フィッシャーマン …… 112
図11-15	染付鉢・皿 パルスメ・オーロリア …… 112
図11-16	第Ⅲ・Ⅳ期発掘調査地点全景 …… 113
図11-17	棹銅 …………… 113
図11-18	銅滴 …………… 113
第12章	
図12-1	草梁倭館船滄周辺遺跡出土陶磁器(1) …… 123
図12-2	草梁倭館船滄周辺遺跡出土陶磁器(2) …… 124
図12-3	草梁倭館船滄周辺遺跡出土陶磁器組成表 … 124
第13章	
図13-1	本章で扱う資料関係地図 …………… 125
図13-2	中城御殿SJ3出土陶磁器産地・器種別比率 … 132

表目次

第3章	
表3-1	土層観察表 …………… 9
表3-2	報告資料観察表 …………… 10
第4章	
表4-1	大熊集落におけるノロ祭祀 …………… 18
表4-2	大熊大里遺跡出土の近世陶磁器 …… 20
表4-3	大熊大里遺跡出土の近世国産陶磁器 …… 20
表4-4	大熊大里遺跡出土の肥前磁器 …… 20
表4-5	大熊大里遺跡出土の肥前陶器 …… 21
表4-6	大熊大里遺跡出土の薩摩焼(陶器) …… 21
表4-7	大熊大里遺跡出土の苗代川陶器 …… 21
表4-8	大熊大里遺跡出土の加治木・始良産陶器 … 21
表4-9	大熊大里遺跡出土の堅野系陶器 …… 21
表4-10	大熊大里遺跡出土の薩摩磁器 …… 22
表4-11	大熊大里遺跡出土の沖縄産陶器 …… 22
表4-12	大熊大里遺跡出土の中国産磁器 …… 22
表4-13	大熊大里遺跡出土の近世陶磁器の概要 … 23
第5章	
表5-1	盛岡家伝来陶磁器の種類と器種 …… 27
表5-2	盛岡家伝来陶磁器の時期と産地 …… 29
第6章	
表6-1	松前城下の寺院過去帳に記載された職人 … 55
表6-2	松前城下の寺院過去帳に記された職人 (年代別) …………… 59
表6-3	松前城下の寺院過去帳に記された職人 (居住地別) …………… 59
第8章	
表8-1	需要の所在と段階 …………… 83
表8-2	器種組成 …………… 83
表8-3	年代別器種組成 …………… 83
表8-4	胎質・装飾組成 …………… 83
表8-5	推定生産地組成 …………… 83
表8-6	推定年代組成 …………… 83
表8-7	銘款の年代 …………… 83
表8-8	出土地 …………… 83
表8-9	貿易陶磁器のアセンブリッジ (森1995より抜粋) …………… 84
第13章	
表13-1	切石遺跡出土陶磁器一覧 (大橋・山田1995を元に作成) …… 126
表13-2	臥蛇島伝来陶磁器(渡辺編2015より) …… 127
表13-3	トカラ列島採集陶磁器(渡辺2015より) …… 127
表13-4	大熊大里遺跡出土近世陶磁器 …… 128
表13-5	根皿原遺跡出土陶磁器 …… 128
表13-6	根皿原遺跡出土本土産陶磁器 (図化報告資料のみ) …………… 128
表13-7	根皿原遺跡出土沖縄産陶器 …… 129
表13-8	奄美群島 古墓出土陶磁器一覧 …… 130
表13-9	金瑠瑯脚付碗関係年表 …………… 134
表13-10	奄美における陶磁器の価格 (橋口2001を元に作成) …………… 138
第15章	
表15-1	「清單」に見える生活用品を中心とする輸入品 …………… 158

第1章 研究の目的

近世日本において対外交渉の窓口として長崎・対馬・琉球・松前の「四つの口」が置かれた。これらの地域は「近世国家領域境界域」という性格を有し、その歴史的様相は他の地域のそれと大きく異なっている。これら「四つの口」を通じてさまざまな人・物・情報が流通していたことは、これまでの「近世日本＝鎖国」という考え方を大きく変えてきている（荒野他編2010など）。これらの地域における貿易活動については近年、近世考古学的な調査研究の進展によりその様相が明らかになりつつある。長崎では肥前磁器研究の進展によりその輸出のあり方が解明されるとともに、オランダ船とともに中国船の果たした役割が注目されつつある（大橋2004、野上2010など）。対馬についても、肥前や対州窯で焼かれた製品が、現在の韓国釜山に置かれた倭館を通じて朝鮮に輸出されていたことが判明している（家田2006）。琉球に関して清朝と冊封関係に基づく朝貢貿易により、大量の清朝磁器が流入し、肥前磁器が市場を席卷した本土地域とはかなり様相が異なることが指摘されている（新垣2010）。また1609年以後、琉球に対して強い支配力を持っていた薩摩藩においても琉球経由の物資流通が盛んであったことが知られている（橋口1999・2009など）。また沖縄・奄美と本土を結ぶトカラ列島において清朝磁器が広く分布していることが確認されている（渡辺編2015、渡辺2018）。一方、北の松前についてはアイヌの生活の「内国化」が近世を通じて生じていたことが明らかにされている（関根2014）。また江戸は、近世の政治的中心地であるとともに物資流通の結節点の役割を果たしており、清朝製品の流通が考古学的に抽出されてきている（堀内2010など）。

報告者は2012～2014年度科学研究費（基盤(C)）「近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究」において、琉球と松前という2つの国家境界域における物資流通の比較研究を実施した。その結果、二つの課題が抽出できた。一つは「国家／非国家」の違いにより物資流通の様相が大きく異なること、もう一つは考古学資料に見られる物資流通と文献史料に見られるそれとの間には齟齬、乖離があることである。

以上のようにこれら対外交渉地における考古学的な調査研究は各地域において蓄積がある。同時に同じ対外交渉の窓口とはいえ「四つの口」では、それぞれにその支配形態・貿易相手（貿易内容）・貿易形態の違いが見られ、独自の特徴を有している（図1-1）。それゆえそれらの最新の研究成果を相互比較することで近世日本の対外物資流通を相互的に検討する必要がある。そこで本研究では、この「四つの口」における物資流通に関わる考古学資料（陶磁器など）を比較し、総合的に検討することで、近世日本の対外物資流通を総合的・立体的に明らかにすることを目的とした。

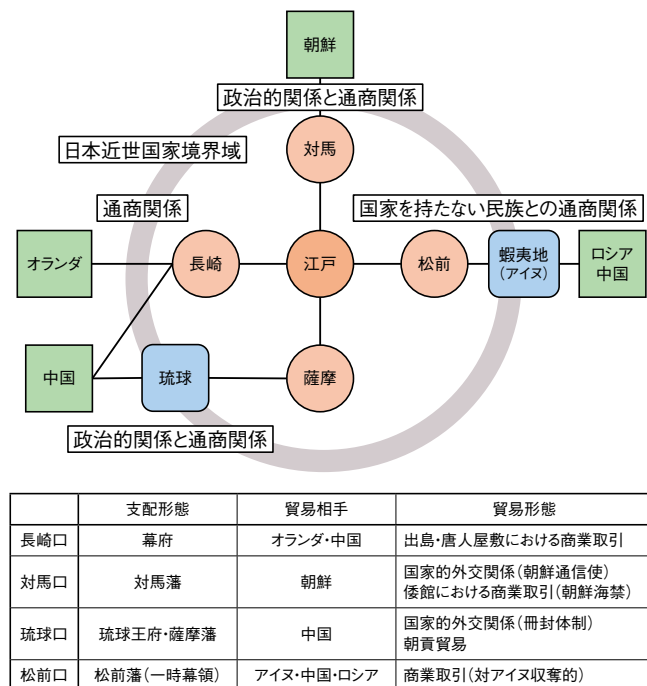


図1-1 「四つの口」模式図

またこれら対外交渉地における物資流通については、文献史的な研究も進められているが、両資料の性格的な違いから、先述したように齟齬ないし乖離が認められる。本研究では両領域の研究者が協同で調査研究を進めることで、両者の相違点と一致点を探る。さらに近年、琉球口における物資流通において、経由地としてのトカラ列島の存在がクローズアップされているが、その考古学的資料はきわめて少ない。そこで現段階でもっとも資料が欠落しているトカラ列島において考古学的発掘調査を実施することで、その実態解明の基礎資料を収集する。また近世における最大消費地である江戸における輸入品を考古学的に調査研究することで、輸入品が与えた社会的影響を明らかにする。

以上の研究状況を踏まえて、本研究では、「四つの口」における物資流通の具体相について考古学的資料を比較検討するとともに、「四つの口」における考古学資料と文献史料とを比較することで総合的な近世物資流通の具体相を明らかにすることを目的とした。

参考文献

- 新垣力 2010「沖縄から出土する17～19世紀の貿易陶磁器」『海の道と考古学』pp.203-217 高志書院
荒野泰典他編 2010『日本の対外関係6 近世の世界の成熟』吉川弘文館
家田淳一 2006「江戸中・後期「伊万里の朝鮮貿易」」『日本海域歴史大系』5巻 pp.37-80 清文堂出版
大橋康二 2004『海を渡った陶磁器』吉川弘文館
関根達人 2014『中近世の蝦夷地と北方交易』吉川弘文館
野上建紀 2010「一七世紀後半～一八世紀前半における肥前磁器のアメリカ大陸への流通」『交通史研究』72 pp.1-23
橋口亘 1999「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究』19 pp.141-146
橋口亘 2009「近世薩摩における中国陶磁の流入－清朝磁器を中心に－」『からふね往来－日本を育てたひと・ふね・まち・ころ』pp.53-66 中国書店
堀内秀樹 2010「近世都市江戸における貿易陶磁器の消費」『海の道と考古学』pp.248-265 高志書院
渡辺芳郎 2018『近世トカラの物資流通－陶磁器考古学からのアプローチ－』北斗書房
渡辺芳郎編 2015『近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究』鹿児島大学法文学部

第2章 研究の概要

2016年度

①口之島発掘調査

調査期間：2017年8月17日（木）～23日（水）

※2016年度予算を繰り越し、2017年度に実施した。

調査地点：鹿児島郡十島村口之島10-2「阿弥陀様」前庭部

調査参加者：渡辺芳郎・幸芸（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科2年生）・松山初音（同1年生）・小西義将（鹿児島大学法文学部3年生）（いずれも当時）

調査内容：口之島「阿弥陀様」前庭部の発掘調査

②沖縄研究会

開催日時：2016年11月19日（土）～22日（火）

開催地：那覇市立壺屋焼物博物館研修室

内容：

渡辺芳郎 「主旨説明」

野上建紀 「考古学から見た「長崎口」貿易」

山口美由紀 「長崎出島の発掘調査成果」

木村直樹 「文献から見た「長崎口」貿易」

堀内秀樹 「江戸における貿易陶磁器の流通と受容」

関根達人 「考古学から見た「松前口」貿易」

片山まび 「陶磁器から見た「対馬口」貿易」

池田榮史 「考古学から見た「琉球口」貿易」

深澤秋人 「文献から見た「琉球口」貿易」

調査・巡見：張猷功墓・天使館跡・薩摩藩番所跡など

2017年度

①北海道研究会

開催日時：2017年11月23日（木）～26日（日）

開催地：松前町町民総合センター

内容：

渡辺芳郎 「趣旨説明」

関根達人 「松前城下正行寺北側武家屋敷発掘調査について」

菊池勇夫 「「松前口」(松前三湊)の移出入品について」

堀内秀樹 「江戸における外国製品の流通」

片山まび 「近世国家領域「四つの口」における物資流通の比較考古学的研究 2017年度 研究成果」

野上建紀 「考古学からみた「長崎口」-陶磁器流通からみるグローバル化、ヒトとモノの移動-」

渡辺芳郎 「トカラ口之島「阿弥陀堂」前庭部の発掘調査について（付：横当島分布調査）」

池田榮史 「近世中・琉・薩間の物資流通」

深澤秋人 「「琉球口」における物資流通の担い手-奄美諸島船への着目-」

なお研究会については『北海道新聞』道南版（2017年11月28日）に記事が掲載された。

調査・巡見：福山（松前）城跡（資料館）・松前町郷土資料館（「道南の海揚がり遺物」展）・上ノ国町勝山館ガイダンスセンター・上ノ国町文化財整理室（勝山館跡出土資料）・笹浪家住宅（重文）・江差町郷土資料館・開洋丸展示館など

②沖縄県久米島博物館調査

日時：2018年2月9日（金）

調査者：渡辺芳郎

調査地：沖縄県久米町久米島博物館

調査内容：久米島博物館保管の旧家伝来資料の調査

2018年度

①奄美市立奄美博物館調査

調査期間

事前調査：2018年5月23・24日（水・木）

本調査：2018年8月13日（月）～19日（日）

調査参加者：渡辺芳郎・中尾綾那（鹿児島大学大学院人文社会科学研究1年生（当時））

調査地：奄美市立奄美博物館

調査内容：奄美市大熊大里遺跡出土資料の再整理

②長崎研究会

開催日時：2018年11月24日（土）～25日（日）

開催地：長崎大学多文化社会学部

内容：

関根達人 「松前藩福山城下町の考古学的研究2」

菊池勇夫 「近世後期松前地における諸職人の存在様態」ほか

堀内秀樹 「江戸における外国製品の流通Ⅱ」

片山まび 「釜山広域市草梁倭館船蔵周辺遺跡」

野上建紀 「東アフリカの遺跡と陶磁器」

木村直樹 「長崎口」における抜荷」

山口美由紀 「長崎出島出土の西洋陶器－産地・中継地・流通－」

渡辺芳郎 「奄美大熊大里遺跡出土陶磁器の調査報告（暫定版）」

池田榮史 「中近世の交易路と船舶について」

深澤秋人 「近世琉球末期における朝貢品錫の調達について－1850年代の状況－」

調査・巡見：長崎出島・出島整理作業所・長崎市埋蔵文化財整理所（唐人屋敷跡出土資料、田中学氏説明）・唐人屋敷跡

③韓国釜山調査

調査期間：2018年9月27日～10月1日、10月23日～10月30日

調査者：片山まび

調査地：釜山博物館

調査内容：草梁倭館遺跡出土の遺物整理

2019年度

①奄美市立奄美博物館調査

調査期間

予備調査：2019年6月14日（金）

本調査：2019年8月19日（月）～21日（水）

調査参加者

予備調査：渡辺芳郎

本調査：渡辺芳郎・中西瑠花（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科1年生（当時））

調査地：奄美市立奄美博物館

調査内容：奄美市立奄美博物館保管の盛岡家伝来資料の調査

②対馬研究会

開催日時：2019年11月2日（土）～4日（月）

開催地：東横イン対馬厳原会議室

内容：

池田榮史 「沖縄県那覇港「渡地村跡」遺跡調査報告書からみた那覇港の変遷」

深澤秋人 「鹿児島県管轄期における日本製品の流通－繰綿と海産物を中心に－」

渡辺芳郎 「奄美大和村盛岡家伝来資料の調査」

野上建紀 「西海の島々で焼かれた磁器」

木村直樹 「長崎貿易の捉え方－オランダ貿易・唐人貿易・脇荷・抜荷」

堀内秀樹 「江戸における外国製品の流通Ⅲ」

片山まび 「朝鮮通信使がもたらした陶磁器」

関根達人 「北海道松前町福山城下町遺跡発掘調査報告」

調査・巡見：お船江跡・椎根の石屋根倉庫群・小茂田浜神社・御胴塚・上見坂展望所・上見坂砲台跡・西漕手・和多都美神社・烏帽子岳展望所・住吉神社

2020年度

①公開研究発表会

※鹿児島大学での開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。

②成果報告書の刊行（本報告）

第 1 部 報告編

第 3 章 十島村口之島「阿弥陀様」前庭部の発掘調査

第 4 章 奄美大熊大里遺跡出土陶磁器の調査

第 5 章 奄美大和村盛岡家伝来資料の調査

第3章 十島村口之島「阿弥陀様」前庭部の発掘調査

渡辺 芳郎 (鹿児島大学法文学部)

1. 調査目的の目的と概要

(1) 調査の目的

報告者は、これまで鹿児島県鹿児島郡十島村(トカラ列島)において、近世の陶磁器流通を明らかにするため分布調査を実施してきた(渡辺編2015)。琉球と薩摩とを結ぶ海上ルートの経由地であり、近世の物資流通を考える上で重要である。しかしこれまでトカラ列島における近世遺跡の発掘調査は、諏訪之瀬島切石遺跡(熊本大学考古学研究室編1994、大橋・山田1995)にとどまっており、考古学資料は十分とは言えない¹⁾。そこで口之島において近世遺跡の発掘調査を実施することで、物資流通の具体相について資料を蓄積することを目的とした。なおトカラ列島では、祠や神社への陶磁器の奉納が確認されていることから(亀井1993など)、口之島「阿弥陀様」前庭部を調査地点として選択した。

(2) 調査期間

予備調査：2017年6月30日(金)～7月2日(日)

本調査：2017年8月17日(木)～23日(水)

(3) 調査地点

鹿児島郡十島村口之島10-2「阿弥陀様」前庭部

(図3-1、No.13地点)

(4) 調査体制

調査担当者：渡辺芳郎

調査補助者：辜芸(鹿児島大学大学院人文社会科学研究科2年生)・松山初音(同1年生)・小西義将(鹿児島大学法文学部3年生)(いずれも当時)

調査協力：十島村教育委員会

(5) 調査面積

4.0㎡(Aトレンチ：3.0×1.0m、Bトレンチ：1.0×1.0m)

(6) 調査経過

8月16日(水) 23:00 鹿児島港発のフェリーとしまにて口之島へ向かう。

8月17日(木) 5:30 口之島港着。調査機材を調査地点まで運搬。「阿弥陀様」前庭部にAトレンチを設定。表土(第1層)を剥いだ後、第2層上面を検出し、写真撮影。Aトレンチ東側に1.0×0.5mのサブトレンチを設定し、第2層を掘り下げる。第3層上面を検出。

8月18日(金) 第2層から中世から近現代までの遺物を包含することから、第2層を掘り下げる。Aトレンチのほぼ中央部でビニル製の水道管が検出され、第2層は水道管設置に伴う造成土と判断する。水道管両側に幅20cmのベルトを残し、第2層を掘り下げ、第3層上面を検出する。

8月19日(金) Aトレンチ第3層上面を検出したのち写真撮影。Aトレンチ東側に1.0×0.5mのサブトレンチを設定して第3層を掘り下げる。Aトレンチの東側に1.0mの距離を置いてBトレンチを設定。表土(第1層)を剥いだ後、第2層を掘り下げる。第2層からは中世から近現代までの

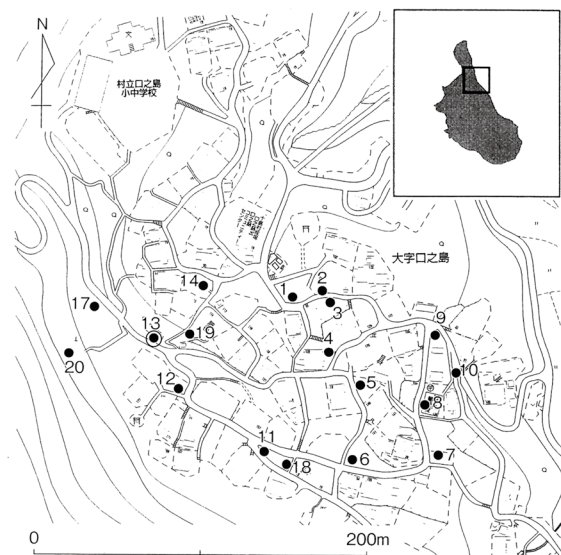


図3-1 調査地点位置図

遺物が出土する。

8月20日(日) Aトレンチのサブトレンチ部を深さ約30cmまで掘り下げるが、遺物をまったく含まないことから地山層と判断し、掘り下げをやめ、写真撮影。Bトレンチは第2層の下より、Aトレンチ第3層と同色同質の地層が検出され、地山と判断し、その上面で完掘とする。Aトレンチの北面と東面、Bトレンチの北面と東面の断面図(S=1/10)を作成。

8月21日(月) 降雨のため野外での作業は中止。出土遺物の洗浄を行う。

8月22日(火) 調査地点周辺の平板測量(S=1/100)とトレンチ平面図(S=1/20)作成。

8月23日(水) 午前10時より現地説明会開催し、約30名が参加。午後埋め戻し、機材を撤収して調査を終了する。

8月24日(木) 11:30 口之島発のフェリーとしまにて鹿児島へ帰る(18:50着)。大学まで機材を運んで解散。

2. 調査地点の概要(図3-2・4・5)

調査地点は口之島北東部にある集落の南西部、南から北へ下る傾斜地途中の平坦部にある。平坦部は自然地形を利用して、ある程度、人工的に削平されたと思われる。現在は南側の道路からコンクリートの階段で降りるようになっている。北～東側周辺は崖面となって落ちている。平坦部の西隅に祠が建てられており、島では「阿弥陀様」と通称されている。祠周辺はコンクリートで固められている。内部には木像一体が安置されている²⁾。祠前庭部のほぼ中央に自然の丸石が埋め込まれており、集落の人の話では、祭礼が行われる際にこの上に立って祝詞が読まれるという。平坦部の南西部(山側)斜面には集石が見られ、花瓶が供えられており、この集石も信仰の対象になっているようであるが、詳細は不明である。調査では前庭部の祠前面東側にトレンチを設定した。

3. 調査成果

(1) 層位状況(図3-3・表3-1)

Aトレンチ

Aトレンチでは3層が確認できた。以下の土色表記は『標準土色帳』によるマンセル表色法を用いている。

第1層(表土層): 灰黄褐色(10YR4/2)。粘質土で粘土粒子は細かく、小礫を多数含んでいる。中世から近現代の遺物が出土した。

第2層(造成土): 黒褐色(7.5YR3/2)。粘質土で粘土粒子は細かく、小礫を多く含む。硬質に叩きしめられており、トレンチほぼ中央の土層中にビニル製の水道管が南北方向に埋設されているのを検出した。第1・2層において埋設のための掘り込みは確認できなかったため、ビニル管埋設と第2層の造成は同時期に行われたと判断した。中世から近現代の遺物が出土した。

第3層(地山): 褐色(10YR4/4)。粘質土で粘土粒子は細かく、大小の礫を多く含む。トレンチ東側に1.0×0.5mのサブトレンチを設定して3層を掘り下げたが、遺物が出土しなかったため地山と判断した。

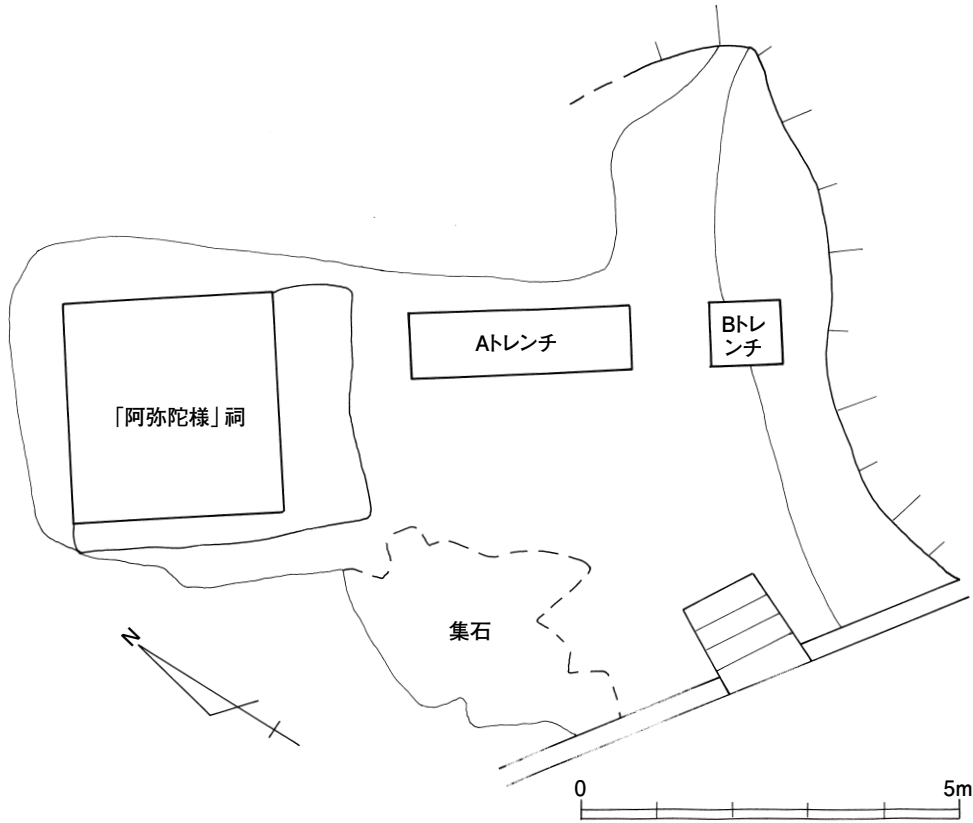


図3-2 トレンチ配置図 (S=1/100)

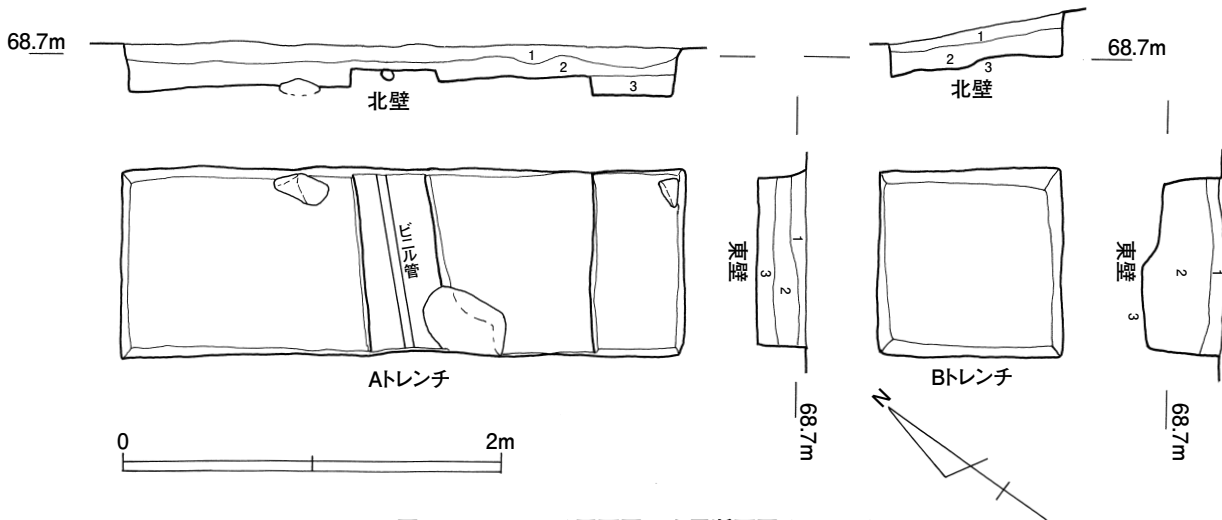


図3-3 トレンチ平面図・土層断面図 (S=1/40)

表3-1 土層観察表

Aトレンチ

	土色	土質	備考
1層	10YR4/2 灰黄褐色	粘質土で小礫を多数含む。	表土。
2層	7.5YR3/2 黒褐色	粘質土で硬く叩きしめられる。小礫を多数含む。	造成土。遺物を多数含む。
3層	10YR4/4 褐色	粘質土で礫を多数含む。	地山。

Bトレンチ

	土色	土質	備考
1層	10YR4/2 灰黄褐色	粘質土で小礫を多数含む。	表土。Aトレンチと同じ。
2層	5YR3/1 黒褐色	粘質土で大小礫を多数含む。土質は脆い。	遺物多数を含む。
3層	10YR4/4 褐色	粘質土で礫を多数含む。	地山。

Bトレンチ

Bトレンチでも3層が確認できた。うち第1層と第3層はAトレンチと同じ土層である。

第2層：黒褐色 (5YR3/1)。粘質土で、粘土粒子は細かく、大小の礫を多数含む。しまっておらずもろい土層であり、Aトレンチの第2層とは異なる。前庭部のはずれに位置することから、前庭部中心部分からの排土が堆積したものと推測される。中世から近現代の遺物が出土した。

以上のように、今回の発掘調査では年代の限定できる地層・遺構は検出されなかった。

(2) 出土遺物 (図3-6～8・表3-2)

遺物 (表面採集も含む) は中世～近現代のものが小片も含め90点が出土している。うち陶器が36点、磁器が50点、その他金属製品などが4点である。陶器は日本の中世にあたる中国産陶器が少数あり、他は近世～近代の陶器で、肥前・薩摩 (苗代川・龍門司・堅野など)・関西系・沖縄産がある。磁器は中世では中国の白磁・青磁・青花、近世では中国青花、肥前、薩摩磁器がある。年代・産地は不明であるが、須恵質の陶器も出土している。小片については年代・産地比定が困難なものが多い。先述したように年代が限定できる地層・遺構は検出されなかったので、遺物について主要なものを年代順に報告する。

日本の中世段階における陶磁器はいずれも中国産である。11世紀後半～12世紀前半の玉縁口縁の白磁片が、今回の調査における最古段階の資料である (No.1)。それに続く陶磁器として、同安窯系青磁小皿 (12～13世紀) (No.2)、小片のため年代比定ができない竜泉窯青磁片など (No.3) がある。15世紀後半の南中国産褐釉陶器 (No.4) は、沖縄での出土が多く見られるタイプで、沖縄5類と分類されている (瀬戸他2007)。沖縄経由で口之島に運ばれた可能性が高い。青花磁器としては、景德鎮産の青花皿 (うち1点は「大明成化年製」銘) (16世紀) (No.5・6)、碁笥底青花皿 (No.7)、中国南部産の粗製の

表3-2 報告資料観察表

図	No.	トレンチ	層位	種類1	種類2	器種	産地	年代	備考
3-6	1	採集		磁器	白磁	玉縁口縁皿	中国	11c後半～12c前半	
	2	A	2	磁器	青磁	小皿	中国同安窯系	12～13c	内面櫛描文、外底無釉
	3	A	2	磁器	青磁	小片	中国竜泉窯	15～16c	2点、うち一点は刻線蓮弁文
	4	B	1	陶器	褐釉	壺	中国	15c後半	沖縄5類褐釉陶器
	5	A	2	磁器	青花	皿	中国景德鎮	16c	外底「大明成化年製」銘
	6	B	1	磁器	青花	皿	中国景德鎮	16c	
	7	採集		磁器	青花	碁笥底皿	中国	16c	
	8	A	2	磁器	青花	小杯	中国	17c前半	
3-7	9	採集		磁器	青花	皿	中国	16c後半～17c前半	南中国産粗製青花、内底・外底無釉
	10	A	2	磁器	染付	皿	肥前	17c前半	初期伊万里
	11	A	2	陶器		摺鉢	肥前	17c	
	12	B	1	磁器	染付	丸碗	肥前	18c	丸文
	13	採集		陶器		摺鉢	薩摩苗代川	17c後半～18c	
	14	B	1	陶器		甕口縁	薩摩苗代川	19c～	
	15	B	1	磁器	染付	半筒碗	薩摩	18c末～19c初	雪持笹文
	16	A	2	陶器	鮫肌釉		薩摩龍門司	19c	
3-8	17	A	2	陶器	色絵	碗か	関西系		
	18	A	2	陶器	無釉	摺鉢	沖縄		
	19	A	2	陶器	無釉	大壺	沖縄		
	20	採集		陶器	黒釉	香炉	沖縄か		脚周辺をなでる技法が沖縄陶器に似る
	21	A	2	陶器	上焼	灯明具	沖縄か		白化粧土
	22	A	2	磁器	青花	碗	中国	19c後半	明治27年平島漂着船由来
	23	A	2	陶器	無釉	壺?	?		須恵質の陶器片
	24	A	2	銭貨		寛永通宝	日本		2点。祠への奉納品か

青花碗底部(16世紀後半～17世紀前半)(No.9)がある。また17世紀前半と推測される青花小杯口縁(No.8)も沖縄でしばしば見られる器形である(新垣2018)。

近世に入ってから国産陶磁器には、17世紀段階のものとして肥前産染付磁器(No.10)や陶器の摺鉢片(No.11)がある。また18世紀の肥前産染付磁器(丸文)(No.12)、薩摩焼苗代川産の摺鉢(No.13)、18世紀末～19世紀初頭の薩摩産の染付雪持笹文半筒碗(No.15)がある。19世紀の陶磁器には薩摩焼苗代川産の甕口縁(No.14)、龍門司産の鮫肌釉陶器片(No.16)がある。ただし両者ともに近代まで下る可能性もある。

その他の陶磁器として、沖縄産の無釉陶器(荒焼)の甕胴部片(No.19)や摺鉢片(No.18)、三足香炉の底部(No.20)がある。香炉の脚部周辺を丸くなでて貼り付ける技法は沖縄産の土瓶の脚などに見られる。白化粧土を掛けた沖縄の施釉陶器(上焼)と思われる灯明具も1点ある(No.21)。このほか関西系と推測される色絵陶器片(No.17)もある。また明治27(1894)年に十島村平島に漂着した中国船に搭載されていたと推測される清朝青花磁器片(新里2016)(No.22)もある。このほか年代・産地不明の須恵質土器の口縁～肩部(No.23)が出土している。

陶磁器以外には寛永通宝2点(No.24)が出土している。これらは通貨として島内で流通したかもしれないが、「阿弥陀様」前庭部という点から、同祠への奉納品である可能性もある。

以上の出土陶磁器の様相は、中世段階における中国産白磁や青磁、青花、沖縄経由と推測される褐釉陶器・青花、近世段階における肥前陶磁器と薩摩焼、また平島の漂着船由来の青花磁器など、これまで十島村一帯で実施してきた分布調査の成果(渡辺編2015、渡辺2018)と整合するものである。

4. 発掘調査成果のまとめ

- (1) 今回の発掘調査で、時期を限定できる土層・遺構は確認できなかった。
- (2) 出土・採集された陶磁器の最古の年代は11世紀後半～12世紀前半(玉縁口縁白磁)である。
- (3) 日本の中世段階の陶磁器として、中国の白磁・青磁・青花、褐釉陶器が確認された。
- (4) 近世の陶磁器として、中国青花磁器、肥前陶器・磁器、薩摩焼(磁器を含む)、沖縄産陶器が確認された。
- (5) (2)～(4)の陶磁器流通の様相は、これまでの分布調査成果と整合的である。

注

1) 筆者による調査と並行して、新里貴之によって積極的にトカラ列島の考古学的調査が進められている(新里2015・2016・2017・2018、Shinzato2020など)。また橋口亘・松田朝由らによる中世石塔の調査(橋口・松田2012・2013)、河口貞徳によるトカラ列島における調査資料の再整理・報告事業なども進められている(鹿児島県立埋蔵文化財センター2019)。

2) 『十島村誌』によれば高さ90cmで、製作年代は不明だが、破損具合から江戸中期頃であろうか、としている(十島村誌編集委員会編1995 p.939)。

参考文献

- 新垣力2014「17～19世紀の琉球列島における貿易陶磁の様相」『琉球列島の貿易陶磁』第35回日本貿易陶磁研究集会(沖縄大会) 発表要旨・資料集 pp.41-50
- 大橋康二・山田康弘1995「鹿児島県鹿児島郡十島村諏訪之瀬遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』15、pp.141-164
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター2019『吐噶喇・奄美の遺跡』同センター
- 亀井明德1993「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』11、pp.11-45
- 熊本大学考古学研究室編1994『トカラ列島の考古学的調査』十島村教育委員会
- 新里貴之2015「トカラ列島・横当島の壺屋焼」『Archaeology from the SouthⅢ－本田道輝先生退職記念論文集－』pp.317-330 本田道輝先生退職記念事業会
- 新里貴之2016「ピーピーどんぶり考」『鹿児島考古』46、pp.77-92
- 新里貴之2017「トカラ列島の弥生時代と平安時代：中之島地主神社敷地内発掘調査成果から」『日本考古学協会第83回総会研究発表要旨』pp.178-179
- 新里貴之2018「トカラ列島宝島大池遺跡」『平成30年度鹿児島県考古学会総会研究発表会要旨』pp.31-32
- Shinzato, Takayuki. 2020 Discarded ceramics which had been stored in Ji-nushi shrine, Nakano-shima Islands, in the Tokara archipelago. *The Tokara Islands : Culture, Society, Industry and Nature* pp.20-28 北斗書房
- 瀬戸哲也他2007「沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－」『沖縄埋文研究』5、pp.55-75
- 十島村誌編集委員会編1995『十島村誌』十島村
- 橋口亘・松田朝由2012「トカラ列島の中世石塔(1) 鹿児島県十島村悪石島の15世紀の山川石製宝篋印塔」『南日本文化財研究』14、pp.6-9
- 橋口亘・松田朝由2013「トカラ列島の中世石塔(2)〔修正版〕鹿児島県十島村悪石島の15世紀の山川石製宝篋印塔」『南日本文化財研究』16、pp.1-5
- 渡辺芳郎編2015『近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究』平成24～26年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書、鹿児島大学法文学部
- 渡辺芳郎2018『近世トカラの物資流通－陶磁器考古学からのアプローチ－』北斗書房



1. Aトレンチ設定状況 (08/17)



2. Aトレンチ第1層(表土)除去 (08/17)



3. Aトレンチ・サブトレンチ設定状況 (08/18)



4. Aトレンチ・サブトレンチ完掘状況
(第3層上面) (08/18)



5. Aトレンチ第2層除去 (08/19)



6. Aトレンチ・サブトレンチ(第3層掘り下げ) (08/20)

図3-4 口之島「阿弥陀様」前庭部発掘調査状況(1)



1. Bトレンチ設定状況 (08/19)



2. Bトレンチ完掘状況 (第3層上面) (08/20)



3. A・Bトレンチ完掘状況 (08/20)



4. 現地説明会 (08/23)



5. A・Bトレンチ埋め戻し状況 (08/23)



6. 調査参加者 (08/23)

図3-5 口之島「阿弥陀様」前庭部発掘調査状況 (2)

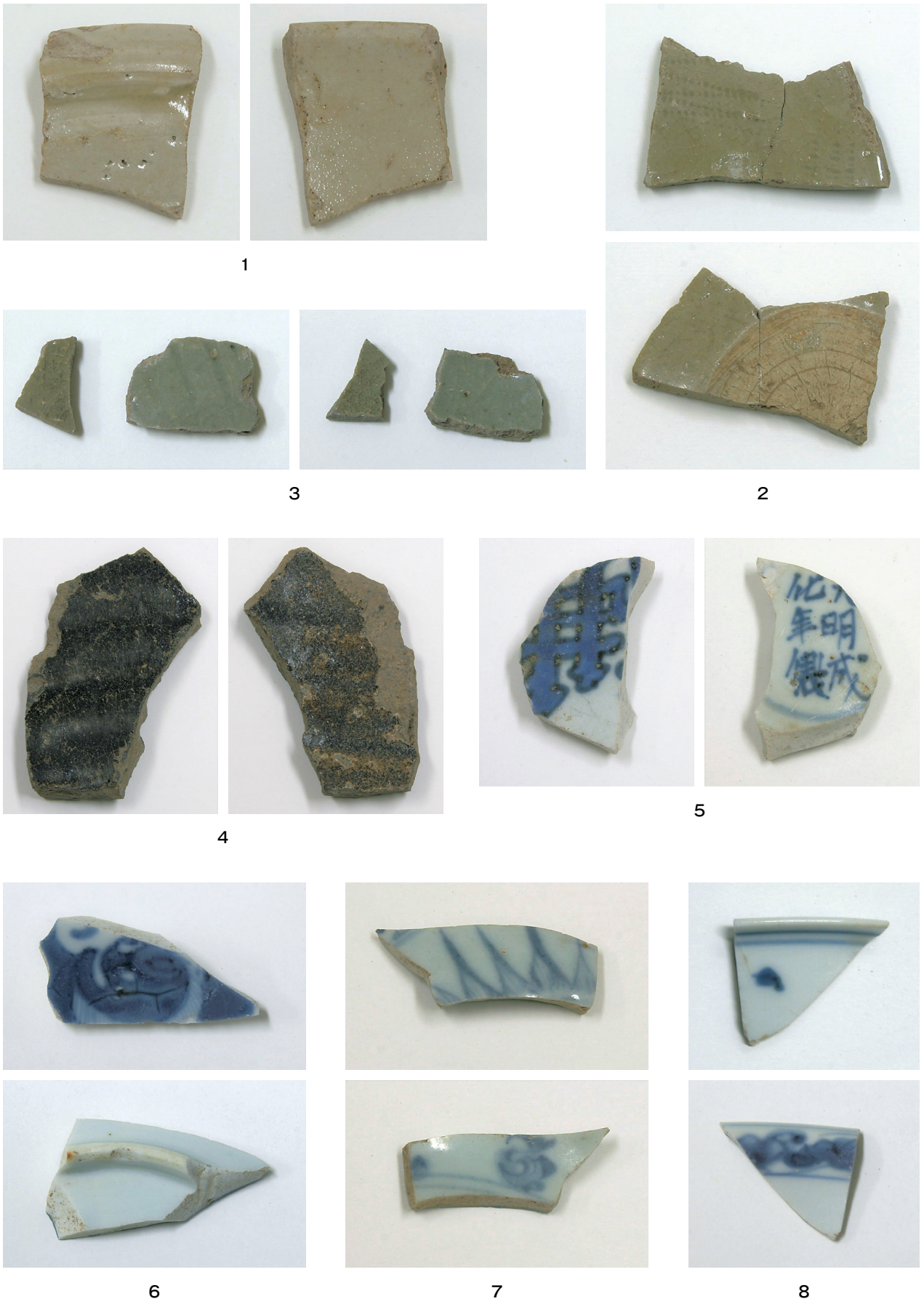
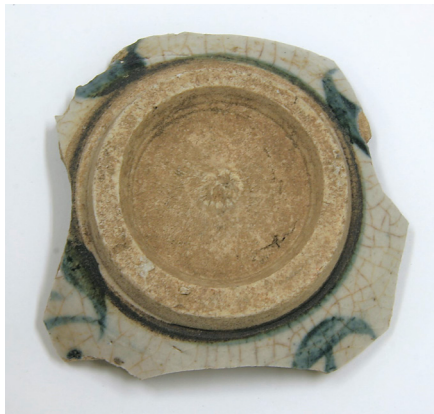
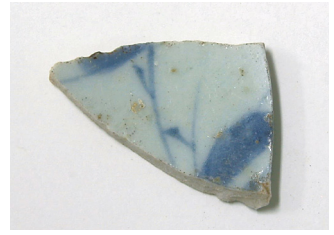


图3-6 口之島「阿弥陀様」前庭部出土遺物(1)



9



10



11



12



13



14

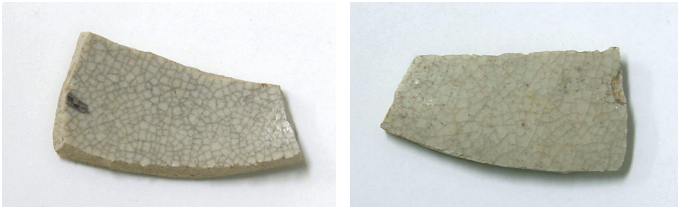


15



16

图3-7 口之島「阿弥陀様」前庭部出土遺物(2)



17



18



20



22



24



19



21



23

图3-8 口之島「阿弥陀様」前庭部出土遺物(3)

第4章 奄美大熊大里遺跡出土陶磁器の調査

渡辺 芳郎 (鹿児島大学法文学部)

1. 調査の目的と概要

(1) 調査の目的

奄美群島における近世遺跡の発掘調査は、近年増加しつつあるとはいえ、まだ決して多くない。その中で過去の調査成果の再検討も重要な作業となる。奄美市名瀬大熊の大熊大里遺跡は、1996～2002年に発掘調査され、その報告書も刊行されているが、出土資料について十分に報告されているとはいえない(名瀬市教育委員会2004『奄美大島名瀬市大熊集落遺跡群』同委員会)。そこで今回、改めて出土陶磁器資料を再整理することで、奄美大島における近世陶磁器流通の状況の一端を明らかにするため、本調査を実施した。

(2) 調査期間

事前調査：2018年5月23・24日(水・木)

本調査：2018年8月13日(月)～19日(日)

(3) 調査地：奄美市立奄美博物館

(4) 調査者：渡辺芳郎・中尾綾那(鹿児島大学大学院人文社会科学研究1年生(当時))

調査協力：奄美市立奄美博物館(喜友名正也氏・高梨修氏)

(5) 調査内容・方法：

- 1) 報告書の分類別に収納された遺物の中から近世陶磁器を抽出
- 2) 陶磁器の種類・産地・器種などの比定
- 3) 上記分類に従って破片数をカウント(調査カード記入)
- 4) 写真撮影

2. 大熊大里遺跡について

奄美市名瀬大熊に所在する「大熊集落遺跡群」の一部である。1996・2001年に3地点で試掘調査が実施され、うち「ウントネ・シャントネ敷地跡」(後述)において遺構等が検出され、2002年4～7月に、大熊地区土地区画整備事業にかかる緊急発掘調査として、同地点の発掘調査が実施された。ウントネ敷地内からピット17基、シャントネ敷地内からピット104基が検出された。ピットおよび文化層からは5000点以上の中世～近代の陶磁器が出土した。発掘調査報告書は2004年に刊行されたが、出土遺物の一部が掲載されるにとどまり、全貌は十分に報告されていなかった。

ウントネ・シャントネとは大熊集落でノロ祭祀に関わる建物である。ノロ祭祀とは琉球王国における政治的神女組織による国家的祭祀制度で、奄美諸島にも琉球王国

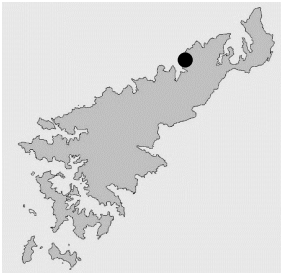
表4-1 大熊集落におけるノロ祭祀
(名瀬市教育委員会2004より一部改変)

祭祀名称	祭祀月日(いずれも旧暦)	開催場所
インバン祭り	1月2日	シャントネ
テロコガミ祭り	ウムケ 2月の中壬の日	シャントネ
マンセンガミ祭り	ウムケ 3月の初庚の日	シャントネ
マンセンガミ祭り	ウフリ 3月の初庚の日から14日目	シャントネ
テロコガミ祭り	ウフリ 4月の中壬の日	シャントネ
アラホバナ	6月の第一または第二庚の日	ウントネ
フーウンメ	7月の中壬の日	ウントネ
マンセンガミ祭り	ウムケ 9月の初庚の日	シャントネ
マンセンガミ祭り	ウフリ 9月の初庚の日から14日目	シャントネ
フユンメ	11月の初戊の日	ウントネ

※ウムケは「お迎え」、ウフリは「お送り」の意味



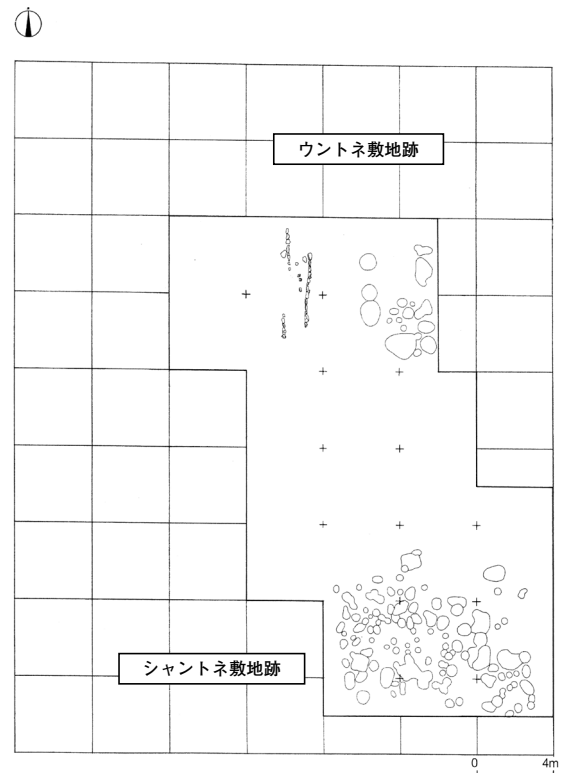
図4-1 ウントネにおけるフーウンメ祭り
(旧暦7月の中壬の日、平成6年)
(名瀬市教育委員会2004より)



大里大熊遺跡所在地



ウントネ・シャントネ敷地跡設定グリッド



ウントネ・シャントネ敷地跡検出遺構



ウントネ・シャントネ全景
(奥がウントネ、手前がシャントネ)

図4-2 大熊大里遺跡概要
(名瀬市教育委員会2004より一部改変)

統治時代（15世紀中頃）に導入されたとされる。ノロは琉球王府から祭祀管轄地域を任命され、公的な村落祭祀に従事していた。慶長14（1609）年の島津氏の琉球侵攻以後、藩の直轄地となった奄美では、ノロは厳禁されたとされているが、その後もノロの家系は継承され、平成期まで存続していた。ウントネ・シャントネは、それら村落祭祀を行う家屋である。1年間に表4-1のような祭祀が同地において行われる。

3. 調査成果（図4-3～5）

本章では、調査した陶片について、産地別（肥前・薩摩・沖縄・中国・その他）、種類（陶器・磁器）、器種（食膳具・貯蔵具・調理具・その他）に分類して検討する。もう一つ重要な属性として「時期」があるが、小片のため年代比定が難しい資料が多いため、最後に年代が推定できる資料を抽出して、時期的変化を検討したい。

まず調査資料の全体像を整理すると表4-2になる（数字はいずれも破片数。以下同）。

このうち中国磁器には、16世紀後半～17世紀前半の明朝磁器も含んでいる。また白磁・青磁については小片のため年代比定が困難なものも多く、徳化窯系白磁と判定できたもの以外は含んでいない。「不明」としたものの大部分は甕や壺など貯蔵具の胴部片である。

表4-2 大熊大里遺跡出土の近世陶磁器

	肥前磁器	肥前陶器	薩摩陶器	薩摩磁器	沖縄荒焼	沖縄上焼	その他	中国	不明	合計
破片数	1271	150	982	117	243	73	55	302	668	3861
比率	32.9	3.9	25.4	3.0	6.3	1.9	1.4	7.8	17.3	

(1) 近世国産陶磁器（表4-3）

近世の本土産陶磁器と沖縄産陶器は2891点を抽出した。産地・種類別に見ると、肥前磁器が最も多く（44%）、薩摩陶器（34%）がこれに次ぐ。肥前陶器と薩摩磁器が4～5%を占める。沖縄の荒焼・上焼も一定比率を占めるが、近代以後のものも含む可能性がある。そのほかに「その他」の中に関西系（京焼）と思われる色絵陶器碗など数見られる。

表4-3 大熊大里遺跡出土の近世国産陶磁器

	肥前磁器	肥前陶器	薩摩陶器	薩摩磁器	沖縄荒焼	沖縄上焼	その他	合計
破片数	1271	150	982	117	243	73	55	2891
比率	44.0	5.2	33.9	4.0	8.4	2.5	1.9	

(2) 肥前磁器（表4-4）

近世肥前磁器は1271点を抽出し、その大部分は染付であるが、白磁の場合、その産地の比定が難しいという面もある。器種は碗・皿などの食膳具が大半であるが、碗・皿の区別は困難なものも多く、杯・鉢なども含む可能性がある。大きくまとめれば食膳具が圧倒的に多いと言える。そのほかに瓶もあるが、肩部に一重網目文を描くやや小振りの瓶（17世紀後半）が比較的多く見られ、この点は沖縄と共通する（大橋2003）。

表4-4 大熊大里遺跡出土の肥前磁器

	破片数	比率
碗	1087	85.5
皿	157	12.4
瓶	27	2.1
合計	1271	

(3) 肥前陶器 (表4-5)

150点を抽出した。摺鉢と少数の甕を除くと、基本的に碗・皿・鉢などの食膳具である。もっとも古いものとして胎土目皿・溝縁皿片がある。摺鉢は17世紀段階のものがほとんどであり、鹿児島県本土地域の傾向と一致する。碗・皿のうち、銅緑釉を掛けた内野山窯産がもっとも多く、そのほか刷毛目製品や京焼風陶器など17世紀後半～18世紀前半のものも多く見られる。

表4-5 大熊大里遺跡出土の肥前陶器

	胎土目製品	鉄絵製品	溝縁皿	象嵌製品	刷毛目製品	蚩手製品	三彩製品	銅緑釉製品	京焼風陶器	脚付鉢	摺鉢	甕	その他	合計
破片数	1	2	1	3	15	2	1	58	7	2	44	6	8	150
比率	0.67	1.33	0.67	2.00	10.00	1.33	0.67	38.67	4.67	1.33	29.33	4.00	5.33	

表4-6 大熊大里遺跡出土の薩摩焼 (陶器)

(4) 薩摩焼 (陶器) (表4-6)

982点を抽出した。苗代川産陶器が大半を占め、次いで加治木始良産陶器(龍門司を含む)、豎野窯産陶器がある。

	破片数	比率
苗代川	864	88.0
加治木始良産	92	9.4
豎野・白薩摩	26	2.6
合計	982	

① 苗代川産陶器 (表4-7)

苗代川産陶器は864点を抽出した。器種としては甕・壺687点、摺鉢56点、土瓶113点(蓋を含む)などが見られる。また甕・壺のうち、薄い器壁の17世紀段階の破片が約1/3を占めている。ただし甕・壺類の比率の高さは、本体がもともと大型であるため、損壊時の破片数は多くなる傾向があるので、その量的評価は注意を要する。

表4-7 大熊大里遺跡出土の苗代川陶器

	甕	(17c甕)※	土瓶	摺鉢	その他	合計	※甕の内数
破片数	687	228	113	56	8	864	
比率	79.5	26.4	13.1	6.5	0.9		

② 加治木・始良産陶器 (表4-8)

加治木・始良産陶器は基本的に碗・皿の食膳具である。92点を抽出した。山元窯の製品と初期龍門司製品とは、小片では区別が困難であるため、「山元～初期龍門司」としたが、その製品が26点確認した。龍門司製品には白化粧土と鮫肌釉の製品がある。加治木・始良系陶器は元立院窯か龍門司窯か区別のつかない単色釉の製品を指す。41点ある。このほか胎土と釉調から元立院窯製品と考えられるものが2点あった。山元～初期龍門司は17世紀後半～18世紀前半、白化粧土を施す龍門司製品は18世紀後半以後、加治木・始良系陶器は18～19世紀と年代比定できる。ほぼ近世を通じて流通していることがわかる。

表4-8 大熊大里遺跡出土の加治木・始良産陶器

	破片数	比率
山元・初期龍門司	26	28.3
龍門司	23	25.0
始良・加治木系	41	44.6
元立院	2	2.2
合計	92	

③ 豎野系陶器 (表4-9)

薩摩藩窯・豎野窯の製品は26点抽出した。うち大部分が白薩摩で、器種は碗が多い。一部に染付の千鳥印が施されるものもある。「商売焼」(商品)として流通していたものと考えられている。

表4-9 大熊大里遺跡出土の豎野系陶器

	破片数	比率
白薩摩	23	88.5
その他	3	11.5
合計	26	

(5) 薩摩磁器 (表4-10)

薩摩磁器の器種は圧倒的多数が染付の碗であり、そのうち器形がわかるものとして、18世紀末～19世紀初頭の半筒碗(雪持笹文)、19世紀中頃の端反碗がある。ただし白磁の産地比定が難しいことによる面もある。

表4-10 大熊大里遺跡出土の薩摩磁器

	破片数	比率
染付	115	98.3
白磁	2	1.7
合計	117	

	破片数	比率
碗	104	88.9
皿	9	7.7
その他	4	3.4
合計	117	

(6) 沖縄産陶器 (表4-11)

沖縄産陶器には荒焼(無釉陶器)と上焼(施釉陶器)があり、前者は243点、後者は73点と、荒焼が多くを占める。ただしこのことは、苗代川の甕などと同様、荒焼には壺や甕などの大型品が多いため、破片数が多くなることを考慮に入れておく必要がある。荒焼は壺・甕のほか、摺鉢や、肩部に沈線が数条めぐる瓶(徳利)、いわゆる「鬼の手」がある。

上焼として器種がわかるものとして土瓶(蓋を含む)と碗がある。その他はほとんどが器種不明であるが、香炉と思われるものもある。釉薬は黒釉と褐釉が見られ、一部に白化粧土をかける事例も見られる。

表4-11 大熊大里遺跡出土の沖縄産陶器

荒焼	破片数	比率
壺・甕	209	86.0
摺鉢	20	8.2
瓶	14	5.8
合計	243	

上焼	破片数	比率
土瓶	24	32.9
碗	7	9.6
その他	42	57.5
合計	73	

(7) 中国磁器 (表4-12)

302点を抽出した。ただしその多くは16世紀後半～17世紀前半の明末清初とされる青花磁器(漳州窯製品を含む)であり、1609年以後、薩摩藩の直轄領となる以前の流通を反映している可能性もある。ただ沖縄で17世紀前半とされる青花磁器の小杯が目立つ。このほか清朝磁器(福建広東系磁器を含む)が見られ、沖縄における状況から18世紀後半以後ではないかと考えられる(新垣2018)。白磁1点は徳化窯系製品で、やはり18世紀後半以後であろう。

表4-12 大熊大里遺跡出土の中国産磁器

	破片数	比率
明清青花	241	79.8
漳州	33	10.9
福建広東	9	3.0
清朝青花	18	6.0
白磁	1	0.3
合計	302	

(8) 時期的変化

以上述べてきた産地別・器種別状況の時期的変化を、器種を「食膳具」「貯蔵具」「調理具」に分類して整理する。

1) 食膳具

陶器製の食膳具(以下、食膳陶器)は、肥前・薩摩・その他がある。もっとも早い食膳陶器は肥前産の胎土目皿や溝縁皿など16世紀末～17世紀初頭のもので、その後、鉄絵や象嵌製品など17世紀前半の製品、内野山窯産の銅緑釉製品を代表とする17世紀後半～18世紀前半の製品が多数流通するようになる。18世紀中頃には肥前陶器が食膳具市場から撤退するため、出土がなくなる。ついで薩摩焼では、加治木・始良地区で生産された食膳陶器がある。山元窯製品と初期龍門司製品は、破片からだとその区別ができないため一括したが、17世紀後半にはすでに奄美大島においてそれらの製品が流通していたと推測される。加治木・始良系および白化粧土を施した龍門司製品などが食膳陶器の大

部分を占めることになるが、これは肥前の食膳陶器の欠を埋める形で流通したと考えられる。もう一つ食膳陶器として土瓶があるが、その大部分は苗代川産で、18世紀後半以後に数多く流通している。このほか京焼の色絵陶器も少数ながら見られる。

磁器製の食膳具（以下、食膳磁器）は、その量的変動を追うのは難しいが、肥前磁器が17世紀前半から19世紀を通じて流通している。しかし18世紀末から薩摩磁器が見られるようになり、これは本土における状況と共通する。中国産青花磁器も大部分が食膳具である。ただし17世紀前半に位置づけられる青花小杯は、沖縄では古墓からの出土も多く、日常の食膳具として使用されていたかどうかは疑問も残る。18世紀以後の清朝磁器の流通は沖縄のそれと共通すると言えるが、磁器の主体はあくまで肥前磁器である。

2) 貯蔵具

貯蔵具はいずれも陶器で、薩摩産と沖縄産とがある。薩摩産では苗代川産が圧倒的多数を占め、本土の状況と同じである。とくに17世紀の堂平窯産と推測される器壁が薄い製品も一定数出土している。上記の山元窯～初期龍門司製品と同様、17世紀段階で薩摩焼が奄美に数多く流通していた状況がうかがえる。沖縄荒焼大壺なども一定数を占めるが、出土した資料から見ると、その流通は18世紀以後と考えられ、近代のものも含む可能性がある。近世段階において苗代川産と沖縄産とが貯蔵具においてどのような比率の変化をしていたかは今後の課題である。

3) 調理具

調理具としては肥前・薩摩・沖縄がある。肥前の摺鉢は17世紀段階のもののみで、18世紀以後は見られない。薩摩の摺鉢はすべてが苗代川産で、近世を通じて流通していた。沖縄荒焼の摺鉢も見られるが、貯蔵具と同様、近世と近代との判別が難しいことから、苗代川に対してどの程度流通していたのかは判断できない。

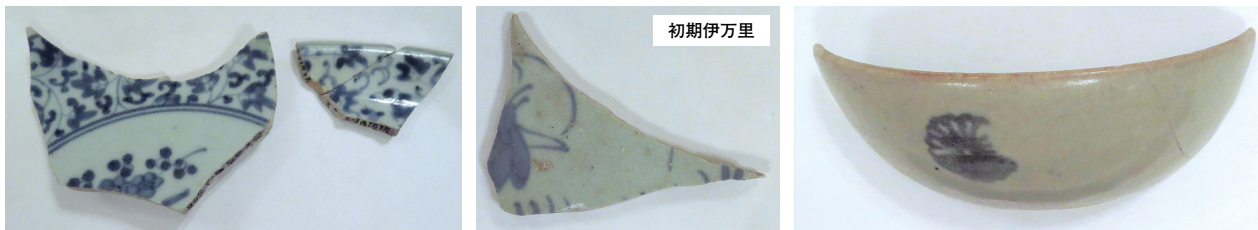
おわりに

以上までの検討結果をまとめる表4-13になる。

表4-13 大熊大里遺跡出土の近世陶磁器の概要

	肥前		薩摩焼		沖縄	その他
	磁器	陶器	陶器	磁器		
食膳具	17～19c	17c～18c前半	加治木・始良:17c後半～19c 苗代川土瓶:18c後半～19c 白薩摩碗など	18c末～19c	上焼碗・土瓶など	関西系
貯蔵具			苗代川:17～19c		荒焼壺・甕	
調理具		摺鉢:17c	摺鉢:17～19c		荒焼摺鉢	

本調査の結果、これまで経験的に多寡が語られてきた奄美における近世陶磁器流通の一端を数値的に示すことができた。筆者が以前に提示した南西諸島の近世陶磁器流通における三層構造モデルをほぼ支持するものであり、またその内容の具体的なあり方を示していると言える。ただし今回の検討では、資料が小片で時期推定に困難なものが多かったため、時期的な比率の変化（たとえば18世紀末以後の肥前磁器と薩摩磁器との比率など）が十分に検討できなかった点が今後の課題として残った。

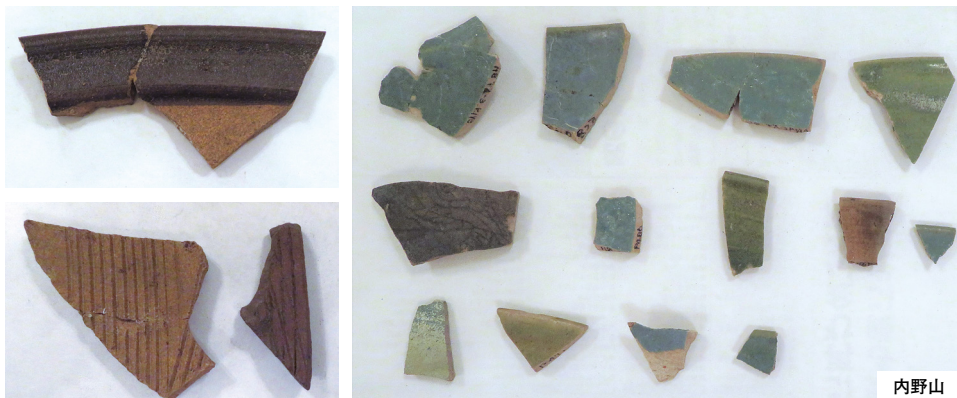


1 肥前陶器



溝縁皿

刷毛目



摺鉢

内野山

2 肥前陶器

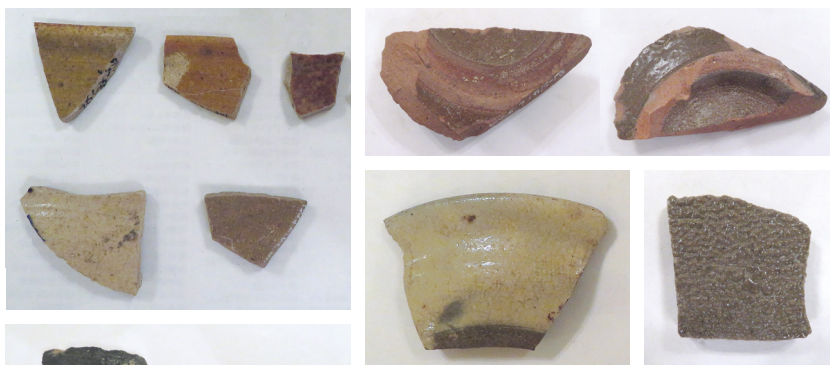
图4-3 大里大熊遺跡出土陶磁器 (1)



17c 苗代川



1 薩摩焼 (苗代川陶器)



山元～
初期龍門司

鮫肌釉

2 薩摩焼 (加治木・始良産陶器)

元立院

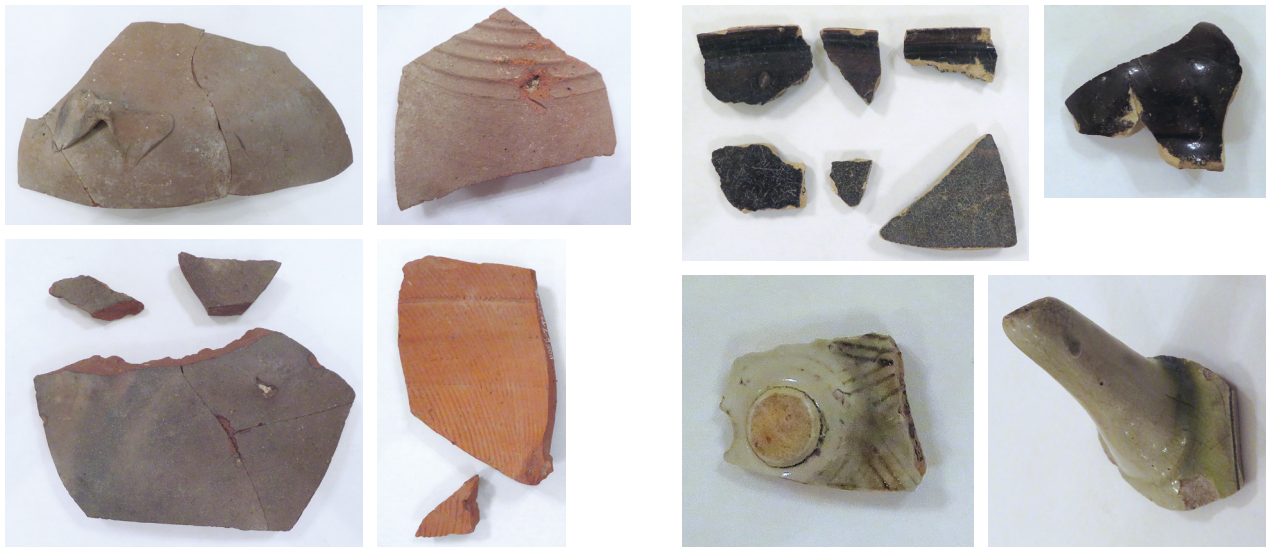


3 薩摩焼 (豎野産陶器)



4 薩摩磁器

图4-4 大里大熊遺跡出土陶磁器 (2)



1 沖繩陶器 (荒焼)

2 沖繩陶器 (上焼)



3 中国磁器



4 関西系陶器

图4-5 大里大熊遺跡出土陶磁器 (3)

第5章 奄美大和村盛岡家伝来資料の調査

渡辺 芳郎 (鹿児島大学法文学部)

1. 調査の目的と概要

(1) 調査の目的

本調査は、奄美大島大和村国直の旧家である盛岡家(旧姓：盛家)に伝来し、現在、奄美市立奄美博物館が保管している陶磁器資料を調査することにより、奄美における近世・近代の陶磁器流通とその所有形態の一端を明らかにすることを目的とする。

(2) 調査期間

予備調査：2019年6月14日(金)

本調査：2019年8月19日(月)～21日(水)

(3) 調査地：奄美市立奄美博物館

(4) 調査者：渡辺芳郎・中西瑠花(鹿児島大学大学院人文社会科学研究科1年生、当時)

調査協力：奄美市立奄美博物館(喜友名正也氏・高梨修氏)

(5) 調査方法

資料について1件ずつデジタルカメラで撮影し、同時に法量を計測した。その上で、先行研究を参照しつつ、産地・年代等を推定した。また産地・年代の推定には多くの方々のご教示を得た。

2. 盛岡家について

奄美における地域有力者(大家(フーヤ))には、「ユカリッチュ」と呼ばれる琉球時代からの有力者(龍郷の龍家、住用の住家など)と、「シュータ」いう延享2(1745)年の換糖上納令および19世紀の天保改革期以後、献上糖などにより藩に貢献した新興有力者がいた。盛岡家は旧姓を盛家といい、後者に属する。盛岡家は、屋喜内間切大和浜万国直村に本拠地を置き、天保改革期以後、前武仁(まえばに)・前仁志(まえにし)親子の時代に急成長した家柄である。前武二は弘化3(1846)年に与人となり、前仁志も慶応4(1868)年与人格を与えられている(改訂名瀬市誌編纂委員会編1996、山田1996)。

3. 調査報告

(1) 種類・装飾技法(表5-1)

調査した陶磁器は全体で37件83点である。このうち磁器が27件73点、陶器が10件10点、磁器が件数比で73.0%、点数比で88.0%を占める。これは陶器が壺などの大型品が多く1件1点であるのに対し、磁器

が1件で複数点の組物が多いこと、また貯蔵具よりも食膳具が伝来しやすいことなどを反映したものであろう。

表5-1 盛岡家伝来陶磁器の種類と器種

	件数	点数	白磁		染付・青花		色絵※		その他	
			件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数
磁器	27	73	1	1	17	43	7	23	2	6
陶器	10	10								
合計	37	83								

※青磁・染付に色絵を加えたものも含む

	件数	点数	皿		鉢		瓶		碗		壺		その他	
			件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数
磁器	27	73	9	26	5	17	8	9	2	18			3	3
陶器	10	10					2	2	1	1	5	5	2	2
合計	37	83	9	26	5	17	10	11	3	19	5	5	5	5

磁器の装飾技法としては染付と青花がもっとも多く17件43点を数える。その中には褐釉と併用するものもある。ついで「色絵」(青磁・染付に色絵・金彩を加えたものも含む)が7件23点である。白磁が1件1点、そのほかとして薄青釉を単味でかけたもの1件1点、緑色を下絵付けしたもの1件5点ある。陶器は白色胎土に透明釉をかけたものが2件2点(うち1点が白薩摩)、焼締陶器が3件3点あり、そのほか褐釉のみをかけたもの、黒釉に白濁釉を流し掛けしたもの、白色不透明釉に青釉を流し掛けしたものなどがある。また胴部に椰子文を貼り付けたものもある。

(2) 器種 (表5-1)

<磁器>

磁器においてもっとも多いのが皿で9件26点を数える。うち直径が約30cmをはかる大皿が5件5点ある。No.1は青磁染付に色絵・金彩を施す輪花皿で、佐賀県立九州陶磁文化館所蔵の柴田コレクションに類例 (No.3314) があり、18世紀後半の肥前磁器である (佐賀県立九州陶磁文化館編2019)。No.2は楼閣山水文を描く大皿で、白化粧土をかける。19世紀前半～中頃の肥前志田焼である。雪持笹文を描くNo.3も同じ産地・年代であろう。No.4は中国産の清朝磁器である。類例が1817年にマラッカ海峡で沈没したイギリス船籍ダイアナ号引き揚げ陶磁器にあり (京都国立博物館編2006、堀内2002)、19世紀前半と考えられる。また明治18 (1885) 年に沖縄で購入された陶磁器類が東京国立博物館に所蔵されているが、その中に同種のもが含まれている (東京国立博物館編2002)。考古学資料としては沖縄県那覇市真珠道跡から同種の破片が出土している (沖縄県立埋蔵文化財センター2006)。No.5はプリントの染付で双鳳文と龍文、唐草文を描いた大皿である。No.6は五寸皿の輪花皿で6枚よりなる組物である。No.7と8はいずれも近代の小皿の組物である。前者5点は緑色下絵付けで笹文を描く。大正期の瀬戸製品と推測される (瀬戸市歴史民俗資料館編2002)。後者8点は色絵で窓絵双鶴文、花草文を描いている。No.9は貝形三足皿で、大小2枚よりなる。見込みに楼閣山水文を染付で描き、外面は褐釉を施す。三足の端部は無釉である。

No.10と11の染付の鉢は、口径にわずかな差異はあるが、セットとなると考えられる。No.12は大中小3点セットの鉢で、文様と器形の類似性からNo.10～12は一組の可能性はある。

No.13は中国産の清朝磁器の碗7点である。外面に双喜文、蝙蝠文、草花文など色絵で描くが、その文様の組み合わせには3種類ある。また1点のみ高台内に「方」の字を赤絵で描く。類例は、沖縄県那覇市の真珠道跡からの出土例があり、18世紀後半とされている (沖縄県立埋蔵文化財センター2006)。また文様に違いがあるものの同型同大の碗は、那覇首里城周辺 (沖縄県立埋蔵文化財センター2012など)、与那国島嘉田古墓群 (沖縄県立埋蔵文化財センター2004)、鹿児島市の鹿児島城本丸跡 (鹿児島県教育委員会1983)、霧島市弥勒院跡 (霧島市教育委員会2010) などで出土し、トカラ列島口之島での採集例がある (渡辺編2015、渡辺2018a)。盛岡家資料の色絵碗も沖縄から鹿児島にかけて広く流通していた清朝磁器の一例と考えられる。No.14は化学コバルトによる染付の蓋付碗である。蓋が9点残るのに対し、身は2点のみで、蓋と身の破損率の違いに由来するのであろうか。No.15も同じく化学コバルトの染付の小鉢11点である。高台内に「富貴／長春」銘を記す。

No.17は色絵と金彩の双耳瓶で、胴部に花鳥図を描く。銘がないが、肥前の明治期の海外輸出品の可能性はある。No.18は肥前産の染付瓶 (徳利) である。No.19～23はいずれも近代の瓶 (銚子) であ、これらは清酒の燗付け用と考えられ、近代奄美における清酒流通を考える上で手がかりとなる。No.24は化学コバルト染付の近代の注口付瓶、鹿児島でいう「からから」で、底部に被熱痕跡がある。

No.32は白磁の香炉で、内面に使用した際の煤が付着している。No.33は色絵の三段積みの重箱である。No.34は染付の筆筒で、釉調から薩摩磁器と考えられる。No.35は大型の染付鉢で、器形・法量的には植木鉢に近いが、底部に穿孔がないことから金魚鉢の可能性はある。

<陶器>

陶器には瓶2件2点、碗1件1点、壺5件5点、その他2件2点がある。No.16の碗は白色胎土に透明釉を掛けた白薩摩であり、薩摩藩窯・豎野窯の製品である。瓶は備前産の貼付布袋文のもの（No.25）と、沖縄産の古典焼（貼付椰子文）がある（No.26）。前者は18世紀中頃～後半（乗岡2017）、後者は大正～昭和戦前期のものである（仁王2009）。壺は5件5点（No.27～31）で、薩摩焼苗代川産の四耳壺（No.27）、龍門司産の壺（No.28）、沖縄壺屋産の荒焼大壺（No.29）などがある。その他として薩摩焼豎野窯産の褐釉丁字風炉があり（No.36）、「嘉永七年寅七月吉祥日／丁子風呂（マ）入／與人／前武仁」という箱書きを持った木箱がともなう。「前武仁（まえぶに）」は幕末の盛岡家の当主の名である。嘉永7年は1854年で、丁字風炉の製作年代はそれ以前であることがわかる。No.37の鷹型置物は、奄美大和村で明治初期に短期間操業した津名久焼で、底部の刻銘から明治9（1876）年に製作されたことがわかる（渡辺2020）。

(3) 産地と時期（表5-2）

生産年代として近世11件17点、近代23件63点、不明3件3点である。

近世磁器8件14点のうち、肥前産がもっとも多く4件で、うち3件が大皿である。薩摩磁器2件が香炉、筆筒と小型であるのとは対照的である。中国産磁器（清朝磁器）は2件8点、大皿1点、色絵の碗7点の組物である。先述したように色絵の碗は、沖縄～鹿児島本土地域に広く流通していたものである。近世陶器3件のうち、薩摩2件、備前1件である。

近代の磁器は生産地が不明なものが多いが、肥前1件、薩摩2件がある。近代の陶器では、沖縄が2件、奄美津名久焼が1件ある。

陶磁器の生産年代は近世後半～近現代で、18世紀後半が最古であり、これは盛岡家が地域有力者として成長してきた時期と一致する。これらの陶磁器は前武二・前仁志の時代に備えられたとする聞き取りがある（山田1966）。

表5-2 盛岡家伝来陶磁器の時期と産地

年代	磁器		陶器	
	件数	点数	件数	点数
近世	11	17	8	3
近代	23	63	18	5
不明	3	3	1	2

年代	磁器		皿		鉢		瓶		碗		その他	
	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数
近世	8	14	4	4			1	1	1	7	2	2
近代	18	58	5	22	4	16	7	8	1	11	1	1
不明	1	1			1	1						

年代	陶器		瓶		碗		壺		その他	
	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数
近世	3	3	1	1	1	1			1	1
近代	5	5	1	1			3	3	1	1
不明	2	2					2	2		

年代	磁器		肥前		薩摩		中国		瀬戸		不明	
	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数
近世	8	14	4	4	2	2	2	8				
近代	18	58	1	1	2	7			1	5	14	45
不明	1	1									1	1

年代	陶器		薩摩		備前		沖縄		奄美		不明	
	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数	件数	点数
近世	3	3	2	2	1	1						
近代	5	5					2	2	1	1	2	2
不明	2	2	1	1							1	1

4. 盛岡家伝来陶磁器の特徴

(1) 大皿・組物が多い

大皿や、蓋付碗、小鉢、鉢などが複数セットになった組物が見られる。これらは冠婚葬祭などの儀式や各種の接待・会合などの宴席で用いられるもので、日本本土においては大きな商家や庄屋などの伝来資料にしばしば見られる。

(2) 清朝磁器が含まれる

上記の大皿・組物には18世紀後半～19世紀の清朝磁器が見られる(大皿1点、色絵碗1件7点)。琉球経由で運び込まれたものと推測される清朝磁器が、宴席具として組み込まれている点は、南西諸島ならでは特徴といえる。

(3) 薩摩藩窯・豎野窯製品が含まれる

藩窯製品として白薩摩の碗と褐釉の丁子風炉がある。これらは拝領品と推測され(本書第13章参照)、地域有力者の盛岡家が藩と密接な関係があったことを示唆する。

(4) その他

近代のものであるが磁器製の徳利が数点、伝来している。いずれも量産品ではあるが、このような徳利は、清酒の爛付けに用いられるもので、奄美における清酒の流通を考える上で手がかりとなる。明治41(1908)年～大正8(1919)年の大島郡統計書(鹿児島県立図書館奄美分館編1981)によれば、当時十島村も含む大島郡全体ではあるが、焼酎、泡盛、洋酒とともに清酒が流通していたことがわかる。また同書の「物価」によれば清酒は焼酎に比べ約1.5倍高額であることから、清酒の消費層は焼酎のそれより富裕であった可能性が考えられる。

また鷹型置物は、明治初頭に大和浜津名久に開かれた津名久焼の一つである。津名久焼は、京焼の陶工で、当時、鹿児島田之浦窯で製陶に従事していた青木宗兵衛が、明治8(1875)年に田之浦の陶工らを連れて渡島、奄美大和村の津名久で開窯した窯である。津名久の人々も雇用し操業したが、数年で閉じたようである。これまで津名久焼は、黒釉を主体とした製品が知られていたが、本資料のように白薩摩と同じ胎土を有する製品もあることが今回の調査によって明らかになった(渡辺2020)。

沖縄古典焼は、大正時代から昭和初期にかけて沖縄の壺屋で生産された焼き物である。奈良県橿原市出身の黒田理平庵(明治3(1870)年生)によって始められた。大正初期には沖縄県に移り住んだものと考えられている。以後、大正5年(1916)には息子の黒田幹次郎(壺中)が、昭和3年(1928)には同じく息子の太田保が来沖し、製作や指導、販売に励んだ。昭和7年(1932)、黒田一家は一部を残して離沖するが、彼らが去った後も古典焼は焼かれ続け、その影響は現代の壺屋焼にも確実に見ることができる(仁王2009)。これまで古典焼は外来趣味が強く沖縄の伝統から乖離しているとされ評価が低かったが、近年になって再評価と研究が進められている(倉成2014、仁王前掲など)。

おわりに

盛岡家伝来資料は近世から近代にかけての奄美大島の有力者が所有していた陶磁器の一端を伝えている。遺跡から出土する陶磁器が基本的に廃棄されたものであるのに対し、これらは丁寧に保管されて伝来してきたものである。それゆえ両者には共通点もあるが、同時に考古学資料には見られない種類の陶磁器もしばしば含まれている。今後は考古学資料と伝来資料とを総合的に扱いながら、南西諸

島における陶磁器流通のあり方を明らかにしていく必要がある。

参考引用文献

- 沖縄県立埋蔵文化財センター2004『嘉田地区古墓群』同センター
沖縄県立埋蔵文化財センター2006『真珠道跡』同センター
改訂名瀬市誌編纂委員会編1996『改訂名瀬市誌 第1巻 歴史編』名瀬市役所
鹿児島県教育委員会1983『鹿児島(鶴丸)城本丸跡』同委員会
鹿児島県立図書館奄美分館編1981『奄美史料11～22 鹿児島県大島郡統計書』同館
京都国立博物館編2006『魅惑の清朝陶磁』展図録 同館
霧島市教育委員会2010『弥勒院跡-遺物編-』同委員会
倉成多郎2014『壺屋焼入門』ポーターインク
佐賀県立九州陶磁文化館編2019『柴田夫妻コレクション総目録(増補改訂)』同館
瀬戸市歴史民俗資料館編2002『大正二年のせともの屋』展図録 同館
東京国立博物館編2002『東京国立博物館図版目録 琉球資料篇』同館
仁王浩司2009「古墓から出土する古典焼-浦添市前田・経塚近世墓群の発掘調査事例より-」『壺屋焼物博物館紀要』10 pp.10-25
乗岡実2017「備前焼の徳利」『中近世陶磁器の考古学』7巻 pp.209-238 雄山閣
堀内秀樹2002「十七から十九世紀の東洋陶磁とヨーロッパ市場の動向-沈船引き上げ資料の器種組成の検討から-(1)」『掘り出された都市』pp.109-132、日外アソシエーツ
山田尚二1966「大島、島役人前仁志の家計について-盛岡家文書を中心として-」『鹿児島史学』14 pp.21-37
渡辺芳郎2015「シマの陶磁器-近世トカラ列島における陶磁器流通を中心に-」『中近世陶磁器の考古学』2巻 pp.13-32 雄山閣
渡辺芳郎2018『近世トカラの物資流通-陶磁器考古学からのアプローチ-』北斗書房
渡辺芳郎2020「奄美大和村津久焼の基礎的研究」『奄美群島の歴史・文化・社会的多様性』pp.70-89 南方新社
渡辺芳郎編2015『近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究』平成24～26年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 鹿児島大学法文学部



調査風景



No.	1	収蔵 No.	41	点数	1
素材	磁器	器種	輪花皿		
絵付け	青磁・染付・色絵・金彩	文様	見込み:染付楼閣山水文、周囲:色絵松竹・岩・鶴文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	30.4cm	5.5cm	18.8cm		
産地	肥前		年代	18世紀後半	
備考	高台内圏線、銘「太明成／化年製」、ハリ支え痕5				



No.	2	収蔵 No.	42	点数	1
素材	磁器	器種	皿		
絵付け	染付	文様	楼閣山水文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	32.7cm	4.9cm	18.8cm		
産地	肥前(塩田)		年代	19世紀前半	
備考	白化粧土、ハリ支え痕7、内面釉剥げ3ヶ所、外面2ヶ所呉須流れ、口唇部一ヶ所欠け				



No.	3	収蔵 No.	44	点数	1
素材	磁器	器種	皿	雪持笹文	
絵付け	染付	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	26.7cm	4.6cm	16.3cm		
産地	肥前(塩田か)		年代	19世紀前半	
備考	ハリ支え痕5				



No.	4	収蔵 No.	43	点数	1
素材	磁器	器種	皿	花卉文・幾何文	
絵付け	青花	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	27.4cm	4.5cm	16.4cm		
産地	中国		年代	清朝(19世紀前半)	
備考	高台内露胎				



No.	5	収蔵 No.	45	点数	1
素材	磁器	器種	皿		
絵付け	染付(印判)	文様	見込み:双鳳文、周囲:龍文・唐草文、外面:唐草文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	30.8cm	3.7cm	18.0cm		
産地			年代	近代	
備考					



No.	6	収蔵 No.	92	点数	6
素材	磁器	器種	輪花皿		
絵付け	染付	文様	楼閣山水文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	14.9~15.1cm	4.1~4.3cm	8.5~8.7cm		
産地	薩摩か		年代	19世紀後半	
備考	凹型蛇の目高台				



No.	7	収蔵 No.	91	点数	5
素材	磁器	器種	皿	文様	笹文
絵付け	緑色下絵付け	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	11.0~11.2cm	2.2~2.5cm	6.5~6.6cm		
産地	瀬戸か		年代	大正時代か	
備考					



No.	8	収蔵 No.	48	点数	8
素材	磁器	器種	皿	文様	
絵付け	色絵	文様	窓絵双鶴文、花草文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	10.6~11.0cm	1.7~2.0cm	6.0~6.6cm		
産地			年代	近代	
備考					



No.	9	収 蔵 No.	52・53	点 数	2
素 材	磁器	器 種	貝形三足皿		
絵 付 け	褐釉染付	文 様	楼閣山水文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	小:13.5×13.1cm 大:17.3×15.8cm	小:3.9~4.4cm 大:4.1~5.1cm	小:6.9cm、大:8.9cm (二足間最大幅)		
産 地			年 代	近代か	
備 考	小:収蔵No.52、大:収蔵No.53				



No.	10	収 蔵 No.	140	点 数	1
素 材	磁器	器 種	鉢		
絵 付 け	染付(化学コバルト)	文 様	捻り文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	27.2cm	9.7cm	15.1cm		
産 地			年 代	近代	
備 考	凹型蛇の目高台、底部に窯傷、No.139とセット				



No.	11	収蔵 No.	139	点数	1
素材	磁器	器種	鉢	文様	捻り文
絵付け	染付(化学コバルト)				
法量	口径	器高	底径	最大径	
	25.0cm	9.0cm	14.3cm		
産地			年代	近代	
備考	凹型蛇の目高台、底部に窯傷、No.140とセットか				



No.	12	収蔵 No.	141・142・143	点数	3
素材	磁器	器種	鉢	文様	捻り文(祥瑞風)
絵付け	染付(化学コバルト)・色絵				
法量	口径	器高	底径	最大径	
	141:19.3cm、142:16.7 143:13.9cm	141:7.7cm、142:7.0cm 143:5.9cm	141:10.6cm、142:8.9cm 143:6.9cm		
産地			年代	近代	
備考	No.141:大、142:中、143:小、蛇の目凹型高台				



No.	13	収 蔵 No.	46	点 数	7
素 材	磁器	器 種	碗	双喜文、蝙蝠文、草花文	
絵 付 け	色絵	文 様			
法 量	口 径	器 高	底 径	最大径	
	14.4~14.9cm	6.4~6.8cm	6.4~7.1cm		
産 地	中国		年 代	清朝(18世紀後半)	
備 考	1点のみ高台内に「方」字の赤絵付け銘。文様3種類。				



No.	14	収 蔵 No.	49-50	点 数	碗:2,蓋:9
素 材	磁器	器 種	蓋付碗	見込み:麒麟文、外面:花卉文、口縁:瓔珞文	
絵 付 け	染付(化学コバルト)	文 様			
法 量	口 径	器 高	底 径	最大径	
	身:10.9~11.0cm 蓋:9.8~10.2cm	身:5.6~5.7cm 蓋:2.5~2.9cm	身:3.8cm 蓋:3.8~4.0cm		
産 地			年 代	近代	
備 考					



No.	15	収蔵 No.	47	点数	11
素材	磁器	器種	小鉢		
絵付け	染付(化学コバルト)	文様	外面:楼閣松文、見込:花菱文、口縁内:唐草文		
法量	口径	器高	底径	最大径	
	8.0~8.2cm	6.0~6.4cm	4.2~4.5cm		
産地			年代	近代	
備考	高台内染付「富貴長春」銘				



No.	16	収蔵 No.	51	点数	1
素材	陶器(白薩摩)	器種	碗		
絵付け		文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	11.8cm	5.7cm	4.4cm		
産地	薩摩		年代	近世	
備考	使用による汚れ				



No.	17	収蔵 No.	89	点数	1
素材	磁器	器種	双耳瓶	文様	花鳥文
絵付け	色絵・金彩	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	16.4cm	38.3cm	13.0cm	16.3cm	
産地	肥前		年代	近代	
備考	輸出製品の可能性あり				



No.	18	収蔵 No.	74	点数	1
素材	磁器	器種	瓶	文様	草花文
絵付け	染付	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	4.3cm	22.2cm	7.3cm	13.2cm	
産地	肥前(波佐見)か		年代	18世紀後半~19世紀前半	
備考					



No.	19	収 蔵 No.	81	点 数	1
素 材	磁器	器 種	瓶(銚子)	点 数	1
絵 付 け	染付(化学コバルト)・ 褐釉	文 様	竹文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	2.9cm	15.1cm	5.2cm	5.6cm	
産 地				年 代	近代
備 考					



No.	20	収 蔵 No.	82	点 数	1
素 材	磁器	器 種	瓶(銚子)	点 数	1
絵 付 け	染付(化学コバルト)	文 様	花枝文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	2.6cm	14.6cm	5.0cm		
産 地				年 代	近代
備 考					



No.	21	収蔵 No.	145	点数	1
素材	磁器	器種	瓶(銚子)	唐草文	
絵付け	染付(プリント)	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	2.5cm	14.9cm	4.4×4.4cm	5.4cm	
産地		年代	近代		
備考					



No.	22	収蔵 No.	83	点数	1
素材	磁器	器種	瓶(銚子)	陽刻花草文	
絵付け	薄青釉	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	2.9cm	14.3cm	4.4cm	6.4cm	
産地		年代	近代		
備考					



No.	23	収蔵 No.	90	点数	2
素材	磁器	器種	瓶(銚子)	文様	菊文
絵付け	褐釉・青釉・色絵・金彩	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	2.5cm	13.6~13.7cm	4.4cm	6.9cm	
産地			年代	近代	
備考					



No.	24	収蔵 No.	77	点数	1
素材	磁器	器種	注口付瓶(からから)	文様	笹文
絵付け	染付(化学コバルト)	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	3.8cm	12.7cm	4.5cm	13.1cm(注口含む) 10.7cm(胴部のみ)	
産地	薩摩		年代	19世紀後半	
備考					



No.	25	収蔵 No.	76	点数	1
素材	焼締陶器	器種	瓶	貼付布袋文	
絵付け		文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	2.2cm	16.0cm	6.8cm	11.2cm	
産地	備前		年代	18世紀中頃～後半	
備考	底部に印銘				



No.	26	収蔵 No.	154	点数	1
素材	陶器	器種	瓶	椰子文	
絵付け	貼付文	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	3.5cm(推定)	17.2cm	11.7cm	11.7cm	
産地	沖縄古典焼		年代	20世紀前半(大正・昭和戦前期)	
備考	口縁部欠損				



No.	27	収蔵 No.	78		
素材	陶器	器種	三耳壺	点数	1
絵付け	褐釉	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	7.6cm	13.2cm	7.3cm	13.4cm(耳含む) 12.9cm(胴部のみ)	
産地	薩摩焼苗代川		年代	近世~近代	
備考					



No.	28	収蔵 No.	160		
素材	陶器	器種	壺	点数	1
絵付け	黒釉・白濁釉流し掛け	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	10.5cm	26.3cm	10.8cm	21.9cm	
産地	薩摩焼龍門司窯か		年代	近代	
備考					



No.	29	収蔵 No.	161	点数	1
素材	焼締陶器(荒焼)	器種	壺		
絵付け		文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	11.9cm	41.0cm	17.5cm	30.2cm	
産地	沖縄		年代	近代	
備考	肩部に刻銘、胴部に黒斑、底部に漆喰様の付着物				



No.	30	収蔵 No.	148	点数	1
素材	焼締陶器	器種	壺		
絵付け		文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	5.8cm	17.6cm	9.5cm	16.6cm	
産地			年代	近代以後	
備考					



No.	31	収蔵 No.	153		
素材	陶器	器種	壺	点数	1
絵付け	青釉流し掛け	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	13.5cm	15.0cm	10.0cm	16.4cm	
産地		年代	近代		
備考	使用に汚れ大(「漬物壺」として伝来)				



No.	32	収蔵 No.	102		
素材	磁器(白磁)	器種	香炉	点数	1
絵付け		文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	9.1cm	8.7cm	5.0cm	9.8cm	
産地	薩摩か		年代	近世	
備考	内面・下段無釉、使用痕跡あり				



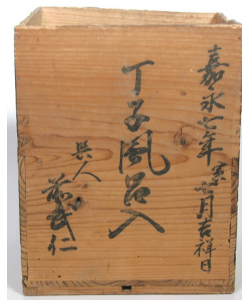
No.	33	収 蔵 No.	54	点 数	1
素 材	磁器	器 種	段重(三段)		
絵 付 け	染付(化学コバルト)・色絵	文 様	窓絵草花文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	一段:9.2cm、二段:9.4cm 三段:8.9cm	総高:11.9cm、蓋:1.8cm 一段:2.6cm、二段:2.9cm 三段:5.3cm	蓋:7.9cm、一段:8.4cm 二段:8.4cm、三段:8.3cm	蓋:9.5cm、一段:9.4cm 二段:9.4cm、三段:9.1cm	
産 地			年 代	近代	
備 考	蓋外面中央に色絵「福」銘、底部無釉、二段目外底に茄子(?)形の染付銘				



No.	34	収 蔵 No.	144	点 数	1
素 材	磁器	器 種	竹節形筆筒		
絵 付 け	染付	文 様	竹文		
法 量	口 径	器 高	底 径	最 大 径	
	2.8cm	13.9cm	5.9cm		
産 地	薩摩磁器か		年 代	近世	
備 考	内面・底部無釉				



No.	35	収蔵 No.	159	点数	1
素材	磁器	器種	鉢(金魚鉢か)	鷹鳥文・竜文	
絵付け	染付	文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	39.4cm	25.2cm	16.0cm		
産地		年代	近代		
備考	底部に四足(高台削り取り)				



No.	36	収蔵 No.	79-80	点数	1
素材	陶器(箱付)	器種	丁子風呂		
絵付け		文様			
法量	口径	器高	底径	最大径	
	釜:3.9cm、炉:5.7cm	総高:16.4cm 釜:7.2cm、炉:12.3cm	釜:3.2cm、炉:4.9cm	釜:8.5cm(耳含む)、6.5cm(胴部) 炉:15.7cm(耳含む)、13.7cm(胴部)	
産地	薩摩焼野野窯		年代	嘉永7年(1854)以前	
備考	釜:双獣耳、炉:双獣耳、三獣足(下端無釉)(蓋欠) No.79:箱、No.80:丁字風呂 箱書「嘉永七年寅七月吉祥日/丁子風呂(マ)入/與人/前武仁」「前武仁(まえぶに)」は盛岡家当主の名前)				



No.	37	収 蔵 No.	88	点 数	1
素 材	陶器	器 種	置物	鷹	
絵 付 け		文 様			
法 量	口 径	器 高	底 径	最大径	
		29.5cm	20.1×13.3cm		
産 地	奄美大和村津名久焼		年 代	明治9(1876)年	
備 考	尾部欠損。 底面刻銘「明治九年丙子閏五月改竈臺(壹?) / 大嶮大和□(濱か)津名久□陶□下 / □□廣業詠之」				

第 2 部 論考編

【松前口】

第 6 章 「松前口」での手工業生産と「蝦夷土産」

第 7 章 松前三港の「蔵敷」にみる移出入品

【江戸】

第 8 章 江戸時代の貿易陶磁器需要
—江戸の状況を中心として—

【長崎口】

第 9 章 長崎から輸出された肥前陶磁

第10章 「長崎口」の輸出入 —抜荷・四つの口の関わりから

第11章 長崎出島の物資流通 —考古学資料を中心に—

【対馬口】

第12章 「対馬口」と日本人
—草梁倭館船滄周辺遺跡出土遺物にみる対馬人の暮らし

【琉球口】

第13章 近世南西諸島における陶磁器流通の諸相
—考古学資料と伝来資料から—

第14章 近世琉球窯業の展開と対外関係

第15章 「琉球口」における流通統制の変容
—「勝手商売」への移行と滞留商人—

第16章 総括

第6章 「松前口」での手工業生産と「蝦夷土産」

関根 達人 (弘前大学人文社会科学部)

はじめに

北海道島と本州を結ぶ北方交易において、北海道側の主たる窓口は、十三湊の安藤氏の没落と北奥和人武装集団の渡島半島進出に伴い、ヨイチ・函館(13世紀～15世紀前半)からセタナイ・上ノ国・松前(15世紀後半～16世紀)へと交替した。豊臣政権や徳川政権から北海道島に渡来する和人の船頭・商人への課税権を公認された松前藩は、財政基盤であるアイヌ交易独占権を行使するため、初代藩主松前慶広に発給された家康黒印状で「附、夷の儀は何方へ往行候共、夷次第致すべき事」と規定されていたにも関わらず、和人だけでなくアイヌからも次第に交易の自由を奪っていった。

アイヌ交易の独占権を保障・実現するため、松前藩は、①「和人地」と「蝦夷地」を明確化し、境界に番所を設けてアイヌと一般和人の往来を厳重に管理、②蝦夷地を藩主と上級家臣のアイヌ民族との独占的交易場とし、蝦夷地に設けた商場での交易権(商場知行)を上級家臣に分与、③本州からの商船の往来を原則として松前に限定し、商船・物資・人物を取り締まるとともに諸役を徴収、といった政策をとった(榎森2007)。③については、交易の拡大により西在の江差と東在の箱館に入港する船舶が増加した結果、元禄・享保期には松前に江差と箱館を加えた「松前三湊」の体制に移行した。

アイヌ社会に受容された和産物では、木綿などの衣類や酒を醸すための米、鉄素材・鉄製品などの生活物資とともに、漆器・武器・武具・ガラス玉など、アイヌの人々が宝物とするような威信財が常に大きな比重を占めており、そうした威信財は、アイヌ社会の集団関係や和人と関係性を維持・保障する重要な役割を果たしていた(関根2014・2016)。筆者はアイヌの物質文化を特徴づけるものとして、鉄鍋・漆器・蝦夷刀・ガラス玉のアセンブリッジを重視するが、アイヌの人々が自製した蝦夷刀の拵の一部やサハリン経由で渡来した大陸製のガラス玉を除き、いずれも和産物が主体をなす。このうち鉄鍋については製作技術の解明(小野2007)、漆器については近年自然科学的分析や文献史料の検討など多角的な研究(浅倉編2019)が進み、生産地についても次第に明らかになりつつある。一方、ガラス玉については近年、出土資料の集成と自然科学的分析が進み、型式や材質の変化が解明されつつあるが、国内の生産地を特定するには至っていない(佐藤・越田2017、馬場ほか2017、新井ほか2018など)。同様に蝦夷刀についても型式や拵の材質の変遷については研究が進展したが、生産地は未解明のままである(関根・佐藤2015)。ガラス玉や蝦夷刀は、鉄鍋や漆器と異なり完全にアイヌ向けの製品だが、それらは一体何処でつくられたのであろうか。

蝦夷地と本州の各地から双方向に物資が行き交う松前は、消費都市と位置づけられ、資史料が乏しいこともあってそこでの生産活動はこれまでほとんど顧みられることがなかった。アイヌ向けの製品も本州で作られ、北海道島に運ばれたと考え、松前城下で生産された可能性は考慮されずにきた。

他方、18世紀から19世紀にかけて、日本国内では北方への関心が高まるなか「蝦夷趣味」が流行した(大塚2001)。文化人や蝦夷地交易に携わる商人の間では、蝦夷錦やガラス玉などいわゆる山丹交易品が珍重され、北前船の水主や北奥から蝦夷地に渡った労働者にはアツシやマキリのようなアイヌの人々が製作したものが蝦夷土産として受容された。果たしてそうした蝦夷土産のなかに松前でつくられたものはないのだろうか。

本稿では、松前での手工業生産について検討し、アイヌ向け、本州向けに松前でつくられた可能性のあるものについて論じることとする。

1. 松前城下での手工業生産

(1) 史料で確認できる19世紀の松前城下の職人

18世紀以前の松前城下の職人については、享保2年(1717)の『松前蝦夷記』など断片的な史料から大工・木挽・檜物屋・鍛冶屋の存在が窺えるに過ぎない。前期幕領期の文化5(1808)年の「市中諸税収納法」では、新たに銅屋・造酒・糶屋・豆腐屋のほか、張替屋・塗師・小細工師・仕裁屋・畳屋などの「市中小職人」が確認できる(松前町史編纂室1988)。復領後については、天保7(1836)年の「自他諸職人・店借・旅商人・背負商人御鑑札并都而旅人市中徘徊御鑑札渡方」(『町役所鑑札下渡手続』)により、大工・木挽・左官・船大工・畳差・石工・屋根師・曲師・鍛冶・銅屋・桶屋・張替・経師・塗師・合羽師・表具師・仕立職・衣師・袋物師・漆屋・焼継・仏師が確認できる(松前町史編纂室1988)。これらの史料を見る限り、19世紀には他の城下町と同様、松前には城下の暮らしを支える職人が必要最低限は存在していたようであり、加えてアイヌ社会が必要とした鉄鍋・蝦夷刀・漆器・煙管の生産や、イクパスイへの漆塗りなども可能であったといえよう。

ここでは18世紀以前の様相についても検討するため、筆者らが松前の近世墓標調査の際に用いた寺院過去帳のデータから城下の職人を抽出するとともに、城下町の発掘調査成果から松前における手工業生産の痕跡を抜き出してみたい。

(2) 松前城下の寺院過去帳に記載された職人

筆者らは松前城下の近世墓標の悉皆調査を行った際、松前町教育委員会に所蔵されていた法幢寺・法源寺・寿養寺の曹洞宗三ヶ寺の寺院過去帳の写しの提供を受け、寺院の許可を得て墓標研究に用いた(関根編2012)。三ヶ寺とも過去帳に欠落はなく、過去帳に記載された江戸時代の被供養者数は重複分を除き、法幢寺が1600年から1868年までの間に4194名、法源寺が1616年から1868年までの間に6631名、寿養寺が1629年から1868年までの間に2826名であった。過去帳に記載された被供養者または施主の職業のなかで職人は、寿養寺の過去帳にある1630年に松前城下の新町に住む大工の久太良が先祖の供養した事例を最古とし、1868年までの間に236件確認された(表6-1)。時期別にみると、17世紀代は大工と炭焼しか記載されていないが、18世紀前半には木挽が加わり、18世紀後半になると鍛冶屋・石切・塗師・船大工・絵師・豆腐屋・仕立屋が確認できるようになる(表6-2)。さらに19世紀初頭から前期幕領期(1801～1821年)には髪結・鳶(仕事師)・菓子屋・張替(提灯張替)が、1822年の復領から幕末までの間には左官・石工・庭師が、それぞれ新たに確認されるようになる。

松前藩では延宝年間(1670年代)にアッサブなど江差周辺の森林で山師による檜材(アスナロヒノキ)の「請伐」開始に伴い、檜山奉行の設置、檜山番所の上ノ国から江差への移転など檜山の管理体制が整備された(松前町史編纂室1984)。元禄15年(1702)には材木業者の飛騨屋久兵衛が蝦夷地の森林を初めて請負っている。18世紀前半から松前城下で製材業者である木挽の存在が確認されるようになり、大工に次ぐ数を占める背景には、城下町での木材需要の高まりと本州への木材移出高の増大があったと考えられる。

18世紀後半の過去帳で、遺構や遺物など考古学的痕跡との照合が期待できる鍛冶屋・石切の存在が確認されたのは注目される。

松前城下では福山城の石垣や墓標に地元産の緑色凝灰岩が多用されており、福山城跡の北1km、大松前川の西岸の標高約60～120mの地点には石切り場が存在した。神明石切り場では発掘調査によって幕末から近・現代にかけての石切り跡や、石材を運搬した石曳き道、番屋跡とみられる建物遺構が

表6-1 松前城下の寺院過去帳に記載された職人(1)

過去帳番号	没年月日	被供養者名	施主名	施主との続柄	居住地	職業	出身地
寿養寺2-298	1630.0213	—	久太良	先祖	城下新町	大工(施主)	—
法幢寺1-855	1660.1123	久五郎	—	—	城下川原町	大工(本人)	—
法源寺6-64	1669.1102	—	吉右衛門	姉	—	大工(施主)	—
法源寺6-153	1675.0504	九兵衛	—	—	—	大工(本人)	—
法源寺6-459	1696.0728	—	与兵衛	弟	—	炭焼(本人)	—
寿養寺2-405	1707.0715	六兵衛	—	—	城下中川原町	大工(本人)	—
寿養寺2-90	1707.1212	—	六兵衛	母	城下中川原町	大工(施主)	—
法源寺6-661	1709.0317	—	弥兵衛	妻	—	木挽(施主)	—
寿養寺1-202	1713.0303	又左衛門	—	—	城下博知石	木挽(本人)	—
法源寺6-743	1714.0611	弥兵衛	—	—	—	木挽(本人)	—
法源寺6-862	1721.0516	源太良	—	—	—	大工(本人)	—
寿養寺2-196	1724.0413	—	六兵衛	—	—	大工(施主)	—
法源寺6-952	1727.0227	—	太良兵衛	母	—	大工(施主)	—
寿養寺3-15	1734.0421	—	六兵衛	弟	城下中川原町	大工(施主)	—
寿養寺1-107	1736.0702	—	六兵衛	子	城下中川原町	大工(施主)	—
寿養寺2-12	1736.0711	又左衛門	—	—	城下博知石	木挽(本人)	—
法源寺6-1206	1740.1030	—	重兵衛	息子	—	炭焼(施主)	—
寿養寺2-624	1741.0917	—	長八	妻父	—	大工(施主)	—
寿養寺1-98	1742.0402	—	久太郎	先祖	城下新町	大工(施主)	—
寿養寺2-735	1742.0918	—	久太郎	母	—	大工(施主)	—
寿養寺3-204	1743.0523	—	木挽	母	城下博知石	木挽(施主)	—
法源寺6-1263	1743.0929	平七	—	—	城下中町	木挽(本人)	—
寿養寺1-297	1748.0904	茂助	久太郎	—	—	大工(施主)	—
寿養寺1-685	1750.0208	—	六兵衛	娘	城下蔵町	大工(施主)	—
寿養寺2-216	1750.0713	—	六兵衛	子	城下蔵町	大工(施主)	—
寿養寺2-935	1750.0920	—	長八	妻	—	大工(施主)	—
寿養寺2-934	1750.0920	—	長八	—	—	大工(施主)	—
寿養寺2-933	1750.0920	—	長八	—	—	大工(施主)	—
法源寺5-156	1752.0512	権九良	—	—	—	大工(本人)	—
寿養寺1-22	1752.0901	—	長吉	父	—	大工(施主)	—
法源寺5-213	1754.1128	—	専太良	妻	—	船大工(施主)	—
寿養寺3-788	1755.0829	—	久治郎	妻	—	絵師(施主)	—
寿養寺1-593	1757.0307	—	又左衛門	子	—	木挽(施主)	—
寿養寺2-940	1757.0820	六兵衛	—	—	—	大工(本人)	—
寿養寺2-638	1761.0617	—	與左衛門	父	—	木挽(施主)	—
寿養寺3-602	1761.0627	—	與左右門	先祖	—	大工(施主)	—
法源寺5-364	1762.0401	—	久四郎	娘	城下川原町	木挽(施主)	—
法源寺5-470	1766.0513	与兵衛	—	—	城下川原町	炭焼(本人)	—
法源寺5-496	1767.0716	茂吉	—	—	—	木挽(本人)	—
法源寺5-506	1767.0910	与八	—	—	—	大工(本人)	南部
法源寺5-565	1769.0809	三之丈	—	—	西在清部	炭焼(本人)	—
法源寺5-591	1770.0410	金兵衛	—	—	—	炭焼(本人)	—
寿養寺3-217	1770.0923	—	清助	父	城下神明	大工(施主)	—
法源寺5-644	1771.1023	—	権七	孫	城下馬形	木挽(施主)	—
法源寺5-667	1772.0911	—	久太郎	娘	—	木挽(施主)	—
法源寺5-668	1772.0911	—	久太郎	娘	—	木挽(施主)	—
法源寺5-673	1772.1005	—	市右衛門	息子	—	木挽(施主)	—
法源寺5-693	1773.0526	—	喜兵衛	息子	—	炭焼(施主)	—
寿養寺2-346	1773.0614	—	六助	妹	城下博知石	鍛冶屋(施主)	—
法幢寺1-766	1773.1220	—	忠蔵	妻	—	大工(施主)	—
法源寺5-746	1774.0409	源四郎	—	—	城下泊川	木挽(本人)	—
寿養寺2-449	1774.0615	—	傳右衛門	母	城下蔵町	塗師(施主)	—
寿養寺3-800	1775.0629	又右衛門	—	—	—	木挽(本人)	—
寿養寺2-450	1775.0815	—	傳右衛門	妻	城下蔵町	塗師(施主)	—
法源寺5-851	1775.0901	長三郎	—	—	城下川原町	石切(本人)	—
法源寺5-864	1776.0502	長兵衛	—	—	城下蔵町	豆腐屋(本人)	—
寿養寺2-38	1776.1211	—	與左衛門	妻	城下博知石	大工(施主)	—
寿養寺2-557	1778.0816	六右衛門	—	—	—	大工(本人)	—
寿養寺2-235	1779.0413	佐次右衛門	—	—	城下博知石	大工(本人)	—
寿養寺2-649	1779.0517	—	—	—	城下唐津内沢	大工(施主)	—
法源寺5-959	1779.0912	和吉	—	—	—	仕立屋(本人)	—
寿養寺3-51	1781.0121	長八	—	—	—	大工(本人)	—
寿養寺3-877	1781.0630	吉平	—	—	—	大工(本人)	—
法源寺5-1025	1781.0915	—	石松	娘	—	大工(施主)	—
法源寺5-1028	1781.0921	—	弥五兵衛	息子	—	大工(施主)	—
法源寺5-1105	1784.0118	—	平五郎	妻	—	木挽(施主)	—
寿養寺2-867	1784.0519	—	清右衛門	妻	城下馬形	大工(施主)	—
法源寺5-1134	1784.0524	—	甚八	息子	城下蔵町	大工(施主)	—
法源寺5-1186	1785.1023	—	吉郎	妻の父	—	大工(施主)	—
寿養寺2-464	1786.0615	佐次右衛門	—	—	城下博知石	大工(本人)	—
寿養寺3-811	1786.0629	—	清右衛門	子	—	大工(施主)	—
法幢寺1-837	1787.0122	—	佐五衛	母	—	大工(施主)	—
法源寺5-1210	1787.0202	—	石松	父	—	大工(施主)	—
法源寺5-1221	1787.0804	—	喜兵衛	息子	—	大工(施主)	—
寿養寺3-153	1788.0122	—	六太郎	—	—	大工(施主)	—
法源寺5-1245	1788.1118	長八	—	—	—	炭焼(本人)	—
法源寺2-37	1790.0503	—	勤兵衛	母	—	大工(施主)	—
法源寺2-49	1791.0209	—	助之丈	息子	—	大工(施主)	—
法源寺2-57	1791.0708	徳治郎	久四郎	息子	—	木挽(施主)	—

表6-1 松前城下の寺院過去帳に記載された職人(2)

過去帳番号	没年月日	被供養者名	施主名	施主との続柄	居住地	職業	出身地
寿養寺3-237	1793.0423	與左右門	—	—	城下馬形	大工(本人)	—
法源寺2-121	1793.1206	元右衛門	—	—	—	大工(本人)	—
法源寺2-138	1794.1117	—	清八	妻	—	木挽(施主)	—
法源寺2-155	1796.0102	弥五兵衛	—	—	—	大工(本人)	—
法源寺2-160	1796.0503	平五郎	—	—	—	木挽(本人)	—
寿養寺2-140	1797.0812	—	清助	母	城下神明	大工(施主)	—
法幢寺1-639	1798.0417	佐五兵衛	—	—	—	大工(本人)	—
寿養寺1-154	1799.0102	—	吉平	子	城下西館	大工(施主)	—
法源寺2-235	1799.0208	—	善之助	子	—	大工(施主)	—
法源寺2-249	1799.0318	—	与左衛門	娘	—	木挽(施主)	—
法源寺2-259	1799.0615	—	与左衛門	娘	—	木挽(施主)	—
法源寺2-267	1799.0925	—	吉三郎	親	—	大工(施主)	—
寿養寺1-528	1799.1006	—	佐五兵衛	母	城下博知石	大工(施主)	—
法源寺2-335	1802.0315	—	松五郎	妻	—	木挽(施主)	—
法源寺2-359	1802.0909	—	三蔵	息子	城下馬形	大工(施主)	—
寿養寺1-161	1804.0702	—	吉平	兄	城下西館	大工(施主)	—
法源寺2-459	1804.0708	利七	—	—	城下馬形	大工(本人)	—
寿養寺2-261	1805.0313	喜助	—	—	—	大工(本人)	—
法源寺2-475	1805.0315	—	吉三郎	兄	城下馬形	大工(施主)	—
寿養寺3-67	1806.0221	長治郎	—	—	—	大工(本人)	—
法源寺2-515	1806.0428	三蔵	—	—	城下馬形	大工(本人)	—
寿養寺3-716	1808.0628	吉兵衛	—	—	—	大工(本人)	—
法源寺2-658	1809.0218	吉三郎	—	—	城下博知石	大工(本人)	—
法源寺2-689	1809.0909	文七	—	—	—	鷹(本人)	津軽青女子
寿養寺1-624	1810.0707	—	興右衛門	子	城下博知石	大工(施主)	—
寿養寺2-791	1810.1118	善助	—	—	—	大工(本人)	—
寿養寺1-428	1810.1205	—	喜八	娘	—	大工(施主)	(羽後)塩越
法源寺2-752	1811.0915	—	勘兵衛	母	城下古館	大工(施主)	—
法源寺2-934	1815.0626	—	源六	子	—	丸玉菓子屋(施主)	—
法源寺2-945	1815.1010	—	源吉	息子	城下中町	張替(本人)	—
法源寺2-967	1815.1223	—	善之助	子	城下古館	大工(施主)	—
法源寺2-969	1816.0106	—	岩右衛門	子	城下蔵町	大工(施主)	—
寿養寺2-882	1816.0419	—	清助	弟	城下神明	大工(施主)	—
法源寺2-980	1816.0621	—	清八	妻	—	木挽(施主)	—
法源寺2-1039	1818.0125	—	清五郎	妻の母	—	髪結(施主)	—
法源寺2-1053	1818.0608	—	清五郎	祖母	城下袋町	髪結(施主)	—
法源寺2-1068	1818.0828	—	安五郎	兄	城下寅向	鍛冶屋(施主)	—
法源寺2-1076	1818.1209	—	長兵衛	息子	—	大工(施主)	—
法源寺1-12	1820.0628	岩蔵	—	—	城下唐津内	髪結(本人)	—
法源寺1-56	1821.0929	善之助	—	—	城下川原町	大工(本人)	—
法源寺1-65	1821.1105	友吉	—	—	城下川原町	髪結(本人)	—
寿養寺1-441	1823.0205	—	清助	孫	城下神明	大工(施主)	—
寿養寺2-490	1823.0615	吉平	—	—	城下馬形	大工(本人)	—
法幢寺3-1627	1823.0729	幸之助	—	—	—	大工(本人)	—
法源寺1-131	1823.0806	利七	—	—	城下馬形	大工(本人)	—
法幢寺3-1338	1823.0824	—	庄兵衛	娘	城下馬形	大工(施主)	—
法幢寺3-1452	1824.0726	兵作	—	—	城下馬形	大工(本人)	—
法幢寺3-128	1824.0903	—	幸之助	子	城下馬形	大工(施主)	—
法幢寺3-1294	1826.0723	—	幸之助	子	城下馬形	大工(施主)	—
法幢寺3-1447	1827.0226	喜太郎	—	—	城下馬形	大工(本人)	—
法幢寺3-439	1827.0308	利兵衛	—	—	城下馬形	木挽(本人)	—
法源寺1-332	1827.0614	團蔵	—	—	城下川原町	大工(本人)	—
法源寺1-353	1827.0908	仁左衛門	—	—	城下神明	大工(本人)	—
法源寺1-375	1828.0511	—	松五良	妻	城下蔵町	大工(施主)	—
法源寺1-410	1829.0423	—	長兵衛	娘	城下神明	大工(施主)	—
法幢寺3-1029	1829.0819	亀吉	—	—	城下神明	石切(本人)	—
寿養寺2-904	1830.0319	—	吉平	父	—	左官(施主)	—
法源寺1-540	1832.0404	長右衛門	—	—	城下神明	大工(本人)	—
法幢寺3-716	1832.0813	—	幸之丞	—	城下馬形	大工(本人)	—
法源寺1-577	1833.0309	—	長兵衛	母	城下神明	大工(施主)	—
法幢寺3-82	1834.0702	—	幸之丞	子	—	大工(施主)	—
法幢寺3-82	1834.0702	—	幸之丞	子	—	大工(施主)	—
寿養寺2-386	1834.0714	—	萬治郎	妻	城下湯殿沢	大工(施主)	—
寿養寺2-388	1836.0814	吉平	—	—	城下神明	大工(本人)	—
法源寺1-826	1837.0721	仁三良	仁左衛門	—	城下神明	大工(施主)	—
法源寺1-916	1839.0112	—	松五郎	子	—	大工(施主)	—
法源寺1-915	1839.0112	—	松五郎	妻	—	大工(施主)	—
法源寺1-925	1839.0225	松五郎	—	—	—	大工(本人)	—
寿養寺3-469	1841.1025	—	吉平	子	—	左官(施主)	—
法源寺1-1114	1842.0629	—	富蔵	妻	城下馬形	大工(施主)	—
法源寺1-1121	1842.0801	—	松五郎	子	城下端立町	大工(施主)	—
寿養寺1-843	1842.1109	—	吉平	母	城下馬形	左官(施主)	—
法源寺1-1156	1842.1121	佐吉	—	—	城下馬形羽立町	大工(本人)	—
法源寺1-1177	1843.0420	与七	—	—	—	大工(本人)	(羽後)塩越
法幢寺追加II-45	1843.1007	—	藤三郎	祖母	—	大工(施主)	—
寿養寺3-275	1843.1023	小多郎	—	—	—	大工(本人)	—
法源寺1-1237	1844.0308	平右衛門	—	—	城下神明	大工(本人)	—
法源寺1-1244	1844.0604	—	三次良	娘	城下馬形中町	大工(施主)	—
寿養寺3-743	1844.0828	—	—	—	—	大工(施主)	—

表6-1 松前城下の寺院過去帳に記載された職人(3)

過去帳番号	没年月日	被供養者名	施主名	施主との続柄	居住地	職業	出身地
法源寺1-1281	1844.1119	—	長兵衛	娘	城下馬形羽立町	大工(施主)	—
法幢寺追加II-84	1845.0704	—	源右衛門	—	—	大工(本人)	—
法幢寺追加II-93	1845.1018	—	権兵衛	—	—	大工(本人)	—
法幢寺追加II-101	1846.0224	—	長右衛門	嫁	—	鍛冶屋(施主)	—
法幢寺3-151	1846.0403	勘右衛門	—	—	—	大工(本人)	—
法幢寺追加II-106	1846.0515	畑中屋平八	—	—	城下馬形町	大工(本人)	—
法源寺1-1308	1846.0516	三治郎	—	—	城下馬形上町	大工(本人)	—
法幢寺追加II-124	1846.0808	—	長右衛門	孫	松前城下泊川	鍛冶屋(施主)	—
法幢寺追加II-138	1846.1107	—	六三郎	妻	城下蔵町	髪結(施主)	—
法源寺4-131	1847.0113	—	利八	母	城下伝治沢	大工(施主)	—
法幢寺3-1320	1847.0523	—	金兵衛	娘	—	石工(施主)	—
法源寺4-23	1848.0706	—	長兵衛	娘	城下川原町	大工(施主)	—
寿養寺1-83	1848.1201	—	吉平	子	—	左官(施主)	—
法幢寺3-685	1849.0212	—	勘之丞	娘	—	石工(施主)	—
寿養寺2-907	1849.0319	—	吉平	子	城下川原町	大工(施主)	—
法幢寺A-51	1849.0326	—	喜七	娘	城下神明町	大工(施主)	—
法源寺4-107	1849.0328	—	岨五郎	子	—	大工(施主)	—
法源寺4-209	1850.0919	—	仁左衛門	祖母	城下神明	大工(施主)	—
寿養寺1-365	1851.0104	万次良	—	—	—	大工(本人)	—
法幢寺A-142	1851.1104	せん	市五郎	孫	城下馬形羽立町	大工(施主)	—
法幢寺A-153	1852.0213	—	喜七	子	城下神明町	大工(施主)	—
法幢寺A-156	1852.0401	—	長右衛門	子	城下泊川町	鍛冶屋(施主)	—
法幢寺3-1275	1852.0622	辰右衛門	—	—	—	大工(本人)	—
法幢寺A-184	1853.0103	—	長右衛門	母	城下泊川町	鍛冶屋(施主)	—
法幢寺5-18	1853.0107	—	長蔵	子	—	大工(施主)	—
法幢寺A-191	1853.0412	三之丞	—	—	城下川原町	大工(本人)	—
法源寺4-355	1853.0711	清助	—	—	—	庭師(本人)	常州水戸
法幢寺3-1186	1854.0121	—	要蔵	母	城下神明	石工(施主)	—
法幢寺3-955	1854.0517	—	権平	息子	—	石工(施主)	—
法源寺4-413	1854.0706	仁左衛門	—	—	城下神明	大工(本人)	—
法幢寺A-232	1854.0723	—	三之丞	子	白浦	大工(施主)	—
法幢寺A-233	1854.0725	—	平次郎	孫	城下湯殿沢町	大工(施主)	—
法幢寺A-234	1854.0729	—	善五郎	孫	城下馬形羽立町	木挽(施主)	—
法幢寺A-240	1854.0805	—	寅吉	子	城下神明町	大工(施主)	—
法源寺4-440	1854.0811	—	利右衛門	子	城下伝治沢	大工(施主)	—
法源寺4-453	1854.0902	—	己之丞	孫	城下川原町	大工(施主)	—
法幢寺3-490	1854.0908	専蔵	—	—	—	大工(本人)	—
法源寺4-469	1854.0928	—	利右衛門	父	城下伝治沢	大工(施主)	—
法幢寺A-266	1855.0116	—	安右衛門	父	城下泊川町	鍛冶屋(施主)	—
法幢寺A-285	1855.0704	—	□内半次郎	妻	城下湯殿沢町	大工(施主)	—
法幢寺A-291	1855.0815	—	平次郎	孫	城下湯殿沢町	大工(施主)	—
法幢寺5-105	1855.1229	—	儀八	妻	城下寅向町	大工(施主)	—
法幢寺3-1200	1856.0721	—	甚太郎	子	城下西館	木挽(施主)	—
法源寺4-600	1856.0817	—	孫太良	母	城下蔵町	大工(施主)	—
法幢寺5-147	1857.0413	—	長吉	子	—	大工(施主)	—
法源寺4-655	1857.0417	—	福恣	父	—	大工(施主)	—
法幢寺A-352	1857.0520	近江屋吉蔵	—	—	城下袋町	髪結(本人)	—
法源寺4-681	1857.0710	—	与左衛門	息子	城下伝治沢	大工(施主)	—
法源寺4-711	1857.1107	—	孫太良	妻	城下蔵町	大工(施主)	—
法源寺4-734	1858.0321	—	甚八	娘	城下馬形端立町	仕事師(施主)	—
法幢寺3-901	1858.0516	吉田屋吉之丞	—	—	城下神明	大工棟梁(本人)	—
法幢寺3-957	1858.0617	要蔵	—	—	城下神明	石工(本人)	—
法幢寺3-1147	1860.1220	□川助五郎	—	—	—	大工(本人)	越後
法幢寺3-261	1861.0104	喜代次	—	—	—	石工(本人)	—
法幢寺5-269	1861.0306	—	新岡屋要次郎	先祖	—	大工棟梁(施主)	津軽
法幢寺3-965	1861.0317	—	常蔵	子	—	左官(施主)	—
法幢寺3-960	1862.0117	—	東屋久助	子	—	大工(施主)	—
法幢寺5-320	1862.1022	—	宇右衛門	—	城下湯殿沢町	大工(本人)	—
法幢寺追加I-123	1862.1223	—	孫兵衛	娘	—	大工(施主)	—
法幢寺3-191	1863.0803	—	金蔵	子	—	石工(施主)	—
法幢寺3-854	1863.0815	常蔵	—	—	—	左官(本人)	—
法幢寺追加I-160	1863.0815	—	孫兵衛	倅	—	大工(施主)	—
法源寺3-167	1863.0909	—	甚八	娘	城下端立町	仕事師(施主)	—
法幢寺B-152	1864.1029	—	孫兵衛	子	—	大工(施主)	—
法幢寺5-395	1864.1117	—	宇右衛門	孫子	—	大工(施主)	—
法源寺3-300	1864.1117	—	喜兵衛	娘	城下馬形	大工(施主)	—
法幢寺5-427	1865.0819	山田伝次郎	—	—	—	大工(本人)	—
法源寺3-387	1865.0822	子之丈	—	—	城下馬形	仕事師(本人)	—
法源寺3-406	1865.1028	—	子之丞	子	城下馬形	仕事師(施主)	—
法幢寺5-439	1866.0201	儀八	—	—	—	大工(本人)	—
法幢寺6-95	1866.0202	—	善五良	—	—	木挽(本人)	—
法幢寺7-117	1866.0214	コト女(志農)	松前村廻り大工孫兵衛	妻	城下	大工(施主)	—
法幢寺5-445	1866.0310	—	吉平	娘	—	左官(施主)	—
法源寺3-453	1866.0708	太兵衛	—	—	西在上野町	石工(本人)	—
法源寺3-564	1868.0714	—	喜兵衛	妻	城下東上町	大工(施主)	—
法幢寺6-158	1868.1118	—	太田直吉	—	城下中町	髪結(本人)	—
法源寺3-599	1868.1212	—	谷林屋喜兵衛	母	城下馬形新町	大工(施主)	—
法幢寺B-16	1865-68.0402	—	—	—	—	木挽(本人)	—

確認され、史跡福山城跡に追加指定されている（松前町教育委員会2009・2010）。松浦武四郎の『蝦夷日誌』巻之一では、弘化年間（1844～1847）の福山城下神明町に関して「石切場 石質甚柔しといへども 此地の竈石 敷石等多くは此処より出す」との記述が見られることから、切り出された石材は石垣石や墓石の他にも、城下で様々な用途に使われていたと考えられる。

松前城下の近世墓標に使われている緑色凝灰岩には、福江市足羽山周辺から産出する基質が細かな笏谷石と、地元の神明石切り場周辺で採れる火山礫が目立つものの両者がみられる。このうち笏谷石が1620年代に始まり17世紀の松前で墓石の主流をなす石材で、18世紀に瀬戸内産の花崗岩に首位の座を取って代わられるのに対して、地元産の緑色凝灰岩（火山礫凝灰岩）は1630年代から使われはじめ、幕末まで常に墓石の2から3割前後を占め続ける（関根2018 209頁の図76）。過去帳で城下の石工が確認できるようになるのは復領後であるが、墓標からみて17世紀代には既に城下に採石と石の加工の両方を手がける石切が存在した可能性が高いであろう。石垣などの建築石材や墓石の増大に伴い、採石が専門の石切と加工専門の石工とに分化したと推測される。

次に過去帳に記された職人の居住地について検討する（表6-3、図6-1）。過去帳に居住地が記された職人は、1630年の新町に住む大工に始まり、幕末まで119例を数えるが、西在乙部に住む炭焼1例を除き、全て城下の住人である。最も多いのは、大松前川を挟んで福山城の対岸の段丘上に位置する馬形の22例で、以下、神明20例、大松前川と馬形の丘陵に挟まれた川原町・蔵町が各11例と続く。職人町は古くは福山館の郭内の新町やその東側を流れる大松前川沿いの川原町に始まり、18世紀には大松前川を遡った神明や海岸部の博打石・唐津内沢・西館町・泊川町に広がり、19世紀には城下町の東方への拡大に伴い主として馬形の台地上やさらにその東の伝治沢・寅向に移っている。

『町年寄日記抜書』に拠れば、天保元年（1830）7月、馬形の・・・寅向町上野の建家48軒に対して新たに命名された13町のなかに鍛冶町、木挽町、大工町といった職人に由来する町名が認められる（松前町史編纂室1977）。復領後に城下の拡大に伴い、新たに職人町が形成されたことが分かる。

(3) 発掘調査から推察される松前城下の手工業生産

松前城下では、福山城に隣接する小松前町（関根2019）、蔵町（北海道埋蔵文化財センター2012）、馬形の正行寺北側地点（関根編2018）等で発掘調査が行われている。

蔵町では17世紀末から18世紀初めの頃と推測される銅・鉄鍛冶炉が3基検出されている。そのうちの1基（炉1）は、穴の底に2cm以下の小砂利を敷き、その上に笏谷石製の石廟の屋根材を裏返して設置し、掘り方と石廟との隙間に灰白色粘土を充填したもので、屋根材の内側の凹みを炉としている（図6-2）。炉に隣接する方形の木枠内からは鉄鍋片、炉の周辺からは熔融銅・鉄滓・銅を熔解した坩堝が出土している。「蔵町」の初出は『福山旧事記』の正保元年（1644）であるが、出土遺物から城下町が形成され始めた慶長から元和期には既に町の一部になっていたと考えられる。宝暦年間（1751～1763）に描かれた『松前屏風』では蔵町に切石を礎石とする蔵らしき建物が確認できる。『蝦夷日誌』には蔵町に問屋・小宿の荷物蔵とともに22軒の青楼があったことが記されており、幕末には問屋・小宿などの商家と妓楼が混在していたとみられる。前述の通り、寺院過去帳では蔵町に大工・髪結・豆腐屋を確認できるが、発掘調査成果を踏まえれば、他に鍛冶屋も古くからいたことになる。蔵町の発掘調査では、マキリの刀身と考えられる小刀が多数出土しており、アイヌの人々が魚を突くのに用いたマレクと呼ばれる鉄製の鉤銚も見つかっている。アイヌの人々は交易やお目見え儀礼のために城下を訪れることはあっても、城下に常に暮らしていたわけではない。蔵町の発掘調査で出土したマキ

表6-2 松前城下の寺院過去帳に記された職人(年代別)

年代	大工	木挽	炭焼	鍛冶屋	左官	石工	石切	髪結	鳶 (仕事師)	塗師	船大工	絵師	豆腐屋	菓子屋	仕立屋	張替	庭師
17世紀	4		1														
18世紀前半	11	6	1														
18世紀後半	40	16	5	1			1			2	1	1	1		1		
1801~1821	18	2		1				4	1					1		1	
1822~1868	82	5		5	7	8	1	3	4								1
合計	155	29	7	7	7	8	2	7	5	2	1	1	1	1	1	1	1

表6-3 松前城下の寺院過去帳に記された職人(居住地別)

居住地	初出年代	大工	木挽	炭焼	鍛冶屋	左官	石工	石切	髪結	鳶 (仕事師)	塗師	豆腐屋	張替
福山城下	新町	1630	2										
	川原町	1660	7	1	1			1		1			
	中川原町	1707	4										
	博知石	1713	6	2		1							
	中町	1743		1						1			1
	蔵町	1750	7							1	2	1	
	神明	1770	17					2	1				
	馬形	1771	17	2			1			2			
	泊川	1774		1		4							
	唐津内沢	1779	1							1			
	西館	1799	2	1									
	古館	1811	2										
	袋町	1818								2			
	寅向	1818	1			1							
	湯殿沢	1834	5										
	馬形派立町	1842	4	1							2		
	馬形中町	1844	1										
	馬形上町	1846	1										
	伝治沢	1847	4										
	東上町	1868								1			
馬形新町	1868	1											
西在 乙部	1769				1								

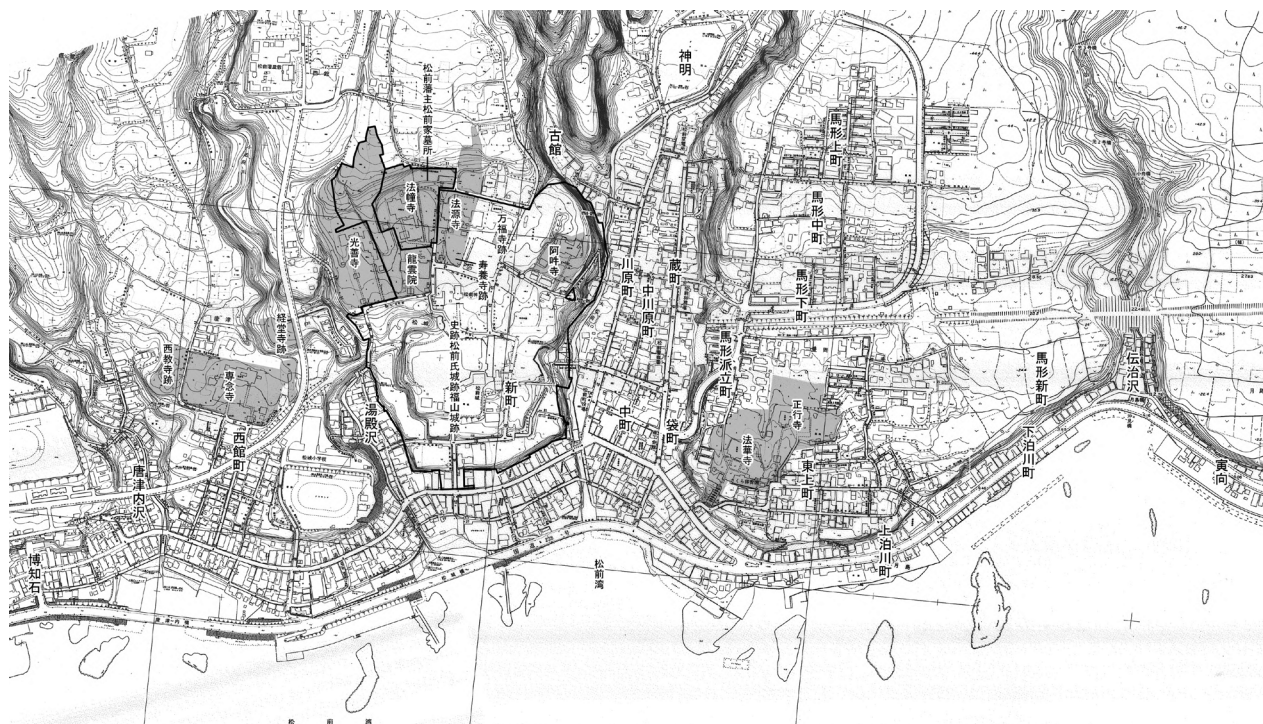
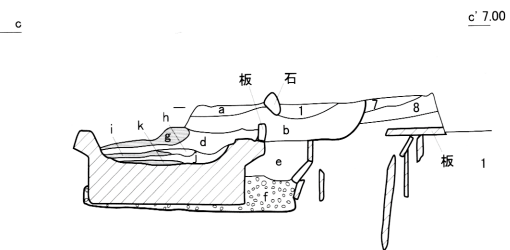
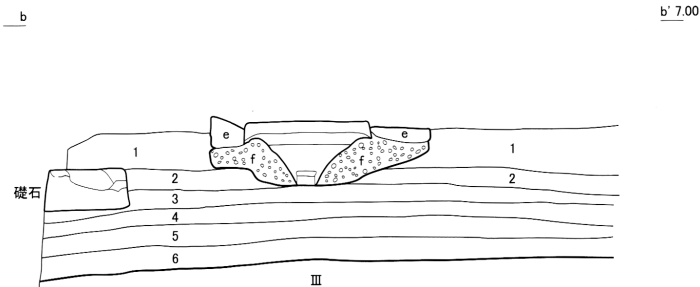
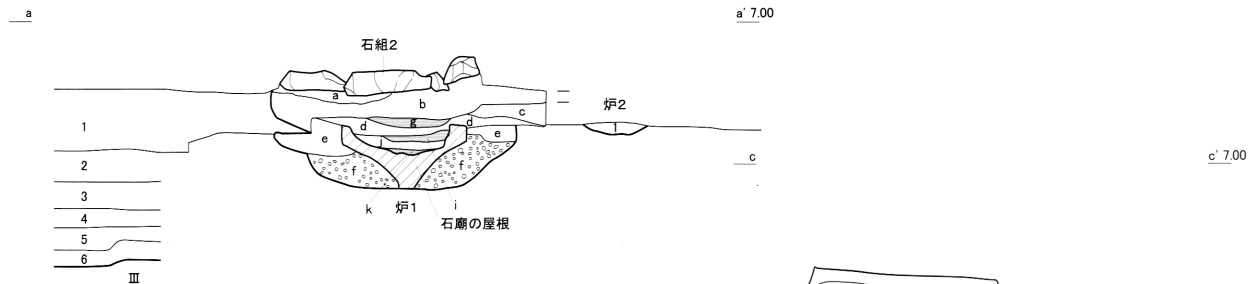
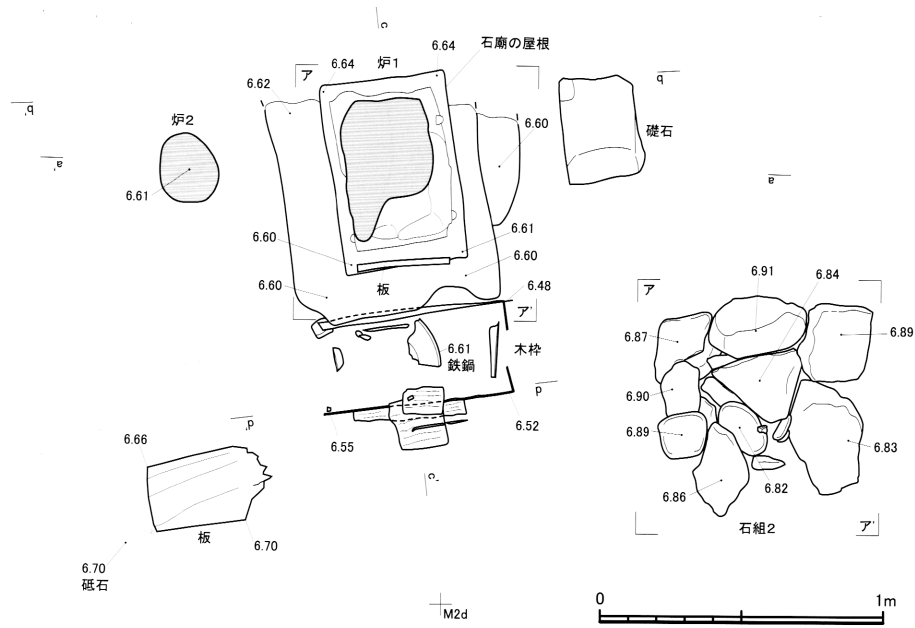


図6-1 松前城下の職人の居住地



- 石組2**
- a 10YR5/4 にぶい黄褐 砂質 粘性極弱 ややしまる
 - b 10YR3/3 暗褐 粘性中 ややしまる 小砂利多量 炭化物少量 風化礫多量
 - c 10YR4/3 にぶい黄褐 砂質 しまる 炭化物少量 dがブロックで混入
- 炉1**
- d 10YR2/2 黒褐 粘性中 しまる
 - e 10YR7/1 灰白 粘土質 粘性強 しまる
 - f 2cm以下の小砂利
 - g 5YR6/4 にぶい橙 粘性弱 しまる
 - h 5YR5/2 灰褐 粘性弱 しまる 炭化物少量
 - i 5YR7/4 にぶい橙 粘性弱 しまる
 - j 5YR3/2 暗赤褐 粘性弱 しまる
 - k 炭化物

- 炉2**
- 1 5YR4/8 赤褐 粘性中 しまる
- II層**
- 1 10YR4/2 灰黄褐 粘性中 しまる 小砂利多量 風化礫多量 炭化物少量
 - 2 10YR4/4 褐 粘性中 しまる 小砂利少量 風化礫多量
 - 3 10YR3/3 暗褐 粘性中 しまる 風化礫少量
 - 4 10YR4/4 褐 粘性中 しまる 小砂利少量 風化礫多量
 - 5 10YR3/3 暗褐 粘性中 しまる 1cm以下のローム塊多量 小砂利少量 炭化物少量
 - 6 10YR4/6 褐 粘土質 粘性強 しまる 風化礫少量
 - 7 10YR3/2 暗褐 粘性弱 しまる 小砂利少量 炭化物少量
 - 8 7.5GY/1 緑灰 風化地山 粘性弱 堅くしまる

(原図出典：北海道埋蔵文化財センター2012)

図6-2 松前城下蔵町地点で検出された鍛冶遺構(炉1・2)

りの刀身や魚突鉤鉾は、松前城下の鍛冶屋でアイヌ向けに製作されたものではなかろうか。

馬形の正行寺北側地点では僅か50㎡の調査範囲から18世紀後葉から19世紀中葉の多量の陶磁器とともにガラス小玉が14点も出土した。松前城下では他にも前述の蔵町地点や、枝ヶ崎町地点（松前町教育委員会2015）、福山城跡二の丸地区（松前町教育委員会2018）の発掘調査でもガラス玉が発見されているほか、小松前川の河口など城下町の各所からガラス玉が表採されている。それら松前から出土するガラス玉の多くは直径10mm未満の銅を着色材とする青系小玉で、 K_2O と CaO が3%以上含まれるカリ石灰ガラス ($K_2O-CaO-SiO_2$) を素材として、「巻き付け技法」により製作されており、共通性が極めて高い。19世紀の松前にはこのように非常に似通ったガラス玉が多量に存在した可能性が高いが、城下にはアイヌの人々は住んでおらず、松前はガラス玉の消費地ではない、むしろ19世紀の松前でアイヌ向けのガラス小玉の生産が行われていたと考えた方がよいであろう（関根2020）。

2. 蝦夷土産

前述の通り、小型の青玉については出土状況とガラス玉の共通性から松前での生産の可能性を指摘した。アイヌの人々は青玉をタマサイやニンカリ等の装身具に多用したが、和人にとっては蝦夷（アイヌ）や山旦人（ウリチ）など北方の異民族を連想させる蝦夷土産の一つであり、根付・緒締・数珠・風鎮として、北前船の関係者や粋人に受容された。19世紀に松前で生産されたガラス玉は、アイヌとともに「蝦夷趣味」を嗜好する和人にも供給されたのではなかろうか。

同じように蝦夷拵の刀についても和人向けに製作され本州に伝来したものを2点確認している。

一つは栃木県那須郡那珂川町矢又の鷲子山上神社に御神宝として伝わる銀装葵文蝦夷拵の太刀である。口伝では太刀は水戸藩の2代藩主徳川光圀、太刀と共に伝世する鏡は9代藩主徳川斉昭からの拝領品とされる。口伝がどこまで真実を伝えているかは不明だが、光圀は貞享5年（1688）に蝦夷地探検のため快風丸を石狩川まで派遣しており、石狩弁天社には蝦夷地の開発を志した斉昭がお抱えの石工大内石可に命じて水戸領内から産出する町屋石で作らせた手水鉢（関根2013）が存在するなど、水戸家と蝦夷地との関係は深い。鷲子山上神社に伝わる銀装葵文蝦夷拵の太刀は、蝦夷地に並々ならぬ関心を持っていた水戸徳川家が特注し、神社に奉納した可能性を考慮する必要がある。

もう一つは、越後黒鳥（新潟市西区）の阿部家に伝えられた銀装桐文腰刀（新潟市指定文化財）である（図6-3）。この腰刀は薬箱とともに、江戸後期の阿部家の当主良伯の実弟が松前藩医を務めた際に

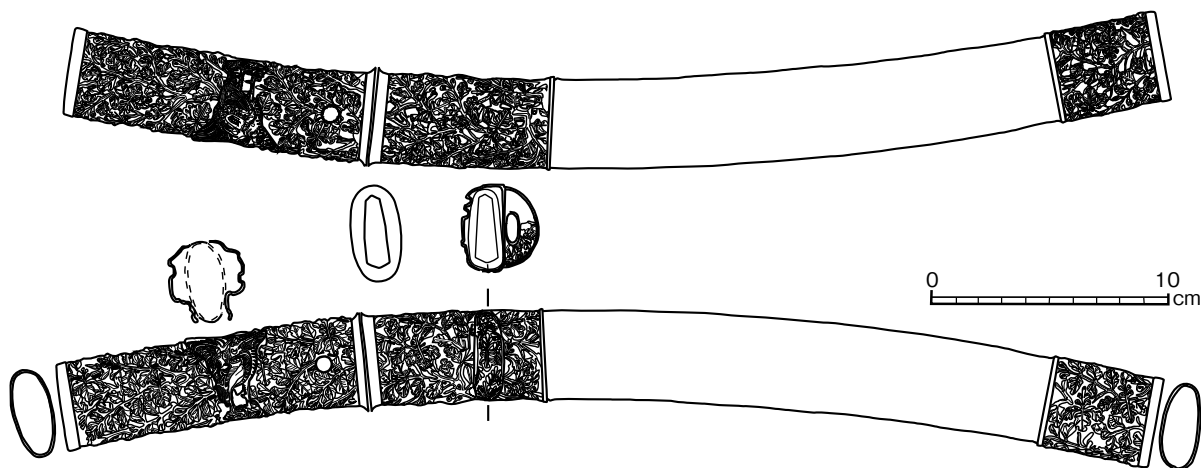


図6-3 和人向けに「蝦夷土産」として製作された蝦夷拵の腰刀

（原図出典：関根・田坂2020）

下賜されたものと伝えられる（新潟市2002）。本来この腰刀の鞘は黒漆塗に金蒔絵が施されていたが、アイヌ民族に伝世した腰刀のなかに鞘に蒔絵を施したものは、管見の限り確認できない。この腰刀は、蝦夷拵に対する和人の求めに応じて、アイヌ好みの腰刀に日本刀の拵の要素を取り入れた可能性が高い。由来にあるように、越後へ帰る医師に対して松前藩主から下賜された蝦夷土産にふさわしいものといえよう（関根・田坂2020）。

まとめ

最北の近世城下町松前には、日本海廻船により全国各地から、城下をはじめとする和人地（松前地）の住民や蝦夷地稼ぎの和人（シャモ）の食料・日用品、さらには対アイヌ交易品まで、実に様々なものが集められていることから、これまで松前城下での生産活動についてはあまり検討されてこなかった。本稿では、松前の寺院過去帳と城下町の発掘調査成果から、松前城下には17世紀代から大工・石切・鍛冶屋が存在し、18世紀前半には和人地・蝦夷地での材木生産の増大を受けて製材業者（木挽）が現われ、18世紀後半には塗師が加わり、19世紀にはアイヌや蝦夷趣味を嗜好する和人向けにガラス玉の生産が行われた可能性を指摘した。また決定的な証拠は見出せないものの、塗師や鍛冶屋の存在から、アイヌ向けの漆器や各種金属製品の製作も松前城下で可能であることが確かめられた。

確かに梁川移封前の松前は他の城下町と異なり、交易に特化するあまり、家屋や交易に必要な舟以外の「物づくり」が極めて低調な、換言すれば武士と商人からなる特異な都市であったと考えられる。しかし、復領後の松前藩には幕府から新たに広大な蝦夷地警備と、住人すなわちアイヌの統治を担うことが求められており、城下町の性格も梁川移封前とは大きく変化したと考えられる。武士と商人に職人が加わることで一般的な城下町に近づいた松前では、対アイヌ交易品についても単に内地（本州・四国・九州）産のものを取り寄せるだけでなく、一部の品については城下での生産を行うようになったと推測した。

末筆ではありますが、本研究プロジェクトの代表である鹿児島大学の渡辺芳郎先生と、本稿に掲載した松前城下の職人町の地図を作成いただいた松前町教育委員会の西川萌、佐藤雄生のお二人に感謝申し上げます。

【引用文献】

- 浅倉有子編2019『アイヌの漆器に関する学際的研究』北海道出版企画センター
新井沙季・馬場慎介・中井泉・中村和之・塚田直哉2018「アイヌ文化期の道南地域出土ガラスの化学組成分析」『函館工業高等専門学校紀要』52巻 pp.20-38
榎森進2007『アイヌ民族の歴史』草風館
大塚和義2001『日本文化のなかのアイヌ文化－木彫品、錦絵などの資料から』平成12年度科研特定領域研究（A）日本文化班資料集4 国際日本文化研究センター千田研究室
小野哲也2007「北海道域出土鉄鍋の生産地」『北海道考古学』43輯 pp.113-122 北海道考古学会
佐藤一夫・越田賢一郎2017「ガラス玉出土遺跡地名表（北海道編）」『北海道・東北を中心とする北方交易圏の理論的枠組みのための総合的研究』平成25～28年度科研挑戦的萌芽研究成果報告書 pp.19-57
関根達人2013「近世石造物からみた蝦夷地の内国化」『日本考古学』36号 pp.59-84 日本考古学協会
関根達人2014『中近世の蝦夷地と北方交易－アイヌ文化と内国化－』吉川弘文館
関根達人2016『モノから見たアイヌ文化史』吉川弘文館

- 関根達人2018『墓石が語る江戸時代』吉川弘文館歴史文化ライブラリー468
- 関根達人2019「北海道松前町福山城下町遺跡小松前町地点発掘調査報告」『人文社会科学論叢』7号 pp.61-94 弘前大学人文社会科学部
- 関根達人2020「松前城下出土のガラス玉」『考古学ジャーナル』737号 pp.16-20 ニューサイエンス社
- 関根達人・佐藤里穂2015「蝦夷刀の成立と変遷」『日本考古学』39号 pp.91-110
- 関根達人・田坂里穂2020「蝦夷刀三例－太刀と腰刀－」『弘前大学國史研究』149号 pp.31-39 弘前大学國史研究会
- 関根達人編2012『松前の墓石から見た近世日本』北海道出版企画センター
- 関根達人編2018『松前藩福山城下町の考古学的研究Ⅰ』弘前大学人文社会科学部文化財論研究室
- 新潟市2002『新潟市の文化財』新潟歴史双書6
- 馬場慎介・柳瀬和也・今井藍子・中井泉・小川康和・越田賢一郎・中村和之2017「北海道出土アイヌ玉の化学組成分析」『函館工業高等専門学校紀要』51巻 pp.48-67
- 北海道埋蔵文化財センター2012『松前町福山城下町遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書290
- 松前町教育委員会2009『神明石切り場跡Ⅱ』平成20年度町内発掘調査報告書
- 松前町教育委員会2010『神明石切り場跡Ⅲ 大館遺跡 バッコ沢牢屋跡遺跡』平成21年度町内発掘調査報告書
- 松前町教育委員会2015『福山城下町遺跡Ⅴ』
- 松前町教育委員会2018『福山城跡ⅩⅢ』
- 松前町史編纂室1977『松前町史』史料編2
- 松前町史編纂室1984『松前町史』通説編第1巻上
- 松前町史編纂室1988『松前町史』通説編第1巻下

第7章 松前三港の「葦藪」にみる移出入品

菊池 勇夫 (宮城学院女子大学)

1. 「松前口」について

江戸期(近世)日本の列島社会はその内部で自己完結していたわけではない。日本人の海外渡航禁止下でありながら、四つの口(長崎・対馬・薩摩・松前)を通じて外部の世界とつながり、アジア・世界のなかの日本であった。本科研は考古学と近世史(文献史学)との共同研究であり、松前口を分担していることから、松前口(松前藩)を經由して、日本(本州・九州・四国)から蝦夷地(アイヌ社会)へ、逆に蝦夷地から日本へ、どのような物品や産物が動いていたのか、「もの」に関心を向けて文献史学の側から計画の一端を担おうというのが役割となる。生産地と消費地を結ぶ流通過程全般の解明が本研究の目標ではあるが、まずはその輪郭だけでも把握して「日本」の国内市場に於ける近世蝦夷地の位置を確かめてみたいと思う。

日本(松前藩)と蝦夷地(アイヌ社会)の関係といっても、江戸時代の初期、中期・後期では相当に変化を遂げている。経済史的指標でいえば、城下交易制(各地のアイヌが松前城下(福山)へ来て行うウイマム交易)から商場知行制(藩主や家臣の船が蝦夷地のアイヌコタンへ出掛けて行う交易)へ、さらに場所請負制(商人が運上金を納めて家臣の取引を請け負う形態)へと移行し、場所請負制もその後、アイヌ交易から請負人が自ら漁業経営を行うことに重点が移った。場所内には請負人に生産物の一部を納めて漁業活動を行う中小業者(二八取)も入り込み、アイヌの人々のみならず松前地や北東北からの出稼ぎ者(雇労働)が生産現場の働き手となった。千島列島を南下してくるロシアへの対応として、寛政11年(1799)、幕府は東蝦夷地の直轄(蝦夷地内国化)に踏み出すが、場所請負制が地域・アイヌの行政的支配の機能を担わされ、請負人の活動領域も南千島や、カラフト(北蝦夷地)南部にまで拡大した。アイヌの人々がおかれている状況は自分稼ぎ・交易の主体から、それを一部保ちながらも、雇われる形態に大きく変えられていく。

およそこのような急激な変化をたどったので、「松前口」を通しての「もの」の動きもまた活発化した。近江や北陸、紀州などを本拠とする請負人は、大坂や江戸と結ぶ全国市場を背景にして鯡・粕や塩引鮭、木材などを増産して巨利を得ようとし、また幕府も長崎貿易品として蝦夷地産の昆布・俵物に着目したので、18世紀後末期以降は蝦夷地産物なしには日本経済(幕藩経済)が成り立たなくなる、そうした重みを「松前口」が担ったことになる。蝦夷地の「富」のほとんどがアイヌの人々に還元されなかったので、「資源略奪」の批判は免れがたい。その一方、こうした生産活動を成り立たせるためには、たとえば塩引を作るためには大量の塩(瀬戸内海産)を必要とし、漁場で働く者の食料・嗜好品(米・酒・煙草)や従前からのアイヌ向け交易品(漆器、鉄製品、その他の生活用品)が欠かせなかった。漁場で使う藁製品や漁網の類まで、蝦夷地向けの生産地が日本各地に生まれ、その地域産業の柱ともなっていく。「もの」の動きというのは双方向で考えなければならない。

さて、このような前置きのうえで、18世紀末以降の江戸後末期・明治初期が中心となるが、どのような「もの」の数々が「松前口」を介して双方向に動いていたのか、ひとまず全体的に把握してみようというのが本稿の趣旨である。個々の主要な「もの」については、煙草(煙管)・漆器・酒など、その生産地や流通経路が追跡され、それらの成果が生み出されており、それらを一度まとめて整理してみたいとも思うが、その準備がないので、ここでは売買される(された)移出入品・売買品を一覧的

に書き上げた史料に着目してみよう。「もの」一つひとつの理解に及ばないものがたくさんあり、考古学が扱ってきた出土品・伝世品との突き合わせも必要であるが、それも未着手である。今後の課題としておきたい。

2. 移出入の「もの」が知られる史料

「松前」口を介して、日本各地と蝦夷地の間をいろいろな物品が動いていた。それを全体として把握できるような史料としてどのようなものが当時作成されていたのか、まずは知っておきたい。その前に、混乱しないために「松前」という呼称について述べておきたい。広くは渡島半島南部の松前藩（無高）の本領地にあたる「松前」（松前地、和人地）を指し、狭くは福山館（城）の所在する松前城下・港を指し、広い意味での「松前」と区別して福山ともいう（以下、小論では松前城下または福山を用いる）。現在いう北海道（本島および付属の島）は江戸期より前から「蝦夷島」または「蝦夷が千島」「夷島」などとも日本社会から呼ばれてきたが、本島では広義の「松前」以外の地が「蝦夷地」になる。17世紀後期以降、「松前・蝦夷地」の呼称が定着した。江戸初期には、福山一港（湊）だけが本州方面から来る他国（他領）船に開かれており、ほかの港に入ることはできなかった。18世紀前期になり、江差方面の鯨・木材、箱館方面の昆布といった積出荷の増加に伴い、他国船も箱館・江差に入港できるようになり、「松前」口の三港体制が整った。ただし、近江などに本店を置く場所請負人が出店を構えることができたのは福山・箱館に限られた。蝦夷地の幕領時代（前期1799～1821年、後期1855～1868年）にあっても踏襲され、奉行所は箱館（前期前半および後期）、もしくは福山（前期後半）に置かれた。

ただ、「松前」口を通過した各年の移出入品目の全体がわかるような史料は見出せない（作成されていない）ので、それを知ることはできない。そのため、個々の請負場所に限られることになるが、蝦夷地での漁業生産およびアイヌ交易に関与した場所請負人の場所経営に関する帳簿類が実態を示すいちばん確かな史料ということになる。活字化された史料でみておきたいが、たとえば、余市町総務課・余市町史編集室編『余市町史』第一巻資料編一（余市町、1985年）に収録されているアブタ・ヨイチ場所を請け負った竹屋林家文書がある。

このなかに「御場所出産物」「積取荷物書上」などと題された毎年作成された出産物名とその数量・目方および石数が記載されている。たとえば、文政11年（1828）8月のヨイチ場所「御場所出産物書上」（『諸書上』のうち）によると、庄内加茂（2人）、早川（越後、以下1人）、敦賀、若狭、大坂、唐津内町（松前城下）の取引先商人ごとに書き上げ、惣石2511石3315、その内訳筒鮭2万3289連、身欠1219束、数子321本、白子240本、笹目199本、外割鮭4383連、鱈351連、雑魚粕363本、囲塩引413連、筋子30樽、となっており、場所支配人の名前で詰合（松前藩役人）に報告されている（132～135頁）。新規産業ともいべき鮭のメ粕・魚油が含まれず、敦賀・若狭との取引量が多いなどヨイチ場所の旧来的な特色が読み取れる。

いっぽう、ヨイチ場所向けの仕入品（注文品）の書き出しには、天保3年（1832）『場所仕入品控 注文』（911～916頁）がある。白米・玄米（産地名、俵数・廻船名、秋田・庄内・越後米などのほか「広東」米がみられる）をはじめ、酒・縄・紙・布・間切・塩など百数十におよぶ品目が書き並べられ、越後酒、竹原塩、水沢（仙台領）網など、産地名を関した物品もみられる。毎年、このような仕入れ品が場所へ送られていたことになる。万延元年（1860）『諸品大数目方控』（1624～1630頁）は、物品の

単位ごとの目方が書かれている。少しだけあげておくと、竹原塩は1俵 = 14貫、同二ツ切 = 7貫、同三ツ切 = 4貫500目、越後酒本二入(2斗入) = 11貫目、同並 = 10貫目、大坂酒4斗入 = 20貫目、杓見蕨1束 = 10貫目、生鮭1丸 = 13貫匁、早割1束 = 2貫500匁、南部薪100本 = 600目、走身欠28入 = 14貫匁などとなっている。なぜ、こうした貫目(匁)が必要なのか、取引のさいの公平性を保つための(不正を避けるための)の基準目方として通用したのであろう。同様の貫目の史料は、秋葉実編『北方史史料集成』第二巻加賀屋文書(北海道出版企画センター、1989年)所収の『加賀屋[覚]』のうちにもみられる(「御産物石数積」597～600頁)。いずれにしても場所経営の帳簿類が「もの」に関しての実態を示す第一次史料であることは論をまたない。

林家文書のなかには、上とは別に安政2年(1855)8月『ヨイチ場所御引渡目録』(1203～1220頁)がある。「引渡」というのは、幕府による蝦夷地再直轄により松前藩から幕府へ場所を引き継ぐためヨイチ運上家(屋)の支配人が作成した一括書類である。このなかには前述の出産物書き上げと同様の「産物去ル寅年積高書」のほか、「軽物小皮類蝦夷人より買入直段書」「産物蝦夷人より買入直段書」が含まれている。また、安政4年(1857)10月、幕府役人の組頭安間純之進が東西蝦夷地を廻浦した節の種々の『一冊書上』(1365～1386頁)には、「御役に諸品売上定直段書上」「土人諸品売物直段書上」、同様に文久2年(1862)7月の組頭栗本瀬兵衛北地廻浦の節の『与市御場所諸書上 扣』には、「御軽物定直段書上」「御役々様江売上直段書上」「土人江売渡直段書上」「土人より産物買入直段書上」(1630～1642頁)が含まれている。運上屋が場所のアイヌから「軽物」(熊皮・熊胆など)および「産物」(煎海鼠・白干鮑・外割鮭など)を買い入れる場合の、逆にアイヌへ「諸品」(玄米・清酒・煙草・古手・間切など)を売る場合の、それぞれ基準となる公定値段が書き上げられている。運上屋とアイヌの間で売買される産物・諸品のリストとなっているが、各年にそれらが実際に売買されたかを示すものではない。役々様へ売上とあるのは、場所詰合の幕府役人が必要とする物品(玄米・半紙・筆など)の値段を記したもので、運上屋が供給していたことになる。

このような売買の値段書きの類は比較的多く残されている。その早い例が田沼期の蝦夷地調査に加わった最上徳内の『蝦夷草紙別録』に収録された、天明6年(1786)「蝦夷地交易直段付帳」(クナシリ・アツケシ・キイタツフ三ヶ所産物、獺虎皮・鷹羽・アザラシ皮・熊胆など。ほかにトカチ場所のうちヒロウ、シヤマニ場所、シツナイ場所)、同年「カラフト人交易直段付帳」(サンタン渡りの切・青玉など)である(松前町史編集室編集『松前町史』史料編第三巻27～33頁、松前町、1979年)。この値段付けは天明6年の「代積」(米・糶・煙草・酒などの交換量、およびその代銭・代金)で、その年の豊凶で値段の高下があるが、その振り合いで交易されているとする。固定された定値段ではないにしても、慣習化されているということだろう。また場所の遠近でも値段の高下があった。『蝦夷地一件』に収録される幕府による御試交易(苫屋久兵衛)の際の天明7年(1787)「仕入荷物残困高書付写」「御用船五社丸神通丸秋味仕入荷物送状写」(427～430頁、434～437頁)の員数書きなども場所移入品として参考になろう(北海道編集『新北海道史』第七巻資料一、新北海道史印刷出版共同企業体、1969年)。幕府は松平定信政権のもとで寛政4年(1792)、「御救交易」を実施しているが、串原正峯『夷諺俗話』に「宗谷交易定直段」が掲載され、アイヌ側の出産物(鯨・煎海鼠・鮭など)と、それとの交換品(酒・煙草・田代など)の値段を記す(谷川健一編集委員代表『日本庶民生活史料集成』第四巻494～495頁、三一書房、1969年)。どちらも8升入米1俵あたりの数量があげられている。この1俵 = 8升はシャクシャインの戦い後に定まり、これを基準に物々交換が行われ、個々の物の価格も慣習化・固定化して

きたものといえる。しかし、飢饉時などにはこの通りであったか検証が必要である。

前期幕領期の交易値段書は案外に残っていない。荒井保恵(松前奉行所調役)の文化6年(1809)『東行漫筆』(秋葉実編『北方史史料集成』第1巻、北海道出版企画センター、1991年)に、ウス・アブタ〜クナシリ間の10有余場所に「交易直段附」「産物買上代」「出荷物買上直段」などと記した場所のアイヌからの産物買上(買入)の定値段が書き留められている。ウス・アブタ場所に玄米8升＝「夷俵」1俵＝代800文(25頁)とあり、交換用移入品はシラライ場所での「玄米八升ニ代候品」(42頁)で知られるだけである。松前藩復領に伴って作成された『文政午年蝦夷地恵戸呂府返地目録写』(国立公文書館内閣文庫所蔵)も、エトロフ島の「産物買上直段書」が引渡目録にはあるが、その交換品については、代米1俵＝8升、1升＝代銭56文定めとし(「演説書」)、「交易之割合」は「是迄定置候振合」(「申渡」)とあって値段付けが固定化していたことを推測させるが、交換品の具体的な書き上げはなされていない。

各場所の交易値段、すなわち買い上げあるいは売り渡しの値段のリストが比較的多く残存しているのは後期幕領期になってからである。前述のヨイチ運上屋の記録にその種の書き上げがいくつか記載されていた。松前藩から幕府へ、幕府から東北諸藩へ、さらに新政府へと領主支配が変更になった際には、現地の場所支配人の書き上げをもとにして引き継ぎ文書が作成された。また、幕府役人が蝦夷地巡回(廻浦)してきたときに求められて提出することもあった。前出『加賀屋文書』のなかにも同種の史料がみられ、請負人の場所経営文書をみていけばいろいろと見つかるであろう。

請負人の史料だけでなく、領地替えに関係した幕府や藩などにも引き継ぎ文書が残されているので、それによっても知ることができる。拙稿「万延元年蝦夷地場所引継文書の紹介と検討－仙台藩分領、とくにクナシリ場所を中心に－」(『近世北日本の生活世界－北に向かう人々』第8章、清文堂出版、2016年)は、幕府から仙台藩への領地替えにあたって作成された引継文書(国立公文書館内閣文庫所蔵)を利用したものであった。そのほか、幕府関係者が蝦夷地を巡回した際の記録がある。そのうちでも安政4年(1857)、箱館奉行堀利熙に随行した玉蟲左太夫『入北記』(稲葉一郎解説、北海道出版企画センター、1992年)は蝦夷地各場所の「交易品直段」(買入品、売渡品両方の値段)を調べて書いており、同一史料で各場所を比較できる貴重なデータである。

3. 松前三港の間屋と倉庫業

蝦夷地から本州方面へ、本州方面から蝦夷地へ運ばれる物品は原則として「松前」口(松前三港)を通過することになっていた。松前藩は沖ノ口役所(時期によっては番所ともいう、税関にあたる)を港に設置して出入りする船・物・人をそこで把握・管理して税を徴収、それが藩の主要な財政基盤となった。この沖ノ口役所の業務と関連して役銭や手数料が徴収されるので、それと関連して移出入の「もの」がわかりそうに思われる。

松前藩(あるいは幕府)の沖ノ口改め・問屋制度について若干説明しておこう。専論としては榎森進「近世北海道における問屋制度の一考察」(『増補改訂北海道近世史の研究』北海道出版企画センター、1997年)があり、『松前町史』など三港の自治体史でも詳しく述べている。これらによると、沖ノ口は蠣崎(松前)氏が豊臣秀吉政権に認められた「船役」徴収権に始まる。全国経済の展開を背景に、18世紀前期になると、前述のように松前城下(福山)一港体制から福山・箱館・江差の三港体制へ拡大し、沖ノ口口銭(売買価格の1%、その後3%まで増加)の徴収などが新たに始まり藩の財源と

なった。こうした沖ノ口業務を担うのが問屋で、その補助的機能をもつのが小宿であった。

榎森氏によると、問屋の機能は、①船宿の機能（沖ノ口番所改・沖ノ口口銭の徴収含む）、②純商業的機能（物品の委託販売、倉庫業）、③場所の断宿（松前・箱館）、④不正品取締・難破船の救助（228頁）などに整理される。17世紀以来だんだんと整備・制度化されてきた。福山では、『寛政十年沖之口諸御役控並問屋儀定控』（前掲『松前町史』史料編第三卷85～130頁）によると、享保7年（1722）12月に問屋15軒が藩に願ひ上げ株仲間として認可されている。箱館では、『函館商業の慣例』（『函館市史』史料編第二卷、編集発行函館市、1975年）によると、延享5年（1748）5月、6人が廻船問屋の株を公認された（89頁）。江差の問屋仲間の始まりはわからないが、『町年寄日記抜書』（『松前町史』史料編第二卷、松前町、1977年）によると、文政13（1830）年8月20日記事中に江差問屋一同として11人の名前がみえる（487頁）。三港の問屋株を持つ者はその後増減があり、各港それぞれに頭取が置かれていた。

沖ノ口業務に関与して作成された問屋の現用の帳簿類は破棄されたものが多いのか、ほとんど紹介されていないようである。そのいっぽう、三港それぞれの沖ノ口の取扱方・収納取立に関する手続書・規定書の類（写本）は少なからず残存し翻刻もされてきた。その種の史料中に沖ノ口の御口銭（藩）・口銭（問屋）徴収と関わって物品名が出てきそうだが、物品ごとへ課すのではなく、売買価格への比率課税であるためなのか、個々の物品名を知ることはできない。そのなかで唯一、羅列的に移入品名がわかるのは問屋機能②の倉庫業に関してということになる。

上の福山の『寛政十年沖之口諸御役控並問屋儀定控』に、「先年々相究置候通、諸色庭口銭別紙書付之通目録ニ仕候而急度受取可申、万一船頭ト相對ニテ右究庭口銭致用捨、目録出候者急度致吟味、其仁定法之通中間相除き可申事」（前掲『松前町史』史料編第三卷88頁）、また、『箱館問屋儀定帳』にも、延享5年（1748）の規定として「従先年相究候通、諸色庭口銭、浜売庭敷共ニ別紙書付ノ通目録面ニテ急度受取可申候、万一船頭相對ニテ右究ノ庭口銭致用有免候ハゞ、急度吟味イタシ、其者定ノ通仲間相除可申事」前掲『函館市史』史料編第二卷8頁）とあり、各問屋は「諸色庭口銭」（庭敷料・蔵敷料などともいう）とあって、「別紙書付」の「目録」に定める口銭にしたがって必ず徴収し、決して廻船の船頭と勝手に相談して口銭を用捨（軽減や免除）するようなことはあってはならないとし、そうしたときは仲間から除名するという取り決めになっている。問屋同士が蔵敷料で手心を加え、顧客の奪い合いにならないようにするためであった。

倉庫業・倉敷料についての規則・慣習がどのようになっていたのか、近世史料では『寛政十年沖之口諸御役控並問屋儀定控』『箱館問屋儀定帳』以上にはなかなか窺い知れないのであるが、前出『函館商業の慣例』は箱館における問屋業に関しての「旧慣」が問答形式で具体的に書かれている。その慣例の主要な二、三について紹介しておく、以下のようであった。

（問）客の送り荷または船手積付品（船積売品）など着荷したとき、その荷物をいったん問屋の倉庫に蔵入れするのか、それとも船荷のまま販売するのか。（答）それは売主・買主の都合に任せるものなので、問屋はただ船手あるいは荷主（売主）などの便宜をはかるにとどまる。したがって蔵入れするか否かに関して一定の規則はない。この荷物の蔵敷料については維新前に一つの慣例があった。それは、下り荷物（北海道以外から北海道へ入る品）は、蔵入れした物はもちろん、蔵入れしないで直ちに売り渡した物であっても、問屋は必ず蔵敷料を取る。いっぽう上せ荷物（北海道産物を北海道以外へ出す品）については、蔵入れしたときは蔵敷料を受け取るが、蔵入れしないときは受け取らな

い例であった(83～84頁)。

(問) 蔵敷料は一日または一ヶ月単位で徴収するの否か、各種の荷物の蔵敷料はどのような割合になっているのか。(答) この点については、右のように蔵入れするか否かは荷主・船手などの便宜にまかせており、問屋はその荷物に対して問屋仲間で決めた議定の蔵敷料を徴するだけである。元来箱館港は安全な良港なので、船積のままにして荷物を倉庫に陸揚げしなくても不慮の災害を受けるようなことはないので、その船はあたかも問屋の倉庫と同じようなものである。蔵敷料は一日何程、一ヶ月何程と定めて徴収するものではない。いったん荷物の蔵入れをしたなら数ヶ月間にわたっても、年を越えないのであればあえて決まり以上に徴収しない習慣となっている。蔵敷料は荷物の種類によって、その間にははなはだしい差がある。その割合は箱館港の問屋議定帳に掲載される通りである(84頁)。このように説明して、主な物品の倉敷料を抄出してあげている(次節参照)。

4. 倉敷(庭敷)料の「目録」

松前三港の蔵敷料を定めた出荷物・入荷物の物品「目録」について現在、以下のものが知られる。

A『寛政十年沖之口諸御役控並問屋儀定控』(前掲『松前町史』史料編第三卷)。寛政10年(1798)は東蝦夷地直轄の前年にあたる。「売買口銭蔵敷庭」とあって、①「扇金通庭之定」、②「蔵敷之部」、③「買置蔵敷之部」、④「両浜之外脇方へ参る通庭之部」、⑤「下荷物扇金之部」に分けて記載されている(106～110頁)。「扇金」(扇は肩かと傍注、片金、半額の意か)の「通庭」「両浜」(近江商人の両浜組を指すか)や、この区分についてまだよく理解できていない。ここでは物品リストが知られれば当座はよいので、このままにしておきたい(他港も同様)。なお、③には、受け取りのあと造り囲いときはこの通り、ただし預かり蔵入れが年を越すときは2年分の蔵敷を受け取る、④には、他国への下り荷物で当地へ揚げて、それより向地に送る場合でも「部立」通りに庭敷を受け取る、⑤には、右の「部立」にない物は荷物金高より御口銭・扇金を受け取る、とあって、若干の補足書きがみられる。記載のしかたは、②を例にとると、「一 柴田米壹俵ニ付 銭廿弐文 一 元米越後大亀田米 同十三文 (以下同様の記載)」となっている。この一つひとつを「部立」と呼んでいるのだろう。

B『箱館問屋儀定帳』(前掲『函館市史』史料編第二卷)。①延享2年(1745)正月晦日に定めた「通庭」(通庭敷)、②延享4年8月26日に決めた「入庭」、③「産物蔵舗」、④「庭舗」の区分からなっている(15～24頁)。②には、ここに記載された以外の荷物もこの割合で取り、また「地船」に積んできた荷物を船元へ揚げたさいにもこの通りに入庭を取ると補足されている。C『函館商業の慣例』(同前書)掲載の「出荷物庭敷〔蔵敷料なり〕」・「入荷物庭敷〔蔵敷料〕」はBからの「重もなるものの抄出」であるが(84～86頁)、そのため主要な移出入品が何か知りうる。

D『文政五年公儀ヨリ御引継江差御収納廉分』(江差町史編集室編『江差町史』第一巻資料一、江差町、1977年)。文政4年(1821)松前藩復領に伴って作成された。条目・調書・手続・収納廉分に関するいくつかの史料を収めた写本である。そのうち「安永年間」(1772～1781)の「江差御条目」の箇所になるのか、①「諸色蔵舗之覚」、②「蔵舗之覚」がみられる(242～243頁、252～253頁)。①には40品があげられ、そのほかは売物により「見合相応」に取るとあり、蔵敷料が分・厘で書かれているのは、銭でなく砂金で示しているのだろう(砂金1匁=銭600文換算)。E嘉永6年(1853)10月『蔵舗定』(江差町史編集室編集『江差町史』第四巻資料四(関川家文書)781～789頁、江差町、1981年)は入荷物の①「蔵舗」のみで出荷物(産物)については記されていない。

上掲の史料はいずれも活字化されているが(写本も少なくない)、移出入品の蔵敷料から知られる物品リストということになる。ここには、蝦夷地だけでなく、松前地内での産物、消費品も含まれているであろう。そのことにも注意しておきたい。この目録掲載以外にも細かな「もの」が諸種含まれているに違いないが、それにしても生産用具、生活用品、食料・嗜好品などさまざまな物品が「松前口」を介して流通していたことになる。第2節の場所史料のリストと合わせることによって、品名に関しては全容がほぼわかり、考古学が扱ってきた「もの」資料との突き合わせも可能になることだろう。

末尾に、A～Eに記載された物品の一覧をあげておいた。本州などからの「入荷物」には、地名を冠したものがみられ、それは産地名を指しているのだろう。米ならば柴田(新発田)、越後、亀田、庄内、新庄、長岡、本庄(本莊)、秋田、津軽、加賀、九州、塩ならば竹原、播州、齊田、津軽、三厩・小泊(津軽)、煙草ならば仙北、地廻り、正部沢、野戸地(野辺地)、南部、仙台、大迫、大櫃、阿波、国分、豊後、加賀、岐阜、といった地名とともにあり、銘柄の商品名として定着していたことになる。これらのほかにも、大坂・大山の酒、加賀の笠、野戸地の提^{ひさげ}・切桁、津軽の裂織、七島・佐渡の蘆、酒田の縄・沓、佐渡・大坂・敦賀・伊勢の縄、南部の椀、能代・越中・輪島の折敷、などがみられる。これだけをみても、松前・蝦夷地に全国各地からその特産・名産が入っていたことが知られる。

いっぽう、蝦夷地産物では、いずれの史料も鮓(鱈)関係が最初に書かれているように最重要品としての扱いであることがうかがわれる。ただ、A・D(松前・江差)では鮓・身欠・白子・数子の区分であるのに対して、B(・C、箱館)では早割鮓(腹中の数子・白子・笹目を取除いたもの)・筒鮓(胴鮓のことか、早割から身欠きを取った残り)・冬鮓^{つぶ}・粒鮓(生にしん)・外割〔数子・白子・笹目を取除くが、身欠を取らないもの、片身が骨つき〕・白子・身欠・数子・笹目(えら)・目切(頭部が腐れ損じたもの)と細分化し、またメ粕類・油が離れて記載されている。粒鮓、身欠、数子などは食料となり、筒(胴)鮓・笹目・白子やメ粕は肥料向けである。昆布類はB(・C、箱館)に三石昆布、元揃昆布、長切昆布、細布昆布など種別が多く記載され、箱館が昆布の集荷を中心に発展したことを物語っている。そのほか、鮭・鱒・鱈^{かすべ}・鮎、煎海鼠、串貝、干鮑などといった海産物や臘肭臍、鹿皮などといった海獣・陸獣類も記載されるが詳しくは省く。熊胆・鷲羽・ラッコ皮など軽物類がみえないのは松前藩の独占物だからであろう。近世後期以降、蝦夷地が全国経済の産業構造のなかに組み込まれていたことは歴然としている。

紙幅の都合で、物品の倉敷の料金(銭何文、金何歩)や、どのような基準・単位でそれを徴収しているか(たとえば、「壺俵二付」「壺束二付」いくらといった記載)については省略した。ただ、それらの基準・単位は、実際に取引・売買される場合の形状や重量・容量・数量などを反映していると考えられる。近世の「単位」は今日ほとんど使われなくなり、その実感が失われているだけに、「単位の歴史」の復元にも役立つに違いない。順不同であげてみると、俵・呎・樽・尋・束・帖・貫匁・斤・束・箇・縄・枚・連・本・丸・間・わ(把)・つ・足・反・結・疋・鉢、といった単位が使われている。B④でいえば、俵は米・雑穀のほか、橙・生姜などに使われており、大小豆4斗入、荳菜種4斗入などと容量を示しているものもある。樽は酒・醤油・酢・味噌・油など液体物であるが、酒が4斗入・2斗入・1斗入、醤油が2斗入・1斗入、などと樽のサイズがわかるものがある。南部切粉(煙草)140玉入、蠟燭6貫匁入、草履・草鞋100足入、といった表現は、それがひとつのまとまった売買単

位として通用しているからであろう。

およそ以上で本稿を閉じたいが、蔵敷それ自体の慣行を含め、検討すべき事柄は多い。「松前口」を通過した移出入品が具体的に知られる史料は前述のように倉敷料のリストだけではない。それらを含めて、別の機会に一覧化して全体的な把握をしてみたいものである。

〈資料〉松前三港の倉敷料に記された物品一覧

福山（松前城下）：A『寛政十年沖之口諸御役控並問屋儀定控』

①「^(肩金)扇金通庭之定」

諸色売、酒売、諸色買、生鮓・細布・江さし昆布・わかめ頭巻買、青物、小間物

②「蔵敷之部」

柴田米、元米越後・大亀田米、庄内・大新庄・長岡米、小新庄・本庄米、亀田・秋田米、雑穀類、野戸地大豆・小豆、吹物米穀類、仙北芥、地廻り正部沢・野戸地縄芥、竹原塩、播磨塩、津軽塩、才田塩、大櫃物、小櫃物、酒、醤油・酢・味噌の類、あは縄、そうり・わらし、薄べり・表胡座、大筵、小筵、帆座、畳、糸、綱（綱）糸、綿、直綿、素麩、飴 木綿・布、古手、古小袖、絹、茶、から笠、白メ油、鬢付、茶わん且徳利、摺鉢砂鉢・半戸、清水焼・瀬戸物、生姜、臘そく、砂糖、串柿、半紙、半切紙、たい〜、七里ん、かな糸、加賀笠、野戸地提、夷椀、南部三ツ椀、同籠、板折敷、足付折敷、鉄、鍋、明俵、敦賀縄、かゝ（加賀）竹、戸障子、柏ノ実七戸入、碇縄、津軽さき織、能代砥、元結、鯨、ざる、石灰、干こんにやく、ふじ、引白、かまはばき、会津わん、手ほうき、苫、三尺椗、野戸地切椗、同五十枚結、同鳥羽結、桧皮、杉板、桧、たまき・さきり、木舞、鼠尾

③買置蔵敷之部

鮓、身欠、白子、数子、駄昆布、大赤同（石付共ニ）、串具（貝）、いりこ・白干鮑、棒鯨・鮫かし⁽⁵⁾、かすべ、鮫油、塩引、綱（綱）布、鰯、江さし昆布、塩樽、煎海鼠・白干鮑

④両浜之外脇方へ参ル通庭之部

仙北た葉こ、地廻り同、元米大新庄・白川越後米、庄内米、新庄・本庄・大亀田米、柴田五歩一米、長岡米、大豆・小豆、小麦吹物共ニ、竹原塩、播磨同、三馬屋・小泊り塩、割たはこ、糸類、先（裂）織、飴、木舞、長椗、切椗、桧皮、沢切、忒間たま木、木綿、古手、大櫃物、小櫃物、茶、ワタ

⑤下荷物扇（肩）金之部

津軽米・越後米、庄内米、柴田米、本庄・新庄米、酒、亀田・秋田・塩越米、大豆・小豆・小麦の類、竹原塩、はりま塩、仙北芥、地廻り芥、金引糸

箱館：B『箱館問屋儀定帳』

①「通庭」（通庭敷）

玄米、庄内米、秋田米、粟、小麦、大小豆、酒、仙北煙草、地廻り同、南部刻、竹原塩、はりま塩、津軽塩、割鉄、糸類、長椗、切椗、桧皮、忒間六寸角（竹外材木類）、割木舞、早切、二間椗、青もの類

②「入庭」

津軽・新庄・村上米、秋田・本庄・亀田米、庄内・柴田・長岡米、大豆・小豆・麦、仙北煙草、地廻り同、さけ（酒）、竹原塩、播磨同、津軽同、金引苧

③「産物蔵舗」

早割鮭、筒鮭、同買置、同囲、冬鮭、粒鮭、外割、白子、身欠、数ノ子、笹目、目切、干鮭、皮干鮭、寒春鮭、壺本より寒、皆〈背〉割鮭、新鮭、曾谷鮭、同壺本より、鮭胃、干鮫、生同、鮫から、蝶鮫、串貝、干鮎、煎海鼠、干鮑、生鯨、棒同、貝鯨、膾膾臍、テツヒ、帆立貝、口黒鱒、夏同、鮭、あたち、筋子、かれの子、海鹿、メ貝、鱈(鮭ト同字)、赤そい、鯨骨、干烏賊、干かれ、椎茸、樺、厚子、鹿皮、鹿角、生蛸、布海苔、ホツケ、硫黄、メ粕類、油、塩鮭・切囲同断、塩鱒、鰯

④「庭舗」

津軽玄米、秋田米、新庄米、大新庄米、亀田米、庄内米、越後米、柴田米、加賀米、九州米、粟稗(稗カ)、大小豆、大小麦、荏菜種、吠もの、カヤノ実、酒粕、酒、名酒、醤油、酢、味噌、奈良漬、水油、白メ油、茶、素麺、白砂糖、黒砂糖、水(氷カ)砂糖、飴、大俵塩、同二ツ切、同三ツ切、同四ツ切、津軽塩、才田塩、温飩、菓子、梅干、こんにやく粉、鰹節、仙北煙草、南部三十繩、地廻り、仙台葛、正部沢同、南部切粉、箆切粉、大はさま、すのし、大櫃(櫃カ)もの、阿波粉、国分葛、豊後粉、大判綿、真綿、貫出綿、夜着(貫出)、蒲団(貫出)、古手、夜着(大小)、蒲団(大小)、木綿、布、南部布、白絹、紬、割織、総糸、伝甫、解分、風呂敷、厚子、のし継、無尻合羽、古帆、織帆、足袋、金引苧、道具苧、細苧、鮭網、市皮、半紙、ちり紙、半切、赤萩、張紙、鬢付、蠟燭、長割鉄、鉄もの、家釘船釘、小碇、鍋、橙、薩摩芋、串柿、生姜、栗、梨子、長芋、蒨、表蒨、七島蒨、佐渡蒨、帆座、畳、薄縁、毛苫、菅苫、大間縄、中間縄、網羽縄、海鼠引縄、碇縄、酒田縄、大坂縄、遣縄、わらちない、草履・草鞋、雪駄、草履下駄、塗下駄、ほくり足駄、戸障子、襖、艫、荏樽、竹、六七切石、五六同、板石同、植木(大)、わらすた、みご箒、竹箒、傘、菅笠、小三度杉型笠、家具、打敷、南部椀、ひさげ、蝦夷椀、茶碗・徳り、小はんとう、砂鉢、すり鉢、皿、瀬戸物、佐渡笊、箕、附木、かすり、水柄杓、線香、壺丈角、式間、雑木、松杉板、式間垂木、早切、樞、木舞、挽同、長杙、切杙、桧皮、打桧皮、寸甫、柏木皮、天草、南部割木

箱館：C『函館商業の慣例』

①出荷物庭敷〔蔵敷料なり〕

外割鯨、胴鯨、身欠鯨、鯨鯨、白子、笹目、目切、棒鮭、開鮭、新鮭、干鮎、生鰯、生鮫、干鮭、筋子、塩鮭、塩鱒、鱈粕、生鯨、鯨骨、干鮑、串貝、煎海鼠、干鰯、布海苔、魚油、三石昆布、元揃昆布、長切昆布、細布昆布、棹前昆布、内元昆布、内長昆布、片前

②入荷物庭敷〔蔵敷料〕

竹原塩、二ツ切、四ツ切、播州塩、齊田塩、津軽米、庄内米、新庄米、越後米、秋田米、本庄米、加賀米、大小豆、麦、蕎麦、大坂酒、大山酒、味噌、醤油、奈良漬、白絞油、蠟燭、半紙、塵紙、切紙、素麺、白砂糖、黒砂糖、梨子、梅漬、阿波粉、判綿、金引苧、鮭網苧、鉄、鍋、鉄物類、空荏樽、表蒨、薄縁、畳、蒨、大間縄、中間縄、草履、戸障子、五分板、八分板、寸甫、垂木

江差：D『文政五年公儀ヨリ御引継江差御収納廉分』のうち(「安永年間江差御条目」関連か)

①諸色蔵舗之覚

米、酒、鮭、身欠、数ノ子、白子、煙草、茶、苧、半紙、大櫃、小櫃、古手、木綿、蠟燭、白紋、蒨綿、六貫目塩、竹原塩、津軽塩、蒨、薄縁、畳、敦賀縄、アミ縄、蒨、苫、草履、ワラジ、鉄、飴、

ソウ麵、掃、笠、瀬戸物、砂糖、柎桧皮、先織、鯉節、刻煙草、縄煙草、真綿、貫手綿 ㄨ 40品

②藏鋪之覚

見米、庄内米、本庄米、新庄米、亀田米、酒、網羽繩、仙北煙草、地廻シ煙草正部沢、吹物、大物、草履ワラジ、薄縁表蔭、柎・結切柎、桧皮、杉板、角、垂木早切、木舞、飴、張摩塩、竹原塩、津軽塩、古手、木綿、布、茶、傘、糸、白メ油、髪付、小半戸、薑、砂鉢、蠟燭、茶碗半戸、摺鉢、白砂糖、干柿、半紙、半切、代々、セリン、綴、加賀笠、提、夷椀、木部椀、折敷、鉄、鍋、明俵、伊勢縄、戸障子、唐竹

江差：E『藏鋪定』

①藏鋪

穀物、酒、醤油、酢、白酒、味噌、種油、白メ油、魚油、鯨、海月、梅干(若狭、大谷)、梅漬、酒粕、長割鉄、鋤、鍬、鎌、樋、鍋、茶釜、鍋鉋、鍔釜、金物、青物、玉子、葛、栗、榧、胡麻、筆、墨、捕鉢る以、生麩、雌黄、瀬戸物、砥石、笠る以、笊、蒟蒻粉、柄杓る以、焼麩、針、十露盤、釘、炭、材木る以、三味線、火鉢、喇竿竹、毛氈、燈心、丸竹、焼酎、塗物、鱈網、軽多、立茶、袋茶、飯合利、鯛釜、元結、大櫃、碇、柳合利、呉服(古手・鮮<解カ>分)、秤、竹原塩、三ツ切塩、切粉、ホロキ、豊後粉、縄たは粉、仙北地廻、スノシ、加賀粉、国分、阿波粉、岐阜粉、籠粉、布(南部)、先織(能代、三国)、貫手綿、打綿、中入綿、真綿、紺綴、白伝甫、木綿、苧る以、網る以、網苧、半紙、鹿<塵カ>紙、半切、赤萩紙、大良紙、名田庄紙、奉書紙、美濃紙、梶原紙、桐油紙、紙腰提、煙草入る以(布・紙・福木)、飴、玉砂糖、太白、氷砂糖、金平糖、菓子、柿、素麵、同切、温飩、鯉節、干大根、生姜、松茸、水引粉、雁、鴨、生鮭、髪附、蠟燭、南部椀、南部籠、木杭、折鋪(能代・越中・輪島)、行燈(上方、能代)、杓子、唐紙、屏風、傘、附木、箕、片称籠、輪竹、藤、手甲、酒田簾、御簾、畳、七島蔭、帆蔭、表蔭、縁取、毛苜、ケラ、蕨、中間縄、酒田縄、敦賀縄、楯縄、筏網、網羽繩、已ら組、綱(株呂・糸物)、桧綿、吹類、苧(糸、已ら)、綱ノコ、雪踏、皮緒、緒、草履、草鞋、表付下駄、中折、稲子、駒下駄・カツハリ、若狭同、足駄、大坂堂島、沓(酒田、権兵衛)、幅巾(板橋、沼宮内)、線香、夜着る以、古手、明荷、摺鉢、紅鉢、石灰、小倉男帯地、絹女帯地、伸継、櫻箒、手箒、籠焼燈、柎、木舞、桧皮、板類(杉、松、栗)、貫、垂木、石臼、地藏、石類(越前五六、能ト五六、越前板石、能ト板石)、地福石、石塔、竈、石燧、服当、甲手、股引脚半、味醂酒、新帆、帆前掛、板戸、帯戸、障子る以、中障子、柿渋、大判錦、寒天、漬物る以、早切、合羽、瓦

第8章 江戸時代の貿易陶磁器需要 —江戸の状況を中心として—

堀内 秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）

はじめに

16世紀に起こった東アジア地域へのヨーロッパ勢力参入、明の朝貢貿易の衰退、17世紀の明・清の王朝交代による動乱とその後の清朝の外交政策が変化したことで、日本、朝鮮、東南アジア諸国等近隣諸国における国際関係や貿易構造は新たな段階へ入った。

日本では、中世末に堺、博多、豊後府内、長崎などの地域勢力による多元的な国際貿易構造から近世豊臣期を経て、徳川による一元的な貿易管理体制に移行した。周知のようにこうした過程での日本における最重要輸出品は鉱物資源であったが、輸入品のうち文化的にも日本人の精神に大きな影響を与えることになった茶の湯や武家儀礼において重要な道具となった貿易陶磁器の研究は、考古資料の性格から適した題材であると言えよう。

本稿では、本研究テーマである「近世国家境界域「四つの口」における物資流通の比較考古学的研究」の目的に沿って、流通過程における終着点として、幕藩体制下における中心都市であり、最大の消費都市である江戸を中心として、貿易陶磁器の出土様相とそこから窺える江戸の貿易陶磁器需要について考えるものである。

1. これまで指摘した江戸の貿易陶磁器の出土様相

筆者は、これまでにいくどか江戸遺跡出土の貿易陶磁器について考察を加えてきた（堀内2013、2016など）。提示した資料や内容の詳細は、これらを参照されたいが、ここでは指摘した需要について簡単に再確認してみたい。

貿易陶磁器の多くは商品であり、出土様相とその変化は、国内における陶磁器需要と連動していることは言うまでもない。下記は江戸の貿易陶磁器需要の所在を典型的な事例を挙げながら要点を示したものである。

需要① 肥前磁器普及以前の生活用品として需要

特徴：碗、皿などの食膳具が中心。器種のバリエーション、質の幅なども大きい

例：千代田区丸の内三丁目遺跡52号遺構など

需要② 上級武士を中心にみられる武家儀礼の道具として需要

特徴：揃いの磁器皿・鉢・猪口が中心。大型品には年代的に遡る製品などが確認される

例：千代田区有楽町一丁目遺跡070号遺構、文京区東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院中央診療棟地点L32-1など

需要③ 18世紀後半以降、煎茶器など文人アイテム、遊興地におけるトレンドとして需要

特徴：煎茶に関連する飲用器が多い。食膳具、動植物の賞翫、喫煙具、文房具等も散見される

例：文京区千駄木三丁目南遺跡第2地点1号遺構など

需要④ 茶の湯の中で需要

特徴：中国を中心に中世末から朝鮮、近世では東南アジア、ヨーロッパ、中国古染付、祥瑞など

例：文京区東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院看護師宿舎地点SK299など

需要⑤ 流通容器として、中に入れられているものの需要

特徴：中国・東南アジア壺、薬瓶など

需要⑥ その他（特別な入手ルートが想定できるなど）

例：渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡、文京区弓町遺跡第6地点など

また、主に肥前磁器と中国磁器の出土様相から、近世の需要を以下の3段階に分けた。

I 段階－中国磁器のみで構成される段階（～17世紀初頭）

II 段階－中国磁器と国内産磁器が混在している段階（17世紀中葉）

III 段階－ほぼ国内産磁器で構成される段階（17世紀後葉～）。以下に2細分される。

III a：貿易陶磁器がほぼ認められない段階（17世紀後葉～18世紀前半）

III b：特定の器種に貿易陶磁器が認められる段階（18世紀後半～幕末）

表8-1は、上で示した需要の所在に出土状況による年代を照射して作成したものである。貿易陶磁器需要は江戸時代を通して一様に現れるわけではなく、需要①がI 段階、需要②がI～II 段階、需要④はI～III 段階、需要③と⑤がIII b 段階に認められる⁽¹⁾。そしてこれらは、②が武家儀礼の共食道具、③が江戸時代後期の文化的ムーブメントとの関わり、④がいわゆる大名茶の道具などと関連し、江戸の貿易陶磁器需要が御府内で行われていた文化や社会・経済的な行為と相関していると評価できる。

このような需要の一方で、需要⑥で示した渋谷区千駄ヶ谷五丁目遺跡、文京区弓町遺跡第6地点など長崎奉行関連の遺跡、古物のマーケットなど通常の商業ルートとは異なる入手経路の存在など、量的に少ないため発掘資料の中では見えにくい製品の動きなど留意すべき点が存在することを指摘した（堀内2016）。

2. 出土貿易陶磁器の数量分析

筆者らは、2009年までに刊行された発掘調査報告書に掲載されている江戸遺跡出土の全ての貿易陶磁器を集成し、地域、年代、需要の背景、生産、流通などへの言及した（近世貿易陶磁器調査・研究グループ2013a・b）。本研究では、これに加えて2015年までに刊行された報告書の資料を加えて、数量的提示を行い、看取された出土傾向とその背景について触れてみたい。

(1) 分析の方法

上記、報告書に掲載された貿易陶磁器を、器種、装飾方法、銘款、推定生産地、推定生産年代など個体に関わる情報と合わせて江戸遺跡内での出土様相を把握するために、出土地の性格、廃棄年代についての資料化を行った。集成の際には、実見を行い、資料を確認した上で行うべきと考えるが、数量が多く、報告書に掲載された実測図、写真、観察表などを参考に行わざるを得なかった。集成する際の取舍選択は、全て筆者の責任である。

2015年までの報告書に掲載された陶磁器で、貿易陶磁器と判断されたものは、5,898例である⁽²⁾。ただし、集成した資料には図化されたものは1点であっても複数点出土しているものも多数あり、その報告方法は多様である。今回は、実測図や写真図版として掲載されている数で算出している。

(2) 出土様相

①器種（表8-2、8-3）

器種が推定できた陶磁器は、5,692例であった。確認された器種は、碗、皿（含盤）、鉢、坏、瓶（含徳利）、急須、薬瓶、蓮華、灯火具（含ひょうそく、燭台）、香炉、水注、壺、水指、硯屏、合子、花

入、水滴、蓋物、火入、植木鉢、カップ、ボトル、洗、クレイパイプ、インク瓶、播鉢、箱、天目台、餌入れ、陶硯、タイル、チュリーンの32器種である。このうち多い順に皿(2,625例)、碗(1,587例)、坏(620例)、鉢(327例)、壺(139例)、瓶(133例)、散蓮華(60例)、香炉(41例)、花入(20例)の順であった。最も多かった上位4器種は食膳具であり、皿、碗、坏、鉢を合計すると5,159例で、全体の91%を占め、貿易陶磁器の需要の主体が食膳具にあったことを示している。

しかし、後述する陶磁器の推定生産年代と合わせて考えると江戸時代前期と後期では、出土器種に差異が確認できる。S期(清朝期)のみの器種として、急須、薬瓶、散蓮華、灯明具などがあり、特に薬瓶(47例)と散蓮華(56例)は、碗(519例)、坏(271例)、皿(128例)に次いで多く確認されている。また、A期(16世紀以前)が最も多いか、あるいはM期(17世紀前半)とほぼ同数の器種は、瓶(20例)、香炉(19例)、水注(2例)、花入(16例)、水指(1例)などがあり、量的にはそれほど多くはないものの、元から明前～中期の龍泉窯産青磁製品が多く、こうしたものは茶陶としての用途が想定できるものである。一方、皿、鉢などはM期と比べてS期には大きく数を減じており、江戸時代後期にはこれらの器種の需要減少が指摘できる。

②胎質・装飾方法(表8-4)

胎質では、磁器5,383例、陶器508例、土器8例であった。全体の9割は磁器製品で、貿易陶磁器の需要の主体は磁器であったことが判る。磁器のうち、装飾が判断できた磁器は、5,347例であった。このうち青花3,833例、色絵952例、青磁314例、白磁161例で、この他に瑠璃釉、褐釉、黄釉、緑釉、紅釉、翡翠釉などがあつた。

陶器では、ヨーロッパ産が過半(287例)を占め、琉球(80例)、東南アジア(52例)の他に、朝鮮、宜興、華南三彩などがあつたが、朝鮮産陶器や壺・甕類に生産地推定ができなかったものが多く存在した。壺・甕類は国内窯ではないことは推定されたものの、これまで中国南部と言われていたコンテナや見立てられた茶陶類と考えられるものであつた。ヨーロッパ産の製品は、16世紀後半から17世紀のファイアンスやライン炆器と判断された数例を除き、プリントされた硬質陶器類などを中心に幕末期に入ってきたものである。

上記のように、貿易陶磁器の需要の中心は磁器にあり、後述する年代と合わせて考えると、陶器の多くは肥前磁器が十全に国内市場へ供給する前に入ってきたものと言える。

③推定生産地(表8-5)

生産地が推定できた資料は、5,882例であつた。不明なものの中には、中国南部産と言われている壺類が一定量含まれるが、ここではこうしたものについては「中国他」に含めた。量の多い生産地から、中国景德鎮(4,094例)、中国漳州(733例)⁽³⁾、ヨーロッパ(287例)、中国龍泉(231例)、中国徳化(181例)、琉球(80例)、朝鮮(56例)⁽⁴⁾、東南アジア52例、西アジア1例の順である。

上記のように、江戸遺跡における出土貿易陶磁器の92%(5,406例)が中国産であり、中国陶磁器に需要の中心があつたと判断できる。

④推定生産年代(表8-6)

推定生産年代では、貿易陶磁器の9割以上を占め、生産についての研究が比較的進んでいる中国製品を対象に数量を提示した。ここでは、報告書掲載の実測図から細かい年代を推定することは難しいと判断し、大きくA期(16世紀以前)、M期(明末清初、17世紀前半中心)、S期(清朝期、17世紀後半以降)の3区分を行うにとどめた。分類の詳細は後述する。

江戸時代は、中国では、明末万曆帝後期～清朝同治帝の治世までが該当する。したがって、それ以前に生産された陶磁器は、日本で伝世していたか、江戸時代までの間に日本持ち込まれたかいずれかになる。江戸遺跡出土資料ではこのあたりのプロセスは明らかにはできないが、中国国内の混乱、古玩市場の整備、日本の唐物需要、金や銀の鉱物資源の輸出量の増大などの諸状況から、戦国期から江戸時代初期にかけて、日本に持ち込まれたものも多くあったと推定している。

A期と分類したものは、堀内が2013年に行った江戸遺跡出土貿易陶磁器分類に含まれない、それ以前に出土する製品である(堀内2013)。小野正敏氏の染付分類、碗A～E群、皿A～E群(小野1982)⁽⁵⁾、大橋康二氏の貿易陶磁分類碗I～IV類、皿イ～ロ類、ニa～c類に相当するもの(大橋2017)、および、上田秀夫や森田勉の白磁、青磁碗分類にあげられているものである(上田1982、森田1982)。また、これまでの研究で、明清の混乱の影響と肥前磁器の国内需要への十全な供給で17世紀後半から18世紀前半に貿易陶磁器の出土が極端に減少するが、この時期を挟んでそれ以前の堀内2013分類に該当する陶磁器をM期の製品、それ以降に出土する製品をS期の製品とした。実年代で示すと、おおむねA期が16世紀まで、M期が17世紀前半、S期が18世紀以降となろう。

生産年代が推定できた陶磁器は、5,007例あった。このうちA期の製品が390例、M期が3,498例、S期が1,119例であり、M期の製品が70%を占めている。この段階の貿易陶磁器は、肥前磁器の生産・流通状況との関連性を考慮する必要がある、磁器供給のほとんどが肥前になる17世紀前半までに輸入されたものである。したがって、その後の段階で出土するS期の陶磁器と国産磁器の関係とは異なった解釈視点が必要である。一方、A期の陶磁器も一定量出土しているが、その過半が龍泉を中心とした青磁製品で、盤・鉢などの大型の食膳具と香炉、花入、酒会壺など茶の湯に利用される陶磁器が、大名屋敷を中心に確認される。このことは近世段階においても中世からの武家儀礼のアイテムとして青磁類が重要な「御道具」としての価値を有していたと考えている。

⑤銘款(表8-7)

主に中国青花磁器に記されたものであり、種類は、文字銘、角椀銘が最も多くを占めるが、S期には魚や花や昆虫などのワンポイントのものが少量存在する。ワンポイントの銘款は、大坂銅吹所IV2期出土の享保9(1724)年の妙地焼けに伴って廃棄された貿易陶磁器に多く確認されている一方、大坂城下町跡(OJ92-18次調査SK412)の宝永5(1709)年の道修町大火に伴う廃棄資料からは非常に少ないことから、17世紀末から18世紀前半に多く付される銘款であると考えている。ワンポイントの銘款が少ない理由は、この時期に生産された貿易陶磁器が江戸に入っていない証左になると思われる。文字銘は、一文字銘(「雅」「福」など)、二文字銘(「清雅」「片玉」など)、四文字銘(「大明年製」「成化年製」「玉堂佳器」など)、六文字銘(「大明嘉靖年製」「大清乾隆年製」など)、異形字銘、角椀銘、いわゆる堂斎銘などがあるが、判読できないものもかなりの量に上る。

また、A期に分類された青花自体が数量が少ないことで戦国期から桃山期に中で多くみられた「玉堂佳器」「大明年造」「萬福收同」などの量は少ない。一方、S期の製品のうち乾隆年間(1735～96)以降には篆書によって四字銘や六字銘が記される例が多い(図8-1)。ここでは、最も多かった文字銘のうち年号が記された銘款についてカウントを行った。

銘款には、明代と清代のものが確認された。明代では、成化(254例)⁽⁶⁾が最も多く、嘉靖(35例)、宣徳(18例)と続くが、これらの多くは万曆末期～崇禎期(おおむね17世紀前半)に生産された製品であり、ほとんどは古い年紀が使用されたものである。清代では、乾隆(71例)が最も多く、嘉慶(25

例)、道光(17例)と続くが、これについても長佐古氏が指摘しているように記された年代を保証するものではないものの(長佐古2013)、18世紀第四四半期が廃棄年代と推定できる遺構から出土している資料は、乾隆年間の銘だけであるのに対して、廃棄年代が19世紀に入る遺構からは、嘉慶年間(1796～1820)の銘が確認される点、長佐古氏の研究において、古い形態を持つタイプに乾隆年間の紀年銘が付される点から、書かれている紀年銘の時期が大きく異なっているとは考えにくい。また、他に雍正～乾隆年間前半に多く使用された魚・昆虫・花などのワンポイントの銘款、二重角枠内に小さい渦巻と細かい斜線を組み合わせた銘款(図8-1)などが少ないことから、出土している製品の多くは乾隆年間の紀年銘であってもその後半に生産された製品であると推定している。これらから江戸においては、乾隆年間後半～嘉慶年間頃(おおむね18世紀後葉～19世紀初頭)が需要のピークで、道光年間(1821～50)ころまで継続していたと考えることができよう。

⑥ 出土地(表8-8)

居住者が推定できた資料は、4,209例であった。調査区が異なる居住者にまたがっていたり、災害、屋敷割り、屋敷替えなどによって居住者が替わって土地の分割併合などで特定が難しい例が多く存在した。ここでは、江戸城、大名、旗本・御家人、町人、寺社地に分けて、集計を行った。

江戸城は272例、大名2,898例、旗本・御家人853例、町人227例、寺社地231例で、大名屋敷が最も出土例が多いが、これは調査面積差によるものも大きいと思われる。これを年代と合わせて評価を行ったものが、表8-8である。これをみるとA期の割合が最も大きいのが江戸城(江戸城出土272例中97例、36%)、次いで大名屋敷(大名屋敷出土2,898例中214例、7%)で、旗本・御家人(旗本・御家人地出土853例中28例、3%)と町人地(町人地出土227例中10例、4%)は少ない。これはM期の貿易陶磁器についても同じ傾向が指摘でき、江戸城171例、同63%、大名屋敷2,289例、同79%に対して、旗本・御家人では435例、同51%、町人地では118例、同52%と少なく、A期やM期の貿易陶磁器需要の主体が上級武家にあったと指摘できよう。一方、S期では、江戸城4例、同1%、大名屋敷395例、同1%に対して、旗本・御家人では390例、同46%、町人地では105例、同45%と清朝磁器の需要が、上級武家にはなく、下級武家や町人である状況が明確である。

3. 貿易陶磁器の流通について

これまで見てきたように、貿易陶磁器の需要は、大きく見ると江戸前期と後期の二時期が存在する。

(1) 江戸時代の前期の流通

① 17世紀前半の江戸の状況

ここで示した貿易陶磁器の推定生産年代は、M期と一括して扱ったが、細かくみると、段階差を認めることができる。様相差は、堺環濠都市遺跡の慶長20(1615)年の大坂夏の陣に伴う資料群(SKT263 SB1)、土地利用の変遷より元和8(1622)年が廃棄の下限と推定されている大坂城下町遺跡魚市場関連資料(AZ87-5 SK404)など対比すると理解しやすい(堺市立埋蔵文化財センター2004、大阪市文化財協会2004)。森によって提示されている中世後期から近世前期の貿易陶磁器の分類とアセンブリッジをみると、この段階の主体を占めている器種は、丸碗の碗H、芙蓉手の碗I2、直口縁皿E群、芙蓉手皿I、漳州窯系皿Fなどである(森1995)。また、大坂例では漳州窯系碗J1、J2、F2、F4、碁笥底の深皿H2などが加わっている(図8-2、表8-9)。ここで挙げた2遺構のみで器種の存否

による段階差の指摘を行うには危険であるものの、実際には僅かな時間差とは言え、新しい要素が確認できる点に注意したい。これに江戸遺跡例を照射すると、丸碗の碗H、芙蓉手の碗I2、直口縁皿E群、芙蓉手皿I、漳州窯系皿Fなどは確認されるものの、漳州窯系碗J1、皿C群粗製、皿H1、H2、J群などは大きく減少している一方、高台無釉の碗H3（図8-3の11）や小坏IVなどが加わっており、江戸遺跡出土の貿易陶磁器は17世紀第二四半期以降の製品も多いと考えている。また、振花文（同4）、幾何学文（同6）などいわゆる祥瑞に多用される崇禎期（1627～1644）に特徴的な文様も多頻度で確認できる。

当該期の江戸では、当初の城郭と城下町が、いわゆる天下普請と称される御手伝普請によって総構工事が完了した寛永13（1636）年に一応の完成をみる。また、寛永期は、江戸の性格を大きく決めた2つの大名統制制度－証人制度（元和8（1622）年に外様、寛永11（1634）年に譜代大名に妻子の江戸居住を義務づける）と参勤交代（寛永12（1635）年の武家諸法度で制度として確立）－が施行され、幕藩体制が整備されるプロセスの中で武家階層で行われる儀礼行為が規範化、制度化が進行するが、こうした場において使われる道具として大量の揃いの磁器需要が存在した。

下記、明暦3（1657）年の振袖火事による廃棄資料は、江戸で行われた武家儀礼道具の当初の使用・保持の状況を反映していると考えられる。

○明暦の大火で廃棄された貿易陶磁器 一 千代田区有楽町一丁目遺跡70号遺構一（図8-3）

調査区内の当該期の所有者は、藤井松平家（当時播磨明石藩7万石）で、出土遺物は藤井松平家で保管・使用していたものと推定される。070号遺構は、揃いで上質の磁器食膳具－鉢（1、2）、大皿（3）、中皿（4～7、12～14）、小皿（9）、猪口（10、11）⁽⁷⁾－を中心に構成されており、これらは武家儀礼に利用された道具と推定される。この資料中、貿易陶磁器は報告書で図示された製品のカウントでは334個体、肥前磁器は196個体で、貿易陶磁器の量が多い。図示した実測図の1～11が貿易陶磁器で、これだけで武家の食膳形態に必要な器種・法量が確認されていることから、貿易陶磁器が主体であった段階で既に江戸時代の基本的な武家儀礼セットが成立していたと判断できる。

以上の状況から、江戸における江戸時代初期の貿易陶磁器需要は、寛永期に整備された証人制度や参勤交代制度などの法令と武家儀礼様式の成立が大きく作用していると考えており、それに伴う道具も、多くは寛永期に具備されたものと推定している。

② 対外貿易の流れ

当該期における陶磁器の主体は中国磁器であることは、既に示した。江戸の需要が寛永期に増大したと仮定すると、その流通経路が問題となろう。『唐船輸出入品数量一覽1637～1833』によると、大きな量の陶磁器の輸入記録は、寛永14（1637）年の陶器750,000個、寛永18（1641）年の陶器30,000個、正保2（1645）年の陶器鉢22,900包、正保3（1646）年7,000包で、カウントする単位の問題はあるものの正保3（1646）年以降1,000を超える量の輸入はなくなる（永積編1987）。

こうした時期に、元和2（1616）年オランダ・イギリス船の入港を長崎と平戸に限定、寛永元（1624）年スペイン船の来航禁止、寛永12（1635）年中国船の来航を長崎に限定、日本人の渡航・帰国の禁令、寛永16（1639）年ポルトガル船の来航禁止、寛永18（1641）年オランダ商館を長崎へ移転などの諸規則が制定される寛永期は国際関係の大きな転換期であった。寛永前期あるいはそれ以前には、明確な資料が確認できないが、『平戸オランダ商館の日記』（永積訳1969）に散見される唐船やポルトガル船の積載記事では、陶磁器貿易は中国が主体となっていると推定される。その窓口は、寛永12年以降

は長崎になっており、オランダ商館が出島に移る寛永18年以降には輸入量は減少するものの、陶磁器輸入の主たる窓口になっていたと推定している。

(2) 江戸時代後期の流通

当該期の様相として、出土地、推定生産年代の分析から旗本・御家人地や町人地に多く出土が認められ、碗、坏、蓮華、薬瓶など特定の器種に偏ることが確認できた。また、銘款の紀年より乾隆年間(1735～95)のおそらく後半～嘉慶年間(1796～1820)に需要の中心があり、道光年間(1821～50)ころまで継続していたと推定できた。そしてその背景として文人趣味あるいは中国趣味の存在を指摘したが、これと同時にこの段階でヨーロッパ産の陶磁器が増加している。19世紀第三四半期までに出土しているヨーロッパの陶磁器の中心は、プリントウエアである。その多くがオランダ・マーストリヒトのペトゥルス・レゲー窯の製品である。長久智子氏の研究によれば、レゲー社の創業は1834年のことで、1851年にイギリスより最新式の機械類を導入したことで国際市場に参入するとしている(長久2011)。また、オランダの研究では江戸で出土量の多い、ウイロウは1854年から、オリエンタルは1861年から、グリーナーは1858年からの製造とされる(Bogaers Marie Rose1992)。一方、日本では「箱書には、紀年銘の伴う例もあり、天保期(1830～44)以降事例が増加する傾向にある」(仲野2011)と指摘しているが、これら19世紀前半に遡る製品はスタッフォードシャーを中心としたイギリス製品と思われる。

当時の国内情勢は、開国を迫るロシアやアメリカが来航し、日米修好通商条約締結により1859年から横浜、長崎、神戸などを順次開港していくことになっていく。この幕末期に持ち込まれたヨーロッパ陶磁器がどのようなルートで江戸に持ち込まれたのか、明確ではない。ただしオランダ製品が多く確認されることから、長崎からもたらされた割合が高いことが想起される。

幕末期には、プリントウエアの煎茶器、散蓮華、爛徳利など日本文化仕様の器種が、マーストリヒトで生産されており、また、天保頃から青木木米、高橋道八、尾形周平などの日本の陶工のヨーロッパ陶器を写した煎茶器などを作っている。こうした状況は、19世紀前葉までのトレンドの嗜好が中国から多様化したと考えられる。こうした段階の出土例を紹介したい。

○植木屋森田六三郎邸から出土した陶磁器 一千駄木三丁目南遺跡 第2地点1号遺構一(図8-4)

調査区内の当該期の所有者は、植木屋森田六三郎である。平野氏によると森田六三郎は、文政10(1827)年刊の文献で確認できる植木屋で、嘉永5(1852)年に浅草に植木茶屋である花屋敷を開園して有名になるが、それ以前、千駄木の屋敷では文政12(1829)年に親の代から菜飯茶屋を営んでいた点は重要である(平野2007)。報文によると1号遺構は廃棄土坑で、年代的下限は明治初頭と推定している(共和開発株式会社2007)。

貿易陶磁器は、1～15である。福建省徳化窯の型作りの色絵碗(1～3)は、江戸遺跡で多く出土する簡単な草花文が描かれたものではない。景德鎮の皿(4～6)のうち5は「道光年製」銘が確認できる。香炉(7)は対で出土しており、「道光年製」銘がつく。8は薬瓶、9は「雍正年製」銘の手付壺、10は宜興産と推定される植木鉢、11はアルファベットが書かれた陶胎染付であるが、これは日本の写しの可能性もある。12、13はヨーロッパ製の白磁皿で、口唇部は金彩、高台裏に染付銘が確認される。14、15はヨーロッパの色絵陶器皿である。16、17は黄釉坏、18は染付植木鉢、19、20は「音羽」印の素焼の急須把手で、中国やヨーロッパの上質の煎茶器、香炉、植木鉢など趣味的な器種が多く出土している。

この千駄木例は、中国趣味に新しい時代のトレンドが混在した様相と考えているが、必要な点は

これが町人地（植木屋）で出土している点である。これまでに何度か指摘してきたが、既存の階級とは異なる枠組みで構成されるおそらく特定の嗜好や趣味の共有した人が所有していた道具と考えている。

おわりに ー小結ー

本稿は、江戸遺跡から出土した輸入陶磁器を悉皆的に集成を行い、そこから看取された傾向を元に江戸におけるその需要の所在と背景について考察を加えてみた。この中で、朝鮮の陶磁器についての情報を多く提供できなかった点については大きな反省点であり、改めて現状とそれを踏まえた方向性を提示したい。

江戸は、都市として他の都市とは単純に対比できない市場規模や性格を有しており、これらを踏まえて需要や消費の評価をする必要がある。

また、陶磁器の流通経路については、江戸は消費地であり、残念ながら出土遺物個々の観察から得られる情報はほとんどない。ただ、幕末期に輸入されたプリントウエアについてみると、18世紀後葉から19世紀前葉のイギリスの生産量から勘案すると、江戸のオランダ製品の出土量が多い点は、対外貿易の窓口の影響と考えざるを得ないし、レグーの製品に日本仕様の器種がある点もこうした文脈の中で評価できよう。

今回は、陶磁器に限っての分析となったが、ガラス製品、金属製品など考古学的にも検証可能な輸入品も多く存在しており、陶磁器のように国産磁器が十全に供給した中での様相とは異なることも想起される。また、消費のみならず文化の発信地としての影響の解明などの課題も多い。

註

- (1) 2016年には「②、④がⅠ～Ⅱ段階」と書いたが、需要④は江戸時代後期に火災対策などの整備に伴って、考古資料としての出土は少なくなるものの、現在にも引き継がれている需要が存在することで修正を行った。
- (2) 現在、『近世都市江戸の貿易陶磁器 資料集 (2)』刊行に向けて校正中であり、また、既刊の同 (1) についても、精度を高めるために順次修正を加えていく予定である。ここで提示した数量は2020年10月末段階のものである。
- (3) 漳州、徳化は共に中国福建省の窯業地である。漳州窯はいわゆる呉須手、呉須赤絵、ヨーロッパではSWATOWと称された輸出磁器の生産地で知られるが、ここでの「漳州」は、16世紀後葉から17世紀前半に呉須手、呉須赤絵を生産した時期の製品に限って別項を設けて分類を行った。また、これと同様に徳化についても型成形された製品について別項を設けた。
- (4) 朝鮮については、日本の九州や中国地方の国産窯製品と分別が困難なものが存在することや、いわゆる御本手などの日本好みに作った茶碗など嗜好性、趣味性の高い製品が多いことから、産地の特徴が共通認識になっているとは言いがたい。今回の集成における判断は、報告書の記載を基本にグループメンバーの意見も参考に行った。
- (5) 染付皿E群は、17世紀以降においても継続して確認されるが、主文様、銘款、外側面文様などの変化が認められる。小野正敏氏が分類の標準資料として提示したXⅠ、XⅡ、XⅢ類については(小野1982)、A期とした。
- (6) 明代の年号銘は、例えば、成化であれば「成化年製」「成化年造」「大明成化年製」「太明成化年製」「大明成化年制」「大明成化年造」などのバリエーションが存在する。
- (7) 佐賀藩の将軍、幕閣への鍋島の贈遺記録から、将軍への献上は「鉢」、「大皿」、「中皿」、「小皿」、「猪口」と記されており(伊万里市200)、これが武家の食膳具として利用される器種と皿の法量であったと考えられる。ここでは法量については、1尺内外以上の皿を「鉢」、7寸程度の皿を「大皿」、5寸程度の皿を「中皿」、3寸程度の皿を「小皿」と記した。

参考・引用文献

- 伊万里市2006『伊万里市史 陶磁器編 古唐津鍋島』
- 上田秀夫1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 pp.55-70
- 大阪市文化財協会1998『大阪府中央区 住友銅吹所跡発掘調査報告』
- 大阪市文化財協会2004『大坂城下町跡Ⅱ』
- 大橋康二2017「日本などにおいて出土の明清の中国磁器（染付中心に）」『第7回近世陶磁研究会 日本における明清の中国磁器』pp.16-62 近世陶磁研究会
- 小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 pp.71-88 日本 貿易陶磁研究会
- 共和開発株式会社2007『東京都文京区千駄木三丁目遺跡 第2地点』
- 近世貿易陶磁器調査・研究グループ2013a『近世都市江戸の貿易陶磁器 調査・研究報告書』
- 近世貿易陶磁器調査・研究グループ2013b『近世都市江戸の貿易陶磁器 資料集(1)』
- 堺市立埋蔵文化財センター2004『堺環濠都市遺跡(SKT263)発掘調査概要報告』第103冊
- 長崎市教育委員会2020『唐人屋敷跡』
- 長佐古真也2013「江戸出土の清朝磁器について－類出類型を中心に－」『近世都市江戸の貿易陶磁器 調査・研究報告書』pp.173-182
- 永積洋子訳1969-70『平戸和蘭陀商館の日記』岩波書店
- 永積洋子編1987『唐船輸出入品数量一覽1637～1833』創文社
- 仲野泰裕2011「阿蘭陀焼と日本陶磁 陶磁の東西交流」『阿蘭陀焼 憧れのプリントウエア－海を渡ったヨーロッパ陶磁－』pp.6-9 愛知県陶磁資料館
- 長久智子2011「ペトルス・レーゲ社の日本向け輸出製品－19世紀オランダ・マーストリヒト陶器の一側面－」『愛知県陶磁資料館研究紀要』16 pp.1-8
- 平野恵2007「第3章 文献調査 文献史料に見る団子坂・森田六三郎の庭」『東京都文京区千駄木 三丁目遺跡 第2地点』共和開発株式会社
- 堀内秀樹2011「都市江戸における貿易陶磁器消費の一例－江戸幕末の植木屋出土の当駅陶磁器－」『貿易陶磁研究』NO.31 pp.131-142 日本貿易陶磁研究会
- 堀内秀樹2013「基調報告『近世都市江戸の貿易陶磁器』」『近世都市江戸の貿易陶磁器 調査・研究報告書』pp.7-23 近世貿易陶磁器調査・研究グループ
- 堀内秀樹2013「江戸遺跡出土の明末・清初の貿易陶磁器－分類・年代的様相と揃い一括資料の評価－」『近世都市江戸の貿易陶磁器 調査・研究報告書』pp.161-172 近世貿易陶磁器調査・研究グループ
- 堀内秀樹2016「近世期の貿易陶磁器の需要とその背景」『関西近世考古学研究』24 pp.1-15 関西近世考古学研究会
- 武蔵文化財研究所2015『有楽町一丁目遺跡』
- 森 毅1995「一六・一七世紀における陶磁器様相とその流通－大阪の資料を中心に－」『ヒストリア』149 pp.87-106
- 森田勉1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 pp.47-54
- Bogaers Marie Rose 1992『DRUKDECORS OP MAASTRICHTS AARDEWERK,1850-1900』

表8-1 需要の所在と段階

		① 生活	② 儀礼	③ 文人	④ 茶の湯	⑤ 流通容器	⑥ その他
I段階		丸の内	○	×	○	×	△?
II段階		×	有楽町	×	東大299	×	△?
III段階	a	×	×	×	○	×	△?
	b	×	×	千駄木	○	○	△?

表8-2 器種組成

	碗	皿	鉢	坏	瓶	急須	薬瓶	蓮華	灯明具	香炉	水注	壺	花入	水指	その他	合計
数量	1587	2625	327	620	133	7	47	60	8	41	11	139	20	1	66	5692

表8-3 年代別器種組成

	碗	皿	鉢	坏	瓶	急須	薬瓶	蓮華	灯明具	香炉	水注	壺	花入	水指	その他	合計
A期	62	177	42	3	20	0	0	0	0	19	2	15	16	1	12	369
M期	827	2060	198	318	23	0	0	0	0	7	2	16	2	1	12	3466
S期	519	128	37	271	6	7	47	56	5	4	2	7	1	0	4	1094
合計	1408	2365	277	592	49	7	47	56	5	30	6	38	19	2	28	4929

表8-4 胎質・装飾組成

胎質 装飾	磁器						陶器	土器	小計
	青花	色絵	白磁	青磁	その他	小計			
数量	3833	952	161	314	87	5347	508	8	516

表8-5 推定生産地組成

生産地	景德鎮	漳州	徳化	福建 広東	龍泉	宜興	中国他	朝鮮	東南 アジア	琉球	西 アジア	ヨーロッパ	合計
数量	4094	733	181	72	231	9	86	56	52	80	1	287	5882

表8-6 推定年代組成

年代	A期	M期	S期	合計
数量	390	3498	1119	5007

表8-7 銘款の年代

	年号		数量		年号		数量
明	洪武	1368-1398	3	清	康熙	1661-1722	2
	永楽	1403-1424	5		雍正	1722-1735	1
	宣徳	1426-1435	18		乾隆	1735-1795	71
	成化	1465-1487	254		嘉慶	1796-1820	25
	正徳	1506-1521	1		道光	1821-1850	17
	嘉靖	1522-1566	35		咸豊	1851-1861	0
	万曆	1573-1620	8		同治	1862-1874	1
	天啓	1621-1627	3		小計		117
	小計		327				

表8-8 出土地

	江戸城			大名			旗本御家人			町人			寺社			合計
	A	M	S	A	M	S	A	M	S	A	M	S	A	M	S	
数量	97	171	4	214	2289	395	28	435	390	4	118	105	10	185	36	4209
小計	272			2898			853			227			231			

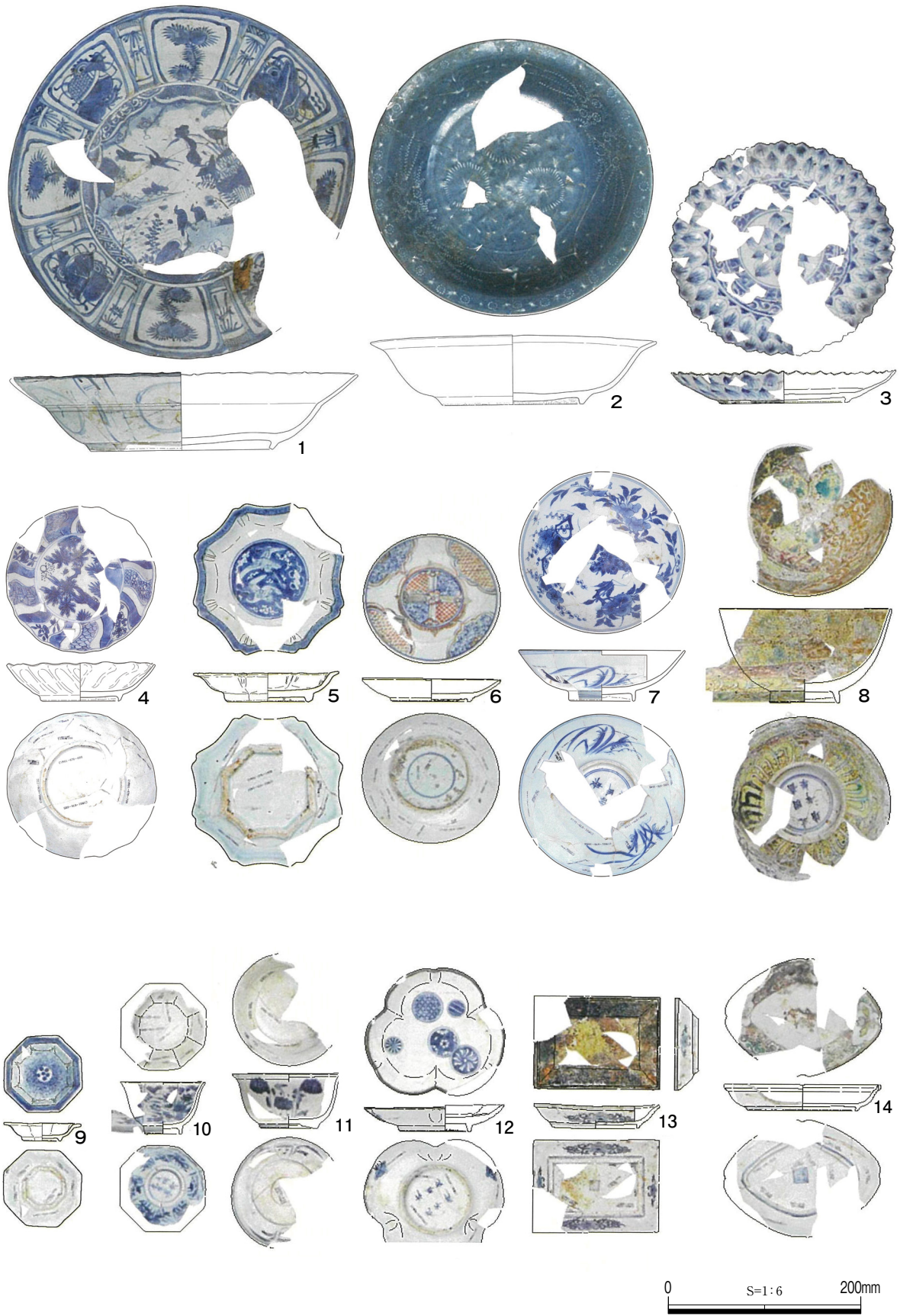


图8-3 千代田区有楽町一丁目遺跡 070号遺構出土遺物

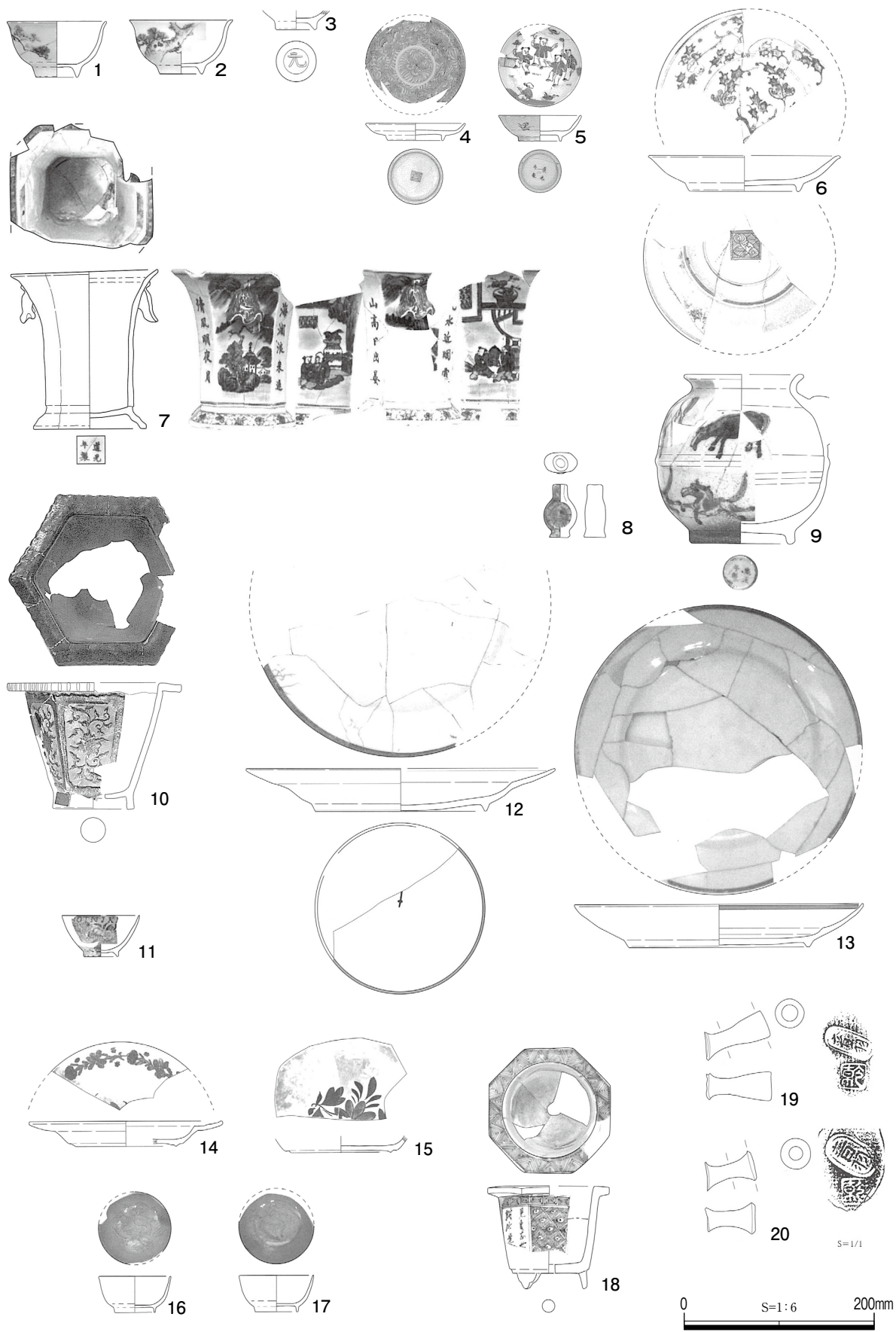


图8-4 文京区千駄木三丁目南遺跡 第2地点 1号遺構出土遺物

第9章 長崎から輸出された肥前陶磁

野上 建紀（長崎大学多文化社会学部）

はじめに

肥前陶磁とりわけ肥前磁器は、近世において海外輸出された数少ない国産の工業製品である。窯業成立時においてはまだ農業と未分化な状態であったが、集約的な細工場と巨大な登り窯を主な生産施設としながら、各工程や業種を分業化した17世紀後半の生産体制は、工場制手工業（マニファクチュア）の形態を備えたものであった。言い換えれば、この充実した生産体制が世界市場への輸出を支えていた。肥前陶磁は近世国家境界域「四つの口」からそれぞれ海外へ運び出された。その中で最も大きな「口」が長崎であった。

江戸時代の肥前陶磁の歴史を簡単に振り返り、「四つの口」から輸出された肥前陶磁について、長崎を中心に述べようと思う。

1. 肥前陶磁の海外流通史

16世紀末、豊臣秀吉による文禄・慶長の役の際、朝鮮半島から帰国する大名らが多くの陶工を連れ帰った。その結果、九州を中心とした各地に陶器を焼く窯業地が興った。山口県の萩焼、福岡県の上野・高取焼、鹿児島県の薩摩焼などいずれも陶祖が朝鮮人陶工であることが伝えられている。他産地より少し早く文禄の役前後に成立したとされる唐津焼も朝鮮出兵の際に連れ帰られた多くの陶工によって盛んになった。連れ帰られた朝鮮人陶工の中には有田の陶祖とされる李参平（日本名：金ヶ江三兵衛）も含まれていた。

李参平は、日本磁器創始の立役者として常に名前が挙げられる人物である。17世紀初めに多久（佐賀県多久市）で、日本で初めて白磁の焼成に成功した後、有田に移住し、陶器生産とともに磁器の量産を行った。朝鮮人陶工らが中心となって焼いた磁器であり、基本的な生産技術は朝鮮半島由来のものであったが、少なくとも表面的な意匠は「中国風」の染付であった。

有田をはじめとした肥前の磁器は当初より海外市場を目指したものではない。海外輸出の開始と本格化は東アジアの情勢の変化によるところが大きい。17世紀中頃の明から清への王朝交替に伴う混乱とその後の清朝による海禁政策によって、磁器市場における中国磁器の欠乏が生じ、その結果、海外市場に吸い出されるように長崎から肥前の磁器が輸出された。その担い手は唐船とオランダ船であった。

しかし、17世紀末にはまた状況が変化した。清朝が海禁を解除し、中国磁器の再輸出が本格化したためである。唐船もオランダ船も主に中国磁器を扱うようになるが、唐船がほぼ中国磁器に切り替えたのに対し、オランダ船による肥前磁器の輸出は継続して行われた。

18世紀中頃にはオランダ東インド会社は会社としての肥前磁器の輸出を打ち切った。18世紀後半以降、肥前陶磁の海外輸出が途絶えてしまったわけではないが、貿易は大いに縮小し、18世紀末にはオランダ東インド会社そのものが解散してしまった。再び海外輸出が盛んに行われるようになるのは、19世紀の幕末になってからである。盛んな海外輸出は明治時代まで続くが、19世紀中頃以降は開国に伴い、海外輸出港も長崎だけではなく、横浜、神戸などにその地位を奪われていった。

1-1 初期の唐津焼の輸出

インドネシアのバンテン遺跡で青海波の叩き痕が見られる唐津焼の小片が発見されている。16世紀末～17世紀初の製品とみられる。海外に渡った肥前陶磁の中ではこれまでに最も古いものと言える。壺、甕、瓶などは商品としてだけでなく、船上で使用するためにも海外に持ち出される可能性がある。

1-2 海外輸出の始まり

山脇悌二郎によると、肥前磁器の海外輸出の記録上の初見は、1647年に長崎を出帆し、シヤム経由でカンボジアに向かう唐船が「粗製の磁器174俵」を積んでいたというものである。記録上、1640年代頃には海外輸出が始まっている。

そして、海外遺跡における1640年代頃の出土資料としては、インドネシアのバンテン遺跡で出土した手塩皿、ベトナムのホイアン市内遺跡で出土した染付瓶の破片がある。これらは海外市場向けに特別に生産されたものではなく、日本国内市場に一般に流通していた製品である。当時の肥前磁器の中で特に粗雑な製品というわけではないが、記録では「粗製」と表現されていることが少なくなく、中国の景德鎮の製品などと比べるとまだ見劣りしたのであろう。

一方、オランダ船も1650年にはすでに肥前磁器の輸出を行なっている。1650年代にはバタビアや台湾の病院向けの薬瓶、薬壺などが輸出されている。

1-3 海禁下の海外輸出

清に対して抵抗を続ける明の遺臣である鄭成功の勢力をそぐために、1656年に清は海禁令を公布し、1661年にはさらに政策を強化した遷界令を公布した。その結果、中国磁器が海外市場に出回らなくなり、肥前磁器が世界中に輸出されるようになる。

主に長崎から東南アジア、南アジア、西アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカへと運ばれた(図9-1)。海禁令直後の1658年には鄭成功一派の勢力圏から長崎に唐船が来航して、大量輸出が始まり、1659年にはオランダ東インド会社による大量注文が始まった。

東南アジア向け輸出の主力製品は染付見込み荒磯文碗であり、その他、ベトナムに染付日字鳳凰文皿、フィリピンに染付芙蓉手皿、インドネシアに染付芙蓉手皿や青磁大皿などが数多く運ばれた。陶器も唐津系の刷毛目大皿(大鉢)などが海外に運ばれている。

インド洋以西に運ばれたものは、波佐見焼の青磁大皿の一部が運ばれた他、ほとんどが有田焼であった。インド洋以西の市場にはヨーロッパ市場も含まれており、オランダ貿易によって運ばれた肥前磁器は有田焼、とりわけ内山地区や一部の外山地区の窯場の製品であった。

さらにはマニラを経由してアメリカ大陸に運ばれた肥前磁器もあった。そのほとんどがやはり有田焼であり、染付芙蓉手皿をはじめとした皿類やチョコレートカップが主な製品であった。

東南アジアよりもさらに遠い市場に運ばれた肥前磁器がおおよそ有田焼に限られることについては、やはり遠隔地に運ぶだけの価値のあるものが選択されたということであろう。例えば、マニラはガレオン貿易のアジア側の拠点であり、マニラまでは唐船によって有田以外の窯場で生産された粗製の染付芙蓉手皿と有田の内山地区で焼かれたような良質の染付芙蓉手皿が共に運ばれているが、マニラからアメリカ大陸に運ぶ際には、後者のみが選択されている。

またここで注目したいのは、唐船の活動範囲が東南アジアの海域に限られていても東南アジア市場向けの製品のみを扱っているわけではないということである。

1-4 展海令以後の海外輸出

清に抵抗を続けていた鄭氏一派が1683年に降伏すると、翌1684年に展海令が公布され、海禁が解かれた。海禁令公布直後はともかく海禁政策下において中国磁器の輸出が完全に止まっていたわけではないが、強く抑制されていたことは確かであり、展海令の公布後、中国磁器の再輸出は本格化した。その結果、唐船が中国磁器の輸出に立ち戻ることで、東南アジアには福建・広東の磁器が大量に出回るようになり、肥前磁器は東南アジア市場を失った。東南アジア以外の市場も中国磁器に奪われていったが、オランダ船による海外輸出は引き続き行われた。特に金襴手と呼ばれる様式の色絵製品が盛んにヨーロッパに運ばれ、ヨーロッパ各地の王宮や宮殿を飾った。また飲料嗜好品のカップ類が大量に輸出されている。

18世紀中頃にはオランダ船による海外輸出も減退し、前述したように、オランダ東インド会社による公式の磁器貿易は終了した。貿易自体はその後も続いていたが、輸出された製品の種類と量とも少ない。有田では染付芙蓉手皿や染付蓋付便器などがこの時期に生産されている。

そして、19世紀前半には後述するように有田の北島源吾が朝鮮貿易を一手に引き受けている。また、厳密には肥前磁器ではないが、肥前系の技術的で生産された対州焼が朝鮮貿易、高浜焼がオランダ貿易によって輸出されている。ただし、後者についてはどの程度、実際に輸出されたか不明である。

2. 長崎口以外から輸出された肥前陶磁

2-1 松前口

松前藩を介した蝦夷地における対外交易である。北方に運ばれた肥前磁器はカムチャッカ半島やサハリンにも及んでいる。例えば、カムチャッカ半島に位置するジュパノヴォ遺跡から日本製の寛永通宝やキセル刀子などとともに1660年代～18世紀初におさまる肥前陶磁が見つまっている(大橋2000)。またサハリンの東西多來加遺跡から肥前磁器が1点出土している(関根2009)。

また蝦夷地においては、和人とアイヌが交易を行った「場所」関連遺跡、チャシやコタンといったアイヌの居住地から肥前陶磁を含む近世陶磁器が出土するが、陶磁器はアイヌの物質文化には本来みられないものであり、彼らにとっては必需品ではないという(関根2009)。そして、19世紀になって初めてアイヌの人々の日常生活で陶磁器が使われるようになったが、その際に彼らが使用したのは、いわゆる「蝦夷地3点セット(肥前系磁器膾皿、高取焼甕、徳利)」であった(関根2009)。この3点セットの内、肥前磁器は磁器膾皿と染付笹絵徳利、コンプラ瓶などである。

2-2 対馬口

対馬藩を介した朝鮮貿易である。寛文年間(1661～73年)には対馬藩から朝鮮へ肥前磁器を献上しており、安永年間(1772～81年)には対馬藩主経由で朝鮮へ肥前磁器の輸出許可も出ている。実際に韓国の慶尚南道梁山市通度寺の花峯堂浮屠舍利具の中に肥前磁器あるいは対州磁器とみられるものが残されている(家田2006)。近年、調査が行われた釜山の草梁倭館からも18世紀頃の肥前磁器が出土している。

また、対馬では18世紀末以降、肥前磁器を仕入れて輸出するだけでなく、地元の志賀窯や立亀窯で磁器を焼き、朝鮮半島に輸出しているが、19世紀初めにおいても「伊万里焼物が相変わらず朝鮮に輸出されて」おり、その輸出が中継担当の対馬藩の収益にはなっていないとの記録もある(泉1990)。

そして、文政3年(1820)には有田の北島源吾が朝鮮向焼物専売の許可を得ており、有田焼と競合しながらの輸出であった。

2-3 琉球口

付庸国とした琉球国を介して行なった薩摩藩の対外貿易である。琉球国は薩摩藩に従属するとともに清の冊封国でもあり、入手した肥前磁器を輸出したとすれば中国向けとなるが、考古資料としては確認されていない。なお、台湾の国立故宫博物院には数十点の肥前磁器が収蔵されており、それらは清宮の旧蔵品を引き継いだものとされる。後世に持ち込まれたものでないとすれば、オランダ人が朝貢したものである可能性とともに、琉球国を介して朝貢されたものである可能性も考えられる。

一方、琉球国自体、独立国家の体裁を取っていたため、中継となった琉球国にもたらされた肥前磁器もまた当時の輸出品と言える。沖縄県下で出土している肥前磁器は、薩摩船によって運ばれたと推測されるが、その場合、薩摩藩あるいはその商人が肥前磁器を入手し、琉球国に運ぶことになる。沖縄県下で出土している肥前磁器の多くは日本本土で出土している同時期の組成と大きく異なるものではない。沖縄本島だけでなく、離島である久米島のヤッチのガマでも大量の染付碗が出土している。

あえて異なる点を挙げるとすれば、網目文などの小ぶりの染付瓶が数多くみられる。同程度の法量の瓶は沖縄産陶器にもみられるので、沖縄の地域性を示しているのであろう。伊万里など国内市場向けの港から直接、琉球国に輸出したとは考えられないので、薩摩を介した注文ということになる。また、染付見込み荒磯文碗などの大碗の出土比率が本土よりもやや高い印象を受ける。日本本土と食生活が異なる沖縄の需要を示しているのか、東南アジアを含めた海域ネットワークに組み込まれていたものか、よくわからない。

3. 長崎口から輸出された肥前磁器

3-1 唐人貿易

唐船は専ら東南アジアに輸出していた(図9-2)。1656年の海禁令直後、長崎から鄭成功一派の拠点である厦門、金門、安海などの福建沿岸の港市に向けて、大量の磁器が輸出された。それらは東南アジアの磁器市場を満たしていった。

前にも述べたように、活動圏が東南アジアを中心としたものであっても東南アジア市場向けに限られた商品を運んでいたわけではない。例えば、ラテンアメリカのスペイン植民地に運ばれた肥前磁器も唐船がマニラにもたらしたものであった。東アフリカのキルワ・キシワニ、モンバサなどで発見された17世紀後半の染付芙蓉手皿なども唐船が東南アジアの港市に運んだものをイスラーム商人やインド系商人、あるいはポルトガル商人などインド洋を舞台に活躍していた商人が入手してもたらされた可能性がある。その他、トルコのイスタンブールのトプカプ宮殿に持ち込まれた17世紀後半の肥前磁器もその可能性を持つ。

3-2 オランダ貿易

オランダ船によって長崎から輸出された製品は、その輸出形態から大きく二つに分けられる。一つは会社としての貿易であり、一つは商館職員たちの私的購入による個人貿易である。

3-2-1 会社による貿易

長崎商館の貿易すなわちオランダ東インド会社の貿易である。1650年代は医療容器を主とした注文であったが、1659年の大量注文以降、様々な種類の磁器を注文している。とりわけオランダ本国

への輸出磁器の内訳をみると、色絵製品の割合が高い。有田で色絵が開発されたのが1640年代であり、肥前磁器の中では最も付加価値の高い種類の製品の 하나가選ばれていたことがわかる。遠隔地の消費地に輸出するに値するものとして選ばれたということであろう。色絵製品に限らず、当時のヨーロッパに運ばれた肥前磁器のほとんどは有田の内山や南川原など一部の外山の窯場の製品であった。会社の貿易による総輸出量については、慶安3年(1650)～宝暦7年(1757)までの間に123万3418個の肥前磁器が輸出されたことが記録に残されている(山脇1988)。

製品の種類によって会社による貿易と個人貿易を区別することは難しいが、オランダ船によって運ばれた肥前磁器がどのようなものであったかについては、ヨーロッパ各地の宮殿や王宮に残るコレクションの他、アムステルダムなどの都市遺跡の出土資料、オランダ船の沈没船資料をみると理解できる。ドイツのツヴィンガー宮殿、シャルロットテンブルク宮殿、ミュンヘン・レジデンツなどをはじめ、イギリス、オランダ、チェコ、オーストリア、ロシア、ハンガリーなどの博物館には色絵磁器を含んだ多数の肥前磁器が残されている。これらのほとんどは、長崎からインドネシアのバタヴィアを經由して、インド洋を横断し、ケープタウンを中継して、大西洋を北上して、オランダに到達し、ヨーロッパ各地に流通したものであろう。正確な数量は把握していないが、清による海禁政策下の17世紀後半と展海令以後の17世紀末～18世紀前半を比べて、とりわけ展海令以後に数量が減るようにはみえない。

アムステルダムにおける出土遺物をみて最も多いのは、17世紀末～18世紀前半の遺物であり、清の海禁政策下における17世紀後半の肥前磁器の大量輸出時代の遺物よりも多い。例えば、アムステルダムでは約100点の肥前磁器が出土しているが、その内訳は1690年以前の製品が37点、1690～1730年代の製品が58点である(バート2000)。つまり、中国磁器の輸出が抑制され、肥前磁器が市場の多くを占めていた時代よりも、中国磁器にシェアを奪われながらも量的にはより多く輸出していた可能性を示している。しかも18世紀前半はヨーロッパでも磁器生産が始まった中での輸出であった。それだけ市場の規模そのものが大きくなったということであろうか。まだ調査例が少なく、ヨーロッパ全体の傾向として捉えることは難しいが、少なくとも展海令以後、考古資料においても激減するようには見えない。

肥前磁器が発見された沈没船資料もいくつか知られており、確実にオランダ船によって運ばれた資料として挙げるができるが、商品として大量に肥前磁器が積み込まれたオランダ船の沈没船資料はまだ発見されておらず、いずれも船上の使用品とみられるものである。例えば、1659年にスリランカのゴール沖で沈んだ*Avondster*号や1697年にケープタウン沖で沈んだ*Oosterland*号で発見されているアルバレロ壺などである。*Avondster*号で発見されている染付芙蓉手皿については購入の経緯は不明であるが、結果的には船上の使用品として沈んでいる。オランダ船の船内もまたヨーロッパ人の一定の生活空間を有するものであり、必ずしもヨーロッパ人向けの製品がヨーロッパ市場まで運ばれるものではない。

また、志田などで焼かれた唐津焼の甕もオランダ船に載せられて海を渡っていった。バタヴィアで販売するために水甕として商品としても運ばれたが、船で使用する水甕として載せられて運ばれていったものもあったであろう。

以上は主に商品としての陶磁器の輸出であるが、容器としてヨーロッパまで渡ったものもある。18世紀末から19世紀にかけて、いわゆる「コンプラ瓶」に瓶詰めされた醤油や酒が輸出されている。コ

ンプラ瓶は主に波佐見の窯場で焼かれた瓶である。磁器はあくまでも容器であり、内容物が主たる商品である。コンプラ瓶は醤油や酒の専用容器であるが、コンプラ瓶が生産される前はガラス製のケルデル瓶が使用されていたという。

3-2-2 個人貿易

商館職員、オランダ船の乗員らの個人の売買荷物を脇荷という。そのため、脇荷貿易はいわゆる私貿易である。しかしながら、私貿易と言っても山脇悌二郎によれば、会社の貿易をしのぐ貿易量であったという。

山脇が算出している脇荷貿易の実数は40万5972個と蓋茶碗413組、ひな道具5334組であるが、その他にオランダ船による総量である「阿蘭陀船日本にて万買物仕、積渡寄帳」の数値から会社の貿易高である「商館仕訳帳」の数値を差し引いた数量を脇荷貿易による輸出量として推定している。すなわち、寛文・延宝・天和期(1661～84年)の23ヶ年が115万個、貞享・元禄期(1684～1704年)の19ヶ年が133万個、宝永・正徳期(1704～1716年)の9ヶ年が63万個、享保8年(1723)までの7ヶ年が49万個、合計360万個を極めて控え目な推定量としてあげている。前記の実数を加えると400万個以上を超える数字となる(山脇1988)。オランダ東インド会社による貿易が123万3418個であるため、会社の貿易の数倍に上る。

そして、注目されるのは、その輸出年代である。清朝による海禁政策下の寛文・延宝・天和期の輸出量の倍以上の肥前磁器が展海令以後に輸出されているのである。記録で見える限り、会社の貿易による肥前磁器の輸出の最盛期は17世紀後半、すなわち清による海禁政策下とみられるが、脇荷貿易まで含めて見た場合、最盛期はむしろ展海令以後となるのである。そして、この傾向は消費地における出土量の傾向にも符合する。

ヨーロッパでもてはやされた金欄手様式の色絵製品は、ヨーロッパ以外の地域でも発見されている。インドネシアのバタビア、バンテン、チルボンなど、ケニアのモンバサ、南アフリカのケープタウン、メキシコのメキシコシティ、ベラクルス、グアダハラハラなどである。その中でバタビアやケープタウンに残された製品は、上記の長崎からオランダまで至る一般的ルート上に位置しているため、そのルートの運搬途上に残されたものであろう。オランダ東インド会社の拠点や中継地であることから、会社の貿易によってもたらされた可能性と個人貿易である可能性といずれも考えられる。しかしながら、その他については東南アジア市場で販売するために長崎から輸出されたものと考えられ、個人貿易による可能性が高いように考える。つまり、長崎からバタビアへ個人貿易によって運ばれたものが、インドネシア各地に運ばれ、バタビアから唐船によってマニラへ運ばれ、そこからスペイン船によってさらに遠くメキシコへ運ばれた。あるいはイスラーム商人やインド系商人が購入して東アフリカなどのインド洋世界に運ばれた。そして、この金欄手様式の色絵製品の流通の広がり個人貿易による輸出が支えていたのではないかと考える。

3-3 長崎から輸出された肥前磁器の特質

長崎から出帆した唐船が主として東南アジアの海を活動海域としたのに対し、オランダ船は肥前磁器をアジア各地の商館、そして、ケープタウンを経由してオランダ本国に運んでいる。扱った磁器の生産地について、唐船が扱った商品が肥前帯の窯場で生産されたのに対し、オランダ船が扱った商品の多くは有田の内山地区や南川原地区の窯場の製品であった。相対的に品質の高い製品を生産する窯場である。また、より付加価値の高い製品として色絵が好まれた。当時、すでに有田では赤絵付業

者が集約され、赤絵町が形成されていたため、内山地区が肥前の色絵製品の主たる生産地であった。オランダ船によって運ばれた色絵製品の大半が内山地区の製品であったと言ってよい。唐船もまたヨーロッパ「世界」向けの製品を輸出したが、その様々な種類のヨーロッパ向け製品が有田で最初に生み出されたのは、長崎商館の注文によるものであろう。唐船は新たに生み出された種類の製品の需要の「量」の把握をしながら、各地に運んだものであろう。例えば、チョコレートカップを最初に注文したのはオランダ東インド会社の長崎商館であると見られるが、チョコレートカップの需要がマニラを経由した中南米にあることを把握し、唐船は盛んにマニラにチョコレートカップを輸出した。

オランダ東インド会社による多種多様な種類の注文や一定の品質の要求が、有田の技術力を景德鎮に並ぶ高みに導くこととなり、色絵の需要の高まりが様々な意匠や様式を展開させていく原動力となった。そして、唐船による大量の輸出は窯業圏の拡大につながっている。

次にその量的な経緯を見てみよう。唐船による海外輸出の最盛期は清の海禁政策下の17世紀後半である(図9-3)。特に1660～1670年代である。波佐見などで新興の窯場が次々と築かれる時期である。発掘調査にみられる生産地と消費地の状況は矛盾しない。そして、展海令以後、急速に窯場が縮小し、廃止されるものもあった。一方のオランダ船による海外輸出について、会社の貿易は記録からみる限り、唐船と同様に17世紀後半に最盛期を迎えている。17世紀末以降、会社の貿易による肥前磁器輸出は減退し、中国磁器の輸出が本格化されるが、個人貿易はむしろ17世紀後半より17世紀末～18世紀前半の方が盛んに行われている。そして、オランダ船による磁器貿易全体をみた場合も17世紀末～18世紀前半の方が多。つまり、会社による磁器貿易が減退した分を個人貿易が補ってさらに余りあるものとしたとみられる。

このことは17世紀後半においてオランダ船と比べた場合の唐船による貿易量の大きさとともに、ヨーロッパ市場における磁器需要の飛躍的な増大を示している。

オランダ船による磁器輸出の最盛期が17世紀末～18世紀前半であったとしても、肥前磁器の総輸出量はやはり17世紀後半に及ぶことはない。1684年の展海令の公布により、東南アジア市場を丸ごと失い、インド洋海域においてもアメリカ大陸においても流通量はとても小さいものになるわけであり、生産地側においても肥前一带で生産していた海外向け製品(例えば染付見込み荒磯文碗など)が消え、中には窯場そのものが消失するところもあるほどの減退であった。つまり、それだけ唐船による輸出が多かったということである。

そして、このように中国磁器の輸出に立ち戻った唐船による貿易は大きく減退したものの、オランダ船による貿易は個人貿易の増大によりむしろ17世紀後半よりも増大している。これは唐船の減退分をオランダ船が引き継いだという構図ではない。オランダ船もまた中国磁器を主に扱うようになっているからである。世界市場において扱う商品は中国磁器が主流となっていたが、それでもオランダ船による肥前磁器の輸出が増大したことが注目される。つまり、ヨーロッパ市場においても中国磁器にシェアを奪われた中で盛んに長崎から肥前磁器がヨーロッパに向けて輸出されたということは、磁器需要全体が17世紀後半に比べて飛躍的に拡大したということを示している。

おわりに

2016年度から行われた「近世国家境界域「四つの口」における物資流通の比較考古学的研究」において、筆者は主として「長崎口」を担当した。5年間にわたる研究期間の中で、沖縄(2016年度)、北

海道松前（2017年度）、長崎（2018年度）、そして、対馬（2019年度）の現地調査と研究会に参加し、長崎以外の三つの口から輸出された肥前陶磁についても考える機会を得た。このことは肥前陶磁の海外輸出の全体像はもちろん「長崎口」の特質を知る上でも貴重な研究体験となった。また、この研究が文献史学、美術史、考古学による学際的研究であったことで、多くの示唆を得る機会となった。今後とも「四つの口」の比較研究は必要であると思うし、さまざまな視座で取り組むべき課題であると考えている。

本論考は、『『出島』から伝わった肥前陶磁』『対外交易の窓口 出島・長崎』（令和元年度 長崎県考古学会秋季大会）長崎県考古学会2019を加筆修正したものである。

引用文献

- 家田淳一 2006「朝鮮へ輸出された江戸時代の肥前・対州磁器」『財団法人鍋島報効会研究報告書』第2号 pp.59-85
大橋康二 1985「鹿児島県吹上浜採集の陶磁片」『三上次男博士喜寿記念論文集』陶磁編 pp.275-291 平凡社
大橋康二 2000「北方、カムチャッカ発見の伊万里」『目の眼』No.289 pp.58-61 里文出版
佐賀県立九州陶磁文化館 2000『古伊万里の道』
関根達人 2009「北日本（北海道・青森県・岩手県域）における江戸時代後期の陶磁器の流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 関東・東北・北海道編』九州近世陶磁学会pp.314-455
野上建紀 2015『アジア・太平洋海域における有田焼交易ネットワークの考古学的研究』
山脇悌二郎 1988「貿易篇－唐・蘭船の伊万里焼輸出」『有田町史 商業編I』 pp.265-410 有田町史編纂委員会
ヤン M バート 2000「アムステルダムの日本磁器出土遺物」『古伊万里の道』 pp.206-220 佐賀県立九州陶磁文化館

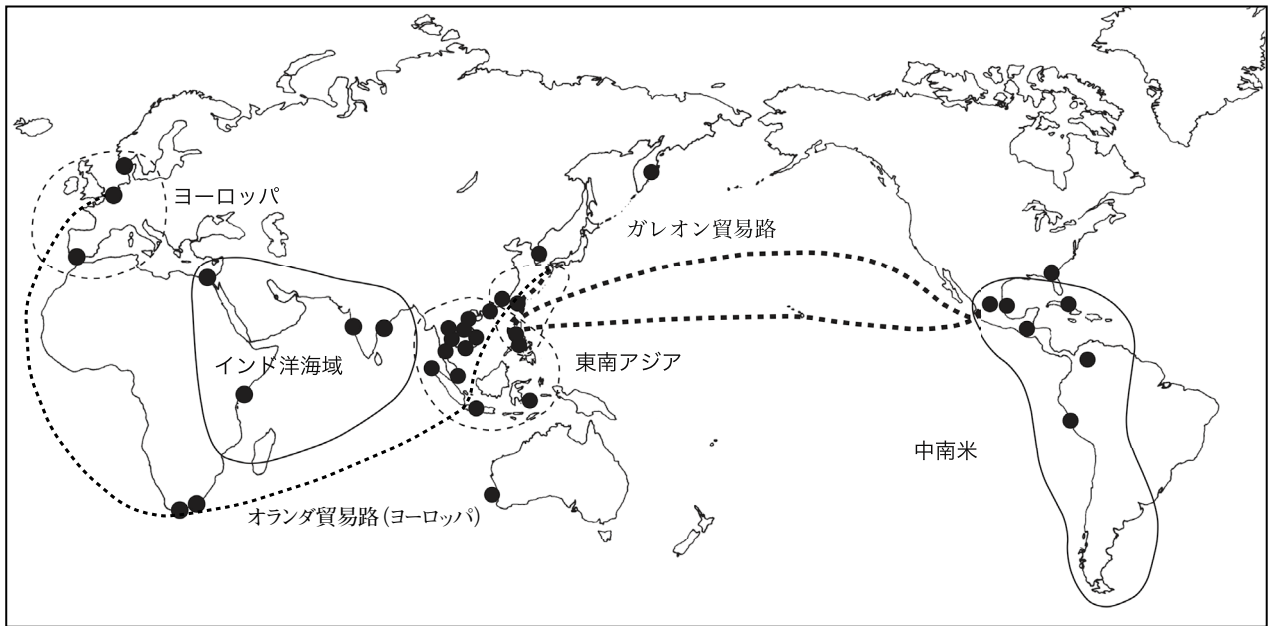
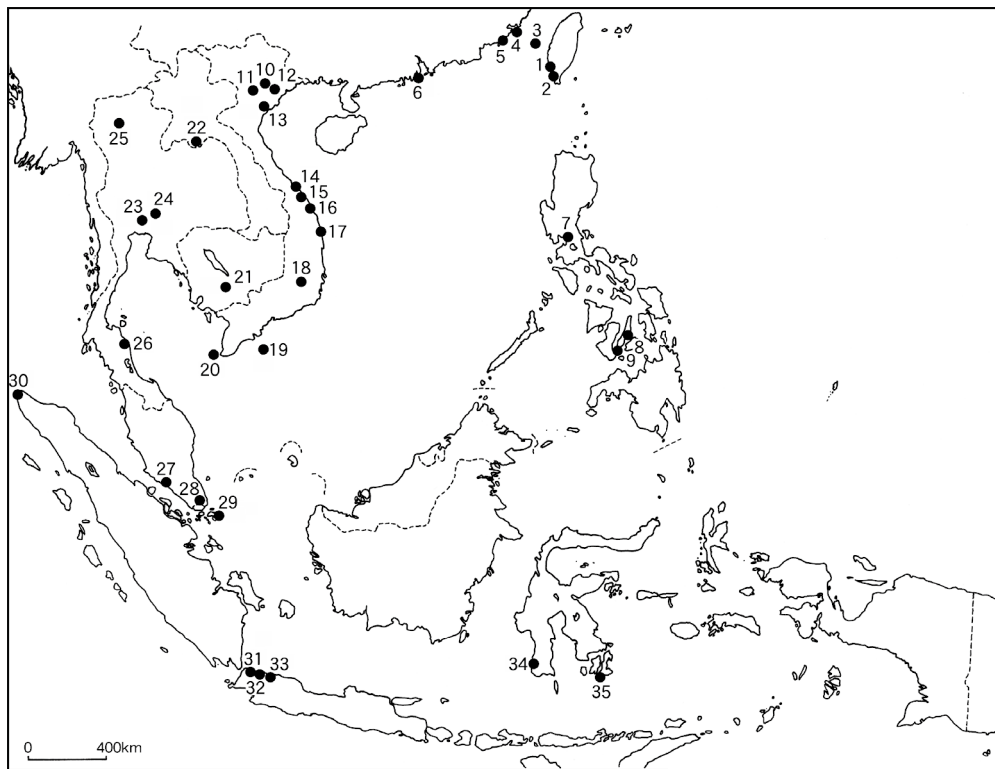


図9-1 肥前陶磁の貿易ルート図



- | | | |
|------------------------------|------------------------|-------------------------------------|
| 1 Tainan 台南, Taiwan | 13 Thanh Hoa | 25 Chiang Mai |
| 2 Kaohsiung 高雄 | 14 Quang Tri | 26 Nakhon Si Thammarat |
| 3 Pescadores 澎湖諸島 | 15 Huế | 27 Melaka, Malaysia |
| 4 Kinmen 金門 | 16 Hôi An | 28 Kota Tinggi |
| 5 東山冬古湾沈船遺跡 | 17 Bin Dinh | 29 The Geldermalsen |
| 6 Monte Fortress site, Macao | 18 Lâm Đông | 30 Gien site, Sumatra |
| 7 Intramuros, Manila | 19 Côn Dao | 31 Banten Lama, Jawa |
| 8 Cebu city | 20 Kien Giang | 32 Tirtayasa site |
| 9 Boljoon | 21 Ôdôngk, Cambodia | 33 Batavia |
| 10 Ha nôl, Vietnam | 22 Vientiane, Laos | 34 Benteng Somba Opu site, Sulawesi |
| 11 Ho'a Binh | 23 Ayutthaya, Thailand | 35 Benteng Wolio site, Buton |
| 12 Hai Hu'ng | 24 Lop Buri site | |

図9-2 東南アジアにおける肥前陶磁出土分布図(野上2015より)

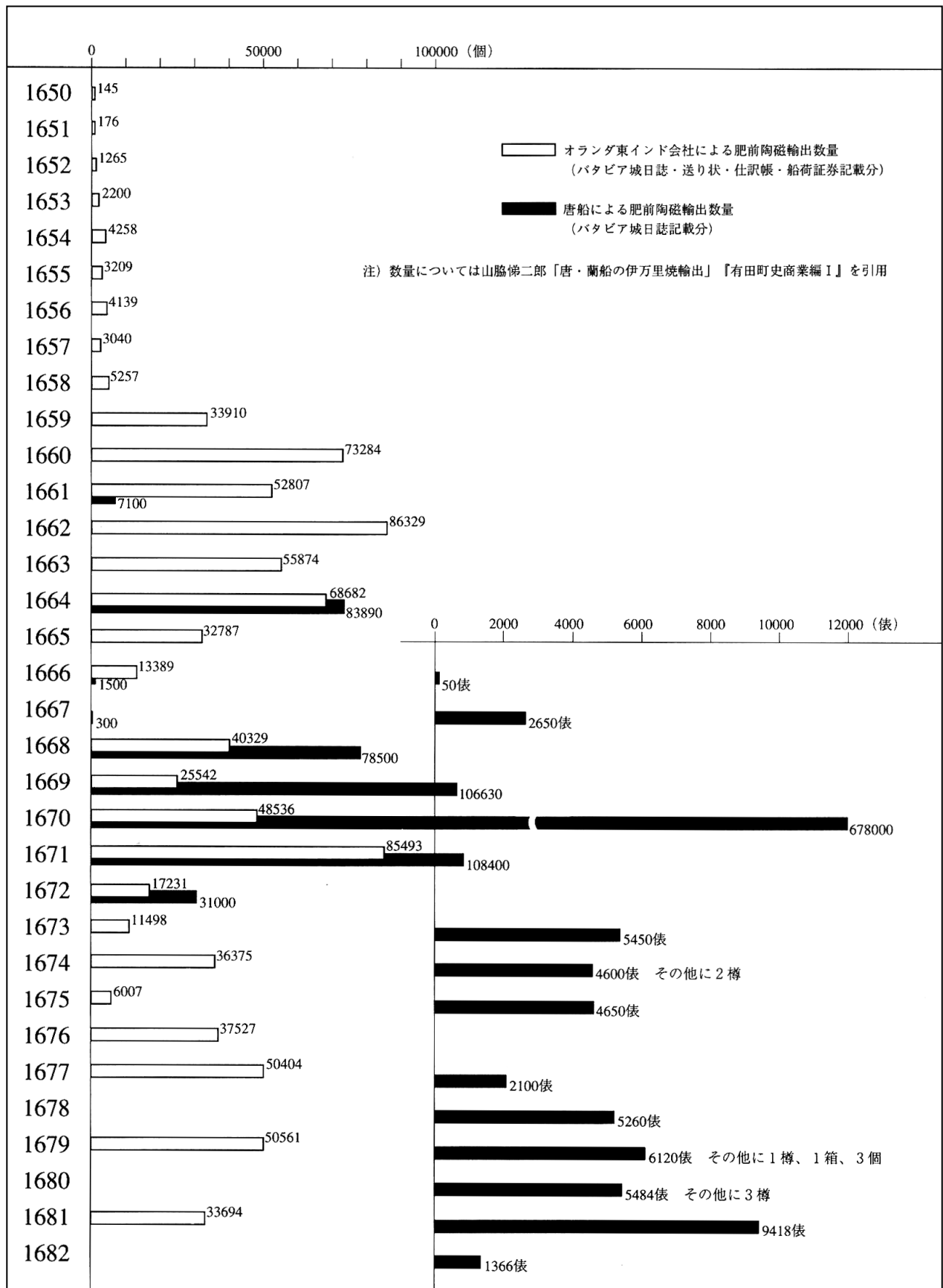


図9-3 文献史料にみる肥前陶磁輸出量の推移 (数値は有田町史編纂委員会1988より)

第10章 「長崎口」の輸出入 ― 抜荷・四つの口の関わりから

木村 直樹 (長崎大学多文化社会学部)

本章では、文献史料から見る「長崎口」の貿易について、その特性を検討したい。その際、二つの視点が重要だと考えている。第一は、長崎口の貿易構造と他の3つの貿易口(薩摩・対馬・松前)との関係。第二は抜荷(密輸入)から見る貿易の傾向である。

第一に、4つの口についての関係を注目する理由は以下のようなになる。後述するが4つの口は必ずしも輸出入において、それぞれの口が、そこでしか輸出入できない物品を扱っているわけではなかった。同じ貿易品が、ほぼ同時に日本にもたらされることもある。そのため長崎口の貿易の流れと、他の口との関係も留意することが必要である。

第二の抜荷については、長崎口の貿易の全容が、詳細な点において、今なおつかみにくいことによる。オランダとの貿易については、個人貿易の問題があり、オランダ東インド会社や後継のバタヴィア政庁が掌握していない貿易が少なからずある。また唐人貿易では、データの欠落が多い。そのため日蘭貿易と唐人貿易とを総合的に理解しようとする、おおよその状況がわかる年は、限られてしまうのである。オランダ側は、会社としての管理部分は、ハーグ国立文書館所蔵の日本商館文書やオランダ東インド会社文書、さらに1799年の同社解散以後はバタヴィア総督府やオランダ貿易会社(NHM)の文書が存在し、一定度の掌握ができる。唐人側は個別の商人の文書は幕末の一部を除き不明であり、オランダ側の収集した情報や、日本側の一部の年代の史料しか存在していない。1710年から1714年までの日本側の輸出入記録である『唐蛮貨物帳』(内閣文庫、1970)や、オランダ側がライバルである唐人たちの状況を書き留めた記録を集成した永積洋子『唐船輸出入品数量一覧1637～1833年―復元 唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳』(創文社、1987)以外は金銀銅などについて、幕府や長崎会所が作成した記録類などが中心となっている。

よく知られているように、1715年の正徳新例によって、長崎における貿易は取引額や数量が固定化される。政治的要件によって、ある程度緩和や縮小があるが、基本的な枠組みは、正徳新例以後、幕末の自由貿易体制への編入まで140年あまり継続する。オランダ貿易と唐人貿易の取引額は1:2となり、総じて、唐人貿易の方がオランダ貿易よりも多いにも関わらず、唐人貿易のデータが大きく欠けている。そのため、本章では、17世紀後半以降通時的に史料がある抜荷の裁判記録を通じて、近世の特定の時期ごとの、貿易の傾向を確認していきたい。

1. 四つの口の中の長崎

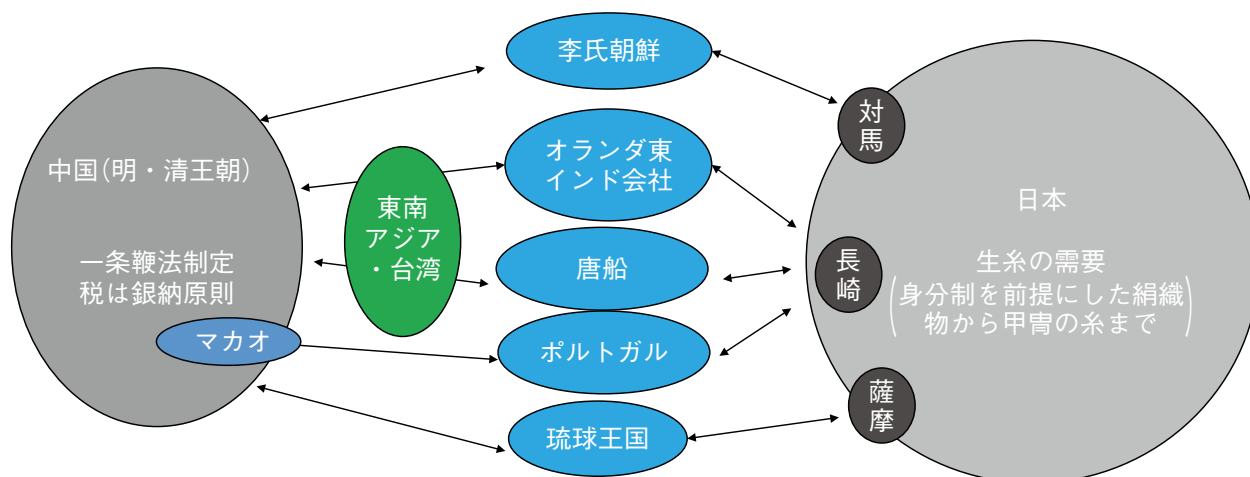
まず、ここでは、長崎の物流の特徴を確認してみたい。異国人との接触の場である出島・唐人屋敷における、日本人と異国人との接触局面のありようを前提として、モノの流れに目を向けた場合、長崎が国内外に対するどのような結節点であったかも多少意識しながら確認してみたい。

(1) 貿易制度と貿易品の変遷

① 17世紀の貿易構造

長崎における貿易は、17世紀と18世紀で大きく様相が異なる。まず、17世紀のポルトガル船が日本から追放される時期までの姿は下記の図10-1のようになる。なお、厳密言えば、オランダ東インド会社の商館は、1641年に長崎へ移転するが、それ以前から輸入の中核を占める生糸は長崎の価格

17世紀の日本の貿易構造



中国大陸産生糸⇔日本産銀の交換が基本

図10-1 17世紀の日本の貿易構造

に連動しており、図中では長崎口としている。

この図からわかるように、中国大陸産生糸と日本産銀との交換が中心的で、その担い手は、唐船だけではなく、ポルトガル船やオランダ船、さらには朝鮮や琉球との貿易も同様であったと言える。

この時期の唐船貿易については、17世紀に正確なデータを求めることは難しいが、そのライバル集団であったオランダ東インド会社は、唐船によってもたらされた輸入品を、オランダ通詞などを通して、様々な情報ルートを用いて収集していたことはよく知られている。1641年については、その年全体の状況をオランダ側が情報収集することに成功しており、『日本関係海外史料オランダ商館長日記 訳文編之5』（東京大学史料編纂所、1988）1641年11月11日条に97隻の唐船（中国本土89隻、カンボジア2隻、広南3隻、トンキン3隻）について記載がある。オランダ側が集約した情報によれば、唐船97隻のうち、生糸は127175斤、絹織物134936反、木綿や麻布類238543反、砂糖5750500斤、鉍石類63480斤、皮革52950枚、蘇木81150斤、薬種79960斤となっている（山脇1995）。取引額は不明だが、生糸・絹織物・砂糖が中心であることがわかる。

一方、オランダの場合、1636年の記録からみると、総取引額では、生糸59.4%・絹織物21.0%・毛織物5.5%など繊維で合計87.7%を占める。それ以外では皮革5.6%・染料香料薬種2.9%・砂糖2.2%となっている（科野1984）。生糸や絹織物類が中心となり、それに東インド会社が確立した東南アジア各地との商館網をつかって、薬種や鹿皮などが特徴であることがわかる。端的に言えば「アジア的」品物がオランダ貿易の中心である。

このように、時期は多少ずれるが、オランダ貿易も唐人貿易も、基本的な構造が同じである。

その後、17世紀後半からは、日本における金銀産出の大幅な減少、1683年の台湾鄭成功一族の清朝への降伏によって、長崎貿易の形は大きく変化する。それまでは、台湾側の船舶とオランダ東インド会社の船舶が、長崎貿易の中心的存在であったが、唐船貿易の担い手が台湾から大陸側へと変化する

る。また清朝が、対台湾政策として行っていた国内の民衆に対する海禁政策をやめ、展海令へと変更している。この二つの要因を基軸とした日本貿易をめぐる変化に対して、将軍綱吉政権下の江戸幕府は素早く貿易制度を大きく変更して対応し、本格的な制限貿易の時代が始まる。1685年には定高貿易が始まる。その結果、唐船貿易において、抜荷が多発することとなり、唐人屋敷の建設と来航した唐人の一括収容や、新地蔵の建設により、より貿易の管理強化がすすんでいった。

一方、琉球貿易はどうだったのか、生糸や絹織物の日本市場へのサブ・ルートとして機能したことは上原兼善らによって指摘されている（上原2016）。

同じ品が長崎へ入ってくることから、当然価格競争が生まれていたと考えることができる。台湾鄭氏が降伏した1683年（天和3）8月3日付で、島津家が、琉球に伝えた覚書からみてみよう。そこでは「琉球より渡唐人、唐買い物においての直段、年々相増し高直に相調い候、唐諸物の直段長崎において、その隠れなく候処、過分に高直に相調い候儀、不届きに候」（『旧記雑録追録1』1844号文書、鹿児島県維新史料編さん所、1971）という指示を与えている。つまり島津家は、長崎で入手される大陸からの輸入品の価格をにらみながら、琉球が清から持ち帰る品々の売買のありかたについて、監督していたことになる。

また、朝鮮からの輸入品については、やはり生糸が中核的であったことが、田代和生より指摘されている。特に中国王朝からの下賜品を含む高級生糸は、日本において、西陣織などに利用されおり、やはり、長崎口との関係は大きな意味を持つ（田代1981）。

このように、日本において、17世紀の中核的な商品である生糸と銀の交換ルートは、長崎口のみならず薩摩口・対馬口との連環を考える必要があることを指摘しておきたい。ただ、17世紀の各口における取引状況の記録について、特に薩摩ルートについては、不明なことも多い。

②18世紀 正徳新例以後

17世紀末からの制限貿易は、1715年の正徳新例によって画期を迎え、以後、制限の枠に対して、幕府の特別な「御用」を勤めることによる増船や、オランダ貿易では1720年の減額、1745年と1790年の貿易半額令などが出され、必ずしも取引ベースでは半分とは言えないが、変更もおきる（木村2009）。総じて、日本側は長崎会所が間にたって、決められた枠組みでの貿易が実施されていく。金銀産出の枯渇と、生糸の国産化が拡大したことにより、長崎貿易は制限貿易の時代を迎える。

1705年のオランダ側の輸入品の総額ベースで見ると、生糸28.3%・絹織物15.3%・綿織物20.7%となり繊維類で67.2%と17世紀から生糸の比率が半減となり、繊維全体が減っていることがわかる。それ以外では皮革8.6%・染料香料薬種7.9%・砂糖15.7%となる。砂糖の占める割合がその分拡大している（科野1984）。

この時期の特徴は、オランダ貿易・唐人貿易ともに、品物の変化がおきていることである。銅・俵物・樟脳などが中心的な輸出品となり、輸入品は、砂糖の占める割合が拡大し、また各種織物や薬種など多様な品物が輸入されていく。

特に銅を輸出する上で、船舶には、輸出銅の重量に見合うだけの重さのある品を積載しないと船の運航に支障がでるため、バラストとしての役割をもつ砂糖が大量に日本へ輸出された。また、日本からは銅が中心的存在であったが、18世紀は銅の産出が基本的に減るため、代替品としての俵物が着目をあび、さらに、防虫剤や強心剤として利用価値のある樟脳も多く輸出されている。

一方で、本科研に即してみると、陶磁器類の輸出はどうであったのかは後述したい。

③ 18世紀末 競合する唐物と長崎貿易の衰退

17世紀の図10-1からみてもわかるように、中国大陸から発出するいわゆる「唐物」は、長崎のみならず、琉球－薩摩経由、朝鮮－対馬経由からも流れ込むことになる。それ以外に、18世紀半ば以後は、中国東北部－蝦夷地を経由する、蝦夷錦のような一部の唐物も日本国内へ流入してくる。江戸幕府もその点は、蝦夷地調査において確認していたことがわかる（木村2012）。

そして、問題となるのは、19世紀に島津家が、公式に唐物を長崎や大坂市場で売却する権利を得たことである。これは、将軍家斉の岳父であった島津重豪の政治力を背景に実現できたものであった。1810年には、まず琉球経由唐物8品目の長崎販売が開始される。この時は、琉球の困窮を助ける名目で、唐紙や緞子など限定的であった。ところが、1818年に薬種や雑唐物へと拡大し、テグス（虫糸）、釉薬の硼砂、漢方薬の桂枝と厚朴へと拡大し、1825年には16品目が追加された（横山2013）。この流れの中で、薩摩藩に導かれたと思われる抜荷が日本沿岸の沖合で発生し、また長崎では自分たちの貿易状況の悪化を背景に、唐人が町中へ抗議のため。集団となって違法に繰り出す事件が頻発することになった（深瀬2008）。

その結果、1800～1819年まで、唐船の来航数平均は、10.65隻であったのに対し、20～39年は、20年の11隻を最後に、10隻を超える年はなくなり、平均7.9隻となる。唐船貿易が縮小に向かうことが見て取れる。一方で、船舶の大型化も影響しているのも、さらに精査する必要がある。19世紀に清の沿岸支配体制が弛緩すると、海賊が横行するようになり、そのため外国貿易に従事する船舶は大型化し、また警備や戦闘に備えた船員を乗船させるということも指摘されているからである。その結果日本における唐人の騒動も激化しやすくなる。以後唐人貿易は1858年の自由貿易体制まで衰退しながら減少し、幕末は唐船の入港はなくなり、個人商人たちが買弁のような形で長崎の外国人居留地の欧米系商社のメンバーの名目で活動していくこととなる。

(2) 貿易の仕組みと脇荷

① オランダ貿易の仕組み

オランダ貿易の区分は本方・脇荷・詔・献上の4本だてとなっている。大枠として、本方は会社の荷物である。脇荷は、カンバン（看板）貿易とも言われ、商館員や船員が手荷物で持ち込む少額貿易の権利であり、オランダ貿易当初から存在し、やがて追認的に脇荷として取引額が規制されていったとみられる。それ以外に、事前に幕府から発注がある詔や、江戸参府に際して持参する献上・進物がある。詔や献上品は、毀損に備えて予備を持っていくことが認められ、余ると江戸で売買できた。そのため、実質的な貿易という性格も有していた。献上品は、様々な織物が多く、18世紀末の商館長ティチングは、欧州と日本とでは、好まれる布地や、価値観が異なるため、売買価格が安定せず、投機的品とみなしている。例えば安価なプリンティング製品が日本にない文様として珍重され、逆に手織りで丁寧に刺繍された白い綿布が低くみられるという現象が生じている（木村2010）。

問題なのは、脇荷にまつわる点である。本来脇荷は、長崎貿易で課せられる掛物＝関税は、本方より高く設定されていた。しかし、個々人の乗組員や商館員の権利として、手荷物を持ち込み売買する慣習が、やがて17世紀末からの制限貿易の中で日蘭双方が公認し、定額になっていった。オランダ東インド会社の公認は1667年、日本側は1670年とされる。また史料上は、1673年に「脇荷物」という言葉が初見される（関山1935、山脇1988、永積1979）。

ただし、本方の貿易枠で収まらなかった貿易品の帳簿上の処理にも使われるので、会社の荷物も含まれ、実態がよくわからない。オランダ側としては、18世紀以降、会社の収益モデルを阻害する要因として問題視し、管理下に置こうとしている。本方の取引や量で40%ぐらいに達する品物もあり、また18世紀以降は、陶磁器は脇荷で処理する傾向がある（1783年10月25日付 次期商館長ロンベルフ宛 商館長イザーク・ティチング覚書）（木村2010）。

研究史的には、本方については、ある程度全体の概要や傾向がわかってきている。また、詠や献上品は、貿易総体からすれば少額なので全体の影響は少ない。脇荷については、2010年代ぐらいから、少しずつ国内外にある史料を発掘し復元する作業が始まっている（石田2004・2009）。

②脇荷と陶磁器

さて、脇荷物の中で陶磁器が扱われることから18世紀初頭の状況をみてみたい。『唐蛮貨物帳』が国立公文書館に残されており、1709年から正徳新例発令前年の1714年までの、日本側から海外へ輸出したとされる品が把握できる。陶磁器については下記のようなになる。なお数字は個数。

	商館長日記	仕訳帳	唐蛮貨物帳
1709 (宝永6)	9820	7860	88070
1710 (宝永7)	10940	10940	158578
1711 (宝永8)	16614	9000	181930

オランダ側の記録でも、商館長が業務日誌に掌握している分と、帳簿内に東インド会社の正規の取扱品となる分にも、ある程度の差異が生じている。そして注目すべきは、日本側からオランダ側への輸出品に、大きなかい離がみられ、数量的に10倍前後の違いがあることがある。日蘭双方の、会計上の分類が異なることも原因である。オランダでは、会社荷物+個人荷物(+抜荷)となる。個人荷物とは、オランダ東インド会社社員が個人の荷物として持ち込んだ物品を売買することであり、扱う品・数量・上限額などの制限はあるものの、権利としては認められていた。一方、脇荷は、公式に認められており、日本側は本方+脇荷(+抜荷)という構造になっている。

また、商館員個人が、日々の出島生活で購入した分は、そのまま個人の荷物として、バタヴィアに持ち帰ることもあり、不正の温床ともなりえた。永積洋子が紹介した1729年の事例では、長持3個・柳行李13個から、コーヒカップ97個、ソーサー200皿・茶碗36セット(受け皿とセット)・急須15個が個人の密輸としてバタヴィア当局に摘発されていることから、個人の荷物と称しても持ちだされた陶磁器は相当数あったと推測される。

このように、長崎口における貿易は、本方以外では、実態がつかめないこと、また、陶磁器類は、脇荷や個人貿易、さらにはオランダ東インド会社の許可しない品物として持ちだされている。

この状況は、唐人に対しても同様であった。唐人屋敷が建設され、貿易品は新地蔵に預けられると、唐人は数ヶ月から半年程度、上陸して唐人屋敷に滞在する。最盛期は5千人近く、18世紀は2千人前後が年間滞在したと推定される。滞在中、生活を送るために「遣い捨て」という名目で日用品の持ち込みや購入が可能であった。1788年(天明8)6月に長崎奉行によって許可された、60人程度の乗組員がいる標準的な船で、唐人屋敷への持ち込みは次のようになる(「寄合町諸事書上控帳」天明8年正月6日条『日本都市生活史料集成』7巻189頁)。船一隻あたり白砂糖20籠(上限額、複数回可能)・氷砂糖3桶・黒砂糖3桶・どんぶり200・鉢50・皿大小300・茶碗大小300・猪口300・匕皿300揃・赤毛氈30・燕巢2斤・海粉3斤・扇子200・茶出50・花瓶20・墨100挺・手炉10・象牙箸30・杓子20

であり、さらに長崎の唐人三寺の三廟寄付と拵用衣類は必要分を随時申請するとされている(木村2009)。1隻当たりがこうであるから、10隻入港した場合、相当数の陶磁器類が「必需品」として持ち込まれ、場合によっては、抜荷に廻る可能性があり、実際、食材などでこの時期に摘発された事例がいくつかある。

2. 抜荷からみる長崎口貿易

ここでは、長崎の貿易の特質を、裁判記録『長崎犯科帳』に残された抜荷＝密輸出入の傾向から探っていきたい。近世において、抜荷がしばしばあったことは様々な史料や先行研究からも指摘されてきている。また、個人レベルから大規模組織まで、抜荷にかかわる人々のありかたは多様だと思われる。一方で抜荷は犯罪であるという性質上、その存在は、犯罪として取り締まられた一部であり、総体をみることも難しい。

そのため、文献をもとにした研究であっても、専論は山脇悌二郎『抜け荷』(1965)が唯一とも言うべき状態である。それ以外は、抜荷に対する法令の変遷・刑罰・適用対象などの観点から検討した服藤弘司(1980)・清水一紘(2003)・安高啓明(2010)らの研究や、上原兼善(1981)・徳永和喜(2011)・深井甚三(2009)らによる薩摩藩を中心とした抜荷を明らかにすることが中心である。

ただし、200年あまりの長崎市中の裁判判決を記録する『長崎犯科帳』には2000件以上の抜荷にかかわる記録があることから、抜荷の近世を通じた傾向はみることができると考えることができる。特に、関わる主体との関係から言えば、組織的な大規模なものか、あるいは個人主体で少量なのか、さらに時期ごとの中心的品目の変遷については研究がない。抜荷となる商品は、需要を前提としており、消費局面からも検討しうる素材となると思われる。特に、山脇悌二郎・永積洋子は、前出の脇物との関係で、最高品こそが対象物となるとの見通しを立てているが、その点については、実際に検討をしてみたい。

『長崎犯科帳』とは1666～1867年の近世都市長崎の裁判判決記録である。すでに森永種夫らによって全11巻の翻刻が出版されている。ただし、すべての長崎の裁判記録を網羅した史料であるか、という点については、留保すべき点もある。特に17世紀の分は極端に少ないので、顕著な大事件、あるいは後の判例の基準となるような案件を精査していた可能性が高い(安高2010)。また19世紀後半には紙の様式が変わるなどしていることも指摘されている。このような限界があるとしても、その中で、抜荷関係の判決記録は約2000件がある。ただし、時期によって、単に抜荷を行ったのみの記載、あるいは未遂事件など、実際の取引がどのようなものであったのか不明な事例も含まれている。異国人の犯罪についても抜荷と関連している可能性も含まれている。

この史料の補足データとしては、重罪について江戸と協議を行った『御仕置伺集』『口書集』、あるいは近世後期の『長崎代官記録集』がある。

このような犯科帳の史料的限界は、そもそも上限が1666年であるのが重要である。この前後に長崎の都市支配において重要な変更が相次いで、長崎奉行の管理する長崎奉行所が司法権を掌握していったためと推定される。長崎は近世初期以来、江戸から派遣された旗本である長崎奉行が管轄する内町と、その周辺部に拡大していった外町とに分かれる。都市の拡大によって17世紀前半に形成される外町は長崎に基盤をおいて活動する[前期]長崎代官が民政を管轄していた。ところが、長崎代官末次家では、その家士たちが、1675年に大規模な国際的抜荷事件にかかわったことが暴露され、

同家を取り潰しとなる。また1699年には内町・外町の区別がなくなり長崎奉行支配に一元化されたこと、さらに長崎奉行所も、1663年(寛文3)の寛文大火以後再編が進み、従来あったのちに西役所と呼ばれる場所以外に、現在の歴史文化博物館のある立山に、かなり広い立山役所が建設され、1673年に立山役所が本格的に機能し始めると、そこに行政文書が保存されたとみられ、また司法の場が移ったことが背景にある。都市支配の強化と、行政文書の蓄積が関連している。本稿では、抜荷と密接なかわりのある異国人の犯罪や漂流民も含めて2700件あまりの判決事例から考えていきたい。

(1) 抜荷品

まずは輸出品からみていこう。

①銅

18世紀を代表する輸出品ではあるが、管理体制の厳しさから、全体として77件ある。18世紀は銅とのみあり、棹銅の可能性がたかく、19世紀になると銅器のたぐいが少々でるようになる。万延元年(1860)以後は銅銭がほとんどとなり、自由貿易体制に組み込まれる中で、銅銭の輸出品としての価値が高まっていたことがわかる。

②俵物

干鮑は宝暦年間(1751～64)に登場し、78件、海鼠は延享年間(1744～48)に登場し154件、鱧鱈は寛延年間(1748～51)から登場するが30件が記録されている。俵物三種といっても、煎海鼠が主体となっていることがわかる。大きさとして考えても、鱧鱈は大きい但他的二種はさほど変わらないので、この違いは検討する必要がある。

③昆布

24件あるが寛政4年(1792)から文化元年(1804)までに16件と集中しており、この時期の昆布需要はなにであるのか、メインの市場である中国市場との関係から考える必要がある。

④樟腦

18世紀以後、日本からの輸出品の中核は、銅、銅の代替物としての俵物三種(煎海鼠・乾鮑[干鮑]・鱧鱈)、樟腦であるが、樟腦は、管理が厳しかったのか、香りのある品であったのか、ほとんど『犯科帳』には登場しない。

⑤陶磁器

碗・瓶・皿はほとんどない。皿は4件・瓶が9件あるが、出島か唐人屋敷で日用などの労働者が盗もうとした事件か、沖合で日本人が小舟で乗り付け魚などと何かを交換しようとしたものであり、海外から持ち込まれたものは、あまり抜荷にはなりえなかった。しかし前述したように、日用品などのかたちで日本側には正規のルートで出島や唐人屋敷に持ち込まれた陶磁器類が、海外へ輸出されている事例は18世紀以後多く存在したと考えることができる。

一方、輸入品はどうであったのか、次のようになる

⑥人参

18世紀を代表する抜荷は人参と考えることができる。貞享3年(1686)に始まり弘化4年(1848)まで、記録がある。人参の登場回数は203回をかぞえ、代表的な密輸商品だったと言える。ただし、文政3年(1820)までは一年に複数回みられるが、以後は、数年に1回程度で事例が発生している。1820年代を境に一気に減少している。

背景には御種人参の国産化が本格化し、安価ながらそここの効能のある人参が出回るようになり、密輸品としての価値が減ったのか、あるいは1820年代には薩摩経由の唐物が大阪市場に出回る過程で、同時に(広東)人参も出回り、長崎であえて密輸する必要がなくなったのか、薩摩藩と人参との関係から確認する必要がある。なお、幕末は和人参が安政年間から輸出品として登場する。

⑦麝香

156件あり、19世紀の前後に多く事例があるものの、全体として享保以後の抜荷商品となる。

⑧砂糖

18世紀からの輸入品の中核である砂糖であるが、抜荷としては131件を数え、麝香より少ない。宝永年間(1704～11)にはじまり幕末まで取引されている。ただし、砂糖の場合、荷揚や引き渡しに際して、袋状の容器から、こぼれた砂糖は「こぼれ砂糖」と称し、運搬を担当する日用(ひょう)たちの既得権益と認定されていたので、罪となっていないが、一方でオランダ側は不正と抗議しているが、長崎奉行がとりあげることはほとんどなかった。また砂に落ちた砂糖を、溶かして再結晶化させて販売するこぼれ砂糖専門の間屋が長崎市中で18世紀後半は複数軒存在していることから、広範におこなわれていたと考えることができる(木村2009)

⑨蘇木

116件あるが、享保年間(1716～46)から文久年間(1861～64)まで偏在があまりなく、通時的な対象となっている。

⑩水銀

47件あるが、文化年間(1804～18)から幕末まで42件と、19世紀になって偏在した商品である。日本人、特に都市部において国民病ともいべき病であった梅毒の特効薬として希釈した水銀を用いるステーン水が1770年代から利用されることとの連動を考えてみるべきだろうか。

⑪薬種

104件あり、様々な薬種が想定され、また本稿で取り上げた薬種も含まれる可能性が高い。

⑫白糸

7件で3件は享保年間(1716～46)まで、4件は輸出品として文久年間(1861～64)に記録されている。

⑬てぐす糸(史料の上では 虫偏に糸「虫糸」と表記)

享保年間(1716～46)に初出し、寛政年間(1789～1801)から幕末にいたるまで毎年のように摘発されていることから、需要が急にでたとみることができる。近世期にも釣り糸として利用されたとみられるが、なぜ18世紀末になって拡大したのかは今後の課題としたい。

以上の点からすると、抜荷は、まんべんなく様々なものがある中で、なりやすい物、なりにくい物とがあり、特に19世紀の前半に構造の変化がみとれる。また、一般論的ではあるが、先行研究が指摘するように、最高級品が取引されるというよりは、一定の量として輸出入されている品の方が、流通過程において、あまり痕跡が付かないためだろうか、多いとみられる。特に蘇木や麝香などは典型的と言える。

一方、砂糖や陶磁器のように、片方の側からすれば、正規の取引や慣行であるのに対して、持ちだした先では不正扱いとなる事例も想定され、この差異こそが抜荷研究の難しさと言える。

(2) 担い手たち

では、記録された分だけでも、『長崎犯科帳』が詳細に記録を残す18世紀以降で考えれば、年平均20件近い事件が摘発されているが、その担い手はどうであったのだろうか。個々の案件については、詳細に検討できる場合もあるが、まずは主だった社会的身分を考えてみよう。

①無宿人

全体で470件あり、もっとも多く社会的階層で見た場合は抜荷にかかわったとみられる。ただし、元〇〇町無宿といった記載が多い。特定の場所でのみしか取引ができない以上、都市に他地域から流入して簡単に取引にかかわることができないという管理貿易体制の特質上、もともと長崎の町人で、貿易の仕組みにかかわるなり知識のある者がかかわることが想定される。

②丸山・寄合町遊女

出島や唐人屋敷に常時出入りできるのは貿易業務の地役人と、支払いが保証されれば半ばそこで生活をするので遊女たちであることから、当然かかわりは大きくなる。87件の案件がある。ただし、遊女は出島や唐人屋敷に滞在することが多いため、彼女たちを補佐する「禿」がかなりかかわっていることが特徴的である。また丸山町80件・寄合町87件と、遊女が間にいるとは想定されるが、これらの町の関係者も処罰される事例があり、その広がりを見ることができる。

③唐通事・オランダ通詞

唐通事26件・オランダ通詞20件ある。日常的に異国人と接触をする以上、ある程度かかわることがあったと推定されるが、地役人であり少ないことがわかる。もちろん、個人的な贈答品のようなかたちで抜荷となりうる要素は常にあったとはみることができる。

おわりに

本稿では、駆け足ながら、長崎貿易を理解するための他の口との連動について概要を説明し、また、抜荷の発生において、協荷貿易の存在が重要であることを指摘した。その上で、抜荷の傾向を、発生した時期やかかわった人々、物品などの論点があり、それらを物や担い手の視点から多少なりとも、傾向などがあることが読み取りうるということを提示した。

今後は、2700件あまりの事件をより精査し、さらに当事者たちの居住地などとのマッピングなどと貿易品の関係、そして、いくつかの年代で、公的な輸出入がある程度わかる年と、抜荷との関係性などをより詳細に詰めていく必要があることを指摘しておきたい。

引用文献

石田千尋 2004『日蘭貿易の史的研究』吉川弘文館

石田千尋 2009『日蘭貿易の構造と展開』吉川弘文館

上原兼善 1981『鎖国と藩貿易：薩摩藩の琉球密貿易』八重岳書房

上原兼善 2016『近世琉球貿易史の研究』岩田書院

木村直樹 2009『幕藩制国家と東アジア世界』吉川弘文館

木村直樹 2010「露米会社とイギリス東インド会社」荒野・石井・村井編『日本の対外関係6近世的世界の成熟』吉川弘文館

木村直樹 2012『〈通訳〉たちの幕末維新』吉川弘文館

科野孝蔵 1984『近世日蘭貿易史考』貿易之日本社

科野孝蔵1987『オランダ東インド会社の歴史』同文館出版
 清水紘一2003「抜荷事犯の事例研究(1)」『中央大学論集』(24)
 関山直太郎1935「看板(Kambang)貿易考」『経済史研究』第13巻第6号
 田代和生1989『近世日朝交通貿易史の研究』創文社
 徳永和喜2011『海洋国家薩摩』南方新社
 永積洋子1994「会社の貿易から個人の貿易へー18世紀日蘭貿易の変貌ー」『社会経済史学』60(3)
 永積洋子1979「オランダ商館の脇荷貿易についてー商館長メイランの設立した個人貿易協会(1826ー1830年)」『日本歴史』379
 服藤弘司1980『幕府法と藩法』創文社
 深井甚三2009『近世日本海海運史の研究：北前船と抜荷』東京堂
 深瀬公一郎2008「19世紀における東アジア海域と唐人騒動」『長崎歴史文化博物館研究紀要』3
 安高啓明2010『近世長崎司法制度の研究』思文閣出版
 山脇悌二郎1965『抜け荷』日本経済新聞社
 山脇悌二郎1988「脇荷貿易雑考」箭内健次編『鎖国日本と国際交流』下巻、吉川弘文館
 山脇悌二郎1995『新装版長崎の唐人貿易』吉川弘文館
 横山伊徳2013『開国前夜の世界』吉川弘文館

【関連年表】

1635 唐船長崎集中令
 1639 ポルトガル船追放 対日貿易へゲモニーを誰がにぎるか
 1641 オランダ商館の出島への移転、糸割符の全面的適用
 1655 糸割符制度廃止による相対(自由)貿易、生糸貿易増大、金銀の輸出拡大
 1672 仕法貨物商法による日本側主導貿易へ
 1683 台湾鄭氏降伏
 1684 糸割符制度復活、中国展海令
 1685 定高貿易(年間取引額 オランダ船3千貫目、唐船6千貫目)
 1688 唐船の入港数を年間70隻に限定、密貿易横行(それまでは30・40隻程度)
 1689 唐人屋敷設立(18世紀前半最盛期は2~3000人滞在)貿易対策(出島との違い)
 1698 唐人屋敷大火→1702新地蔵建設へ
 1715 正徳新例(オランダ2隻銅150万斤・唐船30隻銅300万斤)
 →1720・1742縮小 銅→代替としての俵物へ(1785俵物役所による集荷体制強化)
 1790 オランダ貿易半減令(実際には天保期まで半分にならない)
 1810 唐紙など薩摩藩唐物8品目売捌許可
 1825 唐物24品目売捌許可
 1858 通商航海条約締結 世界的自由貿易体制への編入

※なおデータ作成は、山本瑞穂(2020年段階以下同、東京大学大学院)・大淵菜音子(一橋大学大学院)・高本千紘(京都大学大学院)・長岡南実(長崎大学)の諸氏の貢献によるものであり、記して謝意を示したい。

第11章 長崎出島の物資流通－考古学資料を中心に－

山口美由紀（長崎市文化観光部出島復元整備室）

はじめに

出島を発掘調査して分かること－出島の町としての構造や機能、オランダ商館員らの住居や蔵、そこからみえてくる生活の実像。また貿易で取引された商品の破損品や使用品の一部、オランダ商館員と出入りした日本人らの生活必需品の数々、これらの容器。食物残渣からうかがえる食生活。その奥にはヨーロッパにおける流行やはやり病まで、西洋史の一端もこの東洋の島から垣間見ることができる。日本側の視点にたてば、島の維持管理は日本人の役目であり、島の築造はもとより、建物や構造物などの修繕には日本の技術が用いられ、国産品の輸出など日本の産業が海外に与えた影響が分かり、また舶来の品々の日本への浸透がうかがえる。

中継貿易の基地であった出島は、物資流通の起点であり、どこから切り取っても興味深いテーマに満ちあふれている。多様な学術的視点を与えてくれる出島において、本稿では、本科研のテーマである物資流通に即し、筆者が携わった出島の発掘調査成果から、特に貿易に関わる出土資料－貿易陶磁、棹銅－を例として、その流通の一端を明らかにしたい。

1. 出島和蘭商館跡の概要

出島は、長崎市の中心部を流れる中島川の河口に位置する史跡である。その築造の経緯については割愛するが、果たした役割や機能は、オランダのアジアを中心とした貿易活動拠点のひとつであり、広くヨーロッパ、アジアの文物が行き交う場所であった。また、商館員と日本人の自由な出入りが制限されるなか、商館員はこの閉ざされた島で日々の暮らしを営み、限られたなか阿蘭陀通詞や蘭学者などの日本人と交流を持った。江戸幕府にとっては海外の情報を入手する窓口であり、また出島を介して西洋の進んだ学問や技術が伝えられた。さらに日本の文物や情報も広く西洋に伝えられ、出島は、日本と西洋、アジアにおける国際交流の場であった（図11-1）。

文久元年（1861）以降、出島の西側は数回に亘り拡張され、慶応3年（1867）には出島の南側の拡張、馬廻しの整備が行われ、大浦の居留地と出島を結ぶルートがつながり、これまでの孤立した島から、外国人居留地の一角へと変貌する。長崎港については、2度に渡る大規模な港湾改良工事が行われ、これらの工事によって、出島の北側は平均18m削り取られ、出島の南側は全て埋め立てられ、内陸化し、島としての姿は失われた。出島の内部は、出島町人から外国の貿易商人へと所有権や借地権が移り変わり、居住者は多国籍となる。貿易を営む日本人経営者が拠点とする倉庫なども増え、海外貿易が衰退し、日本人の住居及び店舗や医院としての機能を持つ施設が多くなったころ、大正11年（1922）出島和蘭商館跡として、史跡に指定された。

第二次世界大戦後、出島ではオランダ商館の整備に向けての動きが生まれ、一部の庭園や建物などの整備に着手、昭和に入ると失われた島の輪郭を明らかにする範囲確認調査が行われ、本格的な史跡整備へのスタートラインに着いた。さらに平成8年（1996）に、出島復元整備計画を策定し、平成12年（2000）以降は徐々に江戸時代の建物を復元し、現在は16棟の建物を公開している。これらの事業を進めるにあたり、19世紀初頭の出島の建物の位置や生活空間を明らかにすることを目的として実施した発掘調査によって、出島の往時の生活と貿易の様相が見えてきた。

2. 出島の発掘調査概要

出島における発掘調査は、昭和44年(1969)の出島南東角部の調査に始まる。その後、昭和59年(1984)から行われた範囲確認調査により、出島の境界確認と範囲確定に至る。平成8年(1996)から本格的な建造物復元事業及び顕在化事業に取り組み、継続的に発掘調査を実施、これらの調査により、復元時期を含む18世紀後半～幕末に至る各期の建物遺構や出島築造当初から幕末までの護岸石垣を検出した(図11-2)。

平成8年からの建造物復元に伴う発掘調査により、対象となった建物は20棟、そのうち一部であれ基礎遺構を検出できた建物が14棟である。出島の中央部から西側にかけて、建造物の性格や敷地の利用状況によって、それぞれ異なる建物基礎や生活・業務に関連する遺構群が検出された。

実際に出島を構成する建物群等の内容は、商館員の住居や生活物資を収納する倉庫、貿易品を納める蔵、日本人の管理用建物、庭園・菜園に大別され、商館運営のなかで必要な要素、機能がすべて備わっていたことがうかがえる。その生活様式のなかに、日本の商館の独自性があらわれ、それぞれの役割をもつ建物の調査により、東アジアの貿易の拠点であった出島の姿が浮かび上がる(山口2008)。

近年は、開発に伴い出島の周囲の調査が行われ、出島を取り巻く江戸時代の周囲の様相が明らかとなり、出島の本質的な理解の一助となっている。

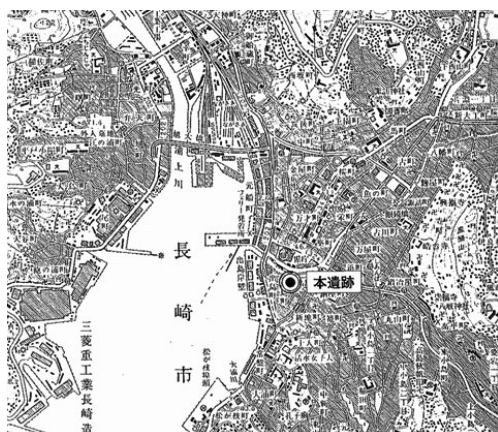


図11-1 出島和蘭商館跡の位置



中央部に発掘地点、西側(下側)に復元建造物が立ち並ぶ
図11-2 出島航空写真 平成25年度(2013)撮影

3. 考古学資料から見た出島における物資流通

昭和44年(1969)から現在に至るまでに実施された発掘調査によって、約75万点を超える近世期の遺物が出土している。その内容は飲食器、容器などの陶磁器類、ガラス器、瓦やレンガ、金属製品などの建材、貝殻や獣骨などの食物残渣、ボタンや眼鏡などの衣類や装飾品、酒瓶やクレーパイプなどの嗜好品と多岐に渡り、様々なキーワードによる解析が可能である。

出島の遺跡の性格上、とりわけ貿易陶磁に関する注目度は高く、海外向けに輸出された肥前磁器、輸入された中国磁器、陶器を中心に、東南アジアの陶器、土器、また江戸時代後期に出土数が増加する西洋陶器が主要な出土品として挙げられる。出島は、貿易の中継基点であるとともに、オランダ商館員の生活の拠点でもあった。このため、出島に舶載された貿易陶磁器は、器そのものが商品となった例、内容物が商品とされ、その容器としてもたらされた例のほか、オランダ商館員がみずから消費した陶磁器類に区分される。とくに地中からの出土品は、商館にて使用した器が廃棄されたものであ

るため、オランダ商館員の生活という枠組で捉えられる(山口2015)。

また貿易陶磁器全般については、ヨーロッパからアジアにかけての世界的な物資流通で理解すべき資料と、ヨーロッパにおける生活必需品をオランダ商館員が個人的に出島に搬入し消費した資料があるため、その用途や日本国内への流通の有無を把握し、検討する必要がある。

出島の整備事業では、復元年代を19世紀初頭と位置付け、史跡内における発掘調査も、一部の試掘調査をのぞいて、18世紀末頃までを対象としているため、出島築造期にあたる17世紀中頃から18世紀中頃までの調査情報が大きく欠けている。このため、数量的な整理を機軸として貿易陶磁器の全体像を把握することはできない状況にある。そのような中でも、出島内の一部の地点では、江戸時代中～後期の包含層が攪乱を受けていたことから、江戸時代前期の遺構面が顕わとなり、17世紀後半を製作年代とする遺物が多数出土した例がある。本地点からは、景德鎮窯の中国磁器とともに、柿右衛門様式の色絵鉢が出土し、またデルフト陶器や東南アジアの印紋土器、中国陶器の黒釉壺が散見された。

18世紀代の遺物は、出島の中央通路に造られた溝の中から、まとめて出土した事例があり、一例として景德鎮窯の染付花唐草文皿の出土が挙げられる。共伴資料は、金襴手様式の華やかな肥前磁器の類であった。このほかに、タイの焼締四耳壺が多数出土し、宜興窯の朱泥急須も散見される。

19世紀代については、発掘調査地点ごとにまとまった成果が挙げられている。中国陶磁器は、福建・広東系の色絵小碗や染付碗、陶器製の褐釉大壺や緑褐釉大壺などが見られる。肥前磁器も多数出土するが、西洋陶器の割合が増加し、イギリス、オランダ製の銅版転写陶器を中心にクリームウェアや手彩色陶器が含まれる。江戸時代を通じて、出島に滞在したオランダ商館員は12～15名ほどであったが、19世紀中頃以降は、海軍伝習所の教官らが出島に滞在したため出島居住者数が増えている。このためヨーロッパ製陶器の消費量が増加し、出土量も連動し、数量が飛躍的に多くなる傾向を見せる。

一方で出島において貿易品として取り扱われた商品は、概括すると、次のとおりである。

輸出品 銀、金、銅、陶磁器、樟脳、漆器、屏風、しょう油、海産物

輸入品 生糸、砂糖、綿織物、毛織物、染料、薬種、ガラス器、西洋陶器、鹿皮、鮫皮、水銀

これらの商品は、それぞれ本方、脇荷物、訛物という輸出入の形態に応じて取り扱われているが、本方から脇荷物への移行、脇荷物と訛物に商品の区別がないことから、ここでは分類を行わない。

このうち、下線を引いたものが、商品そのもの、あるいはその容器として認識されているものが土中に残存し、発掘調査時に取り上げができるものである。発掘調査で出土するものとしらないもの、このバランスを念頭に置いて、全体像をうかがいたい。

4. 貿易に関する出土資料の実例

(1) 肥前磁器

初期の輸出向け肥前磁器の代表格である柿右衛門様式の色絵磁器は、出土数は少ないが鉢、碗など本様式の貴重な資料が出土している(図11-3)。17世紀後半から18世紀代には、様々な種類の芙蓉手様式の磁器が製作された。出島から出土する芙蓉手は、器種は皿が多く、若干瓶と碗が後出する。文様は、初期のタイプはモチーフを線書きで表した粗野な図柄で、その後皿の中央に花虫鳥文を描く明時代の芙蓉手を模写した絵柄が主流となる。18世紀前半には、中央の文様に鳳凰文、三果文、花盆文などの例が見られ、縁周の部分に松、竹、岩や松竹梅などを描く明時代の芙蓉手には無い意匠の出土例がみられた(図11-4)。

1690年代頃から作られた金欄手様式(古伊万里様式)の色絵磁器も多数出土している。この様式は、染付による藍色と、上絵付による赤や金を組み合わせた配色が特徴で、器面には窓絵や区画割が描かれ、全体に細かい地文様書き込まれる。最盛期は18世紀初頭で、その後新しい技法や焼成法などが導入され、18世紀中頃には新しい意匠の様式へと変化する。海外輸出向けであったこの様式の瓶や壺、皿は、大きく華やかで、ヨーロッパの王侯貴族や裕福な人々の館の室内を飾る装飾品として使用された。出島から出土した金欄手様式の磁器は、いずれも小片であるが、大皿や蓋付壺、長胴瓶などの大型の器種も含まれる。

17世紀後半、オランダ人による注文生産が増える中、有田では欧字を記した調味料入れやお茶やココアを嗜むための碗や皿など、その需要に応じた製品が作られた。これらの状況を示すカップ&ソーサーや鉢、皿など、同一の文様が描かれた磁器が出島からまとまって出土し、テーブルウェアとして統一された食器が求められていたことがうかがえる(図11-5)。欧字文が描かれた資料の代表例として、オランダ東インド会社の社章VOCにNが加えられ、月桂樹をあしらった磁器が挙げられる。本資料は、調査事例が増えるにつれ、出土点数が増加し、器形も多様化の傾向を示す。器種は深皿が中心となるが、直径は概ね六寸及び七寸相当に区分され、また深皿の蓋に当たる資料も出土している。このほか、近年、皿や手付鉢(ソース入れ)などの出土例も見られることから、同一文様で構成されたテーブルウェアの可能性が高い(図11-6)。

このほかオランダ陶器の見本品に倣って製作されたアルバレロ(albarello)型の円筒形をした広口壺や唾壺、おまるとして利用された取手付鉢や髭皿が挙げられる。アルバレロ型壺は、ヨーロッパでは主にクリームや薬などの軟膏を入れる薬壺として使用され、オランダ・デルフトやイギリスなどで作られていた。大小様々なタイプがあり、青や橙色で彩色されるものと、無地のものがあるが、肥前磁器の写しもこれに倣い、染付による幾何学文を描くタイプと染付を施さない白磁のタイプが出土している(図11-7)。

出島からは、このほかに平戸焼、亀山焼、波佐見焼、現川焼、長与焼などの肥前長崎の各窯で焼かれた陶磁器が出土する。平戸焼(三川内焼)は、その洗練された技巧が評価され、幕末頃には薄作りの色絵、染付碗などが製造された。また、19世紀前半に操業した亀山焼も、操業期間が短いながらも出土例が多い資料である。このほかに、主に波佐見で、酒や醤油の容器として製作されたコンブラ瓶も多数出土例が知られている。



図11-3 色絵花卉文輪花鉢



図11-4 染付VOC字文大皿



図11-5 金欄手様式の色絵磁器



図11-6 染付N VOC字文皿他



図11-7 染付アルバレロ型壺

(2) 中国陶磁器

出島オランダ商館では、中国各地の窯で作られた様々な種類の陶磁器が出土する。これらは、オランダ東インド会社の時代から手掛けていた中国陶磁の輸出によるもので、出島からは商館内部で使用した後に、投棄したものがみつまっている（山口2014）。

最も出土数が多い景德鎮製磁器は、17世紀中頃～18世紀前半の資料として、中央に唐人や花卉文を描く皿、バタビアン・ウェアと呼ばれる染付に褐色釉が掛け分けされるカップ&ソーサー、上面全面に花唐草文が描かれる大皿などがある。本製品は肥前磁器による模倣品も出土している（図11-8）。染付楼閣山水文（図11-9）は、後にイギリスにおける銅版転写陶器製作時にウイロウパターンのモチーフとなった文様である。オランダではアンティークショップや博物館内で、17世紀後半～18世紀前半に製作された同種の染付磁器が、テーブルのセッティングや室内装飾に使用されている例が紹介されていた。出島の商館員も、同じ頃これらの中国磁器を食事の時に使用していたと思われる。このほか、一部で実施した出島築造当初の時代の調査によって、16世紀末に製作された芙蓉手様式の大皿も出土した。同様の焼物は平戸オランダ商館跡の発掘調査で、まとまった出土例が報告されている。

次に中国南部の福建・広東地方の窯で製作された磁器が挙げられる。景德鎮窯の製品に比べ、胎土がもろく、器に厚みがあり、染付の発色が鈍く、滲む特徴をもち、粗野で暖かみのある印象を受ける。出島からは、染付碗や鉢、皿などが出土している（図11-10）。また、出島当初期まで遡る地点からは、漳州窯産の陶磁器が出土、赤絵の大皿や餅花手などの古手の資料が確認されている。その他は、宜興窯の茶器や、徳化窯の色絵小碗が散見される。



左：景德鎮製 右：肥前製
図11-8 染付花唐草文皿



図11-9 染付楼閣山水文皿



図11-10 染付寿字文鉢・皿

(3) アジアの陶器 容器としてもたらされたもの

オランダの中継貿易により、その広い交易圏から出島にもたらされた輸入品には、液体や粉状のものなど、その保管、運搬に容器を必要とするものがあり、これらの焼物の欠片が遺跡から出土する。これらの産地は、大きく中国南部と東南アジア地域に分かれる。

中国南部産の壺類は、油や酒などの容器と推察される。17世紀代の資料は、黒褐色釉の四耳壺が出土し、18世紀末～19世紀代については、茶褐色の広口壺と、緑褐色釉の壺の2種がみられる。後者は、長崎の唐人屋敷跡からまとまった出土事例があり、当時容器として一般的に流布していたことがうかがえる。

タイ産の橙色の焼締四耳壺も、数多く出土している（図11-11）。この壺は、肩の部分に四つの取手が付き、胴部に数条の沈線が施されたもので、液体物の容器として出島に持ち込まれたと推測される資料である。とくにカピタン別荘と庭園部分の発掘調査のうちにコンテナ約10箱分に及ぶ欠片がまとまって出土した。一般的に製作年代は17世紀前半頃



図11-11 焼締四耳壺

に位置付けられるが、出島出土資料を概観すると、色調が暗灰橙色で肩部が張る形状の四耳壺は、17世紀代の資料と推定されるが、明るい橙色で細身の形状の四耳壺は18世紀代に製作されたと考えられる。このほかにベトナムや中東などの陶器生産が盛んな地域の陶器や、オランダ東インド会社の拠点であったインドネシアの土器が散見される。いずれもオランダ東インド会社の商館が所在した場所であり、その関連を示すものであるが、出土事例はわずかである。

(4) 西洋陶器

出島からは、オランダをはじめとしてヨーロッパ各国で製作された陶器やガラス製品が出土する。これらは、商館員が個人的に取引を行った脇荷物などの輸出品として持ち込まれたものと、商館員が出島で生活する際に実際に使用したものに大きく分かれる(山口2013)。

オランダのデルフトで焼かれた陶器とその系統に属するファイアンス陶器は、16世紀にイタリアのマヨリカの技術が、陶工の移動によってヨーロッパ各地に伝わったもので、オランダでもデルフト地方の窯業地では、イタリア、スペイン、イスラムの流れを汲む厚手の陶器が作られた。17世紀には、中国や日本の染付の意匠を真似た白地に青の染付を施す東洋磁器の影響を受けた陶器を生産し、代表的な窯業地となった。出島からは、中国の芙蓉手を模した藍絵芙蓉手皿やアルバレロ型広口壺が出土している(図11-12)。



図11-12
染付縞文広口壺



図11-13
藍絵広口壺

炆器は、ドイツからベルギーにかけてライン川流域で作られた塩釉炆器と、イギリス製のものに大別される。ライン川流域の製品は、灰色地に藍釉が施される瓶や壺(図11-13)、髭徳利に代表される褐色の塩釉瓶が挙げられる。前者は、現在のドイツ、ヴェスターバルト地方でつくられ、様々な大きさがあり、ピクルスやバター、その他の食品の保存容器として使われた。この藍彩壺や瓶は、有田磁器の写しが知られ、陶器や金属器以外に炆器も磁器に替えて需要があったことが分かる。後者の髭徳利はフレッフェンで製作されたもので、本資料は日本で珍重され、模倣品が日本の陶工により製作された。ラインラント地方一帯で作られる長胴の塩釉瓶もミネラルウォーター瓶として、出島から多数出土する。このほかに、イギリス製のクリーム色地の酒瓶が多数出土する。

19世紀初頭、ヨーロッパでは銅版画による転写陶器(プリントウェア)が製作された。この技法では、同種の製品を大量に生産することができるため、この陶器は瞬く間にヨーロッパ中に広まった。出島でも、19世紀初頭から中頃にかけて、大量のプリントウェアが出土する。とくに出島の護岸石垣の外側から、大量に出土した。イギリス製銅版転写陶器は、メーカーがわかるものとして、ダベンポートやスタッフォードシャー、ドーソンなどの窯銘が多く、器種は皿、鉢、碗、蓋物が挙げられる(図11-14)。オランダ製では、マーストリヒトのペテルス・レグゥー窯の製品が多数出土している。

オランダ製の銅版転写陶器の特徴の一つは、フロン・ブルーと呼ばれるにじんだ風合いの染付で、絵柄がソフトな印象となる(図11-15)。同窯では白色のクリームウェアなども作られ、出島の護岸石垣外側から多数出土している。このほかにベルギーやフランス製のプリントウェアも散見される。



図11-14 染付皿
モスク&フィッシャーマン



図11-15 染付鉢・皿
パルスメ・オーロリア

(5) 出島出土の棹銅

18世紀以降、銅は銀に代わって出島の主要な輸出品となり、輸出用の棹銅は御用棹銅と呼ばれた。棹銅が保管された銅蔵は、出島の中央部に位置し、建物は組頭部屋の正面入口が中央通路に面し、その後背に銅蔵が接続することが、出島絵図などに代表される絵図面から読み取れる。(長崎市1987)

組頭部屋跡の発掘調査では、礎石や床面、焼土を充満し底部が固く締まったレンズ状の遺構が数基検出され、炉跡群と推察している。焼土の下部には、緑色を呈する銅製の細粒が薄く面的に堆積し、精銅との関連も示唆される(図11-16)。銅蔵跡からは、一部攪乱を受けながらも四方から良好な状態で礎石が検出された。礎石の石材はすべて安山岩で、概ね半間間隔(約1m)で設置されている。蔵内部の北東部からは、橙色の粘質土と珊瑚の碎片が面的に検出された(山口2017)。

本地点からは、他地点と比較して多くの棹銅片が出土している(図11-17)。本来の棹銅の規格は、長さ7~8寸(約23cm)、重さは概ね半斤(300g)であるが、出土品はいずれもこの規格に合わない。断面を観察すると、元々長さが短いものと、切断面があるものに分かれ、中には銅滴が付着したものも見られる。点数は、組頭部屋跡から3,981点、銅蔵跡から1,001点が出土した。銅蔵の名の通り、棹銅の保管庫であり、またこれらの棹銅を計量していた場所が組頭部屋であったことを推察させる出土状況であった。あわせて両地点からは、銅滴も大量に出土し、銅蔵跡・組頭部屋跡を中心とした約200㎡の面積から、総重量3kgを超える銅滴が見つかった(図11-18)。これらの銅滴は、通常、溶解した銅を鋳型に流し入れる棹吹の過程で発生するため、なぜ銅滴が出島からまとめて出土するのか、検証が必要な資料である。さらに、出土数が多い資料として、鉄製釘が挙げられる。出島内では、これまで頭部が円形の洋釘や建築材と思われる数種の寸法に分類される四角形の和釘が出土している。本地点からは、概ね3cm内外(約1寸)の寸法の釘が組頭部屋跡から968点、銅蔵跡から213点出土しており、特異な状況が確認された。

棹銅の輸出に関する場面を描いた蘭館図は、石崎融思筆『蛮館図』所収「量官銅図」と川原慶賀筆『蘭館絵巻』所収「計量の図」が代表的な史料として挙げられる。後者の絵図は、19世紀前半に描かれた史料で、出島における生活と貿易の中から、代表的な場面を切り取り表現したものである。本図は、画面奥に銅を納めた箱が積み上げられた様子が描かれていることから、銅蔵と想定され、その手前に引き出し、棹銅を計量している作業空間が前室にあたる組頭部屋と想定される。これらの建物の様相と棹銅や銅滴の出土状況から、本絵図の様相がこのまま発掘調査地点に表現されていると言えよう。銅製品のみならず、鉄製釘の大量出土についても、図中に描かれた計量済みの棹銅を木箱に梱包するため釘打ちを行っている人物の姿から、棹銅用箱に用いられた釘であったことがうかがえる。以上の発掘調査成果から、

出島における銅貿易において、銅の保管、計量、梱包、積み出しに至る一連の作業手順をうかがい知ることが出来た。



図11-16 第三・IV期発掘調査地点全景



図11-17 棹銅



図11-18 銅滴

5. 出島の物資流通における観点

(1) 貿易陶磁

出島から出土する貿易陶磁器は、遺跡の性格上、これらの生産地域は世界各地に及び、その出土資料が意味するものも多様である。出島は日本における最初の窓口となるが、出土したすべての貿易陶磁器がこの地から日本国内に流入したわけではなく、商館内でのみ用いられた事例も多い。

出島からは、海外輸出向けに生産された多種多様な肥前磁器が出土する。初期に出島を通じて輸出された製品は、丸碗など小振りの磁器が主であったが、焼成技術の向上に伴い、次第に大型の磁器が作られるようになった。そして17世紀末から18世紀初頭にかけて、ヨーロッパの宮殿を飾った大皿や長胴瓶、蓋付広口壺などが盛んにつくられ、輸出向け肥前磁器の隆盛期を迎える。その後、中国の磁器輸出、海外展開が進み、18世紀中頃には輸出向け伊万里は次第に押され、肥前磁器は転換期を迎えることとなった。肥前磁器は硬質で丈夫であったため、当時ヨーロッパでは磁器で製作されていなかった様々なものが、注文により磁器で作られた。ここに物資流通のその後、次の段階が設定される。

肥前磁器の出土状況を概観すると、17世紀前半の出島築造当初期に当たる資料から、幕末、明治時代までの各期の資料が出土するが、そのなかでも肥前磁器の輸出最盛期にあたる17世紀後半～18世紀中葉までの磁器が最も多く、次いで18世紀末～19世紀前半の国内向け磁器と輸出向け磁器が中心となる。1757年オランダ東インド会社による正式な国産磁器の輸出が途絶えると、肥前磁器は商館員の私貿易のなかで取り扱われるようになった。出島の発掘調査では、18世紀後半以降も国産磁器が出土するため、これらの磁器が出島のなかで使用されていたことが分かる。

中国磁器については、景德鎮窯の染付磁器を中心に皿や瓶、蓋物、カップ&ソーサー等、多様な器種が存在する。17世紀にヨーロッパで流行した中国磁器によるテーブルセットが可能な器種構成であり、出島においても、かしこまった席ではこのような食器を用いて食事を行っていたことがうかがえる。これらはヨーロッパで好まれたスタイルであり、出島から出土した中国磁器はヨーロッパ向けの器種構成や文様を示していると言えよう。

中国南部の壺類は、出島のみならず、長崎市中でも出土する資料であるため、江戸時代初期に容器メーカーとして、アジア一帯の貿易の中でその需要を満たすものであったことがうかがえる。タイ産の焼締四耳壺も、同種の位置付けと考えられる。

東南アジアの陶磁器は、出島以前の時代の長崎市中遺跡から出土する資料のほうが多彩であり、その頃の活発な交易活動を想起させる。出島時代は、オランダ東インド会社による交易であるため、オランダ船で船載される品々は集約され、商館で用いるためのインドネシアの生活雑器や貿易品の容器類が中心となる。しかしながら、東南アジア及び中東地域で生産された陶磁器類の陶片は、オランダ東インド会社の商館や交易地域と関連を有する資料であるため、まさに地域間の交流の証となる。

ヨーロッパでは、日本が鎖国下にある中、いくども戦争が繰り返され、その中で有力者の求めに応じ、陶工らはその庇護を求め国家間を移動、その行為によって技術が広がった。オランダの中継貿易はヨーロッパ間の流通を促し、このような状況下で製作された陶器やガラス製品の一部が出島にもたらされた。この頃ヨーロッパでは、中国磁器への憧れから、硬質で白くコバルトや色絵が映える美しい磁器を王侯貴族が求め、直属の窯を作り磁器焼成が行われた。1710年にマイセン窯が開窯され、セーブルやウェッジウッドなどの有名な窯が18世紀代に次々と作られた。出島からは、これら的高级な磁器はほとんど出土せず、商館員が私用に持ち込んだ瓶や薬壺などの炆器、ファイアンス陶器が

主体を占める。デルフト陶器やラインラントの炆器類は、舶載された数量が少ないため、日本の一部の有力者や趣味人の手に渡り、丁重に取り扱われてきた。このため、遺跡からの出土点数や伝世品の例が少ないにもかかわらず、注目度が高く、研究事例も多い傾向にある。

19世紀代に出土数が増加する銅版転写陶器は、商館内部で用いられる製品でありながら、日本国内にも輸入されたことが知られている。出島出土資料は、同一の絵柄で皿や蓋物、鉢、手付きの瓶などがあり、テーブルで使用する食器のセットとして持ち込まれていたことが分かる。これらの陶器は、商館員の毎日の食事で使われていたが、西洋の風景や人物を描いた陶器は日本人にも好まれ、阿蘭陀渡りとして、日本国内に広まった。プリントウェアは、ヨーロッパの文物を好む大名や豪商などにとっては、憧れの品々であった。このため19世紀になると、脇荷物の一つとして、これらの商品が取り扱われるようになった。とくに、19世紀中頃になると、盛んに日本国内に持ち込まれ、現在もその頃の箱書きを持つ製品が日本国内に伝世している。本来は、大きくイギリス製とオランダ製に分かれるが、当時の箱書きには総じて「阿蘭陀」と記され、イギリス製であってもオランダを示す「阿蘭陀」、「和蘭」、「和蘭陀」、「おらんだ」、「紅毛」などの墨書が見られる。これは陶器に限らず、当時一般の日本人には、ヨーロッパ諸国の区別がなく、輸入陶磁器が唐と阿蘭陀という区別しかなかったことを示している。銅版転写陶器をはじめとする19世紀の西洋陶器は、製作年代が新しいこと、大量に生産された廉価品であることから重要度が低く見られ、近年まで調査研究の対象とされる機会が少なかった。しかしながら、出島からは多くの西洋陶器が出土し、また江戸時代後期以降に国内に多く伝世する背景を鑑み、出島研究では先駆的にこれらの分類、鑑定を行い、その位置付けを行ってきた(岡2002・2008・2010)。近年は、幕末から明治時代に相当する居留地の発掘調査が各地で進み、近代遺跡が調査対象として広く認識されるなか、西洋陶器についても学術的な調査研究が蓄積されつつある。

(2) 棹銅が通った道

江戸時代、日本国内の銅山で産出した銅は、大坂に集められ、この地の銅吹所で精錬、铸造され、国内向け製品及び海外輸出品として日本各地、または世界市場に供給された。このうち海外との貿易用に供給された銅は、長崎から中国、オランダの貿易船によって、アジア、ヨーロッパの市場に輸出された。出島の銅貿易は、銅の輸出禁止が解かれた正保3年(1646)から始まり、17世紀後半には200万斤を超える輸出量となる年もあったが、18世紀には100万斤という決められた輸出量の中で推移した。日本銅は、インドのベンガル、コロマンデル、スラット地域に最も多く輸出され、次いでモカ、ペルシャの中東、さらにヨーロッパへその一部が送られた。

長崎へ運び込まれた棹銅は、五島町泉屋の蔵から出島島内に船を利用して搬入された。この様子は、石崎融思筆『唐蘭館絵巻』に描かれている。参照すると、出島中央に位置する表門の前面に広がる橋台側面に、舢で銅を搬入するための石段が設置されている。そこから、木箱に収められた棹銅が担ぎ入れられている。表門を通過すると、出島のほぼ中央に位置する銅蔵に保管される。

出島から輸出された棹銅は、主にアジアの市場で取引され、硬貨や建具、あるときは仏像の材料として使われた。また、ヨーロッパでも戦争等によりヨーロッパ内の流通が途絶えた折に、アジアから日本銅が持ち込まれ、硬貨や武器、船舶、調理器具などの様々な製品に形を変えた。なかでも最も重要な製品が、オランダ東インド会社が铸造した硬貨である。当時オランダ東インド会社が製造した貨幣は東インド会社の交易圏に広く流通していた。出島から出土したオランダ製硬貨は、数種が確認されている(櫻木2008)。

江戸時代の日本銅は、国内はもちろんのこと、世界においても貨幣経済を支え、今につながる経済活動の一翼を担ったと言えよう。また国内的には、銅産業の発展がその後の近代化につながる基盤事業の一つとなり、我が国の国力を延ばす契機となったことがうかがえる。

まとめ

肥前磁器、西洋陶器については、交易品そのものとしての物資流通を基点として、その後の模倣品の生産が大きな観点として挙げられる。オランダ商館からの注文を受け、肥前磁器で生産されたヨーロッパの生活様式に合わせた製品の数々、西洋陶器への憧れからその様式を真似て国内で製作された阿蘭陀焼など、流通、文化交流、混合という流れが見えてくる。この相互に渡る影響が、出島が果たした役割のひとつであろう。また、これらの肥前磁器、西洋陶器については、伝世資料が多く、出土資料の類品を発見し、実際の流過程を追うことも可能である。肥前磁器については、ヨーロッパの宮殿、邸宅の陳列資料、博物館所蔵資料、里帰り品の調査が専門家諸氏によって行われ、流通の過程が明らかにされている。19世紀代の西洋陶器も国内の伝世資料が多く、日本における蘭癖趣味の有り様や国内市場の捉え方、また幕末から明治時代の外国人の流入について、大きなヒントを与えてくれる資料となりつつある。本稿では取り上げることが出来なかったが、ヨーロッパ製のガラス製品についても、西洋陶器と同じく、出土資料と伝世資料の比較が可能であり、また輸入品の見本一覧帳などから、舶載されたガラス器の器種、器形がわかり、物資流通の実態へのアプローチが可能な資料である(岡2002・2008・2010)。出島以外の国内近世遺跡からの出土事例は少ないが、貴重品ゆえに語られる背景があることが報告されている(幸田町教育委員会2017)。

最後に、前項に記載した棹銅については、「銅の道」が提唱されており、産銅(別子銅山等)、精銅(大坂)の産地はもちろんのこと、大坂から九州に至る運輸業、保険業、瀬戸内海境界の宿泊業、出島から海外へ輸出された後の棹銅の行方と製品に加工されるまで、多くの人々の手を介し、世界経済の潮流の中に位置付けられる。国内を見ても、銅の輸出に関わる様々な生業があり、ひとつの貿易品がそれを産出する藩と関わりのある諸藩及び国内経済に及ぼす影響を確認する好例である。その他の貿易品についても、同様に、物資流通の背景には大きな産業や経済の基盤があり、出島の中継貿易が形成されていたことがうかがえる。出島の出土資料から、国内外に通じる道が浮かび上がってくる。

参考文献

- 岡泰正2002「出島・食卓の情景」『国指定史跡出島和蘭商館跡』長崎市教委pp.151-186
岡泰正2008『国指定史跡出島和蘭商館跡』第2分冊長崎市教委pp.1-41,pp.42-54
岡泰正2010『国指定史跡出島和蘭商館跡』長崎市教委pp.277-312,pp.313-320
幸田町教育委員会2017「松平忠雄墓所出土祝婚青色ガラス杯調査報告」幸田町社寺文化財調査報告第3集
櫻木晋一2008「出島出土の銭貨」『国指定史跡出島和蘭商館跡』長崎市教委pp.98-107
長崎市出島史跡整備審議会編1987『出島図』中央公論美術出版
山口美由紀2008『長崎出島 甦るオランダ商館』日本の遺跡28 同成社
山口美由紀2013「日本出土のヨーロッパ陶磁」『陶磁器流通の考古学』pp.277-299 高志書院
山口美由紀2014「出島和蘭商館にて使用された陶磁器の様相」『東洋陶磁』VOL43pp.63-73
山口美由紀2015「出島和蘭商館跡出土の貿易陶磁」『中近世陶磁器の考古学』第1巻pp.121-149 雄山閣
山口美由紀2016「出島銅蔵跡の発掘調査と棹銅に関する考察」『広島大学考古学研究室50周年記念論文集・文集』広島大学考古学研究室

第12章 「対馬口」と日本人 —草梁倭館船滄周辺遺跡出土遺物にみる対馬人の暮らし

片山 まび (東京藝術大学)

はじめに

今回の研究により北海道・沖縄・長崎・対馬と現地を訪問しつつ感じたことは、当たり前かもしれないが、「四つの口」は日本人(和人・倭人)と国外の人々・モノ・情報が交錯した「場」であったという実感である。その「場」という観点から見ると、「対馬口」は対馬島内にとどまらず、その外交施設である倭館が置かれた釜山および慶尚南道南海岸もその範疇に含まれるであろう。倭館とは韓半島におかれた日本人の宿泊施設であり、その歴史は高麗時代、金州(現・金海)の客館にまでさかのぼる。朝鮮時代(1392～1897年)が始まるとすぐに薺浦・塩浦・釜山浦に倭館が置かれ、豊臣秀吉の朝鮮侵略後には絶影島倭館(現・釜山広域市影島区)に臨時の倭館が開かれた。1607年には豆毛浦(同市東区水晶洞)に正式な倭館が置かれるが失火により焼失し、1675年3月から1678年4月にかけて草梁(同市中区龍頭山周辺)に約1万坪の倭館が誕生した。朝鮮王朝にとって倭館とは倭人の統制と監視を行う警戒領域であり、日本にとっては朝鮮の文物と情報が伝えられる「場」であった。「四つの口」には出島や琉球館など倭館に等しい「場」が存在するが、こと物質文化においては倭館固有の特色に二点が挙げられる。ひとつは倭館窯(釜山窯)や瓦窯のような本格的な生産施設があったこと、もうひとつは海外における日本人の暮らしの「場」という性格である。そこで本稿では他の口との比較のために、2018年に新たに発見された草梁倭館船滄周辺遺跡出土の遺物に見られる倭館における対馬の人々の暮らしに焦点をあててみることにしたい。

草梁倭館に対する発掘調査については、羅東旭・福泉博物館館長による鷹匠屋敷調査が嚆矢であり、倭館窯の茶碗片が1片採集された。同氏と筆者は2018年8月22日に共同調査を行い、船着場推定地より肥前磁器等を採集したほか、堆積を確認した。同年、当地について同氏をはじめ釜山博物館文化財調査チームによって立会調査が行われ、貝や骨を除く512点の遺物の発見と層位確認がなされた。本調査は草梁倭館に対する初めての本格的な発掘調査と言え、きわめて重要な意義をもつ。その成果は概要報告(羅・片山2018)を経て、筆者が報告書作成中にあるが、コロナ禍のため渡釜が不可能となり、データについては変更される可能性があることをあらかじめお許しいただきたい。

1. 遺跡の調査概要

調査地は大韓民国釜山広域市東光洞1街6番地(東光洞海関路11)に位置する。倭館のうち東館の域内に相当し、看守家から開市大庁を過ぎ、中央洞大路へとつながる道の南側にあたる。古地図と照合すると、船着場北の防波堤の起点からやや入った場所とみられ、羅東旭氏は「草梁倭館絵図」、「釜山和館竣工図」(対馬歴史民俗資料館蔵)などとの比較から、調査地は東館の船滄地域のうち、表老頭屋、もしくは別目付屋の付近であり、防波堤の石築との間の空き地としている(羅・片山2018)。調査地は西側の建物を基準として東西距離約5mほどの元の地形が残されており、東端では地表から約2.6mの地点で地山が確認された。全体の層位は西から東に傾斜面をなす。以下、羅東旭氏の報告に従って詳細を述べる。

I層：現代の攪乱であり、西側上の一部のみ確認された。

II層：20～40cmの明褐色層である。陶片は確認されておらず、一部に瓦が含まれる。北に礎石を造

成しつつ、一部に自然石と砂土、25cm前後の自然の割石によって埋められている。出土瓦は朝鮮瓦と日本瓦である。朝鮮瓦はおおよそ厚さが1.5～3.0cmで、胎土には0.05～0.2mmの黒色や白色の砂粒が含まれており、文様は直線文、斜線文、集線文、長方形集線文が施された瓦が採集された。これらの瓦の年代はおおよそ18世紀以後に相当する。

Ⅲ層：8～10cmの赤黄色層である。遺物は検出されず、西は現代の攪乱層によって断絶している。東はⅣ層を削平しつつ入り込んでいる。

Ⅳ層：20～30cmの暗褐色層である。この層の上に薄く幅60cm、深さ10cmほどの瓦層が確認できた。遺物は11片が出土しており、そのうち陶磁器は、朝鮮白磁、甕器、倭館窯、日本陶磁、土製品などであった。年代を把握できる遺物は19世紀頃とみられる肥前の染付の杯(図12-1-2)と蓋である。

Ⅴ層：Ⅶ層を割り込み、東に石築を設置し、その中に小さな割石と黄褐色の砂土、明褐色の砂を含む粘土の混じる層である。石築の間から朝鮮甕器と日本陶器が3片出土したが、すべて細片であり、年代の判断は難しい。

Ⅵ層：石築の割石の基礎部に形成された深さ30～50cmほどの褐色層である。Ⅶ層と色相は差があるものの、東側の割石とそのなかに含まれる瓦片が固められていることから、Ⅶ層を掘り下げた別の築台か、その上にあるⅣ層から削平されたとみられる。遺物は29片出土し、そのうち陶磁器は朝鮮白磁・施釉陶器・倭館窯・日本陶磁・土製品であった。年代推定が可能な遺物は倭館窯(1678～1743年)と18世紀の波佐見の染付碗と皿(図12-1-3)である。

Ⅶ層：少量の炭と瓦、磁片が混じった40cmほどの暗褐色層である。西側が厚く、東に向かうにつれて上部からⅤ層が斜めに切り込み断絶している。陶片のほか貝や骨などが混じり、Ⅷ層以後に形成された生活層とみられる。遺物は157片出土し、朝鮮白磁(図12-1-4)・甕器(図12-1-14・15)・倭館窯(図12-1-8～10)・日本製磁器(図12-1-6・7)・日本製品陶器(図12-1-11・12)・清朝磁器と思われるもの(図12-1-5)・瓦片などが採集された。瓦は無文と重弧文、方向違斜線集線文・重弧文、曲線樹枝集線文などの朝鮮瓦のほか、日本製の棧瓦も出土した。年代を把握できる遺物は倭館窯、18世紀～19世紀初とみられる肥前磁器であり、本層もこの頃に相当するものであろう。

Ⅷ層：炭と瓦、陶片が混じった30～40cmの暗褐色層である。西側が厚く、東に向かって15cmほど薄くなる。陶片をはじめとする貝や骨、炭などが混じる。遺物は127片出土し、朝鮮白磁(図12-1-16)・甕器(図12-1-22・23)・倭館窯(図12-2-24～26)・日本製磁器(図12-1-17・18)・日本製陶器(図12-1-20・21)・土製品などである。日本製の陶器には胎土目地の唐津焼や京焼風陶器があり、現在まで知られている韓国出土の日本陶磁では最初期に相当する(図12-1-19・20)。日本磁器では17世紀中葉頃の色絵油壺と船形装飾品(図12-1-17・18)が出土し、同時期の遺物とみられる。瓦は最多であり、無文丸瓦と平瓦、縦線集線文重弧文結合式、三又重弧文重畳式、斜状集線文・重弧文結合式、上下対称樹枝集線文式瓦などが出土し、18世紀前後の釜山地域の遺跡の出土瓦に似る。年代は最下部出土の朝鮮白磁から17世紀前半頃、下限は肥前染付が皆無であることから18世紀前半頃とみられる。

Ⅸ層：地山の上の割石の一部が含まれた50cmほどの褐色砂質粘土層である。小さな割石片が含まれ、岩盤上部層の一部で朝鮮白磁と甕器の2片が採集された(図12-2-27・28)。草梁倭館造成当時の地表とみられる。

攪乱：ここでいう攪乱とは、落下や採集などによって出土位置が不確かな遺物であり、陶磁器を中心に165点が相当する。朝鮮白磁・甕器・倭館窯・肥前染付(図12-2-31)・志賀窯(図12-2-29・30)・土

製品・瓦器等がある。

そのほか日清戦争以後に肥前から対朝鮮向けに輸出された磁器(片山2011)は含まれず、本遺跡の年代は草梁倭館の建設が始まる1675年3月から19世紀前半頃までの様相を示すものであろう。

2. 遺物にみる対馬人の暮らし

従来の研究では、倭館に暮らした対馬人の生活については、文献研究を中心としており、数多くの研究成果がある。本稿では文献研究の成果に依拠しつつ、出土遺物とともに対馬人の暮らしを探ってみることにしたい。

(1) 食生活

朝鮮側は東萊府を通じて倭館に居住する対馬の人々に米などの食料品や炭などの生活必需品を無料で提供した。その料理は朝鮮の熟手が担った宴饗や茶禮などの朝鮮式料理と日本人が日常的に調理した日供であった。

1) 食料品

分析は行っていないものの、肉眼で確認できる限り、アワビやサザエ、魚や鶏などの動物の骨が10個体ほど出土した。倭館には宴会や日供用として鶏、紅蛤が提供され、このほか開市や朝市で調達した海産物もあり(沈2008・田代2011)、出土遺物はこれらの食料品との関係性をうかがわせるものである。

2) 食膳具

出土した陶磁器の449点の組成は甕器が219片(52%)、日本陶器49片・日本磁器32片(21%)、倭館窯60片(14%)、朝鮮白磁53片(12%)、その他朝鮮陶磁5片(1%)であり、甕器をのぞいて日本陶磁や倭館窯が数多く出土する点は本遺跡の特徴ともなっている(図12-3)。以下にその詳細を述べる。

① 日本陶磁

日本陶磁のうち胎土目地の唐津焼(図12-1-20)や京焼風陶器(図12-1-19)は、朝鮮時代の遺跡では出土例がない。染付は肥前もしくは波佐見と目されるが、Ⅶ層以上で出土量が増加し、18世紀後半から19世紀初頃の碗と皿が最多を占める。こうした日本製の染付は漢陽都城をはじめ釜山地域でも出土するが、出土品は朝鮮時代の遺跡から出土する特徴的な松文や三栗文の碗皿類(家田2006)ではなく、対馬や長崎市内の近世遺跡から出土する染付碗や皿に似ている。つまり出土遺物は朝鮮輸出向けではなく、対馬の人々の日常の飲食に使われたと考えるべきであろう。その理由は食生活や器の寸法に由来する。『御壁書控』には倭館居住の対馬人の日々の食事は日本人(対馬の人々)が調理した一汁三菜であったと記される(沈2008・田代2011)。しかし一般的な朝鮮白磁鉢は口径13cm前後、器高10cmほどであるが、日本陶磁の飯碗は口径10cm前後、器高7-8cm前後とこれに比べて小さく(長佐古2002)、和食には朝鮮陶磁の寸法や形が合わなかったのではないかと思われる。絵画のため限界はあるが《朝鮮図繪館守家饗宴》(京都大学所蔵)には、木製の三宝や漆器が描かれており、対馬の人々が日本の生活を維持するため器物を持ち込んだことが看取され、出土品もこうした持ち込みの品々であったと目される。

あわせて対州窯のうち「志賀」の黒象嵌と押印のある高台片1点、染付銘のある高台片が1片出土した(図12-2-29・30)。残念ながらこれらは発見日の採集片等であり、年代根拠がない。ただし黒象嵌・押印銘の高台片については見込みに針支え痕が残されている。志賀窯における窯詰め技法の変遷

は不明なもの、17世紀末から18世紀前半とされる志賀窯採集品（厳原町教育委員会2004）に比して新しく、肥前を基準とすれば18世紀末から19世紀前半頃以後となろう。志賀窯については文化10年（1813）に再興されたが、その製品には印を入れ、対馬藩はその保護育成を図るべく、安永8年から天明4年（1779～84）には「伊万里」の仕入れを禁じ、文政10年（1827）には藩庁でも一切の使用を禁じた（泉1991）。これら志賀窯片は対馬藩の保護政策と何らかの関連性を示す可能性もあろう。

②貯蔵具—甕器と石間硃

灰釉のかけられた施釉陶器、いわゆる甕器の出土片は219片と出土片のなかで最多を占めるが、口縁片を基準とするならば実際の個体数は減少する可能性がある。器種は壺、甕、瓶が大多数を占め、トウッペギ（スープ用井）が2片混じる。すべて器壁の内面に同心円状の当具痕があり、貝目をを用いる。出土様相から甕器の年代のみが他の遺物と著しく異なるとは考えにくく、およそ17世紀後半から19世紀前半頃と考えられる。

甕器の用途は液体容器とみられるが、倭館で催された宴会や日供用とされた液体には、ゴマ油、醤油、蜂蜜などがあり、開市や朝市で調達されたものもあった（沈2008・田代2011）。1729年に雨森芳洲に贈られた品物には黄酒、焼酎、清酒があり（田代2011）、酒類と甕器との関係を推定することも可能である。Ⅶ層出土の石間硃壺は「クルダンジ（蜂蜜壺）」と称されるもので、蜂蜜容器であった可能性を示す。容器の生産地別の比率を見ると、朝鮮の甕器と石間硃は全体の224片（76%）を占めるのに対し、日本の陶器製の容器は18片（23%）と圧倒的に朝鮮甕器が大多数を占める。これは調味料や酒類が現地で調達されたという史料を裏付ける物証と言えよう。

③調理具—日本陶器と土製調理具

調理具では、肥前産を中心に播鉢が13片出土している。Ⅷ層では17世紀後半から18世紀前半の口縁にのみ施釉し、口縁が玉縁形をなす型式の肥前播鉢が出土する。Ⅷ層でもⅦ層に近い上部、Ⅶ層では18世紀後半から19世紀の口縁の下に段をなし、総釉の肥前播鉢が出土し、生産地での推移と一致する（図12-1-11）。播鉢は韓国陶磁にはない器種であり、前述の肥前陶磁と同様、日本食のために対馬から持ち込まれた品々であろう。そのほか土製鍋、ほうろくの底片も発見され、年代や窯は不確かであるが、これらも調理の目的のため対馬から搬入されたとみてよからう。

(2) 宗教生活

倭館では東向寺が置かれ、施餓鬼、盆などの行事が行われた（朴2017）。これらの仏事との関連を思わせる遺物は、暗緑褐釉陶器の香炉であり、内側面には灰の痕跡が残されていた（図12-1-21）。生産地を特定はできないが、肥前の香炉と比較的似た型式をとり、仏事に用いられた可能性をうかがわせる。

(3) 茶陶—朝鮮白磁鉢

朝鮮白磁の生産地は胎質や目跡などの特徴から慶尚南道地方と見られるが、窯跡までは断定できない（図12-1-1）。対馬・今屋敷家老屋敷跡SD02でも本遺跡と同様の朝鮮白磁鉢が出土しており（長崎県教育委員会2004）、こうした朝鮮白磁鉢が何らかの目的で流通していたことがわかる。その手がかりとなる資料に、対馬に以酌庵として僧侶を派遣した京都・建仁寺、正傳永源院寺に伝わる白磁鉢がある。これは本遺跡出土品とほぼ同じ形式の白磁鉢であり、数茶碗として今日まで伝わっている（正傳永源院2000）。史料においても倭館窯がすでに終わった1805年に以酌庵の僧侶が茶碗類100個を注文した記録があり（池内2017）、単なる食器ではなく日本に茶碗として流通した可能性を考える必要があろう。そのほか煎茶用の火炉と目される土製品の一部が出土している。

(4) 住居と生産

①瓦

瓦は63片出土し、他の遺物と同じくⅦ層、Ⅷ層に集中している。倭館の家屋には朝鮮式の建物と対馬の人々が建てた日本式の建物があった。朝鮮式の建物は東西の大廳や館守家など格の高い建物であり、日本式の建物はそれより下る建物とされた。羅東旭氏の考察によれば、出土した瓦は朝鮮後期(18・19世紀)の城郭出土の瓦と型式が似ており、他の遺物とほぼ同じ年代観を示す。倭館で用いられた瓦は朝鮮側が準備し、築造当時は金海の燔造所で焼かれた。1689年以前頃からは倭館近く、通称、坂の下で瓦を焼くようになり、不足する場合には巨済島から調達したとされる(木村2014)。このたび出土した朝鮮瓦の生産地については、倭館、金海、巨済島の可能性があることになる。いっぽう日本製の棧瓦については年代、生産地とも不確かであり、検討が必要である。一部の瓦には被熱痕があるが、火災以外の要因も考えられ、倭館の火災記録と結びつけて考えることは避けておきたい。

②倭館窯

倭館窯とは、大名などの日本人の注文を受けて対馬藩が茶陶を焼かせた倭館内の窯のことである。過去には釜山窯とも呼ばれてきたが、釜山広域市内でも青磁窯などの発見が続いている現在、倭館窯と改めたほうが良いと考える。倭館窯の製品は60片以上と多数検出され、本遺跡の特色ともなっている。碗がほとんどを占め、御本三島(図12-2-25)、御本雲鶴、青磁水指(図12-2-26)などがある。1片は耐火土目を用い(図12-1-9)、豆毛浦倭館、もしくは草梁倭館の草創期に製作されたとみられるが、そのほかは露胎とし、草梁倭館で焼かれたものであろう。匣鉢片(図12-1-10)が出土することから、日本への搬出の過程で欠損したと言うよりも、窯の廃棄品と考えられる。草梁倭館窯の位置は龍頭山麓、光復洞2街のロイヤルホテルの場所にあったと目されるが、本遺跡からは直線距離にして約250m離れており、出土経緯については検討が必要である。ただし倭館の修理の際に多くの土を龍頭山麓から掘削され、その採掘地はまさしく倭館窯の近くを流れていた中川であった(木村2014)。この土が東館の修理に使用されたという記録もあり、工事に伴う土の移動による可能性を指摘しておきたい。

③加工具

本遺跡から出土した陶磁器は全体に小片が多い。断面を観察すると、日本製の染付はほとんど、そのほかの陶片についても断面が摩耗していたり、外面の一部を打ち付けたような痕があるなど、二次加工され砥石などに転用されている。甕器にも小さな釘頭を打ち付けたような痕や断面に摩耗痕がある。朝鮮時代の生活遺跡の出土片ではこうした二次加工痕の報告例はないが、日本の中近世遺跡では二次加工された陶片はごく一般にみられるものであり、対馬の人々が日本の生活風習を持ち込んだことがうかがわれる。

④炭と炉

本遺跡の特徴のうちのひとつに、炭が大量に出土したことが挙げられる。これに比して瓦のごく一部を除き、遺物に被熱痕は皆無とあってよく、炭は火災以外の原因によるものであろう。倭館では朝鮮から宴会や日供用に柴炭が支給され、1日に支給される柴炭は8石(俵)8斗80束であったとされ(チャン2017)、これらは柴炭を使用した後に生じた炭ではないかとみられる。このほか火鉢、もしくは手あぶりとみられる日本製の土製品や瓦器の小片が出土している。いずれも形を復元できるほどの資料はないが炭との関連を思わせる。

(5) 貿易

長崎には対馬藩の蔵屋敷があり、対馬藩は長崎奉行との密接な結びつきを持った。朝鮮から対馬を経由して長崎へは公貿易による木綿、私貿易による海産物が渡り、長崎からは丹木、胡椒、明礬などが朝鮮に渡った。今回の調査では長崎の現川碗(図12-1-12)が出土し、長崎・対馬・朝鮮の関係を具体的に示す物証を得ることができた。いっぽう肥前や波佐見、また清朝磁器とみられる皿もやはり長崎経由でもたらされたものであろう。

おわりに

以上、本稿では草梁倭館船滄周辺遺跡から出土した遺物をもとに、倭館における対馬の人々の暮らしの一端を探ってきた。肥前・波佐見・現川などの碗皿や播鉢は対馬の人々の食生活に用いられ、長崎を経由して対馬に持ち込まれた品々がさらに対馬の人々に伴い搬入されたものとみられる。いっぽうで朝鮮の甕器は朝鮮側から供されるか、市で購入された酒や調味料用の貯蔵器と目され、文献史料と同じく調味料や酒は現地で調達し、日常の食事は日本式であったことが裏付けられた。倭館窯の製品や瓦片は倭館独自の特色ともいえる本格的な生産活動を物語るばかりではなく、工事や修理に伴う土の移動という別の生産活動を示唆している。これらの遺物により倭館の中の暮らしが立体的に立ち上がってきたといえるが、現時点では比較対象がなく、今後の調査が待たれる。さらに移動する人々の本来の居住地から持ち込まれた食器と在地の食膳具、貯蔵器との関係については、出島など他の「四つの口」との比較スケールとなることが期待されるが、この問題については今後の課題としたい。

本稿の内容は2019年10月に釜山博物館で行った「草梁倭館の遺物にみる対馬人の暮らし」をもとに大幅な改稿を行ったものであり、図版は転載である。研究代表者としてご尽力をいただき、お声がけをいただきました渡辺芳郎先生をはじめ、貴重なご意見を賜りました参加者の先生方、金尹姫先生、羅東旭館長に心より厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 家田淳一2006「江戸中・後期の伊万里の朝鮮貿易」『日本海域歴史大系』5 清文堂
- 池内敏2017『絶海の碩学 近世日朝外交史研究』名古屋大学出版部
- 巖原町教育委員会2004『志賀窯跡－対州焼採集遺物－』
- 泉澄一1991『近世対馬陶窯史の研究』関西大学出版部
- 片山まび2011「1870～1920年代に韓国に輸出された日本産業陶磁－生産地を中心として－」『東大門運動場遺跡』pp.297－306 中原文化財研究院〔韓文〕
- 木村和代2014「草梁倭館の修理・改建における資材調達」『史学』83 pp.127-162 三田史学会
- 沈致廷2008「18世紀倭館での倭使飲食費と様相」『歴史と経済』66 pp.93-116 釜山慶南史学会〔韓文〕
- 正傳永源院2000『正傳永源院寺寶』
- 田代和生2011『新・倭館-鎖国時代の日本人町』ゆまに書房
- チャン・スンスン2017「草梁倭館の成立と運営」『草梁倭館 交隣の視線から許す』pp.228-236 釜山博物館〔韓文〕
- 長崎県教育委員会2004『今屋敷家老屋敷跡－都市計画道路巖原豆酸美津島線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』
- 長佐古真也 2002 「「お茶碗」考 江戸における量産陶磁器の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』94 pp.61-82 国立歴史民俗博物館
- 羅東旭・片山まび2018「草梁倭館推定船滄周辺出土遺物に関する調査概要」『博物館研究論集』24 pp.137－186 釜山博物館〔韓文〕
- 朴花珍2017「看守家日記にあらわされた倭館生活」『草梁倭館 交隣の視線から許す』pp.264-279 釜山博物館〔韓文〕

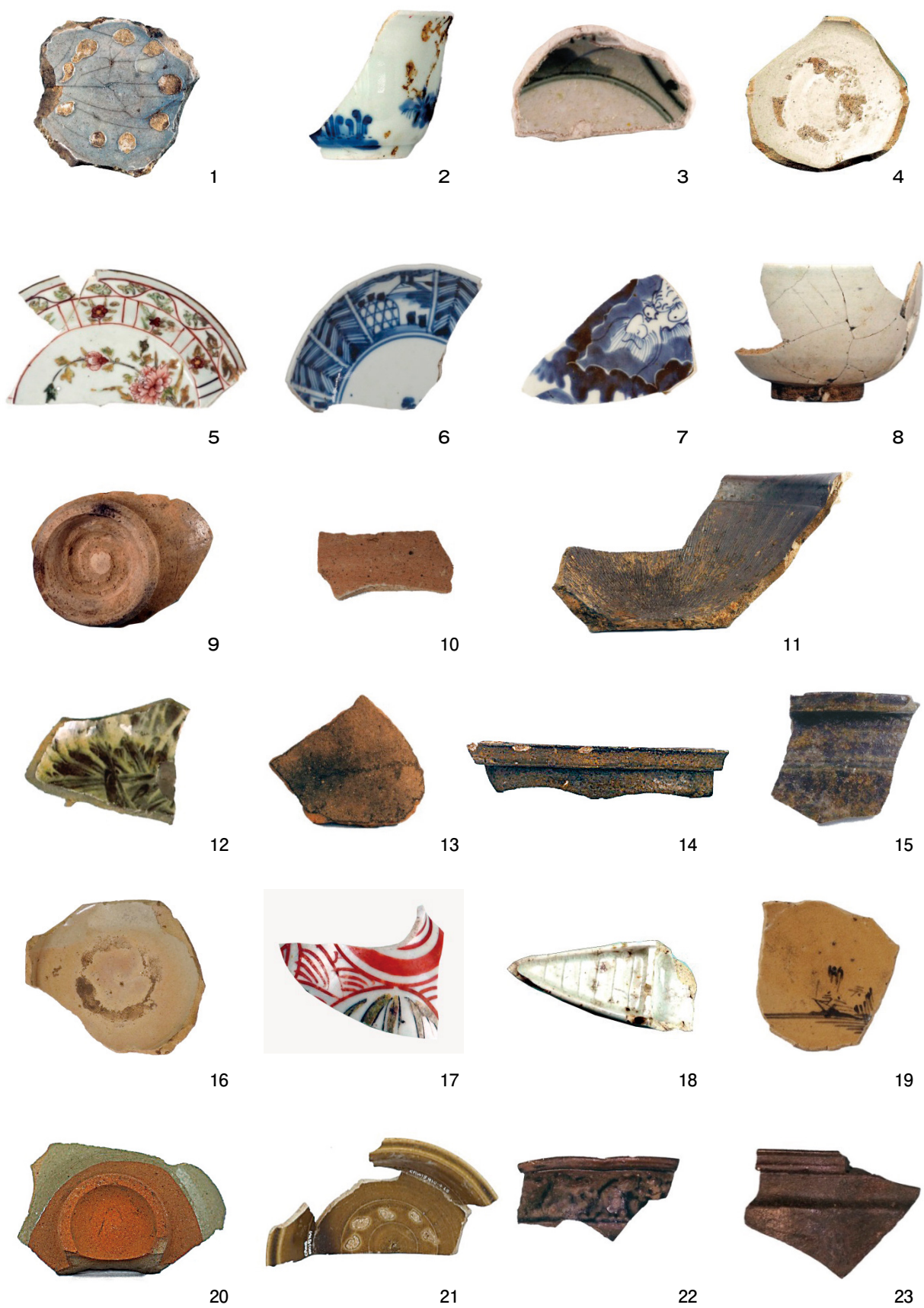


图 12-1 草梁倭館船滄周边遺跡出土陶磁器 (1)

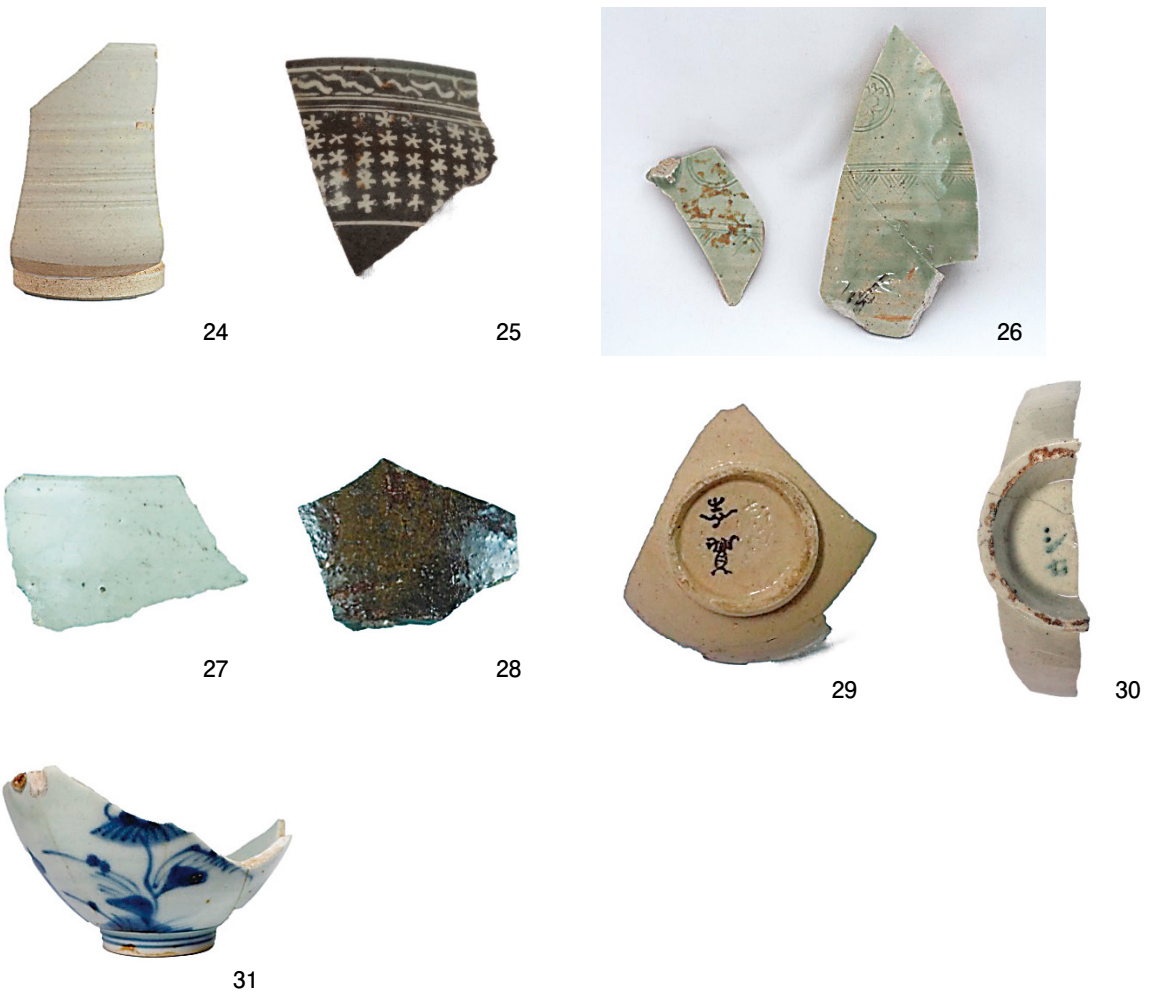


図12-2 草梁倭館船滄周辺遺跡出土陶磁器 (2)

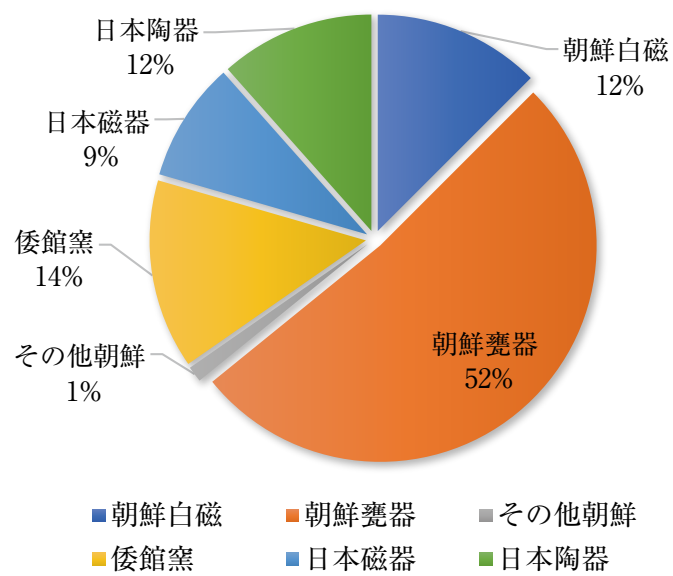


図12-3 草梁倭館船滄周辺遺跡出土陶磁器組成

はじめに

慶長14(1609)年の島津氏の琉球侵攻により、琉球王国は中国王朝(明・清)との冊封体制は維持しつつ存続しながら、同時に日本の幕藩体制に組み込まれ、奄美群島は薩摩藩の直轄地となった。また徳川幕府による海外との接触・交易が「四つの口」(長崎・対馬・松前・琉球)に限定されることにより、南西諸島をめぐる交易は、中世におけるさまざまな勢力による多元的・流動的なそれから、統一権力による統制的・安定的なそれへと変化した。そのような状況下、南西諸島においてどのような陶磁器が、どのように流通したかが筆者の関心の一つである。

筆者はこれまでトカラ列島における考古学的分布調査などを通じて、近世南西諸島の陶磁器流通が、「北からの流れ(肥前陶磁器・薩摩焼などの本土産陶磁器)」「南からの流れ(琉球を介しての中国産磁器(清朝磁器))」「島嶼域内での流れ(沖縄壺屋産陶器など)」の3つの流れによる三層構造を形成していたことを指摘した(渡辺編2015、渡辺2018aなど)。本稿では、その後の調査研究成果を加え、また先行の研究蓄積¹⁾を踏まえることで、近世南西諸島の陶磁器流通について、流通の性格という別の角度から議論をすることを目的とする。

陶磁器流通の性格として以下の5種類がある。

- (1) 商品としての流通：陶磁器そのものが売買の対象として流通するもので、その規模に大小はあれ、もっとも多かったと考えられる流通。
- (2) 容器(コンテナ)としての流通：陶磁器そのものが売買の対象ではなく、酒や油などを運ぶため、それらを入れる甕や壺が容器(コンテナ)として付随的に流通する場合。
- (3) 政治的アイテムとしての流通：将軍家や藩主などへの献上(進上)品や下賜(拝領)品、また大名同士での贈答品として流通。
- (4) 生活用具としての携行品：船乗りなどが自分たちで使う日用品として陶磁器を携行する場合。
- (5) 偶発的機会による流通：漂着船の搭載品などが流通する場合。

ただし(1)と(2)の区分は難しい。食膳具(碗・皿など)や調理具(摺鉢など)は前者の可能性が高く、甕や壺などの貯蔵具は(1)(2)両方を含む場合がある。ここでは両者を一括して検討する。取り上げる資料は遺跡からの出土品などの考古学資料と、旧家などに残る伝来資料である(図13-1)。

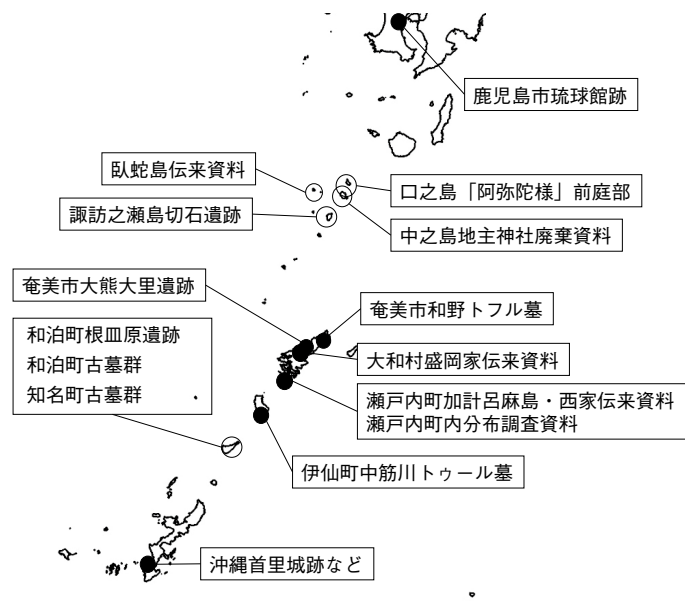


図13-1 本章で扱う資料関係地図

1. 商品／コンテナとしての流通

(1) トカラ列島

① 諏訪之瀬島切石遺跡（熊本大学考古学研究室編1994、大橋・山田1995）

切石遺跡では配石・積石遺構、土坑よりなる祭祀遺構が検出されており、土坑内部から138個体の陶磁器と16個体の土師器皿（灯明皿）が出土し、陶磁器について周辺出土例も含め148個体が報告・検討されている。14世紀中葉から18世紀の

表13-1 切石遺跡出土陶磁器一覧（大橋・山田1995を元に作成）

時期	年代	点数	内容
I期	14世紀中葉～15世紀中葉	9	中国青磁(8)、中国白磁(1)
II期	15世紀後半～16世紀中葉	19	中国青磁(5)、中国白磁(10)、中国青花(4)
III期	16世紀後半～17世紀初	21	中国青花(12)、ベトナム青花(2) 瀬戸美濃(3):天目碗(1600-30)(3) 肥前陶器(4):胎土目灰釉皿(1590-1610)(1)、灰釉碗(1600-30)(2)、同(1610-30)(1)
IV期	1610年代～1660年代	33	肥前陶器(18):口縁外反り灰釉碗(1610-30)(4)、砂目灰釉溝縁皿(1610-30)(4)、砂目灰釉皿(1600-30)(1)、砂目象嵌皿(1610-40)(1)、砂目銅緑釉施文皿(1610-40)(2)、鉄釉碗(17c前半)(1)、鉄釉碗(1630-40)(2)、同(1630-40)(1)、同(1630-50)(1)、同(1640-70)(1)、肥前磁器(15):染付皿(1640-50)(2)、白磁陽刻文皿(1640-50)(1)、白磁口鏝碗(1640-50)(2)、染付山水文碗(1640-60)(7)、染付山水文「大明」銘碗(1640-60)(3)
V期	17世紀後半～18世紀前半	26	肥前陶器(15):銅緑釉内野山碗(17c後半-18c初)(3)、同(17c後半-18c前半)(2)、蛇の目釉剥き内野山皿(17c後半)(5)、刷毛目碗(1690-18c前半)(4)、同(18c前半)(1)、薩摩焼(11):白薩摩碗(3)、深皿(6)、丸形碗(2)
VI期	18世紀(～1813)	40	薩摩焼(40):龍門司白化粧土碗(40)

中国磁器、ベトナム磁器、日本（瀬戸美濃・肥前・薩摩）陶磁器が出土しており、その下限は文化10（1813）年の御岳噴火による全島避難に設定できる（表13-1）。

切石遺跡出土の近世陶磁器の特徴として、いずれも完形率がきわめて高いこと、器種が碗・皿（鉢）に限定されること、また同一器形・法量・文様を有する組物と推測されるものが含まれる点などが挙げられる。完形率の高さと器種の限定は、これらの陶磁器が奉納品的性格を有していた可能性を示唆する。また高台置付や碗内底部に使用痕・摩耗痕などがほとんど見られないことから、未使用に近い状態で奉納されたのではないかと考えている（渡辺編2015、渡辺2018a）。

② 口之島「阿弥陀様」前庭部発掘調査資料（本報告）

近世の本土産陶磁器には、17世紀のものとして肥前産染付磁器や陶器の摺鉢片がある。また18世紀の肥前産染付磁器碗（丸文）、薩摩焼苗代川産の摺鉢、18世紀末～19世紀初頭の薩摩産の染付雪持笹文半筒碗がある。19世紀の陶磁器には薩摩焼龍門司産の鮫肌釉陶器片、苗代川産の甕口縁がある。ただし両者ともに近代まで下る可能性もある。その他の陶磁器として、沖縄産の無釉陶器（荒焼）の甕胴部片や三足香炉の底部があるが、後者は推定の域にとどまる。また明治27（1894）年に十島村平島に漂着した中国船に搭載されていたと推測される清朝青花磁器片（新里2016）もある。

③ 中之島地主神社廃棄資料（Shinzato 2020）

中之島の地主神社拝殿が建て替えられた際に、旧拝殿に所蔵されていた陶磁器の一部が廃棄された。ほぼ完形に近い陶磁器12点で、日本の中世に該当する陶磁器が6点、近世のものが6点ある。後者は中国産磁器として、漳州窯産青花碗（16世紀後半～17世紀）、徳化窯系白磁小碗・碗（ともに18世紀後半～19世紀）があり、本土産陶磁器として、肥前染付碗2点（17世紀後半）、瀬戸産碗（18世紀）がある。瀬戸産碗の高台内には卸皿様の櫛目が付けられている。これらも未使用のまま神社に奉納され、伝来していたものと推測される。

④ 臥蛇島伝来資料（渡辺編2015）

臥蛇島は1970年に全島民が離島し、現在は無人島である。臥蛇島に伝来していた陶磁器類が十島村歴史民俗資料館（中之島）に収蔵、展示されている。展示資料40点のうち中国や東南アジアなど海外産陶磁器が18点、近世本土産陶磁器が21点、不明1点である。中世貿易陶磁は亀井明徳が検討し

ている(亀井1993)。近世本土産陶磁器の内訳をまとめると表13-2になる。これらの資料は、完形率が高いこと、使用痕跡が見られないこと、同じ器形・文様の器種が2あるいは4個体セットになっていることが特徴として認められる。このことは先に検討した切石遺跡出土近世陶磁器と同じである。長嶋俊介によれば、これら臥蛇島伝来資料は同島の八幡神社関係の文化財であるという(長嶋2009 p.120)。やはり日用品としてではなく、最初から奉納品として入手された可能性が考えられる。

表13-2 臥蛇島伝来陶磁器(渡辺編2015より)

	名称	生産地	点数	年代	備考
陶器	天目碗	肥前	2	17世紀前半	
	銅緑釉碗	肥前内野山	2	17世紀後半～18世紀前半	筒碗に近い形状
	銅緑釉碗	肥前内野山	4	17世紀後半～18世紀前半	丸碗
	碗	薩摩龍門司	2	18世紀前半	灰白色胎土、総釉、蛇の目軸剥ぎ
	碗	薩摩龍門司	2	18世紀後半以後	赤色胎土、白化粧土掛け
	皿	薩摩龍門司	1	18世紀後半以後	飛びガンナ、白化粧土
磁器	瓶	薩摩龍門司	1	18世紀後半以後	飛びガンナ、白化粧土、褐釉流し掛け
	染付笹文碗	肥前	2	19世紀	
	染付格子文碗	肥前	4	19世紀前半～中頃	
	染付松文瓶	肥前	1	19世紀	

⑤分布調査

2011～13年にかけてトカラ列島の分布調査を実施し、その成果はこれまで何度か報告している(渡辺編2015、渡辺2018aなど)。トカラにおける近世陶磁器の流通様相は以下のようにまとめられる(表13-3)。食膳具は肥前陶器(17～18世紀前半)と磁器(17～19世紀)、薩摩の加治木・始良系、龍門司製品(18世紀後半～)、さらに19世紀には薩摩磁器が加わる。貯蔵具や調理具は苗代川製品が主体であり、沖縄産の荒焼・上焼が流通していた。このような様相は、これまでに明らかになっている近世鹿児島の本土地域のそれ(橋口2001、渡辺2001)と類似し、トカラにおける本土産陶磁器の入手先は鹿児島本土地域であった可能性が高い。中国産磁器は17世紀から19世紀にかけて、数は少ないながら継続して流通していた。また京焼色絵陶器や中国の色絵磁器は、その所有者が島における有力者である可能性が推測される。

表13-3 トカラ列島採集陶磁器(渡辺2018aより)

	本土産陶磁器			沖縄陶器	中国磁器
	薩摩焼	肥前陶磁	その他		
口之島	苗代川甕(17c) 苗代川摺鉢(18～19c) 苗代川土瓶蓋(18c後半～) 苗代川鉢・甕(19c) 龍門司飛びガンナ皿(18c後半～) 染付半筒碗(18c末～19c初)	砂目陶器碗(17c初頭) 染付香炉(19cか)		荒焼徳利・摺鉢(近代) 上焼土瓶把手(近代)	青花碗(16c末～17c初) 青花小杯(18～19c) 青花碗(18c) 色絵碗(18c)
中之島	苗代川陶器摺鉢(18c) 苗代川土瓶(18c後半～) 加治木・始良陶器碗(18c後半～) 染付唐草文蓋物(19c)	刷毛目陶器碗(17c後半～18c前半) 染付香炉(19cか) 波佐見染付丸文碗(19c中頃) 染付八角鉢(18c末～19c中頃)		荒焼徳利(19c)	青花蛇の目軸剥ぎ皿(16c末～17c初) 青花端反碗(17c初) 青花小杯(17c) 青花碗(18c) 青花鉢(18c)
(伝臥蛇島)	龍門司碗(18c) 龍門司皿(18c) 龍門司瓶(18c)	陶器天目碗(17世紀前半) 陶器銅緑釉碗(17c後半～18c前半) 染付笹文磁器碗(19c) 染付格子文磁器碗(19c前半～中頃) 染付松文磁器瓶(19c)			
平島	苗代川陶器摺鉢(18～19c) 苗代川土瓶(18c後半～) 加治木・始良陶器せんじ碗(18c前半～中頃) 加治木・始良陶器碗・小皿(18c後半～)	陶器銅緑釉碗(17c後半～18c前半) 染付磁器皿(17c前半) 染付磁器皿(18c後半)			青花小杯(18～19c) 青花碗・皿(19c)
瀬訪之					青花碗(19c)
悪石島	苗代川陶器甕(18c後半～)				青花碗(18～19c) 青花小皿(19c)
宝島	苗代川陶器甕(19c～) 苗代川陶器土瓶蓋(18c後半～) 染付半筒碗(18c末～19c初) 白磁朝顔形碗蓋(18c末～19c) 染付端反碗蓋(19c中～後半)	染付蓋(18c後半)	京焼色絵陶器碗(19cか)	上焼土瓶蓋(近代)	青花脚付小杯(17c) 青花碗(18c) 青花碗・皿(19c)
小宝島		染付コンニャク印判碗(17c末～18c前半)			

(2) 奄美群島

1) 考古学資料

①奄美市大熊大里遺跡出土資料（名瀬市教育委員会 2004、本報告）

詳細は本報告第4章に譲り、そのまとめを再掲する（表13-4）。

表13-4 大熊大里遺跡出土近世陶磁器

	肥前		薩摩焼		沖縄	その他
	磁器	陶器	陶器	磁器		
食膳具	17~19c	17c~18c前半	加治木・始良:17c後半~19c 苗代川土瓶:18c後半~19c 白薩摩碗など	18c末~19c	上焼碗・土瓶など	関西系
貯蔵具			苗代川:17~19c		荒焼壺・甕	
調理具		摺鉢:17c	摺鉢:17~19c		荒焼摺鉢	

②和泊町根皿原（にいさらばる）遺跡（和泊町教育委員会 2009）

根皿原遺跡は、中世から近現代にかけての集落跡で、昭和40（1965）年頃まで根皿集落があった。2006年に農地区画事業にともない和泊町教育委員会により発掘調査されている。約2500㎡の調査地より掘立柱建物跡、石組を伴う溝状以降、大型土坑などが検出されている。

報告書によれば、出土陶磁器は総数1908点で産地を大まかに分けると表13-5になる。このうち近世を中心として一部近代を含む本土産・沖縄産陶磁器の比率は前者が522点（47%）、後者が597点（53%）となり、ほぼ半々と言える。なお輸入陶磁器には中世の中国青磁などを含む。

表13-5 根皿原遺跡出土陶磁器

	本土産	沖縄産	輸入	不明	小片	合計
破片数	522	597	351	10	428	1908
比率	27.4	31.3	18.4	0.5	22.4	

本土産陶磁器のうち凶化されたもの82点について、器種や産地で整理すると表13-6になる（産地・器種分類は報告書の記載に基本的に従ったが、一部筆者による訂正も含む²⁾）。

表13-6 根皿原遺跡出土本土産陶磁器（凶化報告資料のみ）

磁器	肥前	薩摩	合計	陶器	薩摩	肥前	他不明	合計	陶器	苗代川	加治木・始良	豎野	合計
碗	21	16	37	碗	5	3	1	9	碗		3	2	5
碗蓋	3	3	6	皿	2			2	皿		2		2
皿	4	1	5	土瓶	5			5	土瓶	5			5
鉢		1	1	土瓶蓋	1			1	土瓶蓋	1			1
合計	28	21	49	鉢	2			2	鉢	2			2
比率	57.1	42.9		甕	5			5	甕	5			5
				壺	3			3	壺	3			3
				摺鉢	5	1		6	摺鉢	5			5
				合計	28	4	1	33	合計	21	5	2	28
				比率	84.8	12.1	3.0		比率	75.0	17.9	7.1	

磁器は肥前と薩摩では薩摩がやや多い。ただし薩摩磁器は18世紀末以後の製品である。肥前製品としては17世紀後半の荒磯文鉢が出土している。荒磯文鉢は主として東南アジア向け製品で沖縄などでも多く出土しており（大橋2003、新垣2009・2018）、その流通傾向に一致するものと言える。薩摩と肥前で器種的な大きな差異は見られない。

本土産陶器には肥前と薩摩が見られる。ただし肥前は内野山窯産銅緑釉碗と17世紀段階の摺鉢に限定され、大部分は薩摩産である。薩摩産陶器のうち、より詳しい産地で見ると、碗・皿は加治木・

始良系と龍門司製品であり、それ以外の土瓶、甕壺類、摺鉢などは苗代川産である。この傾向は本土における傾向と一致する。豎野窯産と思われる白薩摩製品も2点あるが確定が難しい。

沖縄産陶器には上焼（施釉）と荒焼（無釉）があるが、出土点数としては後者が7割を占める（表13-7）。これは荒焼が甕や壺などの大型品が多いことから破片が多くなった影響も含んでいる。上焼の器種は碗・土瓶・酒器・甕壺類が見られる。報告書によれば碗のうち、フィガケを行う灰釉碗が小片を含め144点を数える。年代的には17世紀後半～18世紀に比定され、沖永良部が薩摩藩の直轄地になって以降も、沖縄との物資流通が継続していたことを示唆する。また胴部下半で鋭く屈曲する瓶や、「油壺」と呼ばれる、褐釉をかけた四耳壺などは沖縄で多く見られる器種であり、近代に下るものも含む可能性はあるが、やはり沖縄との流通を示唆する資料である。

表 13-7 根皿原遺跡出土沖縄産陶器

	施釉	無釉	合計
破片数	169	428	597
比率	28.3	71.7	

③分布調査

奄美群島の分布調査には、水中文化遺産調査の一環として実施された海浜部調査（宮城他編2013）と、瀬戸内町教育委員会による町内の分布調査（瀬戸内町教育委員会2017）がある。

前者における海浜採集資料のうち近世の前半期に属するものとしては沖永良部花良治海岸の肥前産コンニャク印判染付碗（18世紀前半）、トカラ平島前之浜の初期伊万里皿（17世紀前半）、徳之島母間旧港の薩摩焼苗代川甕（17世紀）などがある。また採集資料ではないが、平島の墓地に供献されていた肥前産網目文瓶（17世紀後半）がある。近世後半期（18世紀後半～）になると、海浜に散布する陶磁器は増加し、本土・沖縄を含め陶磁器の生産量＝流通量の増大を反映している。全体的に見ると、貯蔵具としては薩摩焼苗代川産の甕や壺と沖縄壺屋産の荒焼壺、また調理具である摺鉢も苗代川と壺屋の両者が見られる。食膳具である碗や皿については、陶器では龍門司焼（加治木・始良系）のものとともに沖縄の上焼もある。磁器では肥前産磁器が主であるが、18世紀末以後の薩摩産磁器も見られるようになる。

瀬戸内町の分布調査では、本土産陶磁器・沖縄産陶器・中国産磁器が採集されている。本土産磁器では、17世紀では肥前磁器が主体で、雲龍文鉢、芙蓉手皿などがある。18世紀も肥前磁器が主で、蛇の目釉剥ぎを有する丸碗やコンニャク五弁花の碗がある。19世紀になると薩摩磁器が多くなり、端反碗や瓶などがある。本土産陶器は肥前と薩摩焼が主で、前者では刷毛目および象嵌の大鉢、後者では苗代川産の甕・壺・摺鉢、加治木・始良系の碗がある。また関西系と思われる製品も少数見られる。

沖縄産陶器には荒焼と上焼とがあり、前者は壺もしくは甕が大部分である。上焼では17世紀後半～18世紀前半と目されるフィガケによる灰釉碗が目立つ。このほか白化粧土を施した碗や土瓶などがあり、これらは19世紀頃と推測される。

中国磁器は、近世前半期に該当するものとして漳州窯、景德鎮窯製品が、近世後半期のそれとしては徳化窯の白磁や青花が見られる。

④古墓出土資料

奄美群島において陶磁器が出土する遺跡として古墓がある。沖縄と同様に洗骨を行っていた同群島特有の墓制で、出土陶磁器は、遺骨を収納する蔵骨器と、墓室内・前庭部に置かれた供献品の二者がある。これまでに発掘調査された奄美群島の古墓から出土した陶磁器を整理すると表13-8になる。

表13-8 奄美群島 古墓出土陶磁器一覧

島名	市町村	遺跡名	蔵骨器			供献品				出典
			沖縄	薩摩	その他	沖縄	薩摩	肥前	その他	
奄美群島	奄美市	和野トフル墓	荒焼大壺(転用)	苗代川壺(転用)(17c後半~18c)	南中国産四耳壺(転用)(16c) 信楽焼腰白茶壺(転用)(18c~か)	襦袖瓶・緑袖瓶 白化粧土鉄絵瓶	白薩摩碗 加治木・始良系碗(18c後半~) 染付磁器碗(19c中葉)	染付磁器碗(こまにゃく印判) (17c末~18c前半) 染付磁器瓶(一重網目文・草花文) (17c後半) 京焼風肥前陶器(17c後半~18c前半)	中国青花小杯(17c前半)	鹿児島県教育委員会 1988
			中筋川トウール墓	荒焼大壺(転用)	苗代川耳付壺(転用)(17c後半~18c) 苗代川壺(転用)(17c後半~18c)	肥前大壺(17c後半) 中国産大壺(沖縄5類)(転用) (15c後半) 東南アジア産大壺(転用) (石灰岩製厨子)	襦袖瓶(白化粧土、19c)	小杯(or肥前)	染付磁器瓶(一重網目文・草花文) (17c後半) 青磁染付半筒碗(18c後半) 染付半筒碗(18c末~19c初)	中国徳化白磁・青花碗(18c末~19c) 中国青花小杯(17c前半)
沖縄	和泊町	世ノ主墓	ボーンジャー厨子(18c) マンガン掛け底付焼締厨子(19c) 荒焼壺	苗代川壺(転用)(17~18c)		襦袖陶器(壺等)(18~19c)	染付磁器(19c)	染付磁器(17~18c) 内野山陶器碗(17後~18前)		和泊町教育委員会 2019
			赤焼御殿型厨子(18c) ボーンジャー厨子(18c) マンガン掛け焼締厨子(18末~19c) 赤焼御殿型厨子(19c)	苗代川壺(転用)(17~19c)	中国襦袖陶器(転用)(15c)				中国清朝青花磁器(19c)	
			赤焼厨子(18c) ボーンジャー厨子(18c) マンガン掛け焼締厨子(18末~19c) 荒焼厨子(19c)	苗代川壺(転用)(17~19c) 苗代川楕木鉢(転用)(18c~19c)	中国襦袖陶器(転用)(15c)	襦袖陶器(瓶・碗・灰釉碗)(18~19c)	苗代川耳付小壺 龍門司碗(18c後~) 加治木始良碗(18c後~) 染付磁器碗(19c) 染付磁器猪口(19c)	陶器壺(18c) 染付磁器(瓦礫文)(17c後) 染付磁器碗(コニャク)(18c後) 青磁染付碗(18c後) 染付磁器半筒碗(18c末~19c初)	関西系碗(18c) 中国青花(印判)(16c後~17c前) 中国清朝磁器(19c)	
	屋者琉球式墳墓 荒焼壺・壺(転用)	苗代川壺(転用)(17~18c) 苗代川?茶焼壺(転用)	タイ産壺(蓋)(転用) 中国産襦袖陶器(転用)	襦袖陶器碗 襦袖陶器瓶	染付磁器羅文碗(18c末~19c) 染付磁器半筒碗(書持笹文)(18c末~19c初)	染付磁器丸碗(18c) 染付磁器瓶	中国青花磁器碗			
知念町	アーマガヤトール墓	瓦質陶器鉢(16c後半か) マンガン掛け蓋	苗代川壺(転用)(17c後半~18c)	南中国産襦袖壺(転用)	襦袖陶器碗		端反碗(19c) 半筒碗(18c末~19c初)	京焼色絵碗 中国青花磁器碗(18c)・瓶・小杯	知念町教育委員会 2019	
		新城花窟ニャート墓	苗代川壺(転用)(18c後半~19c)			加治木・始良系陶器碗(18c後半~19c)	染付磁器碗(18c後半)			
		屋子母セジマ古墳跡		タイ産壺(蓋)(転用)			青磁染付碗(18c後半) 染付磁器瓶(一重網目文) (17c後半)			

蔵骨器の産地には、沖縄、薩摩焼苗代川、中国、東南アジアがある。沖縄産陶器に専用器が見られるのに対し、他の産地の製品はいずれも転用品で、底部に焼成後穿孔が施されている場合もある。転用品は大型の甕もしくは壺で、それら自体が商品として購入された可能性もあるが、容器として運ばれたものが中身の消費後、蔵骨器として再利用された可能性もある。中国・東南アジア陶器には、近世を遡る15~16世紀のものが使われている。島への搬入直後に転用されたのか、日用品としてある程度の期間使用されてから転用されたのかは判断がつかない。苗代川陶器は17世紀代から19世紀まで継続的に使用されている。沖縄からの転用品が入ってくるのは18世紀以後と、今のところ考えられる。もう1点珍しい資料として、和野トフル墓出土の信楽焼腰白壺がある。徳川将軍家への献上宇治茶の容器として17世紀前半から生産が始まった腰白壺は、江戸遺跡での出土事例から近世を通じて生産された可能性がある。もちろんすべてが献上茶容器ではないが、出土例は多くなく、江戸に偏る傾向がある(鈴木2001、畑中2003)。破片の見落としの可能性もあるが、今のところ鹿児島本土地域では確認されておらず、どのような経緯で腰白壺が奄美に運ばれ、蔵骨器として転用されたのか、興味深い課題である³⁾。

供献品は碗・皿などの食膳具および瓶・壺などの貯蔵・運搬具が見られる。薩摩産としては加治木・始良系あるいは龍門司窯の碗や、薩摩磁器の碗などがある。いずれも18世紀後半以後の製品である。このほか薩摩産として堅野窯の白薩摩碗が和野トフル墓で出土している。鉄絵千鳥が描かれており、商品として流通した可能性が考えられる(深港2014)。白薩摩もまた沖縄では古墓から出土する事例がある(渡辺2004、新垣2009)。

肥前製品では陶器としては内野山窯産の銅緑釉の皿や京焼風肥前陶器の平碗があり、染付磁器は17~19世紀のものが継続的に入っていることがわかる。その中で、17世紀後半の一重網目文を有する瓶が目につく。同種のもは沖縄で多数確認されており、沖縄向けの商品であった可能性が指摘されている(大橋2003)。沖縄でも古墓の供献品として用いられており、奄美のそれも同じ性格であったと考えられる。

沖縄製品としては上焼の碗・瓶が見られる。灰釉製品と白化粧土掛けの製品がある。中国製品としては青花の碗や小杯が多く、17世紀前半の古いものと、18世紀末以後の清朝磁器とがある。このほか京焼の色絵陶器碗が出土している。

2) 伝来資料

①奄美大和村盛岡家伝来資料（本報告）

②加計呂麻島西家伝来資料（渡辺編2015）

盛岡家伝来資料の詳細は第5章に譲るが、その際に以下の特徴が見られることを指摘した。

- (1) 大皿・組物が多い
- (2) 清朝磁器が含まれる
- (3) 薩摩藩窯・豎野窯製品が含まれる

一方、西家は、現在の瀬戸内町加計呂麻島の伊子茂に根拠地を置く地域有力者である。記録には残っていないが、以下の言伝えが残っている。西家の初代能悦は、薩摩加世田の城勤めの際に、島流しになる。その後、18世紀の後半、五代目能悦の頃に加計呂麻島薩川から同島伊子茂へ移住した。五代目能悦は郷士格を得て、西姓を名乗る。西家は、代々、与人などや戸長をつとめた家柄で、現在の瀬戸内町一帯で力を持っていた。良港であった伊子茂湾を拠点として、琉球との交易も深めていたようで、西家には、島外産の多くの品々が残されている。同家伝来陶磁器の特徴は、以下のようにとめられる。

- ①磁器の大皿の占める比率が高く、また陶器・磁器を問わず、皿・碗・鉢などの組物が多く見られる。これらは西家という地域有力者が、さまざまな宴席や儀式的場において使用したものと推測される。
- ②磁器の多くは肥前産であり、薩摩磁器は特殊な形態に限定されている。
- ③近世と推測される白薩摩・象嵌の丁字風炉ならびに白薩摩の唾壺が見られる点は、近世における豎野窯製品の流通形態を考える上で興味深く、やはり西家の社会的地位と結びつくものと考えられる。
- ④色絵双獣環耳花瓶は、幕末～明治初頭期の製品と推測される。これがいかなる経緯で西家に購入、伝来したかはわからないが、輸出用が多い色絵薩摩製品の国内流通の一端を知る上で興味深い資料である。

盛岡家と西家とを比較すると、盛岡家の特徴(1)と西家の①とは共通する。ともに地域の有力者として宴席具が必要であったのであろう。西家②の特徴は、盛岡家のそれでは明確に抽出し得ないが、近世磁器について言えば、大皿が肥前産と中国産が多く、薩摩磁器は香炉や筆筒などの小型品にとどまることと類似するとも言える。

西家③と盛岡家(3)も共通する。薩摩藩の藩窯である豎野窯製品は、西家や盛岡家のほか、喜界島の旧家である林家・泉家にも豎野産の丁字風炉が伝来しており（喜界町教育委員会・野崎拓司氏ご教示）、また沖縄久米島の旧家にも象嵌陶器の双耳壺が伝来している（渡辺2018b）。南西諸島における豎野窯製品は、このようなそれぞれの島々の地域有力者の家に伝来している事例が多く見られる。これらは薩摩藩あるいは琉球王府を通じての拝領品と推測され、島支配の一端を担う政治的な意味を持っていたと考えられる（渡辺2018b）。この点についてはのちに改めて触れる。

西家には幕末～明治初期と推測される色絵薩摩の瓶が伝来している（特徴④）。盛岡家には同じではないが、やはり海外輸出用と推測される色絵磁器が伝来している。明治になり新たな時代の室内装飾品として、それぞれ購入された可能性が考えられる。

以上のように、盛岡家伝来資料と西家のそれとは共通点が多く見られる。このことは、ともに島の地域有力者として、また島役人としての両家の性格の共通性が生み出したものと考えられよう。今後、他の島々においても同様の伝来資料があれば、比較検討することで、その共通点と相違点を抽出

することが可能になる。それは同時に、遺跡出土の陶磁器が、基本的には廃棄品であり、日用品が中心であるのに対し、これら旧家伝来資料は高級品としての陶磁器の島における流通状況と所有形態を明らかにする上で重要なものとなる。

(3) 沖縄

近世琉球における陶磁器流通については、ここ数年いくつかの研究会でさまざまな視点から議論されている（沖縄考古学会編2013・2016、日本貿易陶磁研究会編2014、近世陶磁研究会編2018など）。本章ではそれらを参照してまとめたい。とくに新垣2018、大堀2018に多くを負っている。

まず中国磁器では、景德鎮製品は首里城跡周辺と関連遺跡での出土に集中するが、小碗・小杯は古墓からも出土する。首里城跡からは清朝官窯品も出土している（後述）。年代的には17世紀後半～18世紀前半が大半を占め、17世紀前半・18世紀後半以後は多くない。漳州窯製品は16世紀末～17世紀前半に流通したが、器種や品質により出土遺跡に違いがある。つまり青花鉢・盤・壺、五彩盤は首里城跡と関連遺跡に限定されるが、青花碗・小杯・皿は集落遺跡や古墓などからも出土する。徳化窯系製品は、遺跡の性格を問わず琉球国内において最も多く出土している。大半は18世紀以後に位置づけられる。内底や外面胴部下位が露胎する粗製の一群である福建・広東系磁器は、遺跡の性格を問わず一定量出土しており、国内で広く流通していた。白磁が17世紀前半、青花が17世紀後半～18世紀前半に流通したが、一部は18世紀後半～19世紀に入る。明・清王朝と冊封関係を結ぶ琉球王府は進貢使を派遣し、それが中国貿易の主軸となっていたが、その到着先は福州に置かれた琉球館である。徳化窯系や福建・広東系磁器の流通は、その交易ルートによるところが大きいのであろう。

沖縄における中国磁器の流通状況をうかがう資料として中城御殿（首里高校地点）の陶磁器廃棄遺構SJ3（18世紀後半）がある。中城御殿は琉球王国において次期国王の世氏殿（住居）として尚豊王代（1621～40年）に建てられ、明治8（1875）年まで居住した。SJ3からの出土陶磁器のうち中国産が80%を占め、本土産が続く。中国産磁器は福建・広東系が多く、景德鎮系製品も見られる。器種としては碗がもっとも多く、ついで小碗や皿などで、供膳具が中心である。壺や甕などの貯蔵具類を含まないことから、世子などが使用した食膳具が改築時に一括廃棄された可能性が考えられる（図13-2、沖縄県立埋蔵文化財センター2017）。中国産磁器の食膳具が多くを占めるあり方は、琉球王国におけるトップクラスの階層の人々の陶磁器の所有・使用形態の一端を示していると考えられよう。

本土産陶磁器のうち肥前陶磁器については、大橋康二（2003）により枠組みが作られ、その後の資料の増加により、より具体像が明らかにされてきている。新垣（2018）によれば、大橋編年によるⅠ期・Ⅱ期段階（1580～1650年代）では、量的には少ないが、沖縄本島～先島諸島に広く分布し、またこの時期の天目碗の出土は、琉球における茶の湯と関係する可能性がある。大橋Ⅲ期（1650～90年代）は出土量が増加する時期で、雲龍見込荒磯文碗、外面に蕉葉文などを描く小杯、網目文を描く小

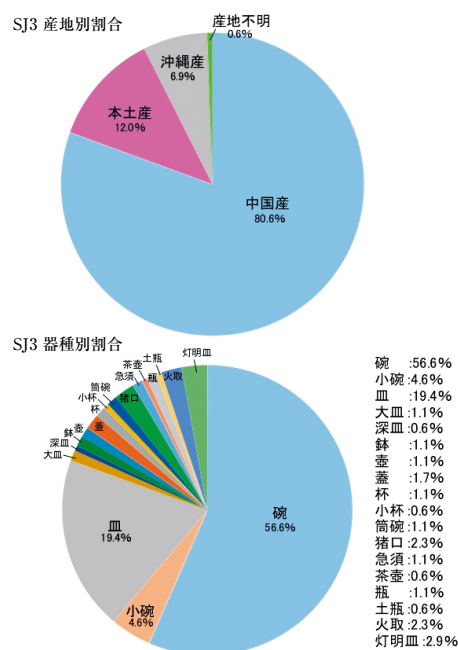


図13-2 中城御殿SJ3出土陶磁器 産地・器種別比率

ぶりの瓶の3種類が代表的な器種である。小杯と瓶は古墓出土が非常に多く、奄美とも共通する。鍋島・柿右衛門・南川原系色絵碗が首里城跡と関連遺跡で出土している。Ⅳ期(1690～1780年代)になると出土が減少するが、首里城跡などでは増加し、良品が占める比率が高い。Ⅴ期(1780～1860年代)ではさらに減少する。このⅣ期以後の肥前磁器の減少は1684年の展界令により中国磁器の輸出が再開されたことと関係すると新垣(2018)は指摘する。このような肥前磁器出土量の減少傾向は、北谷町平安山原(はんざんぼる)A遺跡においても数値的にも示されている(大堀2018)。この点が本土地域と決定的に違う点で、本土地域では中国磁器の輸出が再開されても、日本の磁器市場はすでに肥前製品でほぼ独占され、中国磁器が参入できなかったのに対し、沖縄では中国磁器が再び多数流入し、相対的に肥前磁器が減少していくと言えよう。また上焼(施釉陶器)の本格的流通(17世紀後半～18世紀前半)も肥前磁器の減少と連動するものであろう(木村2016、大堀2018)。

薩摩焼は17世紀前半の苗代川産甕が古墓の蔵骨器に転用されている事例が見られるが、数量としては少なく、増加するのは18世紀後半～19世紀で加治木・始良系陶器や薩摩磁器が見られる。琉球全体に普遍的な現象であるが、地域的に量的な差異がある。堅野系の白薩摩は、首里城跡とその関連遺跡に集中し、また古墓に副葬されることもある(渡辺2004、新垣2009)。

このほか本土産陶磁器として、京・信楽・関西系陶器があり、首里城跡1709年火災による被熱痕例などがある。これらは日用品よりも特定の用途(喫茶・宴席)が想定可能としており、この点についてもものに触れる。年代的には18～19世紀のものが多い。ほかに淡路珉平焼、丹波産甕などがある。

2. 政治的アイテムとしての流通

近世の南西諸島域における政治的アイテムとしての陶磁器には清朝官窯製品、鍋島藩窯製品、薩摩藩窯・堅野窯製品がある。以下、実際の資料を挙げて検討していく。

(1) 清朝官窯製品

森達也(2018)によれば、首里城跡などでこれまで56件の清朝官窯磁器の出土が確認されており、うち紀年銘には康熙年製(1662-1722年)9件、雍正年製(1723-35年)11件、乾隆年製(1735-95年)1件、嘉慶年製(1796-1820年)2件があり、道光年製(1821-50年)も未報告資料にあるという。このうち真珠道跡出土の「康熙年製」銘の碗(沖縄県立埋蔵文化財センター2006)には桃の文様が見られることから、雍正4(1726)年に回賜された「五彩蟠桃宮碗十四件」のうちの一つと推測されている(謝2014)。

琉球王府に入った清朝官窯製品が薩摩藩を通じて日本国内にも流通していた可能性が考えられる。琉球館文書の文化4(1807)年5月26日付文書(那覇市1970、No.187)には以下のようにある。

「近年官窯の内一向ニ窯氣無之、偽物と相見へ候品専有之候。右者直(値)段も下直ニ有之候処より買渡候筋ニても可有之哉。又は琉球ニて取拵候儀ニテハ有之間敷哉、右品之儀は御献上ニも相成事候処、万一偽物取交り候儀共有之候ては決て相成事候間、窯氣無之訳、且出所等の儀、委相糺可申上旨被仰渡(下略)」

琉球王府を通じて薩摩藩に入る官窯製品の品質が落ちているので偽物ではないかと疑っている内容であるが、このことは文書の年代である文化4年以前から、薩摩藩は王府を通じて清朝官窯製品を入

手していたことを意味している。さらに「右品之儀は御献上ニも相成事候処」とあることから、それが献上品として用いられていたことを示している。

この薩摩藩経由の清朝官窯製品の一つとして考えられているのが、近衛家に伝わる白磁金瑠瑯脚付碗（現陽明文庫所蔵）である（京

都国立博物館編2013、尾野2013・2020、謝2014）。同種のもは台湾国立故宫博物院にも所蔵されている。この近衛家のものは、島津家から献上され、享保13（1728）年4月3日、近衛家熙が菓子器として使用したことが『槐記』に見られる。尾野・謝らの研究によれば、この白磁金瑠瑯脚付碗は、雍正帝から雍正2（1724）年に琉球王府に回賜された「磁胎焼金瑠瑯有靫蓋碗六件」のうち一つが島津家に入り、さらに近衛家熙の息子・家久の関白就任の祝いとして島津家から近衛家に献上されたのではないかと推測されている（表13-9）。

このように清朝官窯製品は、琉球王府、島津家、近衛家など、当時の社会階層トップクラスの間で流通していたことがわかる。上掲の文書からすれば、清朝官窯製品の入手はけっして1回限りではなく、おそらく徳川將軍家なども含みながら、継続的に流通していたことが想像される。今後の新資料の調査を待ちたい。

(2) 鍋島藩窯製品

鍋島藩窯で焼かれた鍋島焼は、主として徳川將軍家への献上を目的として生産された磁器であるが、そのほかにも京都の公家や他大名への贈答品としても用いられた（大橋2007など）。そのような特殊な目的を持つ鍋島焼が首里城跡から出土している。年代的には1680-90年代、いわゆる盛期鍋島と呼ばれる時期のもので、出土資料には被熱痕があることから、1709年の火災で損壊、廃棄された可能性が指摘されている（沖縄県立埋蔵文化財センター2001）。この鍋島焼がどのような経路で琉球王府に入ったのか。琉球王府との関係は島津家により厳しく制限されていたので、鍋島家から直接琉球王府に入ったとは考えにくく、鍋島家→島津家→王府、あるいは鍋島家→將軍家（→島津家）→王府などが想定できる。いずれにしろ、先の清朝官窯製品と同様、当時の社会階層トップクラス間での贈答関係の一端を示していると言えよう。

(3) 薩摩藩窯・豎野窯製品

薩摩藩の藩窯・豎野窯では、商品（「商売焼」）も生産していたが（橋口2001、深港2014）、その主たる目的は御用品の生産である。文献には「献上御用」（將軍家などへの献上品）、「御前御用」（藩主が使用する製品）、「お先御用」（藩主家の娘の輿入れの持参品）、「御用」（一般的な公用品）などの違いが見られる（渡辺2018b）。主な製品として茶入などの茶道具類や白薩摩・宋胡録写・象嵌製品（三島手）がある。これら豎野窯製品は、奄美群島における与人（最高位の島役人）などの旧家伝来品にしばしば見られる。

たとえば奄美大島大和村盛岡家伝来資料には、褐釉を掛けた丁字風炉があり、「嘉永七年寅七月吉祥日／丁子風呂（マ）入／與人／前武仁」の箱書きを持つ木箱に入っている。また白薩摩の碗の1点、伝わっている（本報告）。加計呂麻島の西家には白薩摩の丁字風炉2点、白土に茶色い土を象嵌した丁字風炉1点が伝来している。後者と同じ象嵌の三足盤の破片が西家の屋敷跡で採集されている。また

表 13-9 金瑠瑯脚付碗関係年表

中国暦・和暦	西暦	項目
雍正元	1723	琉球国王が雍正帝の即位を祝して慶賀使を派遣。
雍正2	1724	雍正帝が「金瑠瑯」を含む26品目を琉球国王に回賜。
雍正3	1725	帰国した慶賀使により回賜品が琉球王にもたらされる。この年のうちに金瑠瑯が薩摩藩に送られたのではないか。
享保11	1726	近衛家久の関白就任（その祝いとして薩摩藩が近衛家に「金瑠瑯」を献上したのではないか）
享保13年	1728	近衛家熙が家久から譲り受けた「金瑠瑯」を菓子器として茶会で使用。

※尾野2020を元に作成

沖縄の久米島には最高位のノロの家に、豎野窯産の象嵌双耳瓶が伝来しており、これらは薩摩藩から琉球王府を介して同家に拝領されたと考えられる(渡辺2018b)。同種の象嵌双耳瓶は、トカラの悪石島に伝来していたことが白木原和美(1985)によって報告されている(筆者未見)。

このような豎野製品の旧家での伝来は、薩摩藩からの拝領品と考えられ、藩による島支配の一端を示していると考えられる。

(4) その他

そのほか政治的アイテムもしくはそれに近いと思われる事例3例について触れておきたい。

①植木鉢の注文

沖縄県立博物館・美術館が所蔵する「御用植木鉢下図」は、薩摩藩が琉球王府に発注した植木鉢の下絵である(平田2011)。年代は確定できず、19世紀と推定されているが、割印が残ることから公式文書である可能性が高いという。下絵には3点の植木鉢が描かれており、うち1点は大きく口が開く浅鉢形で、他の2点は円筒形を呈する。口縁はいずれも外側に折り曲げられ、胴部には唐草文が貼り付けられている。また3点とも三脚が付く。三脚が付く点を除くと、同種の植木鉢は、遺跡から出土する荒焼のそれに共通するものであり、鹿児島からも出土している。

筆者はかつて鹿児島出土のこれら沖縄産植木鉢が商品として流通していた可能性を指摘した(渡辺2006)。本下図は「御用」とあることから商品ではないが、薩摩藩側で琉球産の植木鉢に強い需要があったことがうかがいしれる。

②冊封使接待の京焼色絵

中国北京故宮博物院が所蔵する『冊封琉球図本』(『冊封全図』『琉球全図』)は、康熙58(1719)年に尚敬王の冊封に渡琉した冊封副使・徐葆光が康熙帝に献上した報告書の一部であり、彼の琉球滞在記『中山伝信録』(1721年刊行、元本は康熙帝に献上)の副本として位置づけられる。冊封使の具体的姿を伝える貴重な資料である(麻生・茂木編2020)。

その『琉球全図』の「木皿部」に食器を含む9点の道具が彩色入りで記録されている。うち1点「茶托」は、やや黄色みを帯びた素地に青緑の花草を描く陶器碗を描いている。『中山伝信録』の該当部分には「色黄 無白地者 描青緑花草 云出土カラ 其質少麤無花 但作冰紋者 出大島」と記述している。森達也(2020)はこの陶器碗を京焼の色絵製品と推測している。筆者もこれに同意するが、このことは京焼色絵が冊封使接待という、琉球王国にとってきわめて重要な場において採用される高級品として認識されていたことを示している。この碗が商品流通で沖縄に入ったものから選択されたのか、琉球王府からの注文品なのかは不明であるが、少なくとも政治的な意味合いが強い使用方法と言える。

③泡盛献上用の壺

徳川将軍の代替わりを賀す慶賀使および琉球国王の即位を謝する謝恩使が江戸に派遣されたのは、近世を通じて計18回を数える。その際に将軍をはじめ世子や御台所に泡盛を献上するのが慣例となっていたが、その泡盛は「壺」という単位で表され、最少で7壺、最多で30壺以上が献上された(宮城1982)。この壺の実相はいまだ不明であるが、沖縄産陶器である可能性が高い(新垣2018)。

このような献上品を入れる容器としての陶磁器には、献上用の梅干しを入れた佐賀藩の鍋島焼大壺(大橋2011)や、薩摩藩が月次献上で砂糖漬けを入れた宋胡録写の蓋物(渡辺2015)などがある。いずれも藩窯による高級品と推測され、容器とはいえ政治的アイテムの一つと言えよう。琉球の献上用泡盛壺もまた同じ性格を持っていたと考えられ、今後の実態究明が求められる。

3. 生活用具としての携行品

船乗りなどの運搬者、あるいは移住者、短期的／長期的滞在者が、みずからの生活用具として陶磁器を携行していく場合がある。ここでは近世鹿児島城下にあった琉球館跡から出土した沖縄産陶器を取り上げる（鹿児島市教育委員会2003）。

島津氏の琉球侵攻後、琉球王府は使者を鹿児島に派遣することを命ぜられ（慶長18（1613）年）、その滞在施設が琉球仮屋、のちに琉球館と呼ばれた（1784年）。当初は三司官や親方が派遣されたが、三司官の在番は通例ではなくなり、居住する在番親方は、貿易品の管理、江戸参府のための準備、薩摩藩との交渉などを行った。最初は鹿児島城の北側にあったが、17世紀末頃までに現在の長田小学校敷地に移転した。

鹿児島市教育委員会の発掘調査により、琉球館跡からは沖縄産の荒焼植木鉢・摺鉢、上焼の灰釉碗が出土している。植木鉢の年代は絞り込めないが、摺鉢は17世紀第4四半期から18世紀前半、灰釉碗はフィガケにより釉掛けされており、17世紀後半～18世紀前半と考えられる。摺鉢と灰釉碗は、この遺跡以外での出土例がきわめて少ないこと、両器種が薩摩においてもすでに生産していたことを考えると、琉球館で使者たちが使用するために持ち込んだと考えられる（渡辺2004・2006）。

4. 偶発的契機による流通

以上検討してきた陶磁器流通はいずれも意図的なものであるが、そのほかに偶然、漂着船から陶磁器を入手する場合がある。かつて亀井明德は、トカラの中世の中国陶磁器が「寄船（よりふね）」、つまり漂着船によってもたらされた可能性を指摘したが、あくまで仮説にとどまる（亀井1993）。また近世トカラにおいても中国や朝鮮からの漂着船が記録に残っているが、その際に物資の遣り取りがあったかどうかは不明である（渡辺（美）2004）。

笹森儀助の『拾島状況録』（明治28（1895）年）の「平島記」に明治27（1894）年に平島に清国からの無人の漂着船が流れ着いたことが記録されている。この漂着船については明治政府の公式文書にも記録がある。船は二本柱を持つ、全長約25mの西洋形帆船で、その搭載物には、乗組員の中国服や寝具類、物入れ（カバンなど）と思われるものや、食料の米、ゲーベル銃、傘、提灯、また海図や『三国志』などの書籍なども含まれており、その中に大量の陶磁器も搭載されていた。搭載物などから清国国内での操業していた船が、何らかの原因で漂流し、平島に流れ着いたと考えられる。

搭載物は平島から奄美大島に回遊されたが、陶磁器は大部分（「陶器茶碗類一九三〇束」「同封手篋入三二八個」）が平島に残された。この「陶器茶碗類」は、平島を中心にトカラ各島に伝来し、あるいは破片が採集されている粗放な双喜文と唐草文を描く青花磁器碗であると推定されている。つまり明治27年の漂着船の搭載品である陶磁器が、その後、トカラ各島に流通したと推測される（新里2016）。

5. 近世南西諸島における陶磁器流通の諸相

以上、トカラ列島から沖縄にかけての近世陶磁器流通について、考古学資料、伝来資料などを手がかりとしながら、なおかつその流通の性格に注目して検討してきた。以下、それらをまとめることで、南西諸島における近世陶磁器流通の特徴を抽出する。

まず商品／容器としての流通は、冒頭で示したような「北からの流れ（肥前陶磁器・薩摩焼などの

本土産陶磁器)「南からの流れ(琉球を介しての中国産磁器(清朝磁器)」「島嶼域内での流れ(沖縄壺屋産陶器など)」という三層構造の流通モデルに合致する状況であることがわかる。ただしそれぞれの「流れ」における流通量には地域差がある。その一つが清朝磁器の流通であり、奄美群島と沖縄諸島、つまり薩摩藩の直轄領である前者と琉球王国である後者には違いが見られるようである。上述したように、1684年の展界令後、沖縄には中国磁器が大量に流入するのに対し、本土ではすでに肥前製品により磁器市場がほぼ独占され、中国磁器の流入は限定される。奄美群島の磁器流通状況は、清朝磁器も見られるとは言え、肥前磁器、さらに19世紀になると薩摩磁器が数多く流通している点は、本土的あるいは鹿児島的と言えるであろう。

食膳陶器に目を向けると、18世紀前半までは銅緑釉碗などの肥前陶器が南西諸島一帯に広く流通していることがわかる。しかし一方で、薩摩産の食膳陶器(加治木・始良系や龍門司)も17世紀後半から奄美群島においては流通している。とくに18世紀後半以後は流通量が増加する。沖縄でも薩摩産の食膳陶器は流通しているとは言え、数は多くない。これは沖縄壺屋において上焼の食膳具製品の生産が始まり、市場において対抗できなかったと考えられる。奄美群島では、薩摩産と沖縄産がともに流通するが、沖永良部の根皿原遺跡では17世紀後半～18世紀のフィガケの碗が一定数出土していることは、薩摩藩の直轄領になっても沖縄との物資流通が継続していたことを示唆する。

同様のことは甕や壺の貯蔵具においても見られる。古墓の事例で見ると、沖縄産の荒焼大壺と苗代川産の甕が共存しながら蔵骨器に転用されていることがわかる。どちらも容器としての流通後に貯蔵具に転用され、さらに蔵骨器に転用された可能性が考えられる。その背景には鹿児島・沖縄両地域との交易があったと言えよう。また沖永良部の古墓群には、いずれも沖縄産の専用器が蔵骨器として用いられている。沖永良部の事例は、いずれも島内における大型墓に属することから、その蔵骨器のあり方が一般的であったかどうかは今後のさらなる調査研究の蓄積を待たねばならない。しかし沖縄と同じ洗骨風習を持つ地域では、このような沖縄産の専用器が求められたことが背景となり、それとともに蔵骨器以外の沖縄産陶器も運ばれた可能性が考えられる。つまり洗骨風習という葬墓制の共通性が陶磁器流通のあり方に関係している可能性を指摘しておきたい。

冒頭で述べたように商品としての陶磁器流通と容器としてのそれとの区別は難しいが、明らかに容器として流通した陶磁器として沖縄壺屋産の荒焼徳利(いわゆる「鬼の手」)がある。これらは鹿児島県内でも多数出土するが、さらに江戸をはじめとして全国各地で出土していることが確認されている。また『守貞漫稿』の記述から泡盛が荒焼徳利に入れて販売されていたことがわかる(小田2008など)。ただし中身の泡盛を消費したのち、別の液体の容器としての二次流通も想定可能であるため、荒焼徳利出土地域=泡盛流通地域とは一義的には言えない。

ところで橋口亘(2001)は近世奄美の陶磁器流通について、文政13(1830)年と天保2(1831)年以後の「諸品代糖表」および安政6(1859)年の「惣御買入方御品物直段」を挙げて検討している(表13-10)。当時の奄美群島では藩による砂糖専売制においてさまざまな日用品が砂糖の納付と交換により給付されていたので、上記史料の陶磁器の価格はいずれも砂糖の量(斤)に換算されている。

橋口の検討を参照しつつ史料を見ると、まず取り上げられている陶磁器の器種には、碗・皿・土瓶(茶家)などの食膳具、摺鉢など調理具、徳利・瓶などの運搬貯蔵具、壺・甕などの貯蔵具であり、日用品としての陶磁器の器種をほぼカバーしている。このうち「奈良茶碗」は通常、蓋付茶碗を指す語であるので、年代的には薩摩磁器の蓋付端反碗である可能性が考えられる。「菊絵茶碗」や「紋

茶碗」は色絵もしくは染付の製品と推測される。一方「金縁酒呑小茶碗」は碗とされるが、むしろ盃のような小杯も考えられる。また「押鉢三ツ入子一組」は大中小よりなる3枚組の皿もしくは鉢と考えられ、奄美大島の旧家に伝来する組鉢のようなものが想定できる。そのほか「徳利」「半銅」(半胴甕)「亀壺」(甕壺)はその容量により細かく細分されていることがわかる。

生産地として明示されているものには「豎(立)野焼茶家」「苗代川焼茶家」「龍門司焼徳利」がある。

また「白焼」と名づけられたものは、豎野窯産の白薩摩の可能性が高いが、白磁(肥前もしくは薩摩)の可能性も残す。とくに「上通白焼紺絵入火入」は、「紺絵」を染付と解するならば、白薩摩に染付があるとはいえ、むしろ染付磁器の方が理解しやすいのではないだろうか。本史料では陶器と磁器が明示されておらず、磁器については肥前産か薩摩産かわからない。

以上のようにはっきりしない部分も多いが、本史料で取り上げられている内容は、考古学資料・伝来資料などで確認される陶磁器の器種や生産地と大きな齟齬はない。

本稿では政治的アイテムとしての陶磁器流通にも注目した。これは上記の商品／容器としての流通とは性格の異なる流通である。ただしその流通にも少なくとも2つのレベルがあったと考えられる。一つは、中国清朝官窯製品や鍋島焼に見られるような、国境や藩境を超えた、当時の社会階層トップクラス間で流通である。これらは当時の東アジア世界における献上と回賜という政治的権力・権威の再生産システムの一部を構成していると言える。もちろん献上・回賜に関わる物品は陶磁器だけではないので、その中での陶磁器の位置づけも別に検討する必要があるだろう。

もう一つは、豎野窯製品に見られる藩内における政治的アイテムとしての陶磁器である。奄美群島の地域有力者の家に伝来する豎野窯製品は、藩からの拝領品の可能性が考えられる。その中でも丁字風炉が多い点は注目される。丁字風炉は、島津重豪が江戸の親類や縁者への贈答品として用いたことが文献に残っており(深港2014)、また考古学資料としても出土例はきわめて少ない(鹿児島市若宮遺跡D地点など(鹿児島市教育委員会編2014))。また沖縄壺屋焼でも丁字風炉が製作されており、琉球王・尚家にも壺屋産の色絵丁字風炉が伝来している(那覇市歴史博物館蔵)。このように丁字風炉

表 13-10 奄美における陶磁器の価格(橋口2001を元に作成)

文政13(1830)年「諸品代糖表」			安政6(1859)年「惣御買入方御品物直段」		
品目	単位	代糖	品目	単位	砂糖
茶家	一ツ	五斤	上通奈良茶碗	壹束	四拾斤
摺鉢	一	六	中通同	壹束	三拾五斤
			下同	壹束	三拾斤
			筒茶碗	壹束	拾式斤
			菊絵茶碗	壹束	拾斤
			白焼茶家	壹ツ	六斤
			同小茶家	壹ツ	三斤半
			白焼カラカラ	壹ツ	六斤
			同五号入	壹ツ	八斤
			金縁酒呑小茶碗	壹ツ	式斤四合
			白猪口	壹ツ	壹斤
			小振同	壹ツ	半斤
			白焼壹升入徳利	壹ツ	拾斤
			同六合瓶	壹ツ	六斤
			同五合瓶	壹ツ	五斤
			同四合瓶	壹ツ	五斤
			同三合瓶	壹ツ	三斤
			除	拾人前	拾式斤半
			飯茶碗	壹束	拾斤
			紋茶碗	壹束	拾斤
			汁茶碗	壹束	拾斤
			豎野焼茶家	壹ツ	四斤
			苗代川焼茶家	壹ツ	三斤
			赤焼茶家	壹ツ	四斤
			白焼火入壺	壹ツ	式斤
			同四寸口火入	壹ツ	四斤
			上通白焼紺入火入	壹ツ	四斤
			火籠	壹ツ	四斤
			白焼筒花生	壹ツ	式拾斤
			魚鉢	壹ツ	三斤
			摺鉢	壹ツ	三斤
			茶イロカン	壹ツ	壹斤
			六升入徳利	壹ツ	拾三斤
			龍門司焼壹升入徳利	壹ツ	三斤半
			拾升入同	壹ツ	式拾斤
			五升入同	壹ツ	拾式斤
			三升入同	壹ツ	六斤
			式升入同	壹ツ	三斤
			七升入同	壹ツ	拾八斤
			八升入同	壹ツ	式拾斤
			壹斤入茶壺	壹ツ	四斤
			三斤入同	壹ツ	八斤
			五斤入同	壹ツ	拾五斤
			拾斤入同	壹ツ	三拾五斤
			式斗入同	壹ツ	七拾斤半
			五斗入同	壹ツ	百斤
			式拾升入焼酎壺	壹ツ	三拾斤
			七拾盃入亀壺	壹ツ	七拾斤
			壹石入亀壺	壹ツ	九拾五斤
			八斗入半銅	壹ツ	八拾斤
			七斗入同	壹ツ	七拾斤
			六斗入同	壹ツ	六拾斤
			五斗入同	壹ツ	四拾斤
			四斗入同	壹ツ	三拾六斤
			三斗入同	壹ツ	式拾八斤
			式斗入同	壹ツ	式拾斤
			壹斗入同	壹ツ	拾式斤
			六斗入亀壺	壹ツ	五拾斤
			五斗入同	壹ツ	四拾式斤
			式斗入同	壹ツ	拾壹斤四合
			四斗入亀壺	壹ツ	三拾五斤

は、薩摩藩および琉球王国において何らかの特殊な政治的意味が付与されていた可能性があり、それらが奄美群島の地域有力者の家に伝来していることは、それらを拝領品として用いた島支配のあり方の一端を示唆していると言えよう。

このほか携行品としての流通、漂着船など偶発的契機による流通など、量的には少数であるが、陶磁器を含む物資流通のあり方の一つとして、出土資料を理解する際に考慮に入れておく必要がある。

おわりに

以上、考古学資料、伝来資料を中心に、一部文献史料も援用しながら、近世南西諸島における陶磁器流通について検討してきた。近世南西諸島の陶磁器流通は、流通圏としての三層構造とともに、その流通の性格によって、社会階層と密接に結びつきつつ重層的に形成されていたことを示した。その具体的内容は前章でまとめたので、最後に今後の課題を提示することで結語としたい。

流通圏、流通の性格とともに、もう一つ陶磁器流通を考える上で重要な課題は、流通の規模である。前近代における南西諸島の流通形態は、言うまでもなく海上輸送であり、その手段である船舶の規模や形態、搭載量が検討すべき課題となる。また島嶼間、あるいは島嶼と大陸間での渡航の頻度も考慮に入れる必要がある。その際には渡航の目的も関係する。さらに船舶を受け入れる港湾の規模や形態、その所在地なども流通のあり方を大きく左右するであろう。これらの課題を解明するためには、船舶や渡航、港湾に関する藩や王国の公的文書、あるいは実際の運送を担った商家の文書などや港湾を描いた古地図などが手がかりとなる。航海技術については船舶史の研究蓄積や民俗調査による聞き取り調査の成果も使う必要がある。さらに水中考古学的な調査成果は、実際の船舶の形態や規模、また搭載物資の具体的内容や梱包方法などを知る上で貴重である。

また陶磁器は、その残存率の高さから、流通の問題に考古学的にアプローチする上で良質な資料である。しかし陶磁器もまた、それ以外のさまざま物資の一部として流通していたことは間違いない。物資流通全体の中で陶磁器のそれは、何を意味し、また流通のどのような側面を表しているのか、総合的に考えていかねばならないであろう。

注

- 1) 先行研究としては、新垣2003・2009・2014・2018、大橋2003、大橋・山田1995、大堀2018、小田2008、亀井1993、亀島2018、金城2018、黒木2020、白木原1985、新里2016、Shinzato2020、橋口1999・2001・2002・2009、宮城(淳)2018、宮城(幸)2018などがある。
- 2) 陶器と報告されているNo.80 (p.42) の碗は薩摩磁器の焼成不良品、沖縄陶器とされたNo.88・89 (p.46) の碗は中国の青花磁器とした(和泊町教育委員会2009)。
- 3) 腰白茶壺を蔵骨器として利用する事例として、火葬骨ではあるが、岩手県奥州市の大安寺水沢伊達(留守)墓所の三代宗景墓など、東北地方の近世墓がある(関根他編2018)。ご教示をいただいた関根達人氏にお礼申し上げます。

参考文献

- 麻生伸一・茂木仁史編2020『冊封琉球全図――一七一九年の御取り持ち(うとういむち)』雄山閣
新垣力2003「沖縄出土の清朝陶磁」『沖縄埋文研究』1、pp.73-88
新垣力2009「古墓出土資料からみた近世陶磁器の流通」『沖縄埋文研究』6、pp.1-12
新垣力2014「17～19世紀の琉球列島における貿易陶磁の様相」日本貿易陶磁研究会編2014 pp.41-50
新垣力2018「琉球王国における近世陶磁器の流通」近世陶磁研究会編2018、pp.1-24
伊仙町教育委員会2010『中筋川トゥール墓』同委員会

- 大橋康二 2003 「沖縄出土の日本陶磁」『東洋陶磁』32、pp.47-56
- 大橋康二 2004 「將軍家献上以外の特別な意味をもつ肥前磁器二題 - 禁裏御用陶器と梅干用壺 -」『佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要』3 pp.1-62
- 大橋康二 2007 『將軍と鍋島・柿右衛門』雄山閣
- 大橋康二・山田康弘 1995 「鹿児島県鹿児島郡十島村諏訪之瀬遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』15、pp.141-164
- 大堀皓平 2018 「沖縄本島中南部地域に出土する近世中国・日本陶磁器の様相」近世陶磁研究会編 2018、pp.89-108
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『首里城跡 - 管理用道路地区発掘調査報告書 -』同センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 『嘉田地区古墓群』同センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 『真珠道跡』同センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 『天界寺跡 (Ⅱ)』同センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2017 『中城御殿跡 (首里高校内)』同センター
- 沖縄考古学会編 2013 『琉球近世墓の考古学 - 発表報告編 -』沖縄考古学会 2013 年度研究発表会資料集 同会
- 沖縄考古学会編 2016 『16～17 世紀の沖縄における窯業の展開とその背景』沖縄考古学会 2016 年度研究発表会資料集
- 小田静夫 2008 『壺屋焼が語る琉球外史』同成社
- 尾野善裕 2013 「清朝官窯と近世日本」『陶説』728、pp.19-26
- 尾野善裕 2020 「「金瑱瑯」は、なぜ「和蘭陀ノ焼物」なのか - 伝世有形文化財 (考古資料) と文字史料 -」『奈文研論叢』1 pp.45-55
- 鹿児島県教育委員会 1988 『下山田Ⅱ遺跡・和野トフル墓』同委員会
- 鹿児島市教育委員会 2003 『共研公園遺跡・琉球館跡』同委員会
- 鹿児島市教育委員会 2014 『若宮遺跡D地点』同委員会
- 亀井明德 1993 「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』11、pp.11-45
- 亀島慎吾 2018 「中城御殿跡 (首里高校内) の発掘調査成果と出土陶磁器」近世陶磁研究会編 2018、pp.37-46
- 木村謙介 2016 「施釉陶器の出現時期 - 沖縄産施釉陶器に関する基礎的研究 (2) -」沖縄考古学会編 2016 pp.39-48
- 京都国立博物館編 2013 『魅惑の清朝陶磁』展図録 同館
- 霧島市教育委員会 2010 『弥勒院跡 - 遺物編 -』同委員会
- 金城貴子 2018 「近世墓出土の近世陶磁器の様相」近世陶磁研究会編 2018、pp.47-58
- 近世陶磁研究会編 2018 『第 8 回近世陶磁研究会 琉球王国の近世陶磁器流通』資料集 同会
- 熊本大学考古学研究室編 1994 『トカラ列島の考古学的調査』十島村教育委員会
- 黒木梨絵 2020 「大隅諸島・トカラ列島の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究』40 pp.50-63
- 謝明良 2014 「関於金瑱瑯靶碗」『故宮文物月刊』372 pp.2-12
- 白木原和美 1985 「悪石島の外国陶磁」『熊本大学文学部論叢』17、pp.165-187
- 新里貴之 2016 「ピーピーどんぶり考」『鹿児島考古』46、pp.77-92
- Shinzato, Takayuki. 2020 Discarded ceramics which had been stored in Ji-nushi shrine, Nakano-shima Islands, in the Tokara archipelago. Otsuka, Y., Terada, R. and Nishimura, S. (eds.), *The Tokara Islands : Culture, Society, Industry and Nature* pp.20-28 北斗書房
- 鈴木裕子 2001 「江戸遺跡出土の信楽焼」『近世信楽焼をめぐって 研究集会資料集』pp.128-139 関西陶磁史研究会
- 関根達人他編 2018 『大安寺水沢伊達 (留守) 家墓所調査報告書』奥州市教育委員会
- 瀬戸内町教育委員会 2017 『瀬戸内町内の遺跡 I - 貝塚時代～近世 分布調査編 -』同委員会
- 知名町教育委員会 2019 『知名町の古墓 1』同委員会
- 長嶋俊介 2009 「第 9 章 島々と暮らし：臥蛇島」『日本一長い村トカラ - 輝ける海道の島々 -』pp.107-120 梓書院
- 名瀬市教育委員会 2004 『奄美大島名瀬市大熊集落遺跡群』同委員会
- 那覇市 1970 『那覇市史資料篇 第一巻二 薩琉関係文書』那覇市
- 日本貿易陶磁研究会編 2014 『琉球列島の貿易陶磁』第 35 回日本貿易陶磁研究集会 (沖縄大会) 発表要旨・資料集 同会
- 橋口亘 1999 「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究』19、pp.141-146
- 橋口亘 2001 「南西諸島にもたらされた近世薩摩焼 - 近世薩摩焼の南と北 -」『からから』10 pp.9-16
- 橋口亘 2002 「鹿児島県地域における 16～19 世紀の陶磁器の出土様相 - 鹿児島県地域の近世陶磁器流通 -」『鹿児島地域史研究』1 pp.3-14
- 橋口亘 2009 「近世薩摩における中国陶磁の流入 - 清朝磁器を中心に -」『からふね往来 - 日本を育てたひと・ふね・まち・ところ』pp.53-66 中国書店

- 畑中英二 2003『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
- 平田信幸 2011「『御用植木鉢下図』から見る琉球王国の産業」『琉球陶器の来た道』pp.134-143 沖縄県立博物館・美術館、那覇市立壺屋焼物博物館
- 深港恭子 2014「窯業産地としての苗代川の形成と展開－薩摩焼生産の歴史－」『薩摩・朝鮮陶工村の四百年』pp.159-189、岩波書店
- 堀内秀樹 2002「十七から十九世紀の東洋陶磁とヨーロッパ市場の動向－沈船引き上げ資料の器種組成の検討から－(1)」『掘り出された都市』pp.109-132、日外アソシエーツ
- 宮城淳一 2018「首里城跡周辺遺跡出土の近世国産陶磁器」近世陶磁研究会編 2018、pp.25-36
- 宮城弘樹他編 2013『水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進－水中文化遺産総合調査報告書・南西諸島編－』アジア水中考古学研究所他
- 宮城栄昌 1982『琉球使者の江戸上り』第一書房
- 宮城幸也 2018「奄美諸島出土の近世陶磁器－国産陶磁器の資料を中心に－」近世陶磁研究会編 2018、pp.59-66
- 森達也 2018「首里出土の清朝景德鎮官窯磁器」『沖縄考古学会 2018（平成 30）年度研究発表会資料集 古都首里を掘る』pp.97-104 沖縄考古学会
- 森達也 2020「『琉球全図』に見る琉球の茶道具」麻生・茂木編 2020 pp.105-111
- 渡辺美季 2004「近世トカラと漂流・漂着」高良倉吉編『琉球と日本本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的位置づけをめぐる総合的研究』平成 13・14・15 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書、pp.101-138
- 渡辺芳郎 2002「鹿児島県・宮崎県における肥前陶磁」『国内出土の肥前陶磁－西日本の流通を探る』pp.679-835 九州近世陶磁学会
- 渡辺芳郎 2004「近世陶磁器から見た鹿児島と沖縄」『第 5 回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表資料集「20 年の成果と今後の課題」』pp.63-78 沖縄考古学会・鹿児島県考古学会
- 渡辺芳郎 2006「鹿児島県本土地域出土の近世沖縄産陶器」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』pp.141-152 桂書房
- 渡辺芳郎 2015「薩摩焼・宋胡録写の性格をめぐる一試考－近世陶磁器生産における政治的コンテクスト－」『金沢大学考古学紀要』36 pp.71-83
- 渡辺芳郎編 2015『近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究』鹿児島大学法文学部
- 渡辺芳郎 2018a『近世トカラの物資流通－陶磁器考古学からのアプローチ－』北斗書房
- 渡辺芳郎 2018b「近世薩摩焼・象嵌陶器の基礎的研究」『中近世陶磁器の考古学』9 巻 pp.275-304 雄山閣
- Watanabe Yoshiro 2020 “Ceramic Distribution in the Tokara Islands in the Early Modern Period” Otsuka, Y., Terada, R. and Nishimura, S. (eds.), *The Tokara Islands: Culture, Society, Industry and Nature* pp.9-19 北斗書房
- 和泊町教育委員会 2009『根皿原遺跡』同委員会
- 和泊町教育委員会 2019『和泊町 of 古墓 1』同委員会

1. はじめに

日本の中世段階の琉球列島には中国明朝との間に朝貢関係を結んだ国家が存在した。明朝が成立した14世紀後半頃、琉球列島の沖縄島には中山、山南、山北の3王があり、明朝はこれらの3王の朝貢を受け入れ、冊封を行なったのである。15世紀に入ると、3王の中の中山王が山北、山南の2王を滅ぼして沖縄島および沖縄諸島の覇権を掌握する。その後、中山王は16世紀初頭までに沖縄諸島北方の奄美諸島や西南方の宮古、八重山諸島を支配下に収めて、版図を琉球列島全域に拡大した。

明朝は朝貢国との国家的交易のみを許し、その他の民間交易を禁じる海禁政策を採った。明朝の海禁政策を利用した琉球国はさまざまな中国産物入手するとともに、同じく明朝との冊封関係を結んだ東南アジアの諸国家や朝鮮、さらには日本との間の交易を積極的に進めた。この結果、琉球国はアジア世界における交易国家として繁栄した。しかし、16世紀後半に入ると、明朝の海禁政策の弛緩による中国商人の対外交易活動への参入、ヨーロッパ諸国の東南アジア地域への進出に伴う交易国の減少、さらにはヨーロッパ諸国の中国、日本地域への交易拡大、加えて日本商人の中国、東南アジア地域への直接渡航と交易活動の開始などが継起的に起こり、琉球国の交易活動は次第に収縮せざるを得ない状況へと追い込まれていった。

その背景として、琉球国には版図内で商品化できる産物がほとんどないため、交易活動は交易対象地域で調達した産物を他地域へ持ち運んで売買する、いわゆる中継貿易によって成り立っていたことによる。また、琉球国の交易活動は中国明朝の海禁政策と中華思想に伴う冊封政策を前提とする朝貢国間での安定的な往来に依存していたことから、明朝の対外政策の動向と東南アジア諸国の国情変化は琉球国の交易活動に大きな影響を及ぼした。さらに交易活動は琉球国にとって国家的事業であったことから、その停滞化は琉球国の存亡を左右することにつながったのである。

この対外交易関係重視という国家のあり方は琉球国の歴史研究にとってさまざまな障害をもたらしている。その一つに琉球国内に残る古文書の問題がある。対外交易関係重視のため、琉球国の中世に関する文献記録は対外関係文書を中心とし、内政に関する文書は役職任命に関する辞令書などがわずかに残るに過ぎない。島々の支配に関する行政文書や人々の生活文化に関わる地方文書はほとんどなく、これらの文書が登場するのは1609年の島津氏による琉球侵攻以後のこととなる。琉球列島に関する中世史研究は琉球国の内政に関わる研究を深化させるよりも、琉球国の国際的な交易活動をめぐる対外関係史研究を中心に展開してきたと言って良いのである。

このこともあり、琉球列島における島々の社会組織や諸産業の成立過程、およびその内容に関する研究は、前述したように島津氏の琉球侵攻以後の近世段階から本格化する。極言すれば、中世段階の琉球国は内政に関する文字記録をほとんど残さない国家であった。島津氏の琉球侵攻は琉球国にとって、外交から内政へと国家施策の重点が変換する契機ともなったのである。

この点は本論で取り扱う窯業生産についても同様であり、琉球国における窯業史を明らかにするためには島津氏の琉球侵攻以降に作成された文字記録とともに、中世段階を含む考古学的調査研究成果に基づいた総合的な検討が必要となる。

2. 琉球窯業史研究の概要と那覇市湧田窯跡の調査

沖縄における窯業生産をめぐる研究は、大正から昭和初期にはじまった民芸運動に関わる人々が沖縄の焼物に関心を向けたことによって本格的に始まる。民芸運動を主導した柳宗悦らは昭和13～15(1938～40)年にかけて沖縄を訪れ、当時の壺屋で行なわれていた窯業生産の実態を観察するとともに、窯業史に関わる情報の収集を行なった。その成果は昭和17(1942)年に刊行された『民芸叢書』第4篇(琉球の陶器)にまとめられている。同書には柳による「現在の壺屋とその仕事」、同行した濱田庄司による「壺屋の仕事」と河井寛次郎による「壺屋と上焼」、さらに地元の研究者であった比嘉常景による「琉球焼物考」、山里永吉による「琉球の陶業史」などが採録されている。本書によって当時の壺屋で行なわれていた焼物生産の様子とともに、壺屋焼の技術や歴史に対する理解状況を知ることができる。とりわけ、比嘉が行なった琉球王府の作成記録や士族家系に残る『家譜』に記された窯業史に関係する記事の検討、および山里が行なった文字記録に対する考証と伝世陶器資料の検討を合わせた沖縄窯業史についての理解論の提示はその後の琉球窯業史研究の基礎となった。

山里によれば、琉球(沖縄)の陶器はタイやベトナム、南中国などの南方系陶器の影響を受けて始まり、17世紀初頭の朝鮮陶工の来琉による朝鮮陶器製作技術、17世紀後半の中国系赤絵技術、18世紀前半の薩摩系陶器製作技術の導入を経て、今日の壺屋焼に繋がる作風が完成したという。山里が琉球(沖縄)陶器の始まりに位置付けた南方系陶器の影響とは、昭和16(1941)年に東恩納寛惇が著した『黎明期の海外交通史』(東恩納1941)に採録した「泡盛雑考」の中で、15世紀後半に伝わったとした泡盛蒸留技法の存在を前提とする。東恩納の所論を受けて、山里は蒸留技術とともに泡盛の蒸留および貯蔵に必要な壺・甕を製作する陶器生産技術が琉球へ導入され、これに17世紀初頭に来琉した朝鮮陶工の陶器製作技術が加わって、本格的な琉球(沖縄)での陶器生産が確立したと考えたのである(前出、山里1942「琉球の陶業史」および山里1963)。

比嘉や山里による沖縄窯業史の枠組みは米軍統治時期を経て、沖縄の施政権が米国から日本に返還された昭和47(1972)年頃までの沖縄窯業史についての基本的な理解となった。なお、この時期の日本本土では陶芸ブームが起こっており、各地の焼物に関する図書の出版が行なわれ、その一環として沖縄の陶器に関する図録も複数刊行された⁽¹⁾。また、その後の沖縄では各地に残る窯跡への関心が高まり、窯跡採集資料を踏まえた論考の発表され始めた⁽²⁾。

このような中で、沖縄の窯業史研究に大きな転換をもたらしたのは、昭和61(1986)年から開始された沖縄県庁舎改築工事に伴う発掘調査である。沖縄県庁舎の敷地は近世期にまとめられたいくつかの文献記録に残る湧田窯跡の比定地であったが、一帯は沖縄戦によって焼土となった上に、戦後は琉球政府庁舎が建築されたこともあり、湧田窯跡に関する遺構はほとんど破壊されたと考えられていた。しかし、改築工事に先立つ発掘調査では複数の窯跡や焼物生産に関わる施設、および大量の貿易陶磁器や沖縄産陶器、瓦、さらには製陶に関わるさまざまな遺物が検出された。中でも窯跡はイチジク状の平面観を呈する平窯と細長い筒状の平面観を呈する単室登窯(筒窯)があり、前者では瓦と瓦質土器(陶器)、後者では焼き締め陶器を中心として瓦も焼成していたことが確認された(沖縄県教育委員会1993・1995・1997・1999)。

それまでの研究において、湧田窯跡は17世紀初頭に来琉した朝鮮陶工をはじめとして、琉球王府に仕えた士族の家系図である『家譜』資料が残る平田典通や仲村渠致元らの陶工が陶器製作に従事した場所とされていた。また、今日の沖縄では上焼と呼ばれる施釉陶器は連房式登窯、荒焼と呼ばれる

焼き締め陶器と瓦は単室登窯（筒窯）で焼成することが常識として知られており、この点からすれば発掘調査で検出した平窯は全く予想しなかった構造の窯であった。さらに発掘調査出土遺物中の貿易陶磁器の中には15世紀後半～16世紀代に位置付けられる明代青花があったことから、新たに発見された平窯の操業年代はこれまで山里らが想定していた朝鮮陶工の来琉年代である17世紀初頭ではなく、15・16世紀代まで遡る可能性を考えなければならなくなった。実際に出土遺物である瓦質土器（陶器）の浅鉢の一つに施されていた「萬曆三十三年」（1605年）の線刻銘資料（前出、沖縄県教育委員会1993）の存在が示すように、湧田窯では朝鮮陶工の来琉年である1616年に先立って、少なくとも瓦質土器（陶器）の生産が確実に行なわれていたのである。

発掘調査終了後、発掘調査の際の窯跡検出状況と中国明代に刊行された『天工開物』に記載された窯構造との比較が行われ、湧田窯跡で検出した平窯は瓦を焼成した中国系の窯と理解することが通説となった。また、出土遺物である瓦および瓦製作に用いた瓦當範の分析によって、製作された瓦には灰色と赤色の2種があり、17世紀後半から18世紀にかけて首里城などの公的建造物の屋瓦として供給されたことも明らかにされた（上原1994）。なお、平窯では瓦とともに瓦質土器（陶器）を焼成していたことは前述した通りであり、その上限年代は「萬曆三十三年」（1605年）の紀年銘が示す朝鮮人陶工の来琉以前の年代まで遡ることが共通理解となった。

沖縄県庁舎改築工事に先立つ発掘調査が行なわれる前まで、沖縄での瓦生産については文献記録の検討に基づき、少なくとも16世紀後半には開始されたと考えられていた。また、その窯跡の所在地としてはやはり文献記録⁽³⁾に基づいて、那覇市真玉橋周辺に存在した可能性を念頭に置いていた。しかし、窯跡は発見されておらず、初期の瓦窯については文献記録以外には全く情報がない状態にあった。このため、沖縄における瓦生産開始段階の瓦窯構造については、近年まで操業していた沖縄の瓦製作所の窯の構造が単室登窯（筒窯）であることを参考にして、単室登窯（筒窯）であるとする認識が一般化していたのである（やちむん会1979）。

しかし、湧田窯跡から平窯が検出されたことによって、16世紀後半以降の沖縄で初めて瓦を焼成した窯は湧田窯跡で検出された平窯に類似した構造であると考えられることとなった。この調査成果を踏まえ、筆者は17世紀初頭の朝鮮陶工来琉に際して伝えられた窯の構造は平窯ではなく、同時に検出された単室登窯（筒窯）であり、後に連房式登窯の築窯技術が沖縄に伝えられた後、瓦の焼成も単室登窯で行なわれるようになったことによって、瓦窯であった平窯は次第に消滅したと論じた。すなわち、瓦と荒焼は単室登窯（筒窯）、上焼は連房式登窯で焼成するという今日まで続く沖縄における窯の使い分けは、平窯が忘れ去られる過程を経て成立したのである（池田1995）⁽⁴⁾。

なお、沖縄県庁舎改築工事に先立つ発掘調査によって琉球（沖縄）における瓦および瓦質土器の生産は16世紀に遡ることが共通認識となった。これに対して、山里らが想定していた泡盛の蒸留技術とともに蒸留および貯蔵に必要な壺・甕を製作する陶器生産技術が伝わったとする考え方については具体的な証明資料が存在せず、あくまでも理解仮説に留まることとなる。

3. 考古学による琉球窯業史研究の新たな展開

沖縄県庁舎改築工事に先立つ発掘調査における平窯や単室登窯（筒窯）の確認は沖縄における窯業史研究の見直しの気運を醸成した。この結果、新たに見つかった平窯をはじめとして、単室登窯（筒窯）、連房式登窯については窯構造の導入過程と操業年代、それぞれの窯で焼成した製品である瓦、

瓦質土器(陶器)、荒焼(焼き締め陶器)、上焼(施釉陶器)との関係、さらにはそれぞれの製品の製作技術や器種、器形、装飾意匠、加飾技法の変化の過程など、さまざまな方面での検討が考古学研究を中心として進められることとなった。

瓦については上原静(2007・2008)や石井龍太(2007・2008)による検討が行なわれ、湧田窯跡で検出された平窯で焼成した瓦は沖縄で明朝系瓦と呼ばれる一群であり、平瓦は桶巻4枚分割技法、丸瓦は模骨巻2枚分割技法で製作され、その確実な製品は17世紀前半に位置付けられることが明らかにされた。しかし、これまでの文献記録研究では16世紀後半とされる瓦生産開始期の製品については、実際の瓦資料によって明らかにするには至っていない。

また、瓦質土器(陶器)の検討を行なった瀬戸哲也は、沖縄の遺跡からは14世紀後半以降に生産がはじまった日本本土産の瓦質土器(陶器)が出土することを指摘するとともに、沖縄でも茶道具や仏具的性格をもつ瓦質土器(陶器)の生産が少なくとも16世紀後半に始まっていた可能性を指摘した(瀬戸2004a・2004b・2009)。なお、石井龍太は沖縄で生産した16世紀後半の瓦質土器(陶器)の一つである植木鉢の存在に注目し、これが17世紀以降の沖縄産焼き締め陶器(荒焼)や薩摩焼陶器製品の製作に際して、模倣された可能性を提起した(石井2009)。

同様に瓦質土器(陶器)について、新垣力は沖縄産焼き締め陶器との関係に着目した。新垣は湧田窯跡で出土した無釉の焼き締め陶器の一群を初期無釉陶器と呼び、これが後の荒焼に発展するとした。新垣は初期無釉陶器と瓦質土器(陶器)の間には植木鉢や挿鉢など器形が似通った器種が複数みられることを指摘する。このことは瓦質土器(陶器)と初期無釉陶器の間で器形の模倣が行なわれたことを暗示しており、新垣は初期無釉陶器(無釉の焼き締め陶器)が瓦質土器(陶器)の器形を取り入れた可能性を考えている(新垣2000・2013)。そして、このような現象が起る背景として、薩摩からの朝鮮陶工の来琉を契機として朝鮮製陶技術がもたらされ、それまで瓦と瓦質土器(陶器)を生産していた沖縄の窯業技術との間で融合が起こり、その結果として初期無釉陶器(無釉焼き締め陶器)の器種構成とそれぞれの器形が生じたと考えたのである。なお、初期無釉陶器(無釉焼き締め陶器)は粘土紐(帯)輪積みと叩き技法を用いて製作されており、後の上焼に見られるロクロ回転を利用した水挽きやケズリなどの製作技法は採用されていない点に特徴がある。また、初期無釉陶器(無釉焼き締め陶器)を焼成した窯について、新垣は当然ながら朝鮮陶工によって伝えられたと推測される湧田窯跡で検出された単室登窯(筒窯)であると考えている。

初期無釉陶器に続いて、湧田窯跡では現在の壺屋焼で上焼と呼ぶ施釉陶器の生産が開始されたと考えられ、これについては筆者も含めて初期の施釉陶器である灰釉碗の存在に着目している(註(2)文献、知念ほか1988、池田ほか1991)。灰釉碗はロクロ整形によって作り出した碗生地のお縁部内外面のみに透明釉を施した製品で代表される。高台部分と見込み内底部は露胎となり、一部には口縁部外面の透明釉下に鉄釉による簡単な模様を描いた製品も見られる。これらの製品群は沖縄県庁舎改築工事に先立つ発掘調査以前には湧田焼と呼ばれ、朝鮮陶工が伝えた製陶技術によって製作された製品に比定されていた。

しかし、湧田窯跡の発掘調査によって、朝鮮陶工が伝えた製陶技術は施釉陶器ではなく、無釉の焼き締め陶器製作技法である蓋然性が高くなった。このため、灰釉碗に代表される施釉陶器の位置付けについて再検討の必要が生じた。これに対して、家田淳一は中国南部地域で製作された粗製青花碗と灰釉碗との類似に言及し(家田1998)、日本本土では粗製青花碗が17世紀後半から18世紀前半に位置

付けられる遺跡から出土することが一般的であることを手がかりとして、灰釉碗の製作開始年代は17世紀後半以降に下降するとした。

なお、この粗製青花碗について新垣力は中国福建省漳州窯系染付（青花）碗であるとし、沖縄の遺跡調査事例では16世紀後半～17世紀代に比定されることを踏まえて、これを摸倣したと考えられる灰釉碗の生産は17世紀前半に始まる可能性を指摘した（前出、新垣2000）。灰釉碗の成形にはロクロが使用されており、初期施釉陶器（無釉焼き締め陶器）との間には施釉技術だけでなく、製陶技術全般にわたる相違が認められることは前述したとおりであるが、その技術系譜はよくわかっていない。

このような研究状況の中、朝鮮陶工の来琉から400年となった平成28（2016）年の沖縄考古学会2016年度研究発表会では、琉球陶器誕生400年記念と銘打ったシンポジウム「16～17世紀の沖縄における窯業の展開とその背景」が開催された。研究会では石井龍太「琉球近世瓦の展開と琉球近世史」、新垣力「瓦質土器の製作技術」、渡辺芳郎「17世紀における薩摩焼製陶技術の琉球陶器への影響」、森達也「16～17世紀における中国陶磁の生産技術－窯構造を中心に－」の発表が行われた（沖縄考古学会2016）。

その中で、石井は琉球における瓦の展開過程を4期に区分し、第1期に位置付けられる瓦として那覇市渡地村跡出土資料を取り上げた。その上で、これらの瓦資料について沖縄産であるかどうかの判別は今後の課題とするものの、15世紀前半に比定するとともに、その製作技術が後の沖縄における瓦生産に継承された可能性に言及している。また、第2期とした16世紀以降については湧田窯跡の存在を上げ、瓦と瓦質土器（陶器）の胎土や焼成が近似していること、瓦質土器（陶器）の植木鉢に瓦と同種の牡丹文様を施した例が存在することを踏まえ、瓦と瓦質土器（陶器）では製作工人とデザイナーが近い関係にあったと述べている。

新垣は沖縄出土の瓦質土器（陶器）の器種構成を概観した上で、大型製品は粘土紐巻き上げ、小型製品は手捏ねを基本とし、ケズリとナデによって調整され、施文には縄目文突帯と瓦質土器（陶器）特有の円筒形施文具を用いて回転押捺文、線彫り文が施されることを特徴として上げる。そして、首里城跡や湧田窯跡の発掘調査成果からすれば、これらの瓦質土器（陶器）は16世紀後半には確実に存在し、その生産は16世紀前半にまで遡る可能性があるとして指摘する。

渡辺は鹿児島県立埋蔵文化財センターが調査した初期薩摩焼の窯である日置市堂平窯跡出土資料と、新垣が紹介した沖縄出土の初期無釉陶器（無釉焼き締め陶器）および瓦質土器（陶器）を対象として、器種、形態、（製作）技法の比較検討を行い、琉球（沖縄）で17世紀初頭に朝鮮陶工の来琉を図った目的は甕や大壺などの叩き成形で製作する大型器種の導入にあったと述べている。また、朝鮮陶工がもたらした製陶技術をそのまま受け入れるのではなく、以前から存在していた瓦質土器（陶器）との融合を図りながら、沖縄の需要に応じた器種や器形の選択を行なったとした。

森は16・17世紀における中国の窯業生産で用いられた窯の構造について近年の研究状況を踏まえた紹介を行ない、同時期の中国福建・広東省の窯跡では陶器を龍窯（単室登窯）、磁器を横室階段窯（連房式登窯）で焼成する使い分けが行なわれていたことを指摘した。また、この使い分けは鹿児島の薩摩焼や沖縄壺屋焼の上焼と荒焼でも認められ、沖縄での使い分けは中国からの直接的な導入ではなく、朝鮮半島や九州地域を経由した影響によるものとした。

沖縄考古学会によるシンポジウムによって、琉球（沖縄）における窯業開始期の様相がかなり明らかとなった。すなわち琉球の窯業は16世紀代に平窯を用いた瓦および瓦質土器の生産から始まり、

17世紀初頭に薩摩から招聘した朝鮮人陶工による筒窯と初期無釉陶器（無釉焼き締め陶器）の導入、その後17世紀中頃には中国福建省漳州窯系染付（青花）碗を模倣した灰釉碗を中心とする施釉陶器の製作が始まり、17世紀末の壺屋統合によって、瓦および焼き締め陶器、施釉陶器の生産管理が整う。そして、18世紀前半に薩摩から新たに連房式登窯が導入されることによって、施釉陶器（上焼）は連房式登窯、瓦と焼き締め陶器（荒焼）は筒窯で焼成するという使い分けが成立することとなる。

4. 琉球社会における窯業生産の位置付け

前段まで述べてきたように、琉球（沖縄）の窯業生産は国家の関与の下に展開するが、そのあゆみの端々に島津氏の琉球侵攻以前から続く中国産陶磁器を中心とした搬入陶磁器を重用してきた歴史と、窯業の国内産業化を追求する動きとの間の葛藤が垣間見えるように思われる。そこでここでは琉球（沖縄）における窯業生産の社会的位置付けについて検討を試みることにする。

琉球（沖縄）において、最初に登場する窯業製品は高麗瓦である。瓦製作の際に用いる叩き板に刻まれた「癸酉年高麗瓦匠造」の文字が瓦の凸面に浮き彫りの鏡面状態で残ることから高麗瓦と呼ばれる。これまでの研究によって、高麗瓦に刻まれた「癸酉年」については1273、1333、1393年などいくつかの比定年が提示されているが、考古学的な調査研究成果によればその製作年代は14世紀中頃に位置付けることが穏当とされる。高麗瓦は銘文の文面通り、高麗（朝鮮半島）の造瓦技術の影響を受けて、琉球（沖縄）で製作されたと理解されているが、いまだに窯跡は確認されていない。また、高麗瓦は後出する大和系瓦と併存し、その後、両者は融合する過程をたどるものの、15世紀代には高麗瓦、大和系瓦ともに途絶える。

これに対して、2005年から開始された那覇市渡地村跡遺跡の緊急調査では、前段で石井が15世紀前半に位置付けた瓦の出土が確認された。報告書ではこれを「渡地系瓦」と呼んでおり、高麗瓦・大和系瓦と、16世紀代に製作が開始されたと考えられる「明朝系瓦」との間を繋ぐ資料である可能性を指摘している。「渡地系瓦」は軒丸瓦の瓦當文様に鬼面表現を用いられる特徴があり、報告書では「今後、出自の検討を含めて出土遺跡の蓄積・追加にも留意したい」（那覇市教育委員会2012 p.396）とまとめている。このことは「渡地系瓦」が琉球（沖縄）以外の地で製作され、運び込まれた可能性を示唆するものの、搬入品もしくは琉球（沖縄）産のいずれかである明確な判断は示されていない。これに対して、石井は「グスク瓦の生産が終了した後、一部の需要に答えて少量が生産され供給された瓦群」（石井2014 p.34）とし、琉球（沖縄）で製作した可能性に言及したのである。

高麗瓦に始まる琉球（沖縄）の瓦生産が大和系瓦、渡地系瓦、さらに明朝系瓦と継続的に続けられているとすれば、琉球における窯業生産は14世紀段階に始まり、連綿と継続してきたことになる。しかし、今のところ高麗瓦、大和系瓦、渡地系瓦の生産窯跡は確認されておらず、あくまでも仮説の域を出ない。これに対して、明朝系瓦については沖縄県庁舎改築工事に先立つ発掘調査によって、16世紀代には瓦生産を開始していたとされる。また、その後の17世紀後半からは首里城をはじめとする公的施設が瓦葺き化されるのに伴って、安定的な瓦生産体制が確立するのである。

このことは17世紀後半以前の琉球では瓦の生産が幾度か試みられる時期があるものの、基本的には必要に応じた散発的な生産にとどまっていた可能性が高いことを示す。実際に高麗瓦や大和系瓦、渡地系瓦の出土遺跡は有力グスクやこれと関連する墳墓、祭祀遺跡、あるいは対外交渉の拠点であった那覇などの港湾遺跡に限られており、瓦葺きが一般家屋に広く採用されるのは遠く隔たった20世

紀後半の沖縄戦後を待たなければならない。中世から近世期にかけての琉球国における瓦の製作は国家が関与した事業であり、そこで製作された瓦には使用規制が加えられていた。したがって、瓦生産は日常的に行われていたのではなく、一時的な中断や長期にわたる途絶が十分にあり得た可能性が高いのである。

これに対し、17世紀後半以降には瓦だけでなく、壺、甕、碗、皿、瓶などの日常生活に必要な焼き物の生産が琉球国内において安定的に行われるようになる。また、壺、甕、大鉢などの大型容器は焼き締め陶器、碗、皿、瓶など小型の供膳具や調度具は施釉陶器を中心とする作り分けが進み、これが現在まで続く沖縄の伝統的窯業製品である壺屋焼に継承される。発掘調査状況からすれば、従前から行われていた瓦生産に付随して16世紀後半から瓦質土器（陶器）の製作が始まり、1616年に薩摩を経由して琉球へ派遣された朝鮮陶工によって、焼き締め陶器の生産が開始されたことが明らかになっている。焼き締め陶器は大型の壺、甕、大鉢、花鉢などを中心として、小型の碗や瓶、茶道具の水指、花生なども製作していた。これらの焼き締め陶器を新垣は初期無釉陶器とするが、現在までのところ、遺跡からの出土量および伝世品の数はかなり少ない。このため、その生産は大規模ではなく、窯跡として知られている那覇市湧田窯跡や読谷村喜名窯跡、沖縄市知花窯跡などで個別分散的に行われていたと考えられる。

しかし、17世紀後半に入ると、文献記録では湧田窯、知花窯、那覇市宝口窯が現在の那覇市壺屋に統合されて窯場が開かれ、ここでの恒常的な窯業生産の拠点が設けられた。壺屋では瓦、焼き締め陶器に加えて、施釉陶器の製作も盛んとなる。ただし、壺屋地域で発掘された窯業関係出土遺物を見る限り、いずれの製品にも器形の簡略化や焼成温度の低下などが看取され、生産の恒常化とともに大量生産を指向したことが知れる。なお、施釉陶器については壺屋統合以前の湧田窯跡において、すでに灰釉碗の生産が開始されていたが、17世紀後半の壺屋統合段階には碗以外の瓶や皿など器種の増加が顕著となる。さらに18世紀に入ると、成形した生地に白色の化粧土を器表面に塗布し、ここに彩画や掻き落としを行った後に彩色を加える技法が採用され、18世紀後半には広く用いられるようになる。これは京焼や白薩摩などに見られる加飾技法であるが、両者に比べて壺屋では生地および白色の化粧土が厚く、全体として厚ぼったい仕上がりとなる。また、焼成後に化粧土の剥落が見られることも多い。これらの作柄は今日においては壺屋焼の特徴とみなされるが、同時期の中国や日本産磁器と比較した場合、焼物としての質的違いが大きい。

このような点もあってか、琉球では窯業生産が盛んに行われるようになった18世紀においても、中国へ進貢船を派遣するごとに大量の陶磁器を購っている記録が見られる。中国北京檔案館から刊行された『清代中琉関係檔案選編』の分析を行なった真栄平房昭によれば、琉球国が1767（乾隆32・明和4）年の進貢貿易によって入手した購入品の中には、琉球到着後に薩摩藩を経由して日本で売買される薬種や絹織物、白糖、香木などの他に、琉球国内で用いる農具の篋箕（竹箕＝ミーゾーキー74,250個）や紙（毛辺紙33,120張・連史紙7,720張・小油紙3,000張・色紙3,600張・甲紙19,040斤・川連紙266斤）、中茶葉（ジャスミン茶＝サンピン茶22,744斤）、粗扇（安物の扇33,250把）、三線の蛇皮（5張）、油傘（唐傘2,252把）などの大量の日常生活必需品とともに、細磁器（2,837斤）、粗磁碗（1,925斤）、宜興罐（15斤）が見える（真栄平2003・2004など）。このことは進貢貿易では薩摩藩を通じて日本で転売することを念頭においた高級品のみではなく、琉球国内の日常生活必需品についても大量に調達していたことを示す。

そこに記された細磁器・粗磁碗・宜興罐は明らかに中国産陶磁器であり、その中の宜興罐については浙江省宜興窯およびその周辺諸窯の製品と判断できる。残る細磁器・粗磁碗については、大まかに精製品と粗製品の区別と考えられる。その実態について、沖縄出土の清朝磁器の分析を行った新垣は、①江西省景德鎮窯およびその周辺諸窯の製品や、②福建省徳化窯およびその周辺諸窯の製品は基本的に薄手の精製品が多いのに対して、③福建省漳州窯およびその周辺諸窯の製品や、④福建・広東系磁器製品には薄手の精製品に区分される製品とともに、比較的厚手の粗製品も認められると述べていることが参考となる(新垣2003・2009)。これを踏まえれば、購入品目に見られる細磁器には①江西省景德鎮窯およびその周辺諸窯の製品や②福建省徳化窯およびその周辺諸窯の製品、粗磁碗は③福建省漳州窯およびその周辺諸窯の製品の中の粗製品や④福建・広東系磁器製品に比定することが可能かもしれない(池田2015 p.114)。いずれにせよ、これらの中国産磁器は①江西省景德鎮窯およびその周辺諸窯の製品を除いて、中国福建省福州に置かれた琉球国の客館に近い地理的条件を持つ地域の産物であり、当然、福州で購入されたと考えられる。

なお、それぞれの購入量を示す単位には「斤」が用いられており、陶磁器の購入に際しては個数よりも船舶に積み込む際の重さ(清代の1斤≒約590g)が基準とされたことが知れる。この場合、持ち帰った細磁器2,837斤は約1.7トン、粗磁碗1,925斤は約1.1トン、宜興罐15斤は約9kgとなり、総計約3トン近い重量となる。前述したように、これは1767年の記録に掲げられた購入量であることからすれば、琉球国は国内での窯業生産が恒常化した18世紀後半においても大量の中国陶磁器を進貢船に積んで持ち帰っていたことが知れるのである。

この18世紀における中国陶磁器の大量輸入が行われる背景について、新垣は琉球産の「上焼が近世琉球の陶磁器需要を満たしたとは考え難い」(前出、新垣2009 p.9)と考え、中国産陶磁器がその補完的な役割を果たしていたとする理解論を提示した。これに対して、筆者は「外部からの各特産物の分配システムが中世琉球において存在した状況からすれば、中国産陶磁器をはじめとする琉球国外からの輸入品は、近世琉球においても所有者(使用者)の地位や富を表すステータスシンボルとして、依然として機能していた」可能性を指摘し、「近世琉球社会においては、内部で生産された琉球国産品と、中国や日本から持ち込まれる輸入品との間に、何らかの価値基準や使用場所などの相違を意識し、使い分けを行っていた」(前掲、池田2015 p.115)とする理解論を提示した。このことは進貢船が持ち帰った中国産品の中には中国国内でしか入手できない繊維製品や薬種だけでなく、琉球で産出することが可能な篋箕や粗扇など多くの日常生活必需品が含まれていることも大きな理由となる。

おそらくは現在社会においてブランド製品に人気が集まる現象や、「Made in Japan」が世界各国で高い評価を受けることと同様の心証が、中国産品を目の前にした18世紀代の琉球列島の人々の間にも存在していたと考えられるのである。

5. まとめ

琉球(沖縄)における近世窯業についてのあゆみと研究史を再確認するとともに、進貢貿易によって輸入された中国産陶磁器をはじめとする琉球列島外から持ち込まれた窯業技術や製品と琉球(沖縄)で生産された窯業製品との関係について検討を加えてきた。ここで注目しなければならないのは、中世の琉球では列島内でさまざまな産物を生産するよりも、外部から調達することに重きが置かれていたことである。中世琉球は中国明朝の海禁政策とアジア地域を対象とする冊封体制の下で、交

易国家として存在することに活路を見出しており、内政よりも対外交易が国家運営の根幹を支えていた。

これに対し、対外交易が次第に衰退する中で、島津氏の侵攻を受け、否応なく日本社会の枠組みの中に組み込まれた近世琉球では、統治制度を含めた内政の充実を図る必要に迫られた。このため、窯業を含むさまざまな産業の育成を試みるが、中世琉球で培われた対外交易に立脚する社会や文化のあり方は、外部から持ち込まれた製品を高く評価し、重用する状況を作り出しており、その嗜好は琉球社会の中にさまざまな形で影響を及ぼし続けたと考えられる。この状況がもっとも良く現れているのが窯業製品の取り扱いであり、国家的な事業として国内窯業生産の育成に取り組みながらも、大量の中国産陶磁器を持ち帰り続けた進貢船貿易の実態がこれを如実に示している。

註

(1) 1970年以降、沖縄の焼物についての主な出版物には下記のものがある。

- ①宮城篤正1970「沖縄の陶器」『世界陶磁全集』7(江戸Ⅱ)小学館
- ②濱田省司監修1972『沖縄の陶器－OKINAWAN POTTERY－』琉球電信電話公社
- ③大城精徳・宮城篤正1972「古我知焼」『琉球の古陶』1 琉球文化社
- ④「特集・琉球の焼物」『琉球の文化』創刊号 琉球文化社 1972年
- ⑤外間正幸・宮城篤正1974「沖縄」『カラー日本のやきもの』1 淡交社
- ⑥立原正秋・林屋晴三監修1980「薩摩・壺屋」『探訪日本の陶芸』1(南九州・沖縄)小学館年
- ⑦上江洲均1980「沖縄の厨子甕」『日本民族文化とその周辺 歴史・民俗篇』国分直一博士古稀記念論集編集委員会編 新日本教育図書
- ⑧満岡忠成1982「沖縄」『日本やきもの集成』(九州Ⅱ)平凡社
- ⑨井上靖・吉田光邦監修1990『やきもの大百科』3(九州・沖縄編)ぎょうせい

(2) 窯跡採集資料に基づく主な論文には下記のものがある。

- ①安里進・上原政昌・家田淳一1987「播鉢編年からみた近世琉球窯業の展開」『あじま』3名護市立名護博物館
- ②知念勇・池田榮史・江藤和幸1988「灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年」『沖縄県立博物館紀要』第14号
- ③池田榮史・津波古聡1991「灰釉碗の話」『沖縄県立博物館紀要』第17号

(3) 18世紀初頭に成立した『琉球国由来記』巻4「事始 坤 技術門 35 瓦工」に下記の記述がある。

「當國瓦作、焼始年代不詳。往昔唐人渡来、而真和志間切于国場村居住、同間切於真玉橋村焼始也。于御檢地帳、渡嘉敷三良云、賜此地也。」なお、『琉球国由来記』については、伊波普猷・東恩納寛博・横山重編1962「琉球国由来記」『琉球史叢書』第1(井上書房)を参照した。

(4) 沖縄で確認される窯の名称について、筆者は1995年の論考において、瓦窯については「平窯」としたが、中国では一般に「饅頭窯」と呼ばれている。また、瓦と焼き締め陶器を焼成した単室登窯については「蛇窯」と呼ぶ磁器窯の構造や、韓国で発掘される高麗青磁や朝鮮磁器の窯跡の構造との類似を念頭に置いて仮に「筒窯」と呼称した。このため、本稿ではこれと呼ぶ場合「単室登窯(筒窯)」と表記している。なお、上焼を焼成した連房式登窯については日本の窯業史研究で用いられている「連房式登窯」をそのまま用いた。また、連房式登窯が沖縄へ導入された年代は18世紀前半とした。

参考文献

- 新垣力2000「モデルとコピーの視点からみた窯業開始期の沖縄」『南島考古』第19号 沖縄考古学会
- 新垣力2003「沖縄出土の清朝磁器」『紀要沖縄埋文研究』1 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣力2009「古墓出土資料から見た近世陶磁器の流通」『紀要沖縄埋文研究』6 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 新垣力2013「17世紀前半～中葉の琉球陶器について－「初期無釉陶器」にみる薩摩焼の影響－」『鹿児島考古』第43集 鹿児島県考古学会
- 家田淳一1998「沖縄のやきもの－概説－」『平成10年度企画展 沖縄のやきもの－南海からの香り－図録』佐賀県立九州陶磁文化館

- 池田榮史1995「琉球近世窯業史考－窯構造の検討－」『琉大アジア研究』創刊号 琉球大学法文学部附属アジア研究施設
- 池田榮史2015「第6章 考古学資料から見る近世琉球の流通と消費」『近世日本国家領域境界域における物資流通の比較考古学的研究』(平成24～26年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 研究代表者:渡辺芳郎)
- 石井龍太2007「湧田古窯の再評価－湧田古窯跡の軒丸瓦－」『南島考古』第26号 沖縄考古学会
- 石井龍太2008「湧田古窯の再評価－湧田古窯跡の軒平瓦－」『南島考古』第27号 沖縄考古学会
- 石井龍太2009「湧田古窯の再評価－湧田古窯跡の瓦質土器製植木鉢－」『南島考古』第28号 沖縄考古学会
- 石井龍太2014「渡地村跡出土瓦の分析～琉球近世瓦の定義に関して～」『壺屋焼物博物館紀要』第15号
- 上原静1994 「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第14号(学会創立25周年記念特集号) 沖縄考古学会
- 上原静2007「琉球王国における瓦窯生産の画期と展開」『南島文化』第29号 沖縄国際大学南島文化研究所
- 上原静2008「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『総合学術研究紀要』第11巻第2号 沖縄国際大学学術学会
- 沖縄県教育委員会1993「湧田古窯跡(Ⅰ)－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－」『沖縄県文化財調査報告書』第111集
- 沖縄県教育委員会1995「湧田古窯跡(Ⅱ)－県庁舎議会棟建設に係る発掘調査－」『沖縄県文化財調査報告書』第121集
- 沖縄県教育委員会1995「湧田古窯跡(Ⅲ)－県庁舎警察棟建設に係る発掘調査－」『沖縄県文化財調査報告書』第129集
- 沖縄県教育委員会1999「湧田古窯跡(Ⅳ)－県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査－」『沖縄県文化財調査報告書』第136集
- 沖縄考古学会2016「(琉球陶器誕生400年記念)16～17世紀の沖縄における窯業の展開とその背景」『沖縄考古学会2016年度研究発表会資料集』
- 瀬戸哲也2004a「沖縄出土の本土系瓦質土器」『グスク文化を考える』(世界遺産国際シンポジウム〈東アジアの城郭遺跡を比較して〉)の記録 沖縄県今帰仁村教育委員会
- 瀬戸哲也2004b「本土系瓦質土器の産地についての試論－北部九州の瓦質土器と比較して－」『紀要沖縄埋文研究』第2号 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 瀬戸哲也2009「南の境界・琉球の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会
- 田沢金吾・小山富士夫1941『薩摩焼の研究』座右寶刊行會(1987(昭和62)年に国書刊行会より復刻)
- 那覇市教育委員会2012「渡地村跡－臨港道路那覇1号線整備事業に伴う緊急発掘調査－」『那覇市文化財調査報告書』第91集
- 東恩納寛惇1941『黎明期の海外交通史』帝国教育会出版部(後に琉球新報社が1969年に再版)
- 真栄平房昭2003「琉球貿易の構造と流通ネットワーク」『日本の時代史』18(琉球・沖縄史の世界)吉川弘文館
- 真栄平房昭2004「6章 琉球における身分制社会の成立」『県史』47(沖縄県の歴史)山川出版社
- やちむん会1979「図録沖縄の古窯」『やちむん会10周年記念『やちむん』特別号』
- 山里永吉1963「南蛮焼」『壺中天地－裏からのぞいた琉球史－』琉球文庫

1. 薩摩藩による日本産品の流通統制と中国貿易

近世における琉球の中国貿易は、1630年代に薩摩藩の介入により停止するが、1680年代には復活する。那覇と福州のあいだを往還する進貢船や接貢船などの琉球船が薩摩藩と琉球側の輸出入品を輸送し、両者の中国貿易が並存するかたちで展開された。琉球側の貿易には、王府の貿易とともに、渡唐役人など乗船者や船舶関係者による許可された範囲内での個人貿易が存在した。

那覇には薩摩藩の中国貿易の拠点となる在番奉行所が設置され、琉球在番奉行をはじめとする派遣役人のほか、大和船（薩摩船）の船舶関係者が滞在した。大和船は、清朝への朝貢品のうち銅と錫、中国貿易の輸出品である貿易銀と昆布・ナマコ・フカヒレ・アワビ・鰹節・筋寒天などの海産物、琉球社会で消費された砂糖鍋・延鉄（鉄鍋や農具の原料）・種子油・繰綿・米・茶・煙草などの日本産品をもたらした。18世紀末には、大和船の船頭や水主が繰綿と昆布などの一手販売を繰り返していたことが指摘されている¹。

しかし、19世紀前半、薩摩藩の中国貿易と連関して、藩による日本産品の流通統制が強化される。上原兼善氏の研究成果に依拠して概観する（上原2016）。1818年、薩摩藩は中国貿易の担当部署である唐物方を設置、翌年には琉球唐物（中国商品）に対する一手買入制を施行、1826年には在番奉行所（定式方）とは別に唐物方の出先機関が那覇に置かれた。前年には、長崎商法をめぐり、幕府から16種の菓種の販売権を獲得している。そして、1844年の産物方への改称に前後して、日本産品の琉球側への専売を実施する。1847年から49年の場合、昆布・筋干藻（筋寒天）・種子油・繰綿・指宿煙草・茶・桐油・荏子油・本手用琉球米の9品目であった。その代金を本手として菓種などの唐物を仕入れ、長崎に回したため本手品という。薩摩藩は唐物を買入れるため特定の日本産品を琉球で専売したのである。日本産品の流通統制と藩の中国貿易は表裏一体の関係にあったといえよう²。

一方、真栄平房昭氏は、琉球側の個人貿易の輸出品について、個人資本や個人貿易権の配分を明らかにしたうえ、貿易銀と海産物に着目し、乗組員の末端になるほど琉球産の海産物に依存していた実態を指摘した。また、同氏は、1767年の輸入品の品目と税額が記された清單（後述）をもとに、絹織物などの高級品ばかりでなく、竹製の農具である篋箕、衣料品として粗夏布・粗冬布、および粗扇や粗磁器などの生活用品が大量に輸入されたことを指摘し、進貢貿易の意味を問い直す必要性を問題提起した（真栄平1986・2003）。

1860年代以降、産物方は再編を繰り返す。1868年には生産方と改称、版籍奉還の翌年の1870年には、島津家の出資により生産方と三島方を継承して国産会社が設立される。上原兼善氏は、1840年代からアヘン戦争や太平天国の乱の影響により中国貿易が不調をきたしたため、薩摩藩が貿易への直接関与の度合いを減らす方向へ転じたこと、1865年の長崎での海外貿易独占体制の崩壊を契機として、1869年に藩が中国貿易の輸出品から貿易銀（一番方銀）を引き取ったこと、ただし、琉球に対する流通統制などの仕組みは変わらなかったことを述べた（上原2016）。産物方から国産会社への再編は、藩による中国貿易の変化と時期的に前後することがうかがえよう。

さらには、1871年の廃藩置県によって琉球は鹿児島県の管轄となり、翌年には、明治政府が琉球国王を藩王に冊封したことにともない、琉球藩の管轄は外務省に移管される。それでは、廃藩置県の

あと、国産会社は日本産品の流通統制を継続したのだろうか。また、薩摩藩の中国貿易が変化する一方、琉球側の個人貿易はどのような状況を呈していたのだろうか。本稿では、鹿児島県管轄期における流通統制のありかた、外務省管轄期における那覇の様相とともに、琉球側の中国貿易の輸入品のなかでも大衆消費財である生活用品について取り上げてみたい。

2. 1871～72年における鹿児島県による流通統制の変容

(1) 本手品の「勝手商売」と搬送許可

尚家文書343号「同治十／明治四辛未六月より翌九月迄 在勤中日記 在番池城親方 与力池村親雲上」(那覇市歴史博物館蔵)は、首里王府が廃藩置県当年の1871年に鹿児島に派遣した在番親方である池城親方の公務日記である(以下、「在勤中日記」)。同年8月6日条には、鹿児島琉球館の現地事務局である「役所」が同日付で在番親方の窓口の「日帳方」に宛てた通知が収録されている³。

【史料1】「在勤中日記」8月6日条(句読点や傍点は筆者による、以下同)

琉球表生産方御商法之儀、御吟味之訳有之、別昏三品之外、都而官商被為解、尔後商人共勝手商売被仰付候条、此旨中山王御承知候様可申渡候、

但、三品之外、昆布之儀、當年迄ハ官商被仰付候、

未八月六日 會計方

一、茶 一、鍋 一、繰

右通被仰渡候間、御商法品抜荷無之様従之者并船中末々迄堅可被申渡候、以上、

八月六日 役所

本殿 日帳方

前半に鹿児島県庁の会計方の同日付の文書が全文引用されている。琉球での「生産方御商法」については、県当局で検討した結果、「別紙」の3品目を除く品はすべて「官商」(専売)の対象から解除され、今後は商人による「勝手商売」が許可されることとなったとある。「別紙」の3品とは、文書の後に列記された茶・鍋(鉄鍋)・繰(繰綿)であろう。宛先はないものの、本件を中山王(琉球国王)が承知してくれるよう申し渡されたしとある。会計方が王府への伝達を鹿児島琉球館に依頼したといえよう⁴。また、但書では、昆布に限っては、当年(1871)まで「官商」の扱いである旨が述べられている。

まず、この時点で、基本的に本手品の流通統制が解除され、商人による「勝手商売」への移行が決定したこと、しかし、茶・鉄鍋・繰綿および昆布はそこに含まれなかったことを確認しておきたい。後半の「役所」が池城親方の「日帳方」に宛てた通知では、「右通り仰せ渡され候間」と会計方の文書を踏まえ、解除から外れた「御商法品」の抜荷がないよう従人と船舶関係者への周知徹底を求めている。

8月6日付の会計方の文書は、本手品が商人による「勝手商売」へと移行する決定を示したものであったが、茶・鉄鍋・繰綿の3品目は従前通りの扱いであることに変更はなかった。「在勤中日記」8

月26日条に収録された8月付の「役所」の通知によると、琉球側は、決定のあと、繰綿の買い付けと搬送について当局へ請願をしていたことがわかる。

【史料2】「在勤中日記」8月26日条

繰綿之儀、琉球江勝手次第下方被召留候段者先達而致通達候通二而、三百本者館内直下方御免被仰付度旨奉願候処、當年之儀者、蔵方其外入用之向者生産方御本手之内より爰許又者於琉球申請被仰付、以来之儀者、願通被仰付候段被仰渡候間、此段致通達候、以上、

八月 役所

本殿 日帳方

冒頭、繰綿について、琉球への「勝手次第」な搬送が禁止されていることは先般通達した通りとある。「勝手商売」から除外されたこととは別に、当局が琉球側による「勝手次第」な搬送を以前から禁止していたことがわかる。このとき琉球側が請願したのは、「館内」(鹿児島琉球館)による繰綿300本の「直下方」に対する許可であった⁵。回答は、「本年については、王府の蔵方などで必要とする分は「生産方御本手」のなかから鹿児島もしくは琉球(那覇)で手続きすることとする、翌年以降は請願の通りに許可する」というものであった。翌年から認められることになった「直下方」とは、鹿児島市場での数量限定での直接的な買い付けと搬送だったのではないだろうか。

請願や当局からの回答そのものをうかがうことはできないが、「役所」は回答結果を「日帳方」に通知したのである。請願は8月6日の会計方の文書から間を置かず、26日までに回答があったのであろう。廃藩置県後の段階でも請願が必要だったのである。なお、繰綿とともに「勝手商売」の対象とならなかった茶と鉄鍋について、こうしたやりとりがあったかは不明である⁶。

しかし、翌年、「官売」から解除されなかった3品目の扱いに変更があった。「在勤中日記」1872年8月29日条には、「一、茶繰綿鍋勝手次第琉球江持下候儀御免被仰付候事」とあり、茶・繰綿・鍋(鉄鍋)は「勝手次第」に琉球へ搬送することが許可されたことが知られる。繰綿は、前年の請願の結果、翌年(当年)からの数量限定での買い付けと搬送がすでに許可されていたが、茶と鉄鍋についても、琉球側による搬送が解禁されたことになる。また、ここでは当局による通達を具体的に知ることはできない。繰綿の場合は請願をしているが、そうした形跡もうかがえない。やりとりがあったわけではなく、当局による決定を直ちに伝えられた可能性もあろう。

なお、3品目が商人による「勝手商売」へと全面的に移行したとすれば、本手品の専売もこの段階で完全に終了したといえよう。ここにおいて、廃藩置県のあとまで継続していた「琉球口」における日本産品の流通統制に大きな変化があったことを指摘しておきたい⁷。

(2) 個人貿易における清明茶と唐認の輸入許可

鹿児島県による流通統制に変化があったのは日本産品ばかりでなかった。「在勤中日記」1872年4月13日条では、「一、今日渡唐之面々清明茶勝手次第買渡候儀御免訴願之通相濟候事」とあり、琉球側の中国貿易でも個人貿易に変更があったことが知られる。すなわち、渡唐役人などが個人貿易において清明茶を「勝手次第」に輸入できるよう、事前に当局に「御免訴」(請願)をしたところ、当日、請願の通りに許可されたことがわかる。

1837年には、進貢船と護送船によって大量の清明茶と繰綿や認がもたらされ、王府蔵方入用分の

清明茶と繰綿が琉球市場に生まれ、唐物方本手品の売却に支障が生じたため、薩摩側は蔵方御用などで輸入する場合は事前の調整を要求していた(上原2016)。個人貿易での輸入自体が禁止されていたわけではないようであるが⁸、当局によって、清明茶の「勝手次第」の輸入が許可されたこと、さらには、日本産品の繰綿と同様、薩摩藩置県の翌年の段階でも請願が必要であったことを指摘しておきたい。

4ヶ月後の8月29日までに、琉球側による鹿児島からの茶の搬送が許可されたこと、商人による「勝手商売」に移行した可能性があることに触れたが、前後して個人貿易における清明茶の輸入が許可されたこととのあいだには関連性を見いだせるのではないだろうか。鹿児島県による中国茶と日本茶の流通統制に変化があったといえよう。

さらには、6月5日条からも個人貿易に変更があったことが知られる。「一、渡唐之面々唐総勝手ニ買渡方御免願相済候付(後略)」とあり、琉球側は、渡唐役人などの個人貿易において唐総(緋模様の木綿布か)を「勝手」に輸入できるよう当局に「御免願」(請願)をしたところ、当日までに許可されたことがわかる。清明茶と同様、請願の趣旨は「勝手(次第)」による輸入であり、輸入そのものが禁止だったのではないことがうかがえる。

なお、清明茶と唐総の一件に触れた同時代史料として、「従大和下状(同治四年～光緒五年(1865～79))」(『琉球王国評定所文書』第16巻)526号文書がある。田中徳水が同年7月3日付で首里王府三司官の宜野湾親方と川平親方に返信として宛てた書状である⁹。追啓として「(略)唐総・清明茶・同粉茶之儀者阮ニ御免相成大慶奉存候。(略)態与不及多筆御受容迄、此段申上候。以上。」とあり、鹿児島県関係者が王府首脳に対して、両件が許可されたことに祝意を示している。請願は鹿児島琉球館の独断ではなく、王府の関与と指示であったことがうかがえよう¹⁰。

すなわち、1872年4月から6月にかけて、琉球側は、中国貿易の個人貿易において清明茶と唐総を「勝手(次第)」に輸入できるよう当局に請願し、連続して許可を得ることに成功したのである。さらに、8月には、本手品であった茶・繰綿・鉄鍋の搬送のみならず、商人による「勝手商売」へと移行した可能性があった。同年は鹿児島県による中国商品と日本産品の流通統制が変容した画期といえよう。しかし、これに前後して、琉球の管轄は鹿児島県から中央省庁の外務省に移管されることになる。

3. 1873～75年における中国貿易の輸入品と滞留商人

(1) 「勝手商売」と那覇の滞留商人

琉球の管轄が外務省に移管した翌年、薩摩藩在番奉行所に代わって置かれた外務省出張所に伊地知貞馨は外務省六等出仕として派遣された¹¹。『日本外交文書』第6巻事項8「琉球藩取扱ニ関スル件」には、一六六「琉球滞留商人取締ニ関シ申入ノ件」と題された史料が収録されている¹²。伊地知貞馨が到着間もなく琉球藩に宛てた明治6(1873)年3月15日付の連絡と附属書(「琉球滞留商人心得規則」(以下、「規則」))である。

琉球藩宛ての連絡では、「今般別紙の通規則相立、当所へ滞留の商人船乗中へ達置候間、以来御見聞の次第も有之候は、不差置御申聞可給、此段申入候也、」と述べている。別紙の「規則」を制定し、那覇に滞留している商人(以下、滞留商人)および船舶関係者に通達したこと、本件について琉球国王(藩王)に速やかに伝えてほしい旨を依頼している。肩書には、「別紙写相添、左の通琉球藩へ申入

置」とあり、本連絡を琉球藩に宛てた際には、「別紙」（「規則」）の写しが添付されていたことがわかる。はたして、このあとには、滞留商人などに通達した「規則」が附属書として収録されている。

【史料3】「琉球滞留商人心得規則」

- 一、商法向は以来官庁より下知を不加、自己の権利に任せ可置候間、雙方懇談の上、勝手に商売可致事、
- 一、着帰の節は時々外務省在勤役所へ名書を以届出申出べく事、
- 一、商法は本有無を通し、彼此の用を弁、此間に於て相応の利益を得、一家の介抱いたす訳合にて候間、各家業を第一に心掛、無益の酒会取企余計の入費に不及様可相心得事、
- 一、取締之為差引役両三人相立、総人数は五人つゝ組合、互に可致督責、組合の内壺人規則を破り候者有之候は、可為同罪事、
- 一、徒党を組、衆人を妨、土人に迷惑を掛、酔狂乱暴ケ間敷所業一切有之間敷、万一相犯候者於有之は、其罪状を路頭に表し、本人は勿論、其組合とも不差置送返し、罪之輕重に従ひ夫々致処置、再び渡海不差許候事、
当藩之儀、今般御直支配相成候に付、右の通規則相立候条各深相心得、聊心得違有之間敷者也、
明治六年三月十五日 琉球藩在勤 外務省

日付は琉球藩への連絡と同一、差出は伊地知貞馨個人でなく「琉球藩在勤 外務省」である。5項目が掲げられたあと、文末では、琉球藩が「御直支配」（明治政府直轄）となったため「規則」を制定したこと、各自が項目の内容を認識し、決して心得違がないようにと通達していることがわかる。

まず、冒頭の第1項目に注目したい。「商法向」については、今後、官庁（外務省）が指図することではなく、各自の権利に任せるので、取り引きについて琉球側と十分に意思疎通のうえ、「勝手に商売」をすべきこととある。これは、外務省出張所独自の判断ではなく、鹿児島県が、前々年（1871）に本手品の専売を解除し、基本的に商人による「勝手商売」を許可する決定を踏まえた指示ではないだろうか。「規則」の腰書として、外務省による追記があり、「鹿児島より多人数の商人渡海、往々疎暴の所業の者有之、土人迷惑いたし候故、無拋臨時、左の通規則を定め、三月十五日貞馨旅館へ滞留商人五六名招呼、懇に演説の上之を渡せり」と記されている。前半からは、鹿児島から多数の商人が渡海しており、粗暴なふるまいをする者もおり、「土人」（琉球人）が迷惑していたため、必要と判断して「規則」を制定したことが知られる。1873年の段階で鹿児島出身の商人が那覇に多数滞在していたこと、琉球側とのあいだにトラブルが発生していたこと、「規則」の制定はそうした状況を改善するための措置であったと読み取ることができよう。その第1項目で、まず、滞留商人の「勝手商売」を認めていることを確認しておきたい。

腰書の後半では、当日、滞留商人の代表者と思われる5・6名を伊地知貞馨の「旅館」（旅宿）に呼び出し、「規則」を手交したことがわかる。「演説」とあることから、文面を読み上げるか、外務省出張所の方針を通達したようである。第2項目には、那覇着発の際は、毎回、外務省在勤役所（同出張所）へ「名書」を届け出ることとある。滞留商人の出入りを管理しようとしたことが知られる。第4項目では、滞在者全体の取り締まりのため「差引役」を2・3人設置すること、総人数は5人ずつの「組合」を編成のうえ相互に監督すべきこと、1人でも「規則」を破った者がいれば連帯責任とするとある。

第5項目には、徒党を組んで他者の活動を妨害したり、琉球人に迷惑をかけること、酔狂や乱暴などの行為は一切禁止する。違反者が出た場合は、罪状を公表し、「組合」もろとも即座に送還し、再び渡海することを認めないとある。滞留商人のなかには、琉球人に迷惑をかけるのみならず、徒党を組み商売に幅をきかせていた集団がいたことがうかがえる。

ともあれ、鹿児島県が商人による「勝手商売」を許可したあと、那覇には鹿児島出身の滞留商人が多数存在したこと、外務省出張所は「勝手商売」を追認したことを確認しておきたい。国産会社の関与や関係は不明であるが、滞留商人は専売から解除された品目を含む日本産品を大量にもたらし、琉球側に売却していたものと考えられる。1875年までは、進貢船と接貢船が那覇港と福州を往還し、中国貿易が展開された。

(2) 最末期の中国貿易の輸入品

尚家文書1041号「明治六酉年 日記 東京琉球館役所」(那覇市歴史博物館所蔵)は、1873年から東京に設置された琉球藩邸で機能していた「役所」の日記である(以下、「日記」)¹³。同年6月23日条によると、三條実美から、「唐御取合」の確認のため詳細を記した書面を提出するよう琉球藩邸に通知があり、「別紙」などを海江田信義に提出したとある。

「日記」の同日条には酉9月付の「別紙」の控えが収録されている。朝貢品や回賜品および船舶の往還時期など12項目からなるが、最後の項目では琉球の中国貿易の現況を次のように簡略に記している。

【史料4】「日記」6月23日条に収録された「別紙」(部分)

一、進貢接貢船よ里蔵方用物料として此中於鹿兒嶋縣洋銀才覚を以持渡、糸・反物・薬種・砂糖等買渡、使者末々二者海參・干匏・昆布・干藻・干いか・鱻ひれ・芋葛類持渡、反布・茶・木綿総・笠・紙・焼物等二品替持渡、右品之内鹿兒嶋縣商人共江茂致商賣候、

首里王府の貿易と渡唐役人や船舶関係者による個人貿易に区別され、それぞれの輸出入品をあげていることに注目したい。王府の貿易は、「蔵方用物料」として鹿児島で洋銀を調達し¹⁴、糸・反物・薬種・砂糖などを買い付けるとある。個人貿易の貿易資本は、海參・干匏・昆布・干藻・干いか・鱻ひれ・芋葛などであり(傍点は旧本手品)、反布・茶・木綿総・笠(傘)・紙・焼物などを入手するとある。おおよそではあるが、近世琉球最末期の王府の貿易と個人貿易の輸出入品の品目を把握できること、個人貿易の輸入品には生活用品が多く含まれたことがわかる貴重な情報である。「茶」と「木綿総」は、前年に鹿児島県当局から許可された「清明茶」と「唐総」と重なると思われる。また、王府の貿易の輸入品である「反物」と個人貿易の「反布」、および後者では「反布」と「木綿総」が区分されていることに触れておく。

(3) 19世紀後半の清単に見える生活用品

『清代中琉関係檔案選編』には、福州将軍が琉球への輸出品(琉球側の輸入品)への免税措置を求めた上奏文が収録されている。期間は1767年から1875年にわたり、品目と税額が記された清単(リスト)が添付されることがある。岡本隆司氏は、イギリス福州領事代理のシンクレアによる1850年の進貢船の貿易に関する駐華公使への報告を取り上げ、輸出入貨物は、慣例的に毎年ほとんど同じ内容の申告が行われていること、貨物は半分の量も海関に申告されないことなどを看破していたと指摘

した。また、シンクレアの報告に付された輸出入品の一覧表のうち、福州から琉球への輸出品表（以下、シンクレアの輸出入表）を再構成のうえ紹介し（調達先明記）、中国側史料と品目や数量の数値が合致しないことに言及した（岡本1999）。

しかし、琉球側の輸入品は、1767年の清單では71品目を数えるが、1770年代を境に減少し、19世紀後半には30品目前後まで半減するなどの変遷がある。実際の品目数が減ったわけではなく、ある品目に別の項目が統合される場合があったと想定する¹⁵。また、真栄平房昭氏は清單に基づいて18世紀後半から19世紀後半にわたる中国茶・唐傘・鉄針な生活用品の輸入についても論じたが（真栄平1999, 2008）、個人貿易との関係、品目数が減少したこと、1870年代の状況については必ずしも言及していない。

そこで、【史料4】に見える個人貿易の輸入品の状況を把握すべく、1853年から1875年のあいだの7件の清單から生活用品と思われる品目を中心に数量の変遷をまとめたのが【表15-1】である¹⁶。1850年代の同時代資料としてはシンクレアの輸出品表がある。1875年は【史料4】の2年後に当たり、船舶は結果的に最後となった進貢船であるが、個人貿易の実態が多少なりとも反映されているはずである。漢語表記であることと品目数の減少のため、品名は完全に一致せず、特定が困難な場合もあるが、実態を明らかにすべく、1850年代と1875年の輸入量の推移、品目による申告のされ方の差異や変化などを比較してみたい。なかでも、【史料4】の「反布」「木綿総」「笠（傘）」「紙」に注目し、「笠」と「紙」を関連づけて論ずる¹⁷。

表15-1 「清單」に見える生活用品を中心とする輸入品

年次 (中国年号(西暦))	船舶	上縐紗	中花綢	粗夏布	中葛布	毡條*	織絨	棉花線	油傘	毛辺紙	甲紙	大油紙	油紙扇
咸豊3(1853)年	進貢船	228疋	312疋	9,600疋	10,400疋	1,800斤	200疋	10,400疋	5,600把	128,000張	11,000斤	2,000張	12,000把
咸豊4(1854)年	接貢船	228疋	312疋	2,000疋	6,400疋	1,020斤	100疋	4,000疋	8,000把	101,000張	14,100斤	1,200張	8,000把
咸豊5(1855)年	進貢船	228疋	312疋	2,000疋		1,200斤		18,800斤	10,000把	164,000張	17,707斤	2,000張	12,000把
咸豊6(1856)年	接貢船	228疋	312疋	600疋		1,140斤		7,000斤	2,500把	61,000張	8,900斤		3,000把
咸豊8(1858)年	接貢船	150疋	165疋	800疋		600斤		4,600斤	3,000把	72,000張	7,500斤	2,000張	4,000把
咸豊10(1860)年	接貢船	228疋	312疋	1,800疋	1,200疋	600斤	100疋	5,000斤	2,400把	84,000張	9,000斤	2,000張	1,500把
光緒元(1875)年	進貢船		495疋	35,600疋		600斤	100疋	15,900斤	30,000把	108,000張	24,000斤	10,000張	3,000把

*1860, 1875年の品名は毡條、下段の「故綢衣」「故布衣」も1856年の品名は「旧綢衣」「旧布衣」

年次 (中国年号(西暦))	船舶	細茶葉	土漆茶盤	粗磁器	篋箕	鉄針	故綢衣	故布衣	税銀**	典拠***
咸豊3(1853)年	進貢船	56,000斤	7,000個	13,590斤	6,000把	60,000根	40件	60件	1,305両	咸豊朝11
咸豊4(1854)年	接貢船	21,600斤	6,062個	23,680斤	6,000把		60件	80件	901両	咸豊朝19
咸豊5(1855)年	進貢船	15,240斤	6,025個	32,331斤	6,000把		40件	40件	1,196両	咸豊朝31
咸豊6(1856)年	接貢船	5,000斤	3,400個	26,830斤			55件	48件	1,185両	咸豊朝42
咸豊8(1858)年	接貢船	3,000斤	1,500個	13,860斤		20,000根	65件	35件	894両	咸豊朝51
咸豊10(1860)年	接貢船	2,000斤	2,125個	5,900斤		150,000根			1,265両	咸豊朝59
光緒元(1875)年	進貢船	15,000斤	3,000個	12,680斤		60,000根	250件	250件	646両	光緒朝8

税銀は本表から除いた品目も含めた当該年の総額 *典拠は「清代中琉関係檔案選編」の文書番号

【史料4】では、王府の貿易の輸入品である「反物」と個人貿易の「反布」と「木綿総」というように織物（布類）が書き分けられていた。「反物」と「反布」は区別され、「木綿総」は「反布」に含まれないことを意味しよう。清單ではどのような品目で立項されているのだろうか。シンクレアの輸出品表とも照合してみたい。

「反物」は絹織物であり、【表15-1】の上縐紗と中花綢（綢は縐子）が相当するのではないだろうか。1850年代、上縐紗の輸入量は6件のうち5件が228疋、中花綢も5件が312疋と申告する数量が定数化していた傾向を見てとれる。シンクレアの輸出品表では、「蘇州より調達」と分類された物品のなかに、縮緬・絹反物・杭州綾織・艶出絹織物・絹反物・縐子（両品は琉球王宮用）が見える。

これに対して、「反布」に相当するのは粗夏布と中葛布と思われる。粗夏布の輸入量は、1850年代は6件のうち3件が2,000疋程度であるものの、600疋から9,600疋と変動があること、1875年は1853年と比較しても4倍近い35,600疋まで増加していることは上縹紗と中花縹とは異なる特徴といえよう。中葛布は7件のうち記載があるのは3件のみで、数量も一定でなく減少しており、1875年には輸入がない状態である。シンクレアの輸出品表では「福州より調達」の物品に福州苧麻布と麻、「広東より調達」に海南苧麻布が見える。清單には毡條（毛で織った敷物）と織絨（厚地のやわらかい毛織物）もあるが、「反物」か「反布」かの比定は保留したい。1875年の輸入量は1850年代と比較すると減少傾向にある。シンクレアの輸出品表には「蘇州より調達」の物品に蘇州産毛氈が見える。

さて、「木綿認」は緋模様の木綿布と思われるが、清單に木綿布と識別できる布類は見いだせない。棉花線と浄棉花はあるが製品ではなく原料であろう（后者は1854年のみのため表に含めず）。しかし、1856年、中国からの復路、薩摩藩領内に漂着した接貢船に中国産の木綿布が積載されていた事例がある。現地で注文品が調達できなかったため、大量の西洋反布とともに中国人商人から無理に渡されたものであるという（上原2016、里井1997）。接貢船の才府など4名が鹿児島琉球館に提出した「端布類取メ帳」には購入者ごとの品目と数量が列挙されている。購入者は船舶関係者や渡唐役人の従人であり、個人貿易の輸入品である可能性がある。中国産の木綿布を品目ごとにまとめると、白花織木綿布25疋、花織木綿布（花木綿布含む）80疋、花織色々木綿布33疋、鞆子織木綿布205疋の計343疋である。「木綿認」あるいは「唐認」の種類を知るうえでの参考となろう。

「笠」は7件の清單すべてに見える油傘に相当する。1850年代の輸入量は、前半の10,000把から後半は2,400把まで落ち込み大きな減少があること、ただし1875年には30,000把と増加して最多を更新したことは粗夏布と類似する傾向にあるといえよう。当該期間以前の清單には、土油紙傘が6件（1775～1832年）、粗油紙傘が3件（1773～1822年）ほど見いだせる。シンクレアの輸出品表では「福州より調達」の物品として雨傘が見える。

「紙」については、毛辺紙、甲紙、大油紙の3品目を見いだせるが、なかでも傘の骨組みに貼る大油紙に着目する¹⁸。1850年代の輸入量は、5件のうち4件は2,000張であるが（1件は輸入なし）、1875年は10,000張と5倍に増加している。1850年代は定数化していた傾向を見てとれるが、1875年に最多を更新するのは粗夏布や油傘と同様である。粗夏布や油傘は、実態がある程度申告に反映されたのに対して、大油紙は、慣例的な内容であったにせよ、申告する数量の枠が拡大された可能性もあろう。これに対して、毛辺紙と甲紙は、1850年代と1875年の輸入量を比較すると減少もしくは微増と差異がある¹⁹。なお、油紙かは不明であるが、当該期間以前の清單には竹傘紙も1件（1775年）のみ見える。シンクレアの輸出品表では「福州より調達」の物品として紙があるが種類は分類されていない。ともあれ、油傘の本体のみならず、大油紙も継続的に輸入されていただけでなく、申告のされ方に特徴的な変化がうかがえることを指摘したい²⁰。

以上、清單を分析した限りでは、個人貿易の輸入品に多く含まれた生活用品のなかでも、1875年において輸入量が増加した、あるいは申告のされ方に変化を見いだせるのは「反布」の粗夏布、「笠」の油傘、「紙」でも大油紙であることを確認しておく。琉球社会で一定の需要があったことがうかがえよう。鹿児島県当局から請願を許可された「清明茶」と「唐認」（「木綿認」）については、何らかの変化や特徴を認めることはできなかった。

ところで、【史料4】の末尾には「右品之内鹿児島縣商人共江茂致商賣候」とあった。「右品」には王

府の貿易が含まれる可能性もあるが、個人貿易による輸入品を指すと考える。そうであるとすれば、生活用品の多くは琉球社会で消費されたが、一部は、鹿児島県商人にも売却されていたことになる。本手品の「勝手商売」への移行のあと、那覇に滞留商人が存在したことは前述したが、鹿児島県商人とは滞留商人を指すのではないだろうか。

一方、那覇港を発着する琉球船の管理体制についても、琉球の所管が鹿児島県から外務省に移管した1873年の段階で変化があった。『日本外交文書』第6巻事項8には、一七四「船舶出入ノ監督方ニ関シ伺ノ件並之ニ対スル伊地知外務省出仕ノ指令」と題された史料が収録されている²¹。「覚（船舶出入ノ監督方ニ関シ伺ノ件）」と伊地知貞馨の回答（指令）からなる。「覚」は高奉行など4名が酉（1873）3月付で作成し、明治6年4月19日付で琉球藩名義の次書を加え、伊地知貞馨に宛てられている。琉球船の管理にこれまで御仮屋方（定式方）がどのように関与したかを18項目にわたって挙げ、移管による変化の有無について指示を仰いでいる。中国から帰着した琉球船に関わり、琉球側が国産会社附属衆に提出した書類も見える。

伊地知貞馨の4月19日付の回答には、「書面十八ヶ条伺いの趣、自今鹿児島県へ引き合いに及ばず、すべて其藩にて規則の通り取り計り（略）」とある。すなわち、今後は鹿児島県への書類提出などは不要であり、琉球側によって「規則」に従い管理すべき旨が示されている。薩摩藩（鹿児島県）との船舶の共同管理体制は終焉を迎え、単独での管理へと移行したのである。国産会社の動静は不明であるが、外務省出張所が出入りを管理するなか、滞留商人は、本手品であった品目を含む日本産品を琉球の中国貿易の輸出品として売却し、個人貿易で輸入された生活用品などを買い付けていたことを確認しておく。

注

¹ 仲地哲夫氏は、琉球・薩摩間の商品流通は一見盛んだが、商品流通というよりも、薩摩藩による経済的な支配が領主的な商品流通の形で行われたと指摘している（仲地1991）。

² 1856年には、那覇の女性が薩摩藩派遣役人個人から日本産品（本手品を含む）を掛け買いしたが、代価未払いを理由として事件化したケースがある（小野2001）。

³ たとえば1870年6月から8月までの「役所」の通知は39件を数える（深澤2016）。

⁴ 前年に国産会社が設立されたが、会計方によって「生産方御商法」の件の伝達が依頼されている。国産会社は1873年に解散して生産会社となる。

⁵ 「案書」（『琉球王国評定所文書』第8巻）59号文書によると、1854年、薩摩藩は、琉球側の請願を受け、鹿児島での求麻茶1,000俵と繰綿332本の買い付けを期限付きで許可している。こうした前例を踏襲した可能性がある。

⁶ 「在勤中日記」1871年8月17日には「覚（茶手形）」が収録されている。御白煎茶240斤、白煎茶90斤、天飛茶150斤を琉球に音信用として発送している。在番親方などには規定の範囲内で認められていたようである。

⁷ 松尾千歳氏は、1872年春より「勝手売買」とされた茶の県外積み出しは国産会社経由とされ、藤安喜左衛門という商人の荷為替取組が必要であったと述べている（松尾1994）。

⁸ 上原2016所収、第二章「進貢貿易の輸出入の動向」表16によると、1836年に帰着した接貢船乗員の輸入品として清明茶15,000斤のほか、後述する笠（傘）7,000本が見える。

⁹ 「在勤中日記」同年3月3日条には田畑平とともに典事として田中徳水が見える。

¹⁰ ほかに「部下米運賃・鬱金之儀者如仰於御地最早御免相成候半」などとあり、複数の案件について交渉していたことがわかる。

¹¹ 伊地知貞馨と琉球との関係や同年の琉球での活動については原口1992がある。

¹² 『那覇市史』資料篇第2巻中の4（那覇市役所、1971年）収録文書に依る。

¹³ 琉球藩邸と「東京琉球館役所」の関係については深澤2014がある。

¹⁴ 真栄平房昭氏は、1871年に渡唐二番銀を洋銀で準備したことに触れている(真栄平2003)。

¹⁵ 謝2004所収、附録三「清代中国輸往琉球貨物及税額統計表(乾隆三十二年至光緒元年)」によると、清單が残る全期間の琉球側の輸入品は148品目を数える。1770年代以降に項目化された品目も見いだせる。以下、後掲する【表15-1】以前の情報は附録三による。

¹⁶ 大石ほか1985所収、表6「道光以後中国より琉球への輸入量」は、清單と情報源を同じくすると考えられる周益湘「道光以後中琉貿易的統計」を典拠とする。1861～74年の生活用品と思われる品目についても数量の変遷を確認することができる。

¹⁷ 【史料4】に見える茶と紙は真栄平2008・2011、丁2006、焼物(磁器)については松浦2011の研究成果がある。真栄平1986・2008・2011は同2020に収録されている。

¹⁸ 丁2006、真栄平2011所収表によると、中国紙は11品目が輸入されたが、1824年以降は清單の項目が3品目に固定される。『福建近代民生地誌』下巻(福建師範大学図書館蔵)には、第五編第四章「本省之農産」に「閩清福安各縣之油傘紙」が立項されている。油傘紙(大油紙)の主な産地は福州府閩清県と福寧府福安県であったことがうかがえる。

¹⁹ 細茶葉と粗磁器も1850年代と比較すると減少や微減の傾向を見てとれる。

²⁰ ほかに製品と原料の関係にある類例として油紙扇と小油紙がある。小油紙は1767年と1775年のあと確認できないが、以降、油紙扇のみが輸入されたのかは検討の余地がある。

²¹ 前掲注12の同書収録文書に依る。

引用文献

上原兼善2016『近世琉球貿易史の研究』岩田書院

大石圭一・原田武夫・張森湧1985「周益湘著「道光以後中琉貿易的統計」の研究」『南島史学』第25・26号、pp.64-97

岡本隆司1999『近代中国と海関』名古屋大学出版会

小野まさ子2001「働く女性の姿をもとめて」『なは・女のあしあと 那覇女性史(前近代編)』pp.58-67、琉球新報社

里井洋一1997「従大和下状(咸豊六～七年) 解題」『琉球王国評定所文書』第13巻、pp.255-258、浦添市教育委員会

謝必震2004『明清中琉航海貿易研究』北京：海洋出版社

丁春梅2006「中琉両国紙張貿易初探」『海交史研究』2006年第1期、pp.59-79

仲地哲夫1991「近世における琉球・薩摩の商品流通—一六八〇年代—一八一〇年代を中心に—」『九州文化史研究所紀要』第36号、pp.151-172

原口邦紘1992「外務省六等出仕伊地知貞馨と琉球藩(上)」『西南地域史研究』第7輯、pp.471-499

深澤秋人2014「東京琉球館役所の人々と運営—「役所」との関係を中心に—」『日本歴史』第797号、pp.1-18

深澤秋人2016「鹿児島琉球館における「役所」の機能—尚家文書三四一号を中心に—」『国史学』第219号、pp.75-117

真栄平房昭1986「近世琉球における個人貿易の構造」『球陽論叢』pp.239-262、ひるぎ社

真栄平房昭1999「琉球の進貢貿易論をめぐる一視点—貿易品の需要と消費の接点から」『沖縄文化研究』25、pp.43-68

真栄平房昭2003「琉球貿易の構造と流通ネットワーク」『日本の時代史18琉球・沖縄史の世界』pp.116-166、吉川弘文館

真栄平房昭2008「中国茶と日本茶」『琉球を中心とした東アジアにおける物流構造2005~2007年度科学研究費補助金(基盤研究C) 研究成果報告書』pp.45-67

真栄平房昭2011「琉球の中国貿易と輸入品—海を越えた唐紙—」『一八世紀日本の文化状況と国際環境』pp.439-456、思文閣出版

真栄平房昭2020『琉球海域史論(上)—貿易・海賊・儀礼—』榕樹書林

松浦章2011『関西大学東西学術研究所研究叢刊四十 清代中国琉球交渉史の研究』関西大学出版部

松尾千歳1994「明治初期の島津家資産をめぐる諸問題—島津家執事方記録の紹介—」『尚古集成館紀要』第7号、pp.48-91

第16章 総括

渡辺 芳郎 (鹿児島大学法文学部)

最後に本報告書に収録された調査報告と論考を整理する。

本科研の調査としては、十島村(トカラ列島)口之島での発掘調査、かつて発掘調査された奄美市大熊大里遺跡出土陶磁器の再整理、奄美市立奄美博物館保管の旧家伝来陶磁器の調査という3つの性格の異なるアプローチを試みた(第3~5章)。その具体的様相は、これまで想定してきた近世南西諸島の陶磁器流通の三層構造と整合するものと考えられる。しかし遺跡から出土する陶磁器が基本的に廃棄されたものであるのに対し、伝来資料は保管されて伝来してきたものである。それゆえ両者には共通点もあるが、同時に伝来資料には考古学資料に見られない種類の陶磁器もしばしば含まれている。今後は考古学資料と伝来資料とを総合的に扱いながら、南西諸島における陶磁器流通のあり方を明らかにしていく必要がある。

ついで論考編について述べる。「松前口」について関根論考(第6章)では、交易都市・消費都市として発展した松前における手工業について、文献と考古学資料から検討している。19世紀の松前において、居住者への供給とともに、本土向けの「蝦夷土産」、アイヌ向けの漆器・金属製品の生産の可能性を指摘している。菊池論考(第7章)ではアイヌ交易に関与した場所請負人の帳簿類や松前の問屋関係文書を検討することで、松前三港で流通していた物品を抽出している。その結果、近世後期以降の蝦夷地が全国経済の産業構造の中に組み込まれていたことを明らかにするとともに、今後、考古学資料との照合の必要性を指摘している。

「長崎口」については野上論考(第9章)では、長崎を通じた肥前磁器輸出を、唐人貿易とオランダ貿易、後者をさらに会社による貿易と個人貿易にわけて、その内容と変遷を検討している。その結果、唐人貿易とオランダ貿易のうち会社による貿易は清の海禁政策下の17世紀後半に最盛期を迎えるが、個人貿易はむしろ17世紀末から18世紀前半に盛んになったとし、ヨーロッパをはじめとした世界各地の伝来資料や考古学資料がそれを裏づけることを指摘している。山口論考(第11章)はオランダ貿易の拠点である出島における長年の発掘調査成果に基づき、陶磁器と棹銅についての考古学的知見を整理、検討している。出島出土の陶磁器には、輸出用の肥前磁器、出島滞在のオランダ人が使用したヨーロッパ向け中国磁器と西洋陶磁器、生活用品あるいはコンテナとしての南中国や東南アジア産陶器類が見られ、出島特有の様相を示している。また近世後期の日本の最大輸出品である棹銅については、組頭部屋跡、銅蔵跡出土資料が、蘭館図に見られる棹銅取引の描写と整合することを指摘している。木村論考(第10章)は、オランダ貿易が本方・脇荷・誂・献上の4区分され、その中で陶磁器が脇荷として相当数輸出されたことを指摘しており、野上論考の見解と一致する。また資料的に限定されるものの抜け荷として摘発された輸出入品は、従来想定されていたような最高級品ではなく、むしろ一般的な物品が多い傾向を指摘している。

「対馬口」では、現在の韓国釜山に倭館が設置され、対馬藩と朝鮮との貿易の窓口となった。片山論考(第12章)は、これまで文献史的研究の蓄積のある倭館について、草梁倭館船滄周辺遺跡出土の遺物を検討することで、倭館滞在中の日本人の生活の復元を試みている。その中で、食文化の違いから食膳具の磁器や調理具(播鉢)は日本製なのに対し、貯蔵具は朝鮮製の甕器が使用されていることは、倭館に限らず、外国の居留地の生活のあり方を考える上でも手がかりとなるであろう。また倭館

窯における陶器生産も倭館の特徴として指摘する。

「琉球口」について、池田論考(第14章)では、中世～近世にかけての沖縄における窯業生産の歴史の中で、中国陶磁との関係、沖縄産陶器の技術系譜、その生産の指向性などを捉え、近世においても引き続き中国陶磁器(清朝磁器、宜興窯製品など)が大量に輸入されていることが指摘され、沖縄産陶器との間にランク差があった可能性を示している。深澤論考(第15章)は、近世において薩摩藩による強い統制があった沖縄の物資流通が、近代に移行した際にどのような変化を遂げたかを、同時期の公文書を精査することで明らかにしている。渡辺論考(第13章)は、近世南西諸島における陶磁器流通の三層構造を再確認するとともに、政治的アイテムとしての陶磁器も含めて検討し、社会階層と密接に結びついた流通が形成されていたことを示した。

「四つの口」から輸入されたさまざまな物資の最大の消費地として江戸が挙げられる。堀内論考(第8章)は、出土貿易陶磁器の年代から、江戸における貿易陶磁の需要層の時代的变化を整理している。江戸前期における需要層は、幕藩体制が整備される過程で武家儀礼が規範化、制度化され、そのための大量の揃いの食膳具が必要とされた武家層であったとする。一方、江戸後期の貿易陶磁器の出土地が旗本や御家人、町人地が多くなり、特定の器種に偏ることから、中国趣味のトレンドを受け入れた人々であるとした。

総括として、各論考での議論に基づいて、いくつかの論点を整理する。

(1) まず「四つの口」における物資流通のあり方が、国内外の経済構造、流通構造とその変化と密接に結びつき、どのように組み込まれているか、という論点である。このことは松前口における流通物資を検討した菊池論考において指摘され、また近世後期の主要な輸出物資であった棹銅については、その原料(銅)の採掘から製作、運輸に関わる「銅の道」の解明の必要性が指摘されている(山口論考)。手工業生産に王府の統制が強かった琉球(池田論考)、また運送を強く統制した薩摩藩による物資流通(深澤論考、渡辺論考)は、政治権力による経済政策とその変化と深く結びついている。さらに需要およびそれを担う社会集団の変化は、輸入品の内容に影響を与えている(堀内論考)。

(2) つぎに「四つの口」の相互比較という論点である。長崎口の輸出入において、唐船とオランダ船の間にその内容に大きな差異はなく、さらにそれぞれの口において物資の共通性が見られる。このことは流通構造の発達した近世後期において、「長崎口」と「琉球口」の競合関係を生み出している(木村論考)。一方、「長崎口」におけるヨーロッパ製品(山口論考)や「松前口」の「蝦夷土産」(関根論考)などの独自性も見られる。同じ肥前磁器の海外輸出において「四つの口」間での共通点と相違点の比較の必要性が指摘されている(野上論考)。「四つの口」における物資流通の関係は補完関係と競合関係の二面から考えていく必要がある。

(3) 「四つの口」は交易の場でありながらも、同時にそこに居住する生活の場でもあり、各地における手工業生産の解明も重要な論点となる。「松前口」においては19世紀に入ると手工業者の増大が認められ、蝦夷地警護を命じられた松前藩の性格の変化との関係が指摘されている(関根論考)。また「対馬口」の倭館では、日本における茶の湯需要に応じて倭館窯が設置され、陶器生産が行われている(片山論考)。一方、長崎出島や倭館では、滞在者の生活用品として国外からの輸入品(出島：ヨーロッパ陶磁器など。倭館：甕器など)が重要な役割を果たした点も、交易地としての特色と言える。

Summary

I would like to sum up this project by summarizing the research articles and discussions contained in this report.

For this research, three approaches with different characteristics were tried: excavation and research on Kuchino-shima, Toshima Village (Tokara Islands), reclassifying of ceramics excavated and researched at the Daikuma Ohsato site in Amami City, and investigation of ceramics handed down from old-established families stored in the Amami City Amami Museum (Chapters 3-5). These are considered to be consistent with the three-layer structure of the circulation of ceramics in the Nansei Islands in the early-modern times. However, while ceramics excavated from sites are usually discarded, those that have been handed down from generation to generation have been preserved. Therefore, although they have some points in common, they often include kinds of ceramic ware that are not found in archaeological materials. In the future, it will be necessary to clarify the circulation of ceramics in the Nansei Islands by dealing with both archaeological materials and handed down goods.

Next, we move onto the discussion of the four gateways (*guchi*) for trade with other countries: Matsumae-guchi, Nagasaki-guchi, Tsushima-guchi and the Ryukyu-guchi. In Chapter 6, Sekine looks at Matsumae-guchi, which developed as town that both traded and consumed products, and examines the handicraft industry there from the literature and archaeological materials. He finds 19th century Matsumae was possibly supplying Ezo souvenirs to the mainland as well as producing lacquer ware and metal products for the Ainu and its own residents. Kikuchi (Chapter 7) extracted goods distributed in Matsumae's three ports by examining wholesalers' documents and the account books of subcontractors who engaged in trade with the Ainu. This demonstrates that from the 19th century onwards Ezochi was part of the industrial structure of the national economy and he points out this needs to be collated with archaeological materials in the future.

In Chapter 9, Nogami investigates the Nagasaki-guchi, and the contents and the transition of Hizen ceramics export through Nagasaki are examined by dividing it into Chinese trade and Dutch trade, and the latter into either trade by companies or private means. It was found that Chinese and Dutch trade by companies reached its peak in the latter half of the 17th century under the Qing Dynasty's Haijin policy, which banned all maritime activities, whereas private trade flourished from the end of the 17th century to the first half of the 18th century, and it is pointed out that imported materials and archaeological materials from various places in the world including Europe support this theory. Yamaguchi (Chapter 11) categorizes and examines archeological knowledge of ceramics and copper bars based on the results of the excavation and research which has been carried out for many years in Dejima, the center of Dutch trading. Reflecting Dejima's particular circumstances, the earthenware excavated there includes Hizen porcelain for export, Chinese and Western porcelain for Europe use used by the Dutch who lived on Dejima as well as earthenware from South China and Southeast Asia used as household items and containers. Yamaguchi also finds that the excavated materials from both the remains of the *kumigashira's* room (chief officer's room) and copper warehouse are consistent with the description of the transactions of copper bars, Japan's largest export commodity in late early-modern times, as depicted in contemporary pictures of Dejima. In Chapter 10, Kimura points out that Dutch trade was divided into four categories of *honkata* (本方, official trade), *wakini* (脇荷, private trade), *atsurae* (訛, orders) and *kenjo* (献上, tributary gifts), and that a considerable number of ceramics were exported as private trade, which ties in with Nogami's findings. Kimura also suggests that imports and exports that were caught in smuggling, although limited in terms of data, were not the highest quality products that had been assumed in the past, but tended to be general items instead.

Moving onto the Tsushima-guchi, a waegwan, Wakan, (Japanese trading post) was established in present-day Busan, Korea, to act as a window for trade between the Tsushima Domain and Korea. Katayama (Chapter 12) attempts to reconstruct the lives of the Japanese people living in the waegwan by examining relics excavated from the Near Ship's Storage of the Choryang waegwan. Among them, due to differences in food culture, the fact that porcelain and cooking utensils (mortars) were made in Japan, while onggi (Korean earthenware pots)

were used for storage would be helpful when considering the way of life in foreign settlements not just in waegwan. Pottery production in the waegwan kiln is also highlighted as a feature of the waegwan.

With regard to the Ryukyu-guchi and the history of ceramic production there from the medieval period to the early-modern period, Ikeda (Chapter 14) points out that from the relationship with Chinese ceramic ware, the technical genealogy of ceramics the produced in Okinawa, and the directivity of ceramic production, a large amount of Chinese ceramic ware (Qing dynasty porcelain, Yixing ware, etc.) continued to be imported even in the early-modern period. He also highlights the possibility of a difference in rank between Chinese ceramic ware and ceramics produced in Okinawa. Fukazawa (Chapter 15) clarifies how the distribution of goods in Okinawa, which was tightly controlled by the Satsuma clan in the early-modern times, changed when the modern times started, by examining official documents of the same period. Watanabe (Chapter 13) looks again at the three-layered structure of ceramic ware distribution in the Nansei Islands in the early-modern times, and examines ceramic ware as a political item to show that distribution became closely connected with social class.

Edo was the largest consumer of the goods imported from the four gateways. Horiuchi (Chapter 8) summarizes the changes in demand stratum for trade ceramics in Edo from the age of excavated trade ceramics. It is said that in the early Edo period, demand was from the samurai class who needed a large amount of tableware in order to normalize and institutionalize samurai rituals in the process of establishing the shogunate system. On the other hand, in the late Edo period, there were more and more *hatamoto* (direct retainers of the shogunate), *gokenin* (immediate vassals of the shogunate), and townspeople in the places where traded ceramics were excavated, and since these were concentrated on specific kinds of pottery, it can be seen that the inhabitants were embracing the trends of Chinese taste.

Here we bring together some of the issues based on these detailed discussions.

(1) First, how the distribution of goods through the four gateways is closely linked to and incorporated into the economic and distribution structures in Japan and abroad. This is pointed out in Kikuchi's chapter which examines the distribution of goods through Matsumae-guchi and shows the need for revealing the "copper road" used for copper bars, a major export product in the late early-modern times, from mining of the raw material (copper) to production and transportation (Yamaguchi). The Ryukyu-guchi, where the government had strong control over handicraft production (Ikeda), and goods distribution by the Satsuma clan, which had strong control over transportation (Fukazawa and Watanabe), were closely related to economic policies implemented by political powers and changes to them. In addition, changes in demand and the social groups responsible for them affect what products were being imported (Horiuchi).

(2) Next, there is the issue of the comparison of four gateways. In the imports and exports through the Nagasaki-guchi, there was no big difference in contents between Chinese and Dutch ships, and in addition, similar goods were seen in each gateway. This created a competitive relationship between the Nagasaki-guchi and the Ryukyu-guchi in the late early-modern times when the distribution structure was developed (Kimura). On the other hand, uniqueness can be seen in Nagasaki with its European products (Yamaguchi) and Matsumae-guchi with its Ezo souvenirs (Sekine). It has been raised that in the export of the same Hizen porcelain, it is necessary to compare the similarities and differences among the four gateways (Nogami). Regarding the relationship between the distribution of goods through the four gateways, it is necessary to consider both complementary relations and competitive relations.

(3) While the four gateways are all places of trade, they are also place where people lived, and interpretation of handicraft production in each place is also an important point. In the Matsumae-guchi, as the number of craftsmen increased in the 19th century, it was pointed out that this might be related to the change in character of the Matsumae Domain, which had been appointed to guard Ezochi (Sekine). The waegwan which form part of the Tsushima gateway, waegwan kilns were built to meet the demand for *cha-no-yu* (the tea ceremony) in Japan, and earthenware was produced there (Katayama). On the other hand, at Dejima in Nagasaki and in the waegwan, goods imported from abroad (Dejima: European ceramics, etc. waegwan: onggi, etc.) played an important role as products that were used daily by the inhabitants, and this can also be said to be a feature of those particular trading posts.

謝 辞

今回の科学研究費による調査研究には多くの方々にお世話になりました。

十島村口之島における発掘調査では、和田章一氏（十島村教育委員会）、今井昭一氏（口之島自治会長）、日高助廣氏（十島村議員）、十島村小中学校に、調査の開始から実施、また現地説明会などで、ご助言、ご協力をいただきました。また離島における発掘調査のノウハウについて新里貴之氏、中村直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）からご教示をいただきました。

奄美市立奄美博物館における大熊大里遺跡出土資料と盛岡家伝来資料の調査においては、喜友名正弥氏・高梨修氏（奄美市立奄美博物館）、盛岡前武仁氏（奄美市）、丹羽謙治氏（鹿児島大学法文学部）、中尾綾那氏・中西瑠花氏（鹿児島大学大学院人文社会科学研究科（当時））に資料の準備や調査場所の提供など、ご協力をいただきました。また大和村津名久焼関係の調査では、和泉豊一氏（大和村教育委員会）、中山昭二氏（元大和村文化財保護審議委員）、南美佐雄氏・栄豊彰氏・大山綱治氏（大和村）、福島義光氏（奄美郷土研究会）、鼎丈太郎氏・鼎さつき氏（瀬戸内町教育委員会）、宗岡克英氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）にご助言、ご教示をいただきました。

年に1回開催した研究会では、研究会開催地において、さまざまな方からご協力、ご教示をいただきました。北海道松前（2016年度）では、佐藤雄生氏（松前町教育委員会）、宮島武司氏（松前町教育長）、塚田直哉氏（上ノ国町教育委員会）、宮原浩氏（江差町郷土資料館）から、研究会会場のご提供や巡見地での案内をいただきました。沖縄研究会（2017年度）では、倉成多郎氏（那覇市立壺屋焼物博物館）、森達也氏（沖縄県立芸術大学）からさまざまなご教示をいただきました。長崎研究会（2018年度）では田中学氏（長崎市教育委員会）から、長崎市内出土陶磁器についてご教示いただきました。

本報告書作成に関しては、鹿児島大学法文学部考古学研究室、鹿児島大学大学院人文社会科学研究科の学生諸氏のご協力を得ました。また英文サマリー作成にあたっては、Stephen Cother 氏（鹿児島大学法文学部）のご校閲をいただきました。

皆様方に心よりお礼申し上げます。

研究代表：渡辺芳郎

2016～2020年度科学研究費補助金

基盤研究(B)研究成果報告書(課題番号:16H03510)

**近世国家境界域「四つの口」における
物資流通の比較考古学的研究**

発行 2021年3月31日

編集 渡辺 芳郎

執筆 池田 榮史・片山 まび・菊池 勇夫・
木村 直樹・関根 達人・野上 建紀・深澤 秋人・
堀内 秀樹・山口 美由紀・渡辺 芳郎

刊行 鹿児島大学法文学部

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30

TEL 099-285-7539

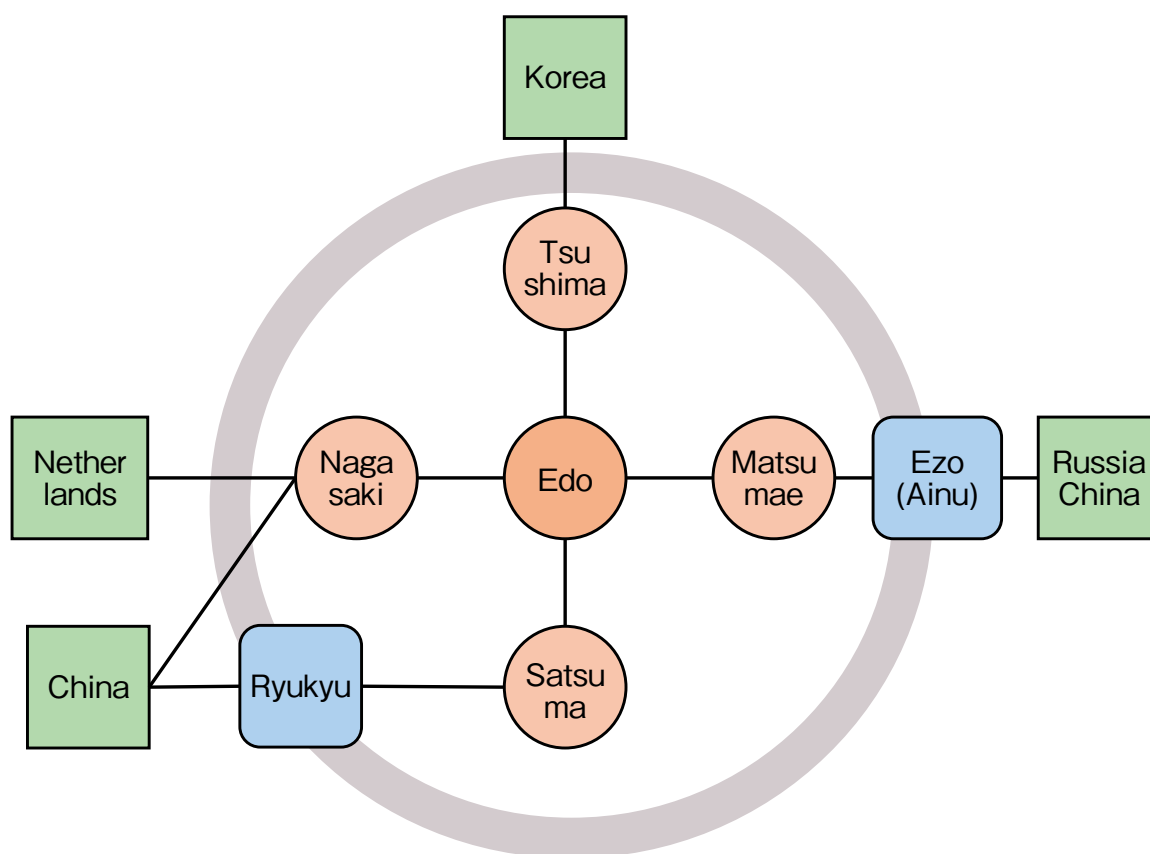
E-mail watanabe@leh.kagoshima-u.ac.jp

印刷 浏上印刷株式会社

〒891-0122 鹿児島市南栄3-1-6

TEL 099-268-1002 FAX 099-266-3423

Comparative Archaeological Study on Circulation in "Four Gateways", Marginal Areas of Early-Modern Japan



WATANABE Yoshiro

Faculty of Law, Economics and Humanities

Kagoshima University, Japan

2021 March